魔法少女リリカルなのは～ご近所の魔法使い～

イッツウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～ご近所の魔法使い～

【Ｎコード】
Ｎ４４７９Ｐ

【作者名】
イッツウ

【あらすじ】
海鳴市在住の魔法使い、『秋月鈴』は出会う。赤毛の少女に…。それは厄介事の始まりでもあった。ジュエルシードの事件の次は、魔導師襲撃？　闇の書？　俺の平穏は？　これはご近所の魔法使い達のほんの一幕。
「ぶっ潰してやる！」「返り討ちにしてやる！」

※Ａ's編始まりに伴い、あらすじ変更しました。

小学生は魔法使い？（前書き）

いろんな意味で初めてです。よって所々おかしい箇所があるかもしれません。そんなものでよろしければどうか生暖かい眼で見てやってください。

小学生は魔法使い？

海鳴市。

中心部にはビルが立ち並び海に隣接した街でありながら、山あり、丘あり、郊外には温泉ありと最早何でもありな万能な街。

その海鳴市の住宅街にある一軒の二階建ての家。門には『秋月』と書かれた表札。早朝、朝日の差し込むその家のキッチンにて1人の少年が慣れた手つきで朝食を作っている。
適当に切り揃えられた黒い髪、黒い瞳、整った顔立ち、寝間着のままなのか白いジャージを着用。その上にはデカデカと「諸行無常」とプリントされたエプロン。外見は本当によくいる日本人のソレ。

名前は『秋月（あきつき）　鈴（りん）』現在9才。この物語の主人公である。

鈴は食卓にできあがった朝食、トースト、目玉焼き、ソーセージ、サラダ、冷蔵庫からオレンジジュースとよくある洋風の朝食を二人分並べていると二階から目覚ましの音が聞こえる。

ジリリリリリリリリｒ…ゴシャ！

その音を聞き届け、ガクリと頭をたれる鈴。「またか…」と呟きながら二階へ。

コンコン！

「先生、朝ですよ。起きてください」

し～ん……

「はぁ～。やっぱりか…」

返事が無いことを確認すると部屋に入りカーテンをあけ、ベッドの布団を剥ぎとり寝ている主を起こす。枕元には砕かれた目覚まし。

「ほら先生、朝ですよ。朝食も準備できましたのでおきてください」

「う～～ん…」

ベッドでのそのそと身をおこし軽く伸びをする女性。

見た目二十歳を少し過ぎた程度。肩甲骨辺りまで伸びた髪の毛は光

を透かしそうなほどに白く（寝起きなので所々ハネている）、眠そうな眼から見える瞳は髪の色に反して深い黒、美しく整った顔立ち。でるとこはでてひっこむところはひっこんでいる理想的なプロポーション。格好も下着にシャツ一枚だけなので扇情的である。

名前は『秋月（あきつきれん）　蓮』

この家の主であり、とある事情により鈴の保護者となった女性である。

「起きましたか？じゃあ俺は先に食べますので下りてきてくださいね。あと、その時計下りる前にちゃんと【復元】しておいてください」

「ん～～。わかったぁ～」

返事を聞き、階段を下りる鈴。

テレビのニュースを観ながら自分の分を半分程食べ終えたところで先ほどの女性、蓮が下りてくる。今度はちゃんと眼を覚まして普段の美しく凛々しい顔立ちを存分に発揮。格好はいまだにシャツ一枚だが…。

「おはよう、鈴」

「おはようございます、先生。できれば服を着てくれるとありがたいのですが…」

そんな鈴の言葉を華麗にスルーし、蓮は椅子に座りトーストをかじる。鈴もいつもの事と思っているのか気にした様子も無く視線を再びテレビのニュースへ向けながら口を開く。

「ちゃんと時計、【復元】しましたか？」

「ああ、やったよ。あの程度なら文字通り朝飯前だ」

「いちいち壊さないでスイッチを切るだけにしたらどうなんですか…っていうかそれが一般的な使い方です」

「わかってはいるんだが…安らかに寝ているときにあんな無機物に安眠を邪魔されるとどうも…なぁ」

「目覚まし時計の機能を否定してどうするんですか…」

と、何気ない（のか？）会話を交わしながら朝食を平らげていく二人。平和なことである。

朝食を食べ終えた鈴は食器を流しに運び、二階の自室でジャージから小学校の制服に着替え登校の準備をする。すべての準備を終え、玄関に向かう途中で鈴を呼び止める蓮。

「鈴、コーヒー豆が底をつきそうなんだ。悪いんだがまた翠屋で帰りにでも買ってきてくれないか？」

「あ、忘れてた。了解しました」

下校時の予定を頭に入れながら靴を履き、玄関の扉をあける。

「じゃあ先生、いってきます」

「ん、いってらっしゃい」

後ろ手に扉を閉め、足を踏み出し歩き出す。予報どおり本日は快晴なり。

「いい天気だ。…さて、とりあえずなのはを迎えにいきますか」

普通の小学生兼”魔法使い”『秋月　鈴』の一日が始まります。

小学生は魔法使い？（後書き）

いろいろと手探り状態のモノですが無事、完結までもっていきたいですね。

学校へ行こう！（前書き）

原作キャラの口調など、おかしいところがあるかもしれませんがご容赦を。

学校へ行こう！

『鈴』

ウチから歩いて数分のところにある道場つきの広い家、高町家までまずは足を運ぶ。その家族の末っ子で同級生の高町なのはを迎えにいくのが俺の平日の日課である。
あいかわらず長い塀を見ながら歩き門に到着。くぐりぬけ、玄関の呼び鈴をならす。
数秒もしないうちに中から「はーい！」と返事がしてドタドタと足音が聞こえ、勢いよくガラス戸が開く。

「おはよう鈴君！」

「ん。おはよう、なのは。おはようございます、桃子さん」

「おはよう、鈴君」

戸を開けたツインテールが特徴的な元気な少女、なのはとその後ろにいるなのはの母親、桃子さんに挨拶する。
毎度のことだがなのはの元気さが俺には少々眩しすぎる。いや、いいことなんだけどね…。

「それじゃお母さん、行ってきまーす」

「じゃあ桃子さん、行ってきます」

「はい、いってらっしゃい♪」

高町家を出発し、学校のスクールバス停留所までお互い話をしながら並んで歩く。話の内容はとりとめのないこと。宿題をすましたかとか、夕べのドラマはおもしろかったとか、この年の子にはよくあるお話。

停留所に着いてバスを待つ間もお喋りは続き、やがてバスがやってきて乗り込むと後部座席のほうから声をかけられる。

そこにいたのは俺となのはの友人、金髪で活発な少女アリサ・バニングス、黒髪のおとなしげな少女月村すずか。

「あ、おはようなのはちゃん、鈴君」

「おはよう鈴。…あとなのは」

「おはよう、すずか、アリサ」

「おはようすずかちゃん、……あとアリサちゃん」

挨拶を終えた俺はため息をつきながら後ろの席の二人の元へ。なのはも俺の隣に座る。
窓際からすずか、アリサ、俺、なのはと四人並んで座る形になり、横目ですずかを見てみると苦笑していた。俺もつられて苦笑してしまう。

原因はわかってる。なのはとアリサの態度だ。

実はこの二人……仲は悪いとはいえないが、良いともいえないという微妙な関係なのだ。俺やすずかを交えると普通に会話をするのだが、二人きりになると途端に口数が少なくなり、下手をすればケンカまでしてしまう始末。っといっても取っ組み合うような本気のケンカではなく口喧嘩の応酬といった類のものなんだけどね。俺とすずかはこの二人を、

「「ケンカするほどなんとやら……」」

っといった感じで、ある程度は放置している。そう考えれば仲はいい方なんだろうなぁ。

こういった関係になったのは一年生の頃。
アリサがすずかにちょっかいをかけていたのを俺となのはが目撃。
さすがに見かねた俺が、「こらこら。そこのおなご苛めはよくないぞよ」と言って間に入る。そんな俺にアリサも最初は驚いたもののすぐにギャーギャー噛み付いてくる。”中身は”大人である俺は正論でコトを治めようとする。
でも俺は失念していた。相手は一年生。正論が通じるほど甘くはなかった。

ふとももに腰の入った素晴らしいローキックをもらいました。

あまりの痛みに蹲る。それを見て怒ったなのはがアリサに詰め寄りアリサも応戦。エスカレートしてと取っ組み合いのケンカを始める。もうその場所はカオスだった。痛みを堪えながら、もういっそ【催眠】でも使ってムリヤリおとなしくさせようかと黒い考えがよぎった時に、先ほどから沈黙を保っていたすずかが声を張り上げた。

「もうやめてっ！！」

その大声に二人はピタッ！と動きを止める。それを好機とみて俺は立ち上がりは二人を宥める。（この時の俺の足は生まれたての小鹿みたいだったという）
だんだん冷静になってきたのかアリサもおとなしくなり俺とすずかに「…ごめん」と小さく謝った。それを聞いた俺とすずかはアリサを許し一件落着……とはいかなかった。
なのはとアリサが意地を張ってお互い謝らなかったのだ。

アリサ曰く、「そっちが先に手を出したんだからそっちから謝りなさいよ！」

なのは曰く、「そもそも鈴君に先に手をだしたのはそっちなの！」

……いや…なのは…被害者の俺は許してるんだからもういいんですけど。その事をやんわりと諭すとなのははしぶしぶとアリサに謝る…はずだった。

そんな諭されるなのはを見てフフンッ♪と笑みを浮かべるアリサ。

それを見たなのはがまたプンスカと怒り、アリサが逆ギレ。

ギャーギャー言いあう二人を見ながら俺とすずかは揃ってため息を吐いた。

そんな経緯を経て俺たちはいつの間にか四人でいることが多くなったのだ。ホント…人の縁とは不思議なものだねぇ。

当時を思い出していたら、バスは学校に到着していた。

授業風景は特に面白みもなかったので省いてっと……
放課後の帰り道、いつもはみんなと一緒に帰るのだが今日は買い物があるため一人で帰る。そして商店街にある喫茶店翠屋へ。

カランカラン

相変わらず繁盛している店内を歩き、カウンターで作業している男性、士郎さん（なのはの父親）に声をかける。

「いらっしゃいませ…って、お～鈴君じゃないか」

「こんにちは士郎さん。いつもの豆をおねがいします」

「うん。わかった。ちょっと待っててくれ」

そう言って店の奥に引っ込む士郎さん。先生がこの店のコーヒーを大層気に入り、高町家と普通に付き合いのあるウチは特別に良心的なお値段で売ってもらっているのだ。
にしてもあの人といい、桃子さんといい、本当に二十代にしか見えないんだけど…。ウチの先生も大概だし。すごいね。人体♪

「おまたせ」

「あ、ありがとうございます。これお代です」

「うん、毎度ありがとう♪それにしても、相変わらず、蓮さんはコーヒー好きだね」

「えぇ、もはや中毒（ジャンキー）者ですよ。まぁそれを抜きにしてもここのブレ

ンドはおいしいですよ」

「ははは。お褒めにいただきありがとう。これからもウチをよろしくね」

「ええ、もちろん」

それからも少しの間、士郎さんと会話を楽しむ。途中で「最近、なのはとはどうなんだい？ん？」って内容になった時に店の厨房側から密かに殺気を向けられた。

……居たんですか……恭也さん…

士郎さんも気づいてるはずなのに普通に会話を続ける。…なかなかいい性格してる。息子をなんとかしろと言いたいが我慢。とりあえず当たり障りのない返答でしのぎ、会話を打ち切り店を出る。

…さっきからビンビンに突き刺さる殺気はもう無視。小学生にそんなもの向けるな大学生。

学校へ行こう！（後書き）

頭の中ではいろいろできてるんですが文章にするってホント難しいと改めて思います。……まぁ、自分のレベルが低いからなんですけど。

それぞれの夢でみるものは？　1

『鈴』

夢をみている……

俺はある光景をみていた。

どこか見覚えのある青年が夜の闇に包まれた林の中で一人眼を閉じ、静かに佇んでいた。

見たことあるなと思い、記憶を探るもすぐに答えが出た。

（あぁ……こいつ……俺だ…）

まだ俺が『秋月鈴』になる前。『　　』の名前だった頃の……

あまり夢で見たい光景ではないが、懐かしいなぁとも思う。

あの頃の自分は魔法という強大な力に魅入られていた。時間の許す限り先生の魔導書を読み漁り、自分の体を省みない自己鍛錬を行い、魔法の一つ一つをその体に覚えさせていった。

（ほんとに無茶ばっかりやってたよなぁー）

やがて見ていた光景に変化が起きる。
青年はゆっくりと眼を開く。その顔に浮かぶのは覚悟の表情。そして青年は魔法を発動させる。

「【時逆】」

瞬間、青年の足元から広範囲に白く光る六角形の幾何学的な紋様が描かれた陣が広がる。

自分の知る限り、先生にしか行使できない時間操作系の魔法。それがこの時、習得しようとしていた魔法。
ただ、この系統の魔法は自然の摂理に反するため行使するのは危険であった。よって先生は大規模な時間操作系魔法は禁術の一つとしていた。
時間操作系は術式も遥かに複雑で使用する魔力も莫大、また生物に行使すれば何かしらの反動もあるという欠陥だらけの危険な魔法。
先生は絶対に使おうとも伝授しようともしなかった魔法であった。

しかしただひたすらに力を求めていたこの時の俺は禁術だろうがなんだろうが関係なかった。だから封印されていた魔導書を勝手に紐

解いて、眼を盗んで魔法を試している。

（やめとけって俺。身の程をわきまえろよ…）

当然、夢なのだから声は届かない。過去に起きたことだからどうしようもない。ただ自分の愚かさを見ているしかない。

力を持つということの意味を本当に理解できていないあの時の自分を…

そして分不相応な力を求めた結果が青年に襲い掛かる。

さっきまで正常な形を示していた陣が突如グニャッと歪み、淡い白い光は荒れ狂う稲妻と化す。制御していた魔力が暴走し、辺りを暴れまわる。

青年はその光景に驚きながらもすぐに術式を安定させようと集中していたが、まったく状況は変わらない。そして、青年の体に異常がおきた。

ゆっくりと足先から青年の体が光の粒に分解していた。

（今ならわかる。これ俺の魂がバラバラになってるんだよなぁ。…なんかエグい）

かつての自分のことなのに妙に軽い気持ちで見ている自分に苦笑してしまう。やっぱり夢だからかな。

やがて青年はどうしようもないと悟ったのかため息一つ吐き力を抜く。自業自得だと呟き、やがてくる『死』を静かに受け入れていた。あと数分ぐらいかな……と青年が考えていたその時、

一人の女性が林の木々の間から飛び出てくる。

見慣れた白い髪に黒い瞳。
林を突っ切ったのであろう、体のあちこちに葉っぱや枝が絡みつき、その白い髪も所々ハネている。

「…　…　…！」

女性…先生は何か言っているが青年には聞こえてないようだった。
そりゃそうだ、この時の俺は消える寸前。もうほとんどの五感を失っていたんだから。やがて青年は……

……光の粒となって消えていった……

パチリッと眼が覚める。ベッドから身を起こしあくびを一つ。

「やっぱり見たくなかったなぁ……」

別に初めて見る夢ではない。だから初めて見た時ほどショックもない。けどやっぱり見たいものでもない。

自分の死んだ時の光景なんて…

『なのは』

夢をみてるの……

見たことのない服装をした同い年ぐらいの男の子が林の中で黒いお化け？と戦ってました。襲い掛かってくるお化けから男の子は必死に応戦して、時には背を向けて逃げをしばらく繰り返してた。やがて男の子がポケットから小さなビー玉？宝石？を取り出し、宙から襲い掛かるお化けに向けて叫ぶ。

「――シード――　印！」

何を叫んだのかはよくわかりません。
すると、その手からゲームとかで見るような魔法陣が広がりそれにお化けがぶつかり…お化けは弾かれてそのままどこかに逃げていきました。
男の子はそれを悔しげな顔のまま見逃し、やがて糸が切れたかのようにその場に倒れて動かなくなりました。

しばらく経つとその場に一人の女の人がやってきました。

白いカッターシャツに黒のパンツ姿の、見た目は二十歳ぐらいでしょうか？
でもなにより眼を引くのはその透き通るような白い髪の毛でした。
…というよりあれは、

（蓮さん？）

蓮さん？は男の子にゆっくりと近づき、

「あっちの人間…か……面倒な事にならなければいいが…」

と呟いていました。

？あっちの人間？どういうことなの？と考えてたら……

ちゃらら～♪ちゃららりりら～♪

目覚ましの音楽を鳴らす携帯を手探り、掴み損ねてベッドの下に落とした事を若干億劫に思いながらも目覚ましをとめます。

「ふぅわぁ～～…ん～…何か変な夢を見ちゃったの……」

しっかりと見てたはずなのに内容ははっきりとは思い出せません。

んーーーー～～～～～……

思い出せないのはもやもやしちゃいますけど仕方ありません。それよりおきて学校の準備です。

このもやもやは鈴君にかまってもらって解消することにするの♪

それぞれの夢でみるものは？　1（後書き）

長いわけでもないのに時間ばかりかかる。文才がほしい…

それぞれの夢でみるものは？　２（前書き）

時間がかかったうえ、捏造、キャラ崩壊などいろいろとひどい。そんな出来ですがよろしければどうぞ。

それぞれの夢でみるものは？　2

『アリサ』

夢をみていたわ……

見ている光景は過去の出来事。

今よりも幼いときにあたし自身も何が起こったのかよくわからない出来事。

今のあたしよりもさらに幼いときのあたし（小学校に入る前の頃）が真っ暗闇の林の中を走っていた。
その格好はパジャマ。とてもこんな場所に似つかわしくない格好である。

（えーと…たしかこの時って……）

たしかこの時は自分の部屋で寝ていて……夜中にふと眼が覚めて窓の外を見てみると家から少し離れた所の林から変な光景が見えたん

なくもっとこう…ろうそくの炎の光のように幻想的で暖かそうで……
遠目から見てもはっきりとわかる白い光、電気の光のような光ではは
の粒が上空に昇って消えていくというよくわからない光景。
木に覆われた林の一角が白く光っててそこから蛍のように小さな光
だっけ？

儚そうな光の粒だったわ。

（……でそれを確かめに行こうって事になったのよね）

好奇心に突き動かされた部分も多分にあったけど、それよりもこの
時のあたしはあの光に強く惹きつけられたんだと思う。でなきゃこ
んな夜中にウチの人たちに内緒で出ていかなかったはずだ。
歩幅は決して大きくないが着実に進んでいるあたし。この視線は常
に前へ……

ようやくたどり着いた場所は木々の開けた場所。決して広いとは言えないがこの時のあたしには十分に広いと感じられた場所。
見えていた幻想的な光景は無かったがあの光はこの場所から発せられていたと確信した。
なぜなら……

小さな光が広場の中央に浮かんでいたのだから。

さっきまで見ていたものよりも小さく、輝きも弱弱しい。それでも見ているだけでも光は暖かそうで幻想的で……儚い。
幼いあたしは全く臆することなくその光に近寄りゆっくりとそれに触れようと手を伸ばす。そして、指先が光に触れた瞬間、一際強い光を放った。
あたしはその輝きに一瞬驚いた様子を見せたがすぐに立ち直り、光をゆっくりと両の手で包み込み胸元に抱え込む。まるで何かから光を守るように……
そして自分でもわからないがこの時はこうしなければいけないような気がした。

徐々に光がおさまっていき、やがて消えるとあたしはその場でゆっくりと横たわっていった……

ピピピピピピ♪　カチッ！

目覚ましの音で目覚め、身を起こし伸びをする。

「ん〜〜！　…それにしても懐かしい夢をみたわ」

あの時あった出来事は結局なんだったのかよくわからない。夢だったのかと思いもしたけどパジャマ姿で外に、あの広場の真ん中で眼が覚めたのだから夢とは考えづらかった。それにあの光は消えたというより私の中に納まったといった感じがした。現に今もあたしの中にナニかがあるという感覚が残ってる。

むしろその後が本当に大変だった。

屋敷に帰ってみると何人かのお手伝いさんがあっちこっちを走り回っていた。

呆然としていたら走り回っていた一人のお手伝いさんがこっちを見て、「みつけました！　奥様ー！　旦那様ー！」と叫び走り去ってゆく。少しすると、パパとママがやって来ていきなり抱きしめられ

た。

どうやらあたしを起こしに行ってみると部屋はもぬけのカラ。屋敷中を探しても見当たらない…とたくさん心配をかけてしまったらしい。

そのことについて素直にあたしは謝った後いっぱい怒られた。それはもう二度としたくないと思うくらいに…

ひとしきり怒られた後に何をやってたのか聞かれてあたしは正直に答えるも、非現実的すぎて信用してもらえなかった。遂には夢遊病の心配までされた。……ショックだった。

その後もいろいろと言われたけど、もうこんな心配をさせないということで一応の解決になった。

「っとそれよりいい加減起きなくちゃ」

窓から入り込む朝日に眼を細めながらあたしはベッドから下り立つ。

「鈴だったら…この話、信じるかしらね……」

『すずか』

夢をみてました……

見ている光景は大体、一年ほど前の出来事。
私と鈴君が夕方、放課後の教室で向かい合っている。けど私は鈴君と顔をあわせず、ただ物悲しい表情のまま俯いていた。

（飲んじゃったんだ……鈴君の……血…）

そうだ。この時、飲んでしまったのだ。鈴君の…血を。

一年生の時の出来事で一緒にいるようになった私たち四人だったけど、私は完全にはその輪の中には入らなかった……いや…入れなかったのだ。

私は普通の人間じゃなかったから……

夜の一族。いわゆる吸血鬼と呼ばれる種族。それが私たち一族の正体だ。人間社会に溶け込んで生きているとはいえやはり迫害による

不安や恐怖といった感情もある。

”人間じゃない”　それだけで迫害されるには十分過ぎる。

私は他の三人から常に一歩引いた場所にいた。その先に踏み入れなかった。ばれることを常に恐れていたのだから…

そんな気持ちで過ごした日々だったがこの日、恐れていたことが起こったのだ。

この日の放課後、教室に忘れ物を思い出した私は急いで来た道を戻り、教室にたどり着いてみると鈴君が左手を押さえて蹲っていた。慌てて鈴君に駆けつけどうしたのか聞いてみるとカッターを使う作業で誤って手を切ってしまったのだという。傍の机にはいくつかの用紙に血液の付着したカッターが見えた。よほど深く切ったのか床にも少しだけ血痕が見受けられた。

私は持っていたハンカチと絆創膏で治療を行おうをして鈴君の傷口を…血を眼にした瞬間、血の匂いを嗅いだ瞬間、

とてつもなく強い衝動に駆られた。

夜の一族がもつ吸血衝動という本能。私も別にそれを発するのは初めてではないがここまで強烈な衝動は今までになかった。あまりにも異常だ。

理性が本能をオサエツケラレナイ……

「すずか？　どうしｔ「ウゴカナイデ」！？」

無意識のうちに自身の魔眼を発動させる。

言葉通り動かなくなった鈴君を余所に、私は傷口に口を近づけその

血をゆっくりと舐める。口にしたその血は今まで飲んだ血などとは比べ物にならないものだった。ゆっくりと舌を這わせ舐めていたがもっともっとと言う欲求に従い歯を立て音を立てて血を吸う。ひとしきり吸い終わり顔を上げた私の顔に浮かぶ表情は……恍惚。

「……ハァ♪」

マダタリナイ。モット…モットモットモットモットモットｔ「【覚醒】」

パキィィーン!!

ナニかが割れるような音が頭の中に響いた。

急激に思考がクリアになる。視界に映るのは人差し指をこちらの額に当てている鈴君の姿。

あれ？　鈴君、動けないはずなのに…？

あれ？　ということは今のは鈴君が…？

あれ？　私はいままで……何…を……!!!　思い出した！　私…鈴君に…なんて事を!?

（どうしよう！　な、なんて説明すればいいの!?　なんとか誤魔化す？　でもどうやって!?　正直に話す？　でもそれだと本当に全てのことがばれちゃう!?　そうなったら今までのことが…無くなる？　お友達じゃなくなる？　そんなの嫌!?）

思考が堂々巡りをおこす。考えれば考えるほどにドツボに嵌まる中、

不意に鈴君が口を開いた。

「あぁ～…すずか？　うん、別に話さなくていいよ。隠したかったことなんだろ？」

……えっ？

一瞬、鈴君の言ったことが理解できなかった。なんで？あれだけのことされて話さなくていいって…

「で、でも私、鈴君にあんなことを…」

「いや、まぁ、たしかに驚いたけど。さっきからすずかの顔を見るに深い事情があるんだろ？　それも話すことが難しいような。だったら別に深くは突っ込まないからさ。それに友人にだって隠し事の一つや二つぐらいあっても不思議じゃないぞ」

「……鈴君はあんなことをした私をお友達だと思ってくれてるんですか？」

「むしろ俺は”あの程度”で友人やめるつもりはさらさらないぞ？」

そう断言する鈴君の顔は微笑んでいました。

…お人好し過ぎます。

…優しすぎます。そんなことを言われたら甘えたくなるじゃないですか。でも今はとてもありがたくて、うれしいです。少し涙が零れそうになりましたが、グッと我慢します。

鈴君が笑顔でいるのですからこっちも笑顔で返します。

「では…今は話す事はできません。でもいつか必ず私の全てを鈴君に…いえ、アリサちゃんやなのはちゃんにも打ち明けます。そして許されるのであればその時は改めてお友達になってもらえますか？」

甘えてばかりじゃいけない。自分の血に嘆くばかりじゃなく、受け入れるように強くなります。お友達を諦めるんじゃなく、自分からつくるように求めるんです。

そして鈴君やアリサちゃん、なのはちゃんと……

ふにっ！　「にゃぁ～♪」

うっすらと瞼を開くとこちらの額に前足を乗せる猫の姿。のっそりと体を起こす。その拍子にコロンと転がる猫を抱き上げる。

「おはよう」

時計を見ればいつもより少し早い時間。二度寝もする気は無いので素直に起きる。窓から差し込む朝日が今日も快晴だと伝えてきます。

…それにしてもあの夢。私にとって一つの転換期となったあの日。ちょっとでも強くなろうと思い、努力してきた。おかげで交友関係も昔に比べて広まった。自分の意見、主張も述べれるようになった（それでも昔よりはマシ程度）もちろん夜の一族の事はばれないように。

お姉ちゃんはそのことを不思議そうにしてたけど私は「内緒♪」と言って大事な部分ははぐらかしている。

ちなみに鈴君にあの時私に何をやったのか聞いてみると、

「禁則事項です♪」

と返された。

……いいんですけどね。お友達にだって隠し事の一つや二つあっても。でもなんだかくやしいです。

でも鈴君も私も近いうちに全てをみんなに話す。なぜかそんな予感がしました。

それぞれの夢でみるものは？　2（後書き）

本当に時間がかかった。すずかちゃんになった途端、筆が停滞した。
難しいですね。もっと精進せねば…

お昼は楽しくおいしく！（前書き）

やっぱり時間ばかりかかる。でも話は進まない。自分の有様にため息がでます。

『鈴』

「将来…」

「「？」」

「どうした？なのは」

昼休み。屋上にていつもの四人でで弁当を食べている時になのはが急に呟いた。

「さっきの授業で将来について考えてみるってあったでしょ？」

「ああ、それで？」

「私の将来ってどうなるのかなぁって思っちゃって」

なるほどね。妙に生真面目なのはの事だ。本当に真面目に考えてみたんだな。ってかこの年齢の子って普通、サッカー選手とかアイドルとかそんな夢が広がりまくった将来像を思い浮かべるんじゃないのか？

それともあれか？　そんな俺の考えが古いのか？　ジェネレーションギャップなのか？

「翠屋を継ぐって選択肢があるじゃない？」

「うん、たしかに選択肢のひとつなんだけどソレが本当にやりたいことなのかなって思うとどうも違う気がするの。…アリサちゃんは？」

「あたし？　そうねぇ。勉強を頑張ってパパの会社を継ぐ……んだけど…」

「だけど？」

「いつだったかパパに言われたのよ。娘だからといって義務とか責任とかそんなの考えずに私の本当にやりたいことをやりなさいって。それ以来ちょっといろいろ考えちゃって…」

「それってつまり…」

「なのはと一緒ではっきりしないってことよ、癪だけど。すずかはどうなの？」

「私は…機械系の方を考えてるってぐらいかなぁ」

意外かもしれないがすずかは機械をそこそこに弄くれるぐらいの知識があるのだ。何でも姉である忍さんが結構弄くれるからその影響もあるのだとか。

「鈴はどうなのよ？　将来とか」

「俺は全然決めてない」

だって今の俺、九歳だよ?先を決めるにはまだ早い気がするんだよなぁ。
でも何かしらの職業には就きたいな。何しろ以前の俺はほとんどフリーターのような身だったからな。アルバイトだったり、先生の仕事の手伝いだったりとまともな職に就いた覚えが無い。(ちなみに先生は軽い”裏”の仕事をしてた)

「あんた、もっとちゃんと将来を考えないとプータローになっちゃうわよ」

「うっせ、大きなお世話じゃい」

「……もう仕方ないわね。もしあたしがパパの跡を継いだら……その……専属の付き人にしてあげてもいいわよ?」

「何?」

「「えっ!?」」

付き人…執事…。ビシッと執事の服を着こなし、常にアリサの傍に付き添い補佐してゆく。
……ふむ。悪くないかもしれんな。アリサが主人っていうのはともかく、執事は一度でいいからやってみたいな。

「悪くないかもな。その時はよろしく頼む」

「も、もし継いだらの話よ! だから「「ダメです(なの)」」えっ?」

アリサの言葉に割り込み、こちらにすごくイイ笑顔を向けて却下を

告げる二人。っていうか何で俺に告げる。発案者はアリサだぞ？

「いや、あのな二人とも。俺の将ｒ」

「「ダメなの（です）」」

「だから俺の…」

「「ダメ」」

「……はい」

二人の半端ないプレッシャーに圧され、つい頷いてしまった。…弱いなぁ俺。

視界の端に何故かぶすっとした表情のアリサがいた。

「ところで鈴？」

「何だ？　アリサ」

「あんたの今日のお弁当、すごく凝ってない？　いつものようにあんたが作ったんでしょ？」

「言われてみるとたしかに凝ってるの…」

「すごくおいしそうです」

三人の視線が俺の弁当に集まる。

たしかに手間暇かけた。あんな夢を見たからかいつもより早くに目覚め、気を紛らわす意味もこめて料理に没頭した。その成果がこの弁当だ。（ちなみに朝食もいつもより少し豪華になった）

おにぎりは全て三角にしてそれぞれ別の具を。おかずにしても卵焼きやいんげんの牛肉巻き、つみれ団子のコンソメ煮、温野菜と手を掛けた。

「ああ、早くに眼が覚めたからな。せっかくだから時間をかけて作ってみた」

「あんたもう完全に主夫よね。普通、小学生でそれほどの子はいないわよ」

「自然と覚えていったモノだけどな…」

昔から家事に関しては一手に引き受けてたからな。先生も出来ないことはないんだが……雑なんだよな。

「ねぇ、よかったら一個くれない？」

「ん？　いいぞ、どれだ？」

「やった♪　じゃあ、そのお団子頂戴」

ほほう、これに目をつけるとはお眼が高い。これは今日の至極の一品だ、存分に味わうがよい。…と、ここでふとした悪戯心が湧いてきたので実行してみる。

串に刺さったつみれ団子を一つ手に取り、

「ほれ、あ～ん♪」

「「え!?」」

ふふふ、うろたえておるな。やっぱりアリサのそのうろたえている表情はおもしろい。あー、だのうー、だの呻きながら赤くなったりそっぽ向いたりと一人で百面相している。

さすがにこれ以上続けると張り手が飛んできかねないので「冗談だ」と手を引っ込めようとしたら…

「…あ、あ～ん（／／／）」

……あれ？

えっ？　本当にするの？　冗談だったんだよ？　さすがにその反応

は予想ＧＵＹですよ。ってかあんた、そこは「何やってんのよ！」って言いながらビンタするのがアリサの正しい反応でしょうが。いや、殴られたいわけじゃないけど…。Ｍじゃないですよ。

…どうしよう。なんか引き下がれないとこまで来てしまった気がする。なら行くしかあるまい。覚悟を決めろ鈴！　おまえはやればできる子だ！　顔が熱くなってる気がするが気のせいだ！

「ほ、ほれ。あ～ん（／／／）」

そのままつみれ団子をアリサの口元に持っていく（アリサも顔が赤い）そして、

パクッ！

「「あ」」

「もぐもぐ♪」

横からなのはに掻っ攫われました。

「あーーーーー！」

叫ぶアリサ。モグモグと食すなのは。呆然とする俺とすずか。

「何するのよ、ばかなのは！　返しなさい！　あたしのつみれ！」

なのはの肩を掴みガクガク揺さぶるも意に介さず咀嚼を続けるなのは。そんなに食べたかったのかアリサよ。もう一個残ってるんだから譲ってやれよ。

ってかいろんな意味ですごいなのは。まさかそこで掻っ攫うとか…。この鈴の眼をもってしても見抜けなんだ。

「相変わらず仲がいいですねぇ」

「だな」

「……ところで鈴君。わ、私にも頂けませんか？」

「あ、うん。いいよ。どうぞ」

返事をしながら弁当を差し出す。さすがにすずか相手に同じ悪戯を

する気は起きないので素直にあげる。

「……」

「？　どうした？」

「……いえ、何でもないです。いただきます」

なぜかぶすっとした表情で最後のつみれを手に取るすずか。なぜそこで憮然とした表情になる？

……まさかあ～んしてほしかった…とか？

んなわけないかと勝手に自己完結しておく。

「……ばか」

すずかがなにか呟いた気がしたが俺の耳には届かなかった。

お昼は楽しくおいしく！（後書き）

もっとペースアップを図れたらいいんですけどねぇ…。
ちなみにこの作品のなのは、すずかちゃんは少しポジティブです。

イタチ？　フェレットです！（前書き）

生きてます。

イタチ？　フェレットです！

『なのは』

学校も終わって帰り道。今日は私とアリサちゃん、すずかちゃんの三人は塾があるのでいつもと違う道を歩いてます。鈴君は家事などがあるのでクラブや習い事の類はやってないから先に帰っちゃいました。

昨日に引き続き、今日も鈴君と一緒に帰れないのがちょっと……いや、凄く残念で仕方ないの。

いつも四人でいる時間も楽しいけど、やっぱり鈴君と二人一緒にいる時間はそれとは別に凄く心地いい時間だと感じます。

昔、ウチのお父さんが倒れて大変だった時期……一人ぼっちだったあの頃に出会って以来、近所ということもあり二人で遊んだりして、一緒にいることが多かったので鈴君が傍にいないと物足りなくなっちゃうの。昨日今日とその幸福感が足りないから明日の朝、またかまってもらうことにするの。久々にハグをしてもらうのもいいかも♪

「こっち、塾の近道なのよね」

そう言ったアリサちゃんが指差し、歩き始めたのはちょっとした林道。私とすずかちゃんは初めて入る場所だからアリサちゃんについていく。

しばらく歩き辺りに木が多くなってきた辺りで、

（…す…けて…）

…？　何か聞こえた？

「ねえ、何か聞こえなかった？」

「なのは？」

「何かって？」

二人に尋ねてみてもわからない様子。私も空耳だと思い、気にしないでと言おうとしたけど、

（助けて）

！　やっぱり気のせいじゃない！

「ほら、やっぱり聞こえる！」

「どうしたのよなのは？　すずかも聞こえ……すずか？」

「……なのはちゃん、たしかに聞こえました。助けてって」

「こっちから！」

「なのは！」

「なのはちゃん！」

二人を置いて私は声がした方向に走ると一匹の生き物が地面に横たわっているのを見つけた。薄っすらと色づいた毛色。首にはビー玉のような物が首にかかってるの。これって…

「イタチ？」

「フェレットっていう動物だと思います」

後ろからの二人の会話を後にフェレットの容態を見るためゆっくり抱き上げる。

呼吸はしてるし、見た限りでは怪我はない。ただ完全に意識が無いのかぐったりとして起きる気配が無い。このままじゃいけないと思い、行動に移す。

「この近くに動物病院ってあったかな!?」

「えーっと、たしか…槙原動物病院ってところがあったはず!」

「すぐに連れて行きましょう!」

フェレットを抱きかかえたままは私たちは走り出します。

この子を助けたい。ただその一心で…

あの後、フェレットを獣医さんに診てもらい、命に別状は無いと診断されて安心した私たちは病院にあの子を預かってもらい塾に来ています。

あの時は無我夢中で助けたんだけど、一つ問題が浮上しちゃいました。

誰があの子を引き取るかについてです。

もちろんあの子を助けたことに後悔はないけどこうして出てきた問題の解決策が思いつかないの。

アリサちゃんの家は犬で一杯。

すずかちゃんの家は猫で一杯。

私の家は飲食店をやっているので衛生面でＮＧ。

うーん……

塾が終わったら鈴君に相談してみる

そう書いた紙を二人に見せる。二人とも納得したのか頷いていた。

…これでダメだったらお母さんに相談してみようかなぁ。

『つまり、そのフェレットの引き取り手に困って電話してきたって事だな？』

「うん、そうなんだけど…どうかな？」

塾が終わり家に帰って自室から鈴君に電話をしてみる。あの子を助けてからのいきさつを説明し鈴君の家で飼えないかな？と…

一応、お父さんお母さんにも言ってみたけどやっぱり難色を示していた。これで鈴君もダメだったら本当にどうしよう……

『…わかった。協力しよう』

「え？」

『ウチでずっと飼うのはちょっと難しいから数日預かるような形にする。その間にネットで里親募集の呼びかけとかもやってみる。それでいいか？』

「うん！　ありがとう鈴君！」

『じゃあ詳しいことは明日にでも話そう。また明日な』

「わかったの、また明日。おやすみ、鈴君」

『ああ、おやすみ。なのは』

挨拶を最後に電話が切れる。名残惜しさを感じながらベッドの枕に顔をうずめる。

やっぱり鈴君は優しい。出会った当初から優しくしてくれて、当時寂しかった私はその優しさに甘えてしまってそのまま今も鈴君に甘えてしまっている。このままでいいのかな？　と思うとこもあるけど鈴君の優しさに浸るうちにずるずると問題を先送りにしてしまっている。

依存といかないまでもやっぱり甘えすぎてるとこもあるけど鈴君はそれも許してくれる気がする。

ふと思う。もしあの時、鈴君に…蓮さんに出会ってなかったら私、どんな子になってたんだろうかと…

自分で言うのもなんだが悪い子にはならなかったと思う。自分を押し殺して、周りを伺い、ずっと”イイコ”でいようとして……

そこまで考えて、急に怖くなり頭を振り思考を振り払う。そんなの考えたくない。鈴君に出会わないなんて嫌なの。

気持ちを切り替えるようにして携帯をもう一度手に取る。問題が解決したことをメールで二人に伝える。

〈鈴君が預かってくれるようになりました。詳しいことはまた明日♪〉

「送信っと」

送信したことを確認してからまた枕に顔をうずめる。

……だんだんと眠たくなってきた。机の上のフォトスタンドに眼をやる。そこに写っているのは私と鈴君、そして二人の肩に手を廻している蓮さんの姿。私の大切な物のひとつ。その写真に「おやすみ」を呟こうとして……

（助けてください！）

!?

ガバッと跳ね起きる。今の声って…あの時の!?

（僕の声が聞こえるのなら…お願いです！　力を……貸してください！）

その必死な呼びかけを聞いて、なのはは無意識のうちに行動を起こした。

これがなのはの常識を一変する始まりの出来事である

「!?　今の声！」

あの時、なのはちゃんにも聞こえていたあの声。頭に直接届く、未知の現象。

どうする？　普通なら関わる義理も何も無い。だけど、あまりにも必死なその呼びかけは見捨てるのもしのびない。それに、

「誰かを助けられるくらいは強く…」

強くなるという想いは少女の体を突き動かした。

これがすずかの新たな想いの始まりの出来事である

「もう！　なんなのよ、一体！？」

そう毒づきながらもアリサは動きやすい服装に着替える。

今の声はおそらくあの二人が聞いたって言う声だろう。なんで今回は私にも聞こえたのかはわからないが…

もとよりこの少女はあの必死な呼びかけを見捨てられるほど冷血ではなかった。昔のアリサならこんな夜更けに出向いてまで行動するほどではなかったろうが…

「絶対、なのはやすずか、鈴の影響よねこれって！」

これがアリサの新たな世界の始まりの出来事である

この夜が三人の”魔法”の始まりであった

イタチ？　フェレットです！（後書き）

キャラの口調ってむずかしいですね。

魔法少女誕生！（前書き）

これはヒドイ（出来と遅筆的な意味で）主人公の出番が…

「鈴、ちょっと出てくる」

「……さっきの念話ですか？」

「ああ。留守番頼むぞ」

「わかりました。気をつけて」

「ん、行ってくる」

『なのは』

「はぁ、はぁ…！」

私は今、脅威から逃げている。

走りながら後ろを振り返る。そこに広がる光景はグラデーションがかかったような闇色の空。今まで居た町と隔離されたかのような物

静かな町。

そしてこちらに迫ってくる脅威の姿。

体の表面を不定形に蠢かしながら迫ってくるソレはまるで見たことの無い生き物。少なくともこの地球上に存在するとは思えないものであった。

「跳んでくる！　逃げて！」

「！？」

胸元に抱いているフェレットのユーノ君からの警告に従い、急ぎ曲がり角を曲がる。

背後で物凄い音が響き渡るが振り向いていられない。まずは逃げ回るには最適な広い場所である公園を目指す。

最初、病院に辿り着いたときは驚いた。大きな音が響き渡り、驚き中庭に走ってみれば預けていたフェレット…ユーノ君と黒いナニカが対峙していた。そこでちょっとした戦闘があったけど何とかユーノ君を回収、そのまま離脱、逃げながらの道中ユーノ君から様々な説明をしてもらった。

自分の正体は魔法使いである事とか、あのナニカはジュエルシードと呼ばれるものである事とか、そして現状の打開策ｅｔｃ…。

正直、非常識すぎて混乱しそうになったけど現状がそれを許してくれそうにないので無理矢理納得することにした。

……まさかフェレットが喋るとは思わず、ビックリして放り投げそうになったのは内緒なの。

化け物の追撃を一時的にだけど何とか振り切り公園に到着。けど安心してはいられない。すぐにあの化け物はやって来るだろう。救いをしては化け物の思考能力が著しく低いことかな。

「それで…！　どうするの!?」

「あなたにこれを渡します！」

そう言って渡された物は首にぶら下げてた赤いビー玉？　宝石なのかな？　手にとって見ると小さく煌いたような気がした。

「これは…？」

「レイジングハートと言います。これで…」

「なのはちゃん！」

「なのは！」

「！！　すずかちゃんにアリサちゃん！？　なんでここに！？」

急に呼ばれ振り向くと、自転車を押しながらこちらに走ってくる二人の姿。

何でここに…と思うが今はそんな状況ではない。今の私たちはあの化け物に追われている状況。そんな現状にこの二人を巻き込むわけにはいかない。

「二人とも！　逃げて！？」

「はぁ？　何言ってんのよ？　それよりなのは、これって何かおかしくない？」

「昼間のあの声が聞こえたから来てみれば急に空が変わって…。それでそのフェレットは…」

「ごめん！　説明してる暇がないの！　お願いだから…」

「来たよ、なのはさん！」

もう来たの！？

ユーノ君の報せに振り向く。そこには夜の宵闇からさっきの化け物がゆっくりと近づいて来る姿が。

振り切られたことに腹を立てたのかさっきよりも威圧感が増してる

気がする。
……感情があるかどうかはわからないけど。

「ねぇ、なのは。あれって…なんなの？　それに今、そのフェレット…喋らなかった？」

「それに今の声って……あの時に聞こえたあの声？」

「！？　ユーノ君！　また逃げるよ！」

そう叫び、私はユーノ君を肩に乗せ、二人の手をとって公園の奥にさらに逃げる。

「ちょ、ちょっとなのは！　どうしたのよ！？」

「なのはちゃん？」

「説明は走りながらします！　今はなのはと一緒に逃げてください！」

ユーノ君のフォローを聞きながらまた逃走劇を繰り広げる私たち。
それと同時に背後で動く気配が感じられたけど振り向けない。とにかくまた一旦引き離してユーノ君から話を聞かないと…
また突進してきたのか背後から轟音が響いた。

「あぁぁーー！！　あたしの自転車ぁぁ！！」

……振り向かない、振り向かない。

「……俄かに信じがたい話だけど…現状がそうじゃないって物語ってるものね」

「つまりなのはちゃんがこのレイジングハートっていうのと契約をすればアレを封印できるって事ですね？」

「はい。さっきのなのはさんを見れば適性は問題ないように感じました。ただ契約もすぐにできる訳ではなく、しかも契約中は完全に無防備な状態になります」

「それって…もしかして」

「はい。契約中に襲われるとひとたまりもありません。だからなのはさん、今から契約の仕方を教えるからレイジングハートと契約を。僕はその間、アレをひきつけて時間を稼ぐから」

「そんな!?　危ないよユーノ君!」

さすがにこの時ばかりは口を挟まずにはいられない。ユーノ君の打開策は自身が囮となって私が魔法使いになるようにとのこと。たしかにそうするしかないかも知れないけどいきなり一人で契約っって不安もあるし、ユーノ君は病み上がりで本調子じゃなさそうなの。

「わかってよなのはさん。今はこうするしか方法が無いんだ」

「…でも」

「そして残りのお二人はその間にどこかに「あたしがやる」…えっ？」

「その囮役はあたしがやるって言ってんの」

「「えええぇー！？」」

「作戦の変更よ。あたしが囮役。ユーノはなのはのフォロー。すずかはいざという時のために待機。これで行くわよ」

「いいえ、アリサちゃん。私はアリサちゃんのサポートをしますわ。いざ危険になったときにフォローできる人がいたほうが心強いでしょ？」

「……わかったわ。頼むわよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

今度はユーノ君が待ったをかける。

「これは僕が負うべき責任でもありますし本当に危険なんです！それにこれ以上、他の人を巻き込む訳には…」

「じゃあ、なのはなら巻き込んでもいいって言うの？」

「っ！？　それは…」

「巻き込みたくないって言うんだったら助けなんて呼ばないはずよ。それに手に負えなくなったから助けを呼んだんでしょ？　そしてそれにあたしたちは自分の意思でそれに応えた。だったら素直に手は借りなさい！」

「……」

「それに私たちはなのはちゃんも助けたいんですよ？」

「え？」

「そうよ。あたしたちが来なかったらなのはは危険な状況で契約をしなくちゃいけなかった。だからあたしたちが囮となってなのはを助ける。なのはは絶対に契約を成功させなさい！　そして…」

「そして？」

「その力であたしたちを助けなさい」

アリサちゃんの言葉の一つ一つがうれしく感じてしまう。
ああ、普段からお互いケンカばかりしてた私たちだけど本心から嫌いになることなんてできないんだなぁと思ってしまう。思わず顔が綻んでしまいそうになるけど我慢する。そんな顔を見られたら絶対突っかかってくるだろうから。鈴君曰く、アリサちゃんはツンデレだから。
そしてそんな助けたいという想いを私に抱いてくれるすずかちゃんにもありがとうを言いたい。
ううん。ことが終わったら絶対に言うの。そのためにも今は…

「ユーノ君」

「…わかりました。素直に力を借ります。ありがとうございます。アリサさん、すずかさん。そしてなのはさん」

「あ、呼び捨てでいいわよ」

「私もいいですよ」

「私もなの！」

「本当に…ありがとう」

うん、これで良しなの！　それじゃあ、がんばるの！

『アリサ』

「ほらほら！　こっちよ！」

「こっちですよ！」

今あたしたちはさっきの作戦通りに囮役となって化け物を引き付けている。あたしとすずかは自慢じゃないけど運動能力は高いほうだと自負している。だからこの役を引き受けた。

あの化け物はあたしとすずかのどちらに的を絞ろうかと動きを止めることが多い。それにあいつはタックルだけだし、動きが直線的だから事前に察知して回避すれば何とかなりそう。知能は低いみたいね。知能があるかどうかわかんないけど。それにしても声が聞こえて来てみればこんな不思議なことに遭遇してって何処かのゲームじゃないんだから…。

まぁ不思議な出来事は昔経験してるし。

けど何だろう？この出来事に遭遇してから胸の奥底が……妙に熱い。

興奮してるの？

どのくらいの時間が経ったかわからないけど、まだあたしは冷静でいられた。

っと、今度はこっちを見据えた。横に走ろうとした矢先に、

グキッ！

「ッ！？」

「アリサちゃん！！」

足を挫いて盛大に転んだ。冷静ではいたが、体のほうは思った以上

に疲労してたみたい。

マズイと思いながら化け物を見るとニヤリと嗤ったような気がして好機とばかりにこちらに襲い掛かってくる。

避けられない。わかっていながらも這うようにして動こうとするが足掻きでしかない。

目前に迫る化け物。

すずかが何か言ってるけど聞こえない。

「ごめんね」

誰に謝ったかわからない。せめてもの足掻きとして化け物をキッと睨みつけた時にそれは来た。

「だめぇぇーーー！！」《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

白い姿のなのはと桃色の光があたしの前に立ちふさがった。

なのはの姿はさっきまでと違い、まるで学校の制服に似たような服になっていた。そしてその手にはさっきまでは持っていなかった杖がありそれを化け物に突き出し、突進を押し留めていた。

やがて黒い化け物は桃色の光の壁に大きく弾かれ、バラバラになりながら吹っ飛んだ。

「大丈夫!?　アリサちゃん」

助かったの……よね。

はぁ～と大きく安堵のため息をつくあたし。それよりも、

「ありがと、それよりちょっと遅すぎるんじゃない？　危うくやられるところだったんだから。」

「むっ！　その言い方はひどいの！　これでも急いだんだから！」

「まったく。本当になのははどんくさいんだから」

「ひどい！」

「なのはちゃん！　アリサちゃん大丈夫！？」

「なのは！　そんなことより早くジュエルシードの封印を！」

いつの間にかすずかとユーノがやって来た。すずかには心配かけちゃったし後でちゃんと謝ろう。

「そ、そうだった。えっと、レイジングハートお願い！」

《ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ》

なのはの杖・レイジングハートの先端部が変形し、そこから伸びた桃色の幾重の帯が化け物を貫き、絡めとる。

「ジュエルシード！　封印！」

《ｓｅａｌｉｎｇ》

光の帯が輝きを増し、化け物をより強く縛り上げる。そして眩しいくらいに一瞬強く光った後には化け物の姿は無く、青い宝石があった。

「あれがジュエルシード？」

「そうです。さあ、レイジングハートをジュエルシードに。それですべて終わります」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けるとスゥっと先端部に吸い込まれていった。

《ｒｅｃｅｉｐｔ　ｎｕｍｂｅｒ　ＸＸＩ》

ガコンッ！　シュゥゥゥゥ…

その音声を最後に辺りは再び静寂に包まれた。さっきまでの闘争が嘘だったかのような静寂に夢だったかのような錯覚に陥ってしまいそうだった。

「終わったん…でしょうか？」

「終わったのよね？」

「はい。これで封印は完了しました」

いつの間にかさっきまでの変な空は元の星が瞬く夜空に戻っていた。あたしはすずかの肩を借りながら立ち上がり、みんなに訊ねる。

「ねぇ？」

「はい？」

「どうしたの？」

「この惨状、どうするの？」

「惨状って……あ〝っ」

そう。辺り一面、酷い惨状なのだ。地面は所々、穴が空いていて、木々も数本へし折れていて、公園の遊具やベンチはいくつか砕けている。とてもじゃないがもはや公園ではない、戦場跡だ。

「ど、ど、どうしよう！　」

「ご、ごめんなさい！　魔力が少なかったんで結界の構成が甘かったみたいです！」

「落ち着いてください、二人とも。」

混乱するなのはとユーノ。宥めるすずか。終わったのにまた問題って…

そんなで頭を悩ませているとあたしたちの背後から聞きなれた声がかかった。

「とりあえずここは私にまかせろ」

その声に一斉に振り向くと見慣れた姿があった。

眼を引く白い髪が綺麗なあたしたち三人が慕う姉のような人であり、鈴の保護者。

「「「蓮さん！？」」」

「誰？」

「はぁ～。やっぱり面倒な事になったか…」

夜はまだ終わらない。

魔法少女誕生！（後書き）

て、展開が…

いったい何が始まるんです？（前書き）

拙い作品ですが…

いったい何が始まるんです？

『鈴』

ガチャッ…

「ただいま」

「あ、おかえりなさい。せん……せ…い？」

ゾロゾロ…

「お邪魔しま～す♪」

「こんばんわ、鈴君」

「お邪魔するわよ鈴」

「お、お邪魔します…」

……

……

…

「いったい何が始まるんです？」

「大惨事説教大戦だ」

なにそれこわい。

俺はキッチンで全員分の紅茶を淹れている。
こんな夜更けに先生が出かけて、帰ってきてみればいつもの三人娘＋αを連れている状態。そしてさっきのやりとり。混乱もするってーの！

っていうか何なんだ、あのフェレット？

もしかしてなのはの言ってたフェレットってあいつ？

軽く解析してみたけどどうやら人間だったみたいだ。

…もしかしてあのフェレットも魔法使い？

俺や先生以外に魔法使いっていたのか？

……ダメだ。考えることが多すぎる。とりあえず一旦思考中断。今は紅茶に専念しよう。お嬢様が二人もいるんだ、中途半端なものを出したらなんか申し訳ないような気になるからな。あのフェレットにはホットミルクでも持っていってやるか。
……フェレットにミルクって大丈夫なのか？

「お待たせっと」

テーブルの上にそれぞれ紅茶を配る。テーブルの上に座っている小さいフェレットの前にはホットミルクの入った小さな小皿を出す。

「ありがとうございます」

丁寧にお辞儀までするフェレット。

…やっぱり喋ってやがる、って何かこっちをじっと見てるし。

「…あなたも魔導師なんですか？」

「何？」

「それまでだ」

先生の横槍が入り、フェレットの言葉が中断される。その言葉をきっかけにここにいる全員が真剣な顔で先生のほうに向き直る。先生はそんな視線を受けながらタバコを咥え火をつける。ハーブや薬草を使った先生お手製のタバコは市販物のようなのタバコ臭さを感じさせず辺りに心地よい香りを広げる。

これを吸うって事は真剣な話のようだ。

「俺は席を外したほうがいいですか？」

「いや、おまえも加われ」

何故とも思うがとりあえずは言うとおりに従い、先生の隣に座りテ

ーブルを挟んでみんなと向き合う形になる。
先生は大きく紫煙を吐き出してから話を始めた。

「今夜の出来事、悪いとは思ったがある程度は高みの見物をさせてもらった。しかし私もさすがにああなった事情がわからない」

その言葉にみんなが驚いているが俺は留守番だったので何があったのかわからない。

「だから君の事や事の経緯、その他諸々、君の口から今一度話してもらおうか、フェレット君」

拒否を許さないような先生の威圧感たっぷりの言葉にフェレットのみならず他の三人まで身を縮こまらせている。
そしてフェレットは重々しく口を開いた。

「軽率だな」

「うぅっ」

フェレットのユーノ君の話を聞いてタバコの火を消しながら放った先生の一言目だ。もう鮮やかにバッサリと切り捨てた。

「起きたことに対して責任を取るその心意気は買うがその後が軽率すぎだ。そもそも君は僕の責任と言うが輸送”事故”なんだろう？　なぜ君の責任になる？」

「でも…僕がジュエルシードを運ばなければ…」

「それが君たちスクライア一族の仕事なんだろう？」

「……」

「そもそもそのジュエルシード、遠目から軽く解析魔法をかけてみたがあれは相当にやばい代物だ。個人がどうこうしていい物ではないぞ。なぜ他の人の手を借りなかった？　これははっきり言って時空管理局が動くレベルだ」

時空管理局？

「……やっぱりあなたはあちらの世界の人間なんですね？」

「質問してるのはこっちなんだが…まあいい。昔の話だ。わけあってこちらにいる」

あちらの世界の人間？　どういう事だ？
というのも俺は先生の詳しい過去を知らない。先生自身も話さなかったし、俺自身も訊ねることはなかった。正直、あまり気にならなかった。どのような過去でも先生が俺の家族であることに変わりないとおもえるからだ。

しかし、今の会話で少し興味が湧いてきた。いい機会だからそれとなく聞いてみるか？

「そんな顔するな鈴」

「えっ？」

「いつか私の全てを話す。だから今は堪えてくれ」

「ちなみにどんな顔してました？」

「好奇心むき出しの子供の顔」

そう言って静かに微笑む先生。その表情に胸がドキリとしたのはここだけの話。
でも今の表情、少し悲しそうにも見えたような気がした。

「…あの～」

そんな中、なのはが小さく恐る恐るといった感じで手を上げる。

「なんだなのは？」

「蓮さんもその魔導師っていうのなんですか？」

「ああ、そうだ」

ぶっちゃけちゃったよこの人。

「ちなみに鈴もそうだぞ。私の弟子だ」

「「「えーーーー！！」」」

「やっぱり…」

三人娘、五月蝿い。夜なんだから静かに。まぁ、防音障壁展開してるから近所迷惑にはならんけど。

ってか先生、魔法は秘匿するものじゃないんですか？

「鈴君、何で黙ってたの！？　私との間に隠し事はなしって誓ったよね！？」

「あんたあたしたちに隠し事なんていい度胸してるじゃない…」

「じゃあ、あの時の鈴君が私に使ったのは…」

すずかちゃん、あの時ってのは一年前のあの教室のか？　うん、正解。

アリサ何で握りこぶし作ってんの？　人は一つや二つ隠し事があるもんなんだよ。だからそのこぶしは解きなさい。ぶっちゃけ怖いのよ。

そしてなのは、そんな誓いは断じてない。あと襟掴んで揺さぶるな。軽くキマってて苦しいのよ

救難要請の意味をこめた視線をユーノに向けるがなのはとアリサのオーラに中てられたのか頭抱えてブルブル震えてやがる。もうそのまま部屋の隅で命乞いの準備でもしてろ。

そして先生は……ああ、めっちゃ２８２８してやがる。そうですか、これは試練なんですね。ＯＫ、わかりました。もうこのまま激流に身を任せどうか…なっちゃいます。

「で、これからどうするんだ?」

火種をおこしたのも先生なら沈静化させたのも先生だった。恨むべきなのか感謝すべきなのか、悩むべきところだが今は保留。

「さっきも言ったようにジュエルシードはお前たちの手に余るような代物だ。それでも自分たちの手でケリをつけるか、時空管理局にまかせるか。まぁ大人の観点からしたらおまえたちのような子供に危ないことはしてほしくはないが」

「……僕は…それでも自分の手でケリをつけたいです。形はどうあれジュエルシードの担当者は僕なんです。だからばら撒かれたのが事故であったとしても最後まで回収していきたいです」

「二十一個中、二個目で救助要請だしてた」

「茶化さないでください！」

俺の呟きが聞こえてたようだ。おお、こわいこわい。

「はい！　蓮さん！」

「なんだね？　生徒なのは」

いつの間にか教師、生徒の立場になってた。

「私はユーノ君のお手伝いを続けます」

「なのは!?」

「なのは？」

「なのはちゃん…」

「……」

「私はユーノ君の声に自分の意思で応え、手を貸しました。手を貸した以上、責任を持ってお手伝いを続けます」

「で、でもなのは」

「それにジュエルシードの封印は私しかできないんでしょ？　だったらやるしかないよ。そうだよね、レイジングハート？」

《Ｙｅｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

なのはの言葉に赤い宝石…デバイスだったか？が小さく答える。ユーノの話じゃ、もはやレイジングハートはなのはを主人と認識・登録してるみたいだしな。あれがなけりゃ封印できないってのなら確かになのはの力は必要だな。

「あたしも手伝うわ」

「私もです」

「アリサにすずかまで！？」

「あたしとすずかも今回の件に深く関わったわ。そしてまだ終わってないのに、はいそこまでってのは納得できないのよ」

「探索ぐらいなら手伝えますよ。それに私たちにもその魔力って備わってるんですよね？　だったら簡単な魔法を覚えれば自衛ぐらいならできるはずよ」

「探し物は一人より二人、二人より三人ってね」

「みなさん…」

ユーノがじっと三人を見つめる。俺も三人を見つめるが…その眼を見て思った。こいつらは絶対に退かない。ユーノが手を借りますと

言うまで食らいつくだろう。
この三人娘の妙な共通点の一つ「妙なとこで頑固」が発揮された時だった。

「先生…」

「ん？」

「このために俺を同席させたでしょう？」

「さあ？　どうだかな」

ニヤニヤしながらこちらに視線を向ける先生。
ああ、そうですよ。こいつらはこのままだと絶対どこかで無茶をやる。そして下手をしたら取り返しがつかないことが起こるかもしれない。そうさせないためにも監督役が必要になる。先生はその無茶をやって取り返しがつかないことをしでかした経験を知る俺をその役にする気なのだ。俺がこいつらを放っておけない性分なのを見越した上でだ。
わかりましたよ。乗ってあげましょう。どうせ確信犯なんだろ？

「あー、チョイ待ち。俺も手伝うよ」

「「「「えっ！？」」」」

何だよその反応は。地味に傷つくぞ。

「おまえら手伝うって言ってるけど生活があるだろう？　家族もいるし、習い事だって…。俺だったらそんなしがらみもあまりないから時間の融通はきくぞ。魔法だって使えるから自衛もできるし」

「そういうことだ、ユーノよ。みんなが力を貸すと言ってるんだ。断るのは逆効果になるぞ」

「…わかりました。みなさん、どうか力を貸して下さい」

今ここにジュエルシード探索チームが結成した。

さて、今日はもう遅いし泊まるということになった三人娘。ここに来る前に用意も済ましたし、先生がそれぞれの家に出向き”説明”して親御さんの了承ももらったとのこと。

先生、魔法使ったでしょう？　じゃなけりゃ普通もらえませんよ。

入浴も済ませ、それぞれの寝床も用意して、あとは寝るだけというとこで問題が発生。

「鈴君、一緒に寝よ♪」

「悪いななのは。このベッド一人用なんだ」

「大丈夫。鈴君がなのはをギュッと抱いたまま寝ればいいの」

「やだ…この子…全然、退かない」

どうしよう…。

いったい何が始まるんです？（後書き）

※どうでもいい設定

鈴が魔法使い、ユーノが魔導師と表記してるのはは単に蓮が魔導師と言う単語ではなく魔法使いと言う単語で教えてたため。

日本では魔導師より魔法使いと言うほうが馴染み深いから。

いい友達でいよう！（前書き）

長いワリに内容はそれほどでもない…

うまく文章にできない…ような…

いい友達でいよう！

『鈴』

さてはて、あの激動の夜から数日が経ちました。その間に起こったいろいろな環境の変化に四苦八苦したりもしたが俺は元気です。そんな環境の変化は…

ユーノはウチに住むことになった。

他の家には魔法を知らない一般人もいるから秘匿とかを気にしなくていいウチは何かと好都合だ。ウチは広いし、部屋も余ってるから家賃として家事を手伝うことで手を打った。それにユーノだって人の姿でいたいだろうからね。

『ほら食え、ユーノ！　ヤモリの黒焼きは魔力の回復に良いんだぞ！』

『ひぃぃぃぃ！　玉ねぎとヤモリ嫌いですぅぅーーー！』

三人娘はそれぞれ魔法の使い方をユーノや先生から教えてもらって

いる。

なのはやユーノが使う魔法はミッドチルダ式という体系のものらしい。聞いてみるとユーノのいた世界ではポピュラーな体系らしい。レイジングハートに組まれているのもそれだとか。

それともう一つ、ベルカ式なるものがあると。ＲＰＧ風に例えるならミッド式の使い手が魔法使い。ベルカ式の使い手は魔法騎士となる。個人戦に特化したものらしい。

しかし、ユーノが異世界の人間だったのが驚きだ。そしてあの夜の話からすれば先生も異世界の人…。先生の過去が少し明かされた。

そういえばユーノが俺や先生の魔法についてこんなことを言っていた。

『蓮さんが使う魔法は僕も見たことがない。ミッド式でもベルカ式でもない。気になってちょっと調べてみたんだけど、術式にミッド式やベルカ式のものと共通する部分も僅かながらにあるんだ。僕の見解では君たちの魔法はミッド式やベルカ式が基盤になってるんだと思う』

多分ユーノの見解は正解だろう。実際、先生は三人にその二つの体系について師事できるんだから。それはこの二つの体系に精通してないとできることではない。本当…先生って一体何者なんだろう？

まぁ、それは置いといて。

魔法には資質や相性があるみたいで、先生によるちょっとした適性検査の結果、アリサはベルカ式、すずかはミッド式を覚えることになった。もともと頭のいい二人はなかなかにスジが良いと先生やユーノからお褒めの言葉をもらっていた。

なのは？　あいつはどうも感覚で覚えていってるみたいだ。こんな感じで…。

『こういう術式。わかった?』

『う〜ん…全然わかんない。けど、多分こう!』

『……成功…だと。…なにこれ…ふざけてるの?』

先生曰く、

『アレは魔導師になるために生まれてきたような子』

だとさ。現在も三人は順調に成長しています。

アリサ、すずかは先生からデバイスを貰った。

デバイスとは魔導師が使う杖、補助器の役割だとか。

先生がジュエルシードを相手にするんだったらこれぐらいの用心はということで渡した。何でもこのデバイス、先生が昔作ったものを二人のために調整したものらしい。その事実にユーノは先生のスペックに大層驚いていた。マジで先生って一体何者なんだ?

そんな俺たちをよそに二人は新しいデバイスに眼を輝かせていた。特にすずかちゃんの興味津々ぶりは半端じゃなかった。機械を弄るだけあって好奇心が押さえられないんだろう。普段のお淑やかな立ち振る舞いとのギャップに思わず微笑ましくなり、お父さんのような気分になった。俺の実年齢ではお父さんと言っても過言ではないけど…。

コホン……これによって封印できるのが三人になり、なのはが抜けてもなんとかなるようになった。ちなみに俺は封印できません。

そして肝心のジュエルシードの捜索なのだが……全然進展無し。

というのもジュエルシードは発動しなければただの石。そんな小さいものをこの広い海鳴市から探そうなんて気が遠くなる、というか無理。一応みんな、外出中はそれとなく探してはいるが……。これに関しては基本、後手に回るしかないのがつらいとこだ。

そんなこんなで過ぎていく日々だったがある日、遂にジュエルシードの反応が感知された。場所は神社。ただ、今回はなのはとアリサは都合がありいない。よって俺とすずか、ユーノでジュエルシードの回収を行う。

そして駆けつけた神社で見た光景は…

「グルルルッッ？」

俺たちよりも大きめの狼のような獣の姿。不定形に歪む体表、四肢は力強く、眼は完全に獣のそれ。口から覗く牙は俺たちなんか簡単に噛み砕き、引きちぎるだろう。

「原生生物を…取り込んでる」

ユーノの呟きが聞こえる。原生生物ってことはこいつはあの体形から見るに元は野良犬だったのか？　それがこんな醜悪な化け物になるって…。ジュエルシードは俺の想像以上にヤバイ代物みたいだな。とにかく犬だったって言うなら相手は獣。目を逸らした瞬間、襲い掛かってきそうだ。だから俺は化け物を睨みつけながら口を開く。

「すずか、デバイスの起動を。ユーノ、結界を頼む」

「は、はい…」

「うん、わかった」

すずかも少し怖がってはいるが受け答えできるぐらいの冷静さをもってたようだ。
すずかに封印を担当してもらうのであまり無茶はさせられない。だから俺が暴走体を可能な限り消耗させる。
すずかは胸元の銀の十字架を象ったペンダントを手に取る。

「クロス、お願いします」

《承知》

重く、渋い老獪を思わせる音声が聞こえるとともにすずかの体が光

り、右手には杖を、その身にバリアジャケットを纏う。
その姿は普段のすずかのイメージとは違い、とても凛々しく見えた。
色は黒、中世ヨーロッパの爵位の人間が着てそうな高貴さが感じられる服装にブーツ。そして、自身の体を覆ってしまいそうな襟の立った闇色のマント。
右手の杖は先端部に十字架を取り付けたような形状をした銀の杖。

いまでは見慣れた姿だが初めて見たときは驚いた。普段のすずかのイメージとのギャップにだ。なのはのバリアジャケットは学校の制服をイメージした物。すずかはとあるゲームのキャラをイメージしたのだとか…。

すずかのデバイス展開を確認し、俺も戦闘準備を行う。

「【強化】」

術式を展開。体に魔力を通し、身体能力を上げる。
この体はまだ子供のそれ。素の身体能力は決して高いとは言えないのでこれを使っとかないとな。

「俺が前衛。二人は後衛。俺が可能な限り、相手を消耗させるからすずかは封印の準備を。ユーノは下がってろ」

「わかった、気をつけて」

「わかりました」

本当はユーノが援護なり、すずかの護衛ができたら良いんだがあいつ魔力がまだ回復してないらしい。結局、ヤモリ食わなかったしな。
……今度、トラウマになるくらい食わせてやる。

さて、こんな本格的な実戦は久しぶりだ。この体は以前の俺のものではないけど何とかなるだろうか…。
武器は魔法と俺の知識と経験。相手は常識が通じそうにない化け物。
ＯＫ…上等だ。

それじゃあ……戦闘開始！

相手を見据えたまま俺はダッシュで近寄り、接近戦を試みる。

「ガアァァァァ！！！」

向こうも迎え撃つ気なのかこちらに向かって走ってくる。化け物はそのまま突っ込んでくるので俺はこぶしを振りかざし相手に振りぬく。

「このぉ！！」

ドゴォォォン！！

強い衝撃とともに俺も化け物も大きく後方に仰け反る。予想以上の衝撃に体勢を崩してしまう。
相手も同じように体制が崩れているが、さすがは四足歩行の化け物。こちらよりも立て直しが早く、間髪いれずに再び突進してくる。

「【盾】！」

前方に手をかざし六角形の白い陣を展開し、突進を防ぐ。化け物は障壁を突破することが敵わず、吹き飛ばされる。

よし、俺の魔法も相手に通じる。なら何とかなる！

「いくぞ！！」

『すずか』

私の前方で鈴君とあの怪物が戦いを繰り広げています。鈴君はその小学生の小柄な体を生かし、右に左にと動き回り怪物を翻弄しながらダメージを与えている。
怪物は少々の攻撃も意に介さずに反撃しているが鈴君はうまく避け

ている。
怪物は直線的な動きなら速いけど、機敏性はそれほどではないので鈴君を捕らえられずにいます。
私はそれを見ているだけ。…そう…見ているだけなんです。
鈴君は以前、
「戦いに慣れてないうちはまず身を守ることを考えろ」
と言って封印に専念させようとしてます。
…わかっているんです。
鈴君は争いごとに慣れていない私に無理をさせようとしないことを。
でもそのせいで大事な人が…鈴君が傷ついたりするのは…。
今は鈴君は怪物の猛攻を回避し続けているけど、もし何かの拍子であの牙や爪を受けたりでもしたら…。
そう思ったら、いてもたってもいられなくなった。
「クロス、ソードシューター！！」
《承知、ソードシューター》
杖を怪物に向け、魔力で構成した剣を生み出す。狙うは鈴君と怪物の距離が開いたとき。まだ慣れてないから一本しか生成できないけど援護には十分。
！？　開いた、今！？
「シュート！！」

私の放った魔法は一直線に怪物に向かっていきその身に刺さらんと迫る。狙いもタイミングもばっちりのその一撃は、

「嘘…」

あり得ない動きで間一髪避けられた。

狙いは完璧だった。タイミングも問題なかった。ただ怪物の勘、野生の直感ともいうべきものがそれらの一歩上を行っていたのだ。

「ガアァァァ！」

「こっちに来る!?」

「すずか!?」

ユーノ君の警告が飛ぶ。鈴君の必死な声が聞こえる。

怪物は攻撃された怒りからか、鈴君からこちらに標的を変え凄まじい速度で一直線に向かってきた。その鬼気迫る怪物の気迫に尻込みしそうになる自分を何とか持ち直す。

「クロス、プロテクション!!」

《プロテクション》

杖を突き出し、防御魔法を展開して怪物の突進を阻む……が、

ビシッ！　バキィィィン！

「そんな!?」

拮抗したのはほんのわずかな時間。怪物のほうが強かったのか、私の防御魔法が甘かったのかわからないけど、私の展開したバリアはガラスのように砕け散り、怪物の接近を許してしまった。
目前に迫る怪物の鋭い爪と牙。そして私は自身に襲い掛かる死への恐怖から逃れるように眼を瞑ってしまった。これで終わってしまうという想いと共に…

だがそんな想いは私の顔にかかった生暖かい感触を感じるまでだった。

いつまでも襲ってくることのないことに怪訝に思いながら私はゆっくりと目を開き……見たくない光景を眼にした。

怪物の牙を左腕に受けながら、私をかばう鈴君の姿だった。

メキメキ…

「ぐっ！？」

圧力が増してるのか、メキメキと嫌な音をたてる鈴君の左腕。鈴君も苦しい表情だった。だが鈴君はそんな状況下で信じられない行動に出た。
無事な方の腕、右腕を怪物の口元へもって行き、

「お返しだ……【衝撃】！！」

ドッゴォォォォォン！！！

とてつもない轟音と衝撃が響き渡ると、怪物は遥か向こうへその体の肉片を撒き散らしながら吹っ飛んでいき地面に墜落するも動かなくなっていた。
その様子を見送ったと同時に鈴君は左腕を押さえながらその場に蹲る。

「鈴君！？」

「大丈夫？　鈴！？」

「メチャクチャ痛い…」

すぐに治癒魔法を施そうと左腕を検診する。怪物の牙で噛まれたため、腕の所々に穴が空いていて血が絶え間なく流れ出て、垂れた血の滴が地面を紅く染めてゆく。
その惨状に息を呑みながら、治癒魔法を施す。そして私は自身の胸の内に後悔を募らせていた。

素直に手を出さずにいたら鈴君は怪物の相手に専念できた…。
もっと強固な防御魔法を展開できたら鈴君がかばう必要もなかった…。

でも、まずは……

「鈴君、ごめ…」

「下がってろ、すずか」

鈴君が治療もそこそこに、急に立ち上がり前方を見据える。私もつ

られてそちらを見ると、

「グルルゥウ……ゥウゥ…」

仕留めたと思っていた怪物が再びその身を起こしていた。さっきの鈴君の攻撃がかなり効いていたのか最初ほどの活力は無いが、それでもこちらに敵意ある眼を向けてくる。
その眼を見据えるうちに私は…

「クソ、仕留めそこなったか。すずか、下がって……すずか?」

胸の内に今度は怒りを生み出していた。

私の大事な人を傷つけたのは?……アイツ

大事なものを傷つけられて許せるか?……ユルセナイ

だったらどうする?……キマッテル

「りんくん、しつれいします」

「すず…か?」

呆然としてる鈴君を他所に、私は未だに血を流す鈴君の左腕を取り、迷わず口をつけその血を啜る。口一杯に広がる、血の味は大切な人のものだからか物凄く甘美な味わいを感じさせる。そして体の奥底から湧き上がってくる力の奔流と熱い衝動。
それはすずかが初めて抱くであろう……殺意。

「クロス、ソードシューター」

《承知、ソードシューター》

さっきと同じ、今の私が使える唯一の射撃魔法を起動する。さっきは一つ生成するのが限界だったが今はなぜか、さらに生成できそうな気がする。ならやってみよう。

「クロス、もっとだせます？」

《問題なし》

一つ、二つ、三つと光の剣を生成していくと、最終的には二十の剣が私の周囲に展開された。その様子に満足感を得た私は怪物を見据える。

怪物はそんな私の様子に恐怖を覚えたのか、獣の勘が告げたのかわからないが、怯んでいる。

そんな態度をしても遅い。あなたは私の大切な人を傷つけた……。

だから……ツグナッテモライマス。

「ツラヌイテ」

私の合図とともに二十本全ての剣が怪物に向かって射出されていく。怪物は回避しようにもかなり弱っていて、まともな動きもままならず無情にもその身を貫かれていった。

全ての剣が役目を終え光となって消えた後に残ったのは無残にも体のあちこちに穴を空けられ、虫の息となった怪物だった。

マダイキガアル

イマイマシイ

ダッタラサイゴノ　「【覚醒】」　パキィィーン！！

……あれ？　わた…し…

「落ち着け、すずか。」

「鈴…君。……もしかして…私」

「あ～…すまん。先にジュエルシードの封印を頼む」

「……はい」

見てみればもはや怪物の姿は無く、あるのは宙に浮かぶジュエルシードと地面に横たわった野良犬の姿。私はあの時のなのはちゃんのようにクロスをジュエルシードに向け回収する。

《封印開始……番号１６の封印完了》

戦いは終わったが、私の心はどうしようもなく沈んだままだった。

『鈴』

あの後、俺たちは衰弱した野良犬を動物病院に連れて行った帰り道を歩いていた。夕方を少し過ぎた時間だからか人通りもほとんど無い帰り道、さらに隣を歩くすずかのひどく沈んだ表情のせいでどんよりとした空気が漂い、ひどく居心地が悪い。ユーノも同じなんだろうかひどく落ち着かない様子である。
そんな中、すずかの方から声がかかった。

「鈴君…」

「ん？」

「少し…お時間をいただけますか？」

「……ああ、いいよ」

そしてやってきました公園。
もう辺りは薄暗くなっていて、公園の電灯が所々を灯すのみ。そして電灯の一つが灯すベンチに俺と沈痛な表情のすずかは座っていた。
お巡りさんに見つかったら職質→連行のコンボをくらう光景だ。
ユーノは先に帰った。なんか空気を読んでもらったみたいで申し訳なく思うので、ヤモリの黒焼きの刑は勘弁しておこう。
しばらくおとなしく座っているとすずかがゆっくりと口を開いた。

「…強く…なりたかったんです」

「強く？」

「はい…一年ほど前に、いつか全てを話しますと言ったのを覚えてますか？」

「ああ」

「今、全てお話します」

「……いいのか？」

「…本当はもっと違う形でお話したかったんですけど…またあんなことがあったのなら…もうこれ以上は…」

「…わかった」

・・・・・・・
・・・・・
・・・
・

薄々ながら感じていた。すずかは”唯の”人間なのかと…。
初めて会った時にすずかから感じる魔力に違和感を感じていた。そして、一年前のあの日以降その感じる魔力の違和感は強くなっていて、さらに今日のあの吸血行為による莫大な魔力の増幅。これでただの人間であると言われても信じないだろう。

それにしても吸血鬼とはねぇ…。
まぁ、そう考えたらあの吸血行為やデバイス、バリアジャケットのデザインも納得できる。それになにより、いまのすずかの”紅い”眼だ。
一年前の時とは違い、今日、俺の血を飲んだ時からすずかの瞳の色が変わったのだ。これは一時的な副作用なのか、それとも永続的なものかわからないが普通はこんな現象はない。
そんなすずかは自身の血を、本能を嫌悪していた。
友達と言ってくれた俺の強さに憧れていた（聞いた俺はちょっと照れた）

自身も強くあろうとしたが、今日の血の本能に飲まれ、何も変わってないことに気付き落ち込んでいる。

全て話し終えたすずかの話は概ねこのような内容だった。うん、重いね。
どう話せば良いものか。世の中にはその幻想をうんたらかんたら言いながら説得、説教をかます手法があるみたいだが俺には無理だ。
とりあえず思ったことを口にする。

「一年前は改めてと言ってたけど、俺の中ではすずかが何者であろ

うと友達だよ」

「…吸血鬼なんですよ？」

「それがどうした？　今の世の中白人、黒人でもフレンドっていう奴もいる。ボールは友達っていう奴もいる。つまりその辺の壁ってあまり関係ない」

「…嫌われるのが怖くて隠してたんですよ」

「友達でもそんなのはある。俺だって魔法使いってこと隠してたし」

今も一度、死んでることも隠してるし。

「……」

「そして本当に強くなりたいんだったら周りを頼れ。一人で強くなろうとしても限界がある。そんな時こそ周りを知り、時には傷つき、時には喜びながら人は強くなる。だから」

俺はすずかの紅い眼を真正面から見据え告げる。

「俺やなのは、アリサやユーノ…友達を頼ってくれ。そうすれば強く在れる」

とりあえず言える事は言った。本当はまだ他に言うべきことはあるんだろうけど、頭に思い浮かばない。

「……遠まわしにみんなにも話そうっていってますね」

なぜばれたし！！

「ひどい人ですね、鈴君は」

そう言ってこちらを向いたすずかの顔はさっきよりも和らいでいた。

「そうですね。よく考えてみればなのはちゃんやアリサちゃんはそれでも友達って言いそうですね。むしろ何で黙ってたのって怒りそう」

まず、間違いないだろうな。

「うん、ありがとうございます、鈴君。決心が固まりました」

おっ？

「私、みんなに打ち明けます。もう一度、友達でいようと告げます。そして…また強くなります」

「うん。当然、俺も協力するぞ」

うん、うん。俺の安っぽい言葉だけど悩みに応えられたようで俺もうれしいよ。

よし、問題もある程度解決したし、もう暗いから早く帰るか。

「悪いんですけど今日はもう暗いんでまた泊めてもらってもいいですか？」

「ん、いいぞ。先生も特に気にしないだろうし」

「ふふ、ありがとうございます。さすがは私の好きな人です」

「ははは、ありがと。俺も好きだぞ（友達的な意味で）」

「ふふ、それはよかったです。それじゃあ帰りましょうか」

「おう」

「……ばか」

※夜中に起きた問題

（どうしてこうなった！　どうしてこうなった！！）

少女同衾中…

「すぅ……すぅ…」

（俺は自分のベッドで”一人で”寝てたはず！　それが夜中、眼が覚めたら同衾状態！）

「んっ…」　モゾモゾ…

（ああっ！　動かないでくれすずか！　ク、クロス！　お前の主を何とかしろ！？）

《却下します》

（ぶっ壊すぞクソデバイス！！）

「ん～」　ぎゅぅぅ…

（タスケテーー！！）

いい友達でいよう！（後書き）

自分はシリアス苦手っぽい…

※どうでもいい設定
すずかのバリアジャケットはＰＳソフト「悪魔城ドラキュラ　月下の夜想曲」のアルカードの服装をイメージしてます。

鈴の習得した魔法に名称が無いので効果をそのまま名称にしている。

魔法使いは忙しい？（前書き）

先に言っておきます。
今回の話は内容が無いに等しい。

魔法使いは忙しい？

『鈴』

はい、お馴染みの鈴です。
現在俺はなのはと夜の聖祥大附属とは別の学校に居ます。何故そんなところに居るかって？
なんとジュエルシードの反応があったのだ。
だがしかし、反応があったということはジュエルシードは発動してしまっているという事。
ということは今までみたいなジュエルシードの発動体が居るということ。俺となのはは学校の校内を探索していくうちにその発動体を発見した。

発見したはいいが、全速力で逃げてます。

「にゃぁぁぁぁーー！　怖いのぉぉぉ！」

「うおぉぉぉ！！　超怖ぇぇぇ！！」

シャァァァァァ！！！

廊下を破壊しながらこちらを追ってくるそれは紅く輝く複眼に廊下

一杯に広がる巨体、八本の肢。

はい、蜘蛛です。

よく漫画なんかで巨大な蜘蛛の妖怪が出たりして主人公は恐れず立ち向かう姿が描かれてますが、俺にはそう簡単にできません。考えてみてほしい。蜘蛛は大半の人間が嫌悪感を抱く虫だ。小さい蜘蛛ならビックリするぐらいだが、大きいサイズ…手のひらサイズのモノだと現れてほしくないレベルだ。そして今俺たちを追いかけているのは遥かに巨大なサイズ。嫌悪感を抱かずにはいられない。

だから今は全力で逃げるのみ！

「はぁ…はぁ…こ、怖かったのぉ」

「ぜぇ、ぜぇ…あのサイズだと…グロイなぁ…」

なんとか逃げ切り、俺たちは校庭で一休み。逃げちゃだめってのはわかるんだが、本当にグロいんだよ。虫ってあんまり好きじゃないし、あのサイズだしな。なにより、

「ぐわんげを思い出してしまった」

「ぐわんげ？」

「後でググってくれ」

アレは猫の混じった妖怪だけどな。まぁそんなことよりも今はアレの退治＆封印だ。

「なのは、俺はもう一回校舎の中に入ってアレをこの校庭に引っ張り出してくる。ここで待ってろ」

「で、でも危ないよ。なのはも一緒に…」

「大丈夫だって。心配すんな」

「……わかったの。でも、危なくなったら絶対呼んでね！　なのはだって戦えるんだから！」

「わかった、わかった。じゃあ行ってくる」

薄暗い校内の中、神経を尖らせながら校舎の中を再び探索する。

あの巨体だ、すぐに見つかるだろうと高をくくり探してるんだが一向に見つからない。校舎内のあちこちに穴が空いていたり、壁が崩れてたりとアレが居た形跡はあるんだが肝心の姿が無い。それぞれの教室を覗き、たまに外に目を向けたりとしても見つからず、遂には屋上に到達した。

「おっかしいな。何処に行きやがった？」

結局、校舎内では見つからず、この屋上はどうだとばかりに来てみればやっぱりいない。

「もしかして、もう学校から…ッ！？」

シャァアァァ！！　ビシュッ！！

「しまっ！　ぐぅっ！？」

見つからなかったことで気を抜いてしまったのがいけなかった。突然、屋上の柵の下からアレが姿を現したのだ。しかもそれと同時に俺に向かって粘糸を撃ってきやがった。
不意打ちで反応できなかった俺は【盾】を展開する間もなく、屋上の床に粘糸で貼り付けにされてしまった。

シュルルゥゥゥ！

体を完全に貼り付けにされて身動きの取れない俺。蜘蛛はそんな俺を絶好の餌だと思っているのかゆっくりと近づいてきた。傍から見たらピンチに見える構図なのだが…

俺にとってはチャンスだ！

一気に封印までのプランを練り上げた俺はなのはに念話を繋げる。

『なのは聞こえるか？』

『鈴君！　大丈夫？』

『大丈夫だ、それより蜘蛛を屋上で見つけた。今から校庭側に吹っ飛ばすから蜘蛛が宙に浮いてる間になのはの砲撃魔法で撃ちぬけ。その後速やかにジュエルシードを封印してくれ』

『そ、それより鈴君は…』

『俺のことは後だ。頼んだぞ』

『わ、わかったの』

念話を切り、こちらに近づいてくる蜘蛛を見遣る。こちらが動けないのをいいことに余裕そうに歩み寄ってきて、その顔は笑ってるようにも感じる。

（よし、目の前まで来やがれ）

そして、とうとう蜘蛛が俺を喰らおうと口を開け迫ってきた。グロ

イが我慢！

術式を構築。イメージはハッキリと。魔力を注ぎ込め！　手足が使えなくても…魔法は使える！

「吹っ飛べ！　【衝撃】！！」

『なのは』

「レイジングハート、お願い！」

《了解です。マスター》

私の声と共にレイジングハートがその姿を変える。私の得意分野の砲撃魔法を行使するに適した形へと。

そして杖を上空の屋上の方向に向けいつでも撃てるよう待機しておく。そして、

ドッゴオオォォォォォン！！

強烈な轟音が響いた直後、鈴君の宣言どおり蜘蛛は屋上から吹っ飛んだ。威力が強すぎたのか、蜘蛛の肢が何本かちぎれ、同じく宙を飛んでいる。

ううぅ…気持ち悪い光景なの。

けど、今は我慢！　鈴君の作ってくれたこの機会。逃すわけにはいかないの！

魔力の充填は完了！

受けてみるの！　蓮さん直伝の砲撃魔法！

「ディバイィィンバスタァー！！」

『鈴』

「で…砲撃がそのまま封印までやっちゃったと」

「う、うん」

「なのは…恐ろしい子！」

現在俺はなのはに救助されてる最中です。この粘糸、蜘蛛のものである以上、相当な粘着力があって俺一人ではどうしようもなかったのでなのはに救助要請を出したのだ。

それにしても、なのはの魔力が桁外れに高いのは知ってたけどあのジュエルシードを砲撃で強引に封印ってどんだけなんだよ。

先生がなのはを魔導師の申し子って言ってた意味が良くわかるわ。

「はい、終わったの」

「ん。ありがとう、なのは。……さて、やることもやったし帰るか」

「うん！」

帰り道にて…

「鈴君、明日は学校もお休みだし…またお泊りさせて♪」

「…おまえ、自分の家はいいのか？」

「大丈夫。どうせ近所なんだし、お父さんもお母さんも蓮さんのとこならいいよって言ってくれてるの」

「…いや、そうじゃなくて」

正確にはあなたのお兄さんがすごく怖いんだよ。マジで…。

この前、翠屋に訪れたときなんかあの人、包丁片手に持ったまま厨房から殺気飛ばしてきやがったからな。っていうか会うたび会うたび、殺気を飛ばして来るんだよなぁ。おのれグリリバめ！

「…だめ…かな？」

「…いいよ」

「やった♪　じゃあまた一緒に寝よ♪」

「それは勘弁して！」

この前のすずかの一件で正直いっぱいいっぱいなんだよ。

「…すずかちゃんは良くってなのははダメなの？」

「あれは不可抗力（？）だ！」

「ふ～ん…」

じぃーーーーーーーー……。

「……わかりましたからそんな眼で見ないで」

「やった♪」

結局、根負けしてしまう俺は押しの弱い典型的な日本人。あぁ、Ｎｏと言える日本人になりたい。

っと、そうだ。すずかと言えば、

「なぁ、なのは」

「んっ？」

「すずかの事……怖いと思ったりしなかったのか？」

以前のジュエルシード封印の後日、すずかはみんなに自分のことを全て打ち明けたのだ。すずかのこの決断は結果的には良かったんだと個人的には思ったんだが、やはりなのは達がどう思ったのかけしかけた本人としては気になった。

「う～ん…怖いっていうのは無かったの。それよりもうれしかった…かな」

「友達として打ち明けてくれたことが？」

「うん。打ち明けてくれた事は、すずかちゃんにとって怖かったんだと思う。それでも私たちに話してくれたって事は私たちを本当に信頼してくれたんだと思うの。だから友達としてうれしいって気持ちの方が大きかったかな。アリサちゃんも同じだと思うの」

「……」

「それに怖いって言ったら初めてのジュエルシード封印のほうが怖かったし」

そう言って、にははと笑うなのはの姿に嘘や飾りなどは感じない。
あぁ…本当にこいつは眩しい奴だ。
そんななのはに俺は思わず嬉しくなり、気がつけば頭を撫でていた。

「にゃ？　どうしたの？」

「気にするな。なんとなくだ」

本当に友達というには俺にとってもったいない奴らばかりだ…。

※その夜…

少女同衾中…

（レイジングハート…）

《なんでしょう？》

（俺の前世って抱き枕だったと思うんだ…）

《……あなたは何を言ってるんですか？》

（…俺、来世も抱き枕になるんだ…）

《……早くお休みなさい。疲れてるんですよ》

レイジングハートの気遣いと優しさに思わず胸がキュンとなった。

魔法使いは忙しい？（後書き）

そろそろアリサの回の予定。

※どうでもいい設定
レイジングハートが日本語なのはアリサ、すずかのデバイスが日本語設定なのに対してお揃いにしたから。

【衝撃】
鈴の得意魔法。衝撃波を叩きつける。高威力だが射程が極端に短い。

【盾】
同じく鈴の得意魔法。六角形の陣による障壁を展開。なのはの砲撃をも防ぐ。

抱える思いはそれぞれ？（前書き）

…遅筆。

……展開も遅い。

……舌噛んできます。

抱える思いはそれぞれ？

『鈴』

「クッ！？」

咄嗟に機体のブーストを吹かし、迫り来るミサイルの雨を紙一重でかわす。

だが、まだだ！

相手はそんな俺の動きなど読んで当たり前のような猛者。このままでは必ず遠距離からの攻撃で追い詰められる。だからこのまま…

前進あるのみ！！

「切り裂く…止めてみろ！」

残り少ないブースト残量の全てを使い切る覚悟で奴に突っ込む。幸い、俺の機体はスピードには自信がある。一気に間合いを詰めるには問題なし。

「くらえ！」

左腕のブレードで奴を仕留めようとしたが…

ドゴォォォン！

「何だと!?」

奴は肩の大型ランチャーを地面に向けて撃ち、自身が損傷することも厭わず、爆風でこちらの突進を防ぎやがった!
おまけに奴はその爆風に紛れて高速で移動し、俺の視界から姿を消す。

「ど、何処に…あっ!」

奴の姿を探すため、その場で立ち続けたのがいけなかった。気がつけば背後から奴はすれ違いざまにブレードでこちらに止めをさした。
機体のあちこちから炎を吹き出し、最後に一際大きな爆発を放ち動かなくなる俺の機体。今この瞬間、勝負は決したのだ。

ＬＯＳＥ

「ば、ばかな…これが俺の最後だというのか」

俺は力なくコントローラーを床に落とす。テレビ画面に写るＬＯＳＥの文字がやけに哀愁漂う。
負けたことに悔しくなり、負け犬の遠吠えだとわかりつつも２Ｐ側の相手に吠える。
ゲーム機（初代プレステ）から伸びる２Ｐ側のコードの先には…

「狙ったか！　レイハさん！」

《誰であろうと…私を超えることなど不可能です》

なのはの頼もしき相棒、レイジングハートですが何か？

・・・・・・・・・・

今日は日曜日。全国の小学生たちが諸手を上げて喜ぶ休校日。小学生の大半は『遊ぶ』に選択肢を割り当てるだろう。俺も例外ではなく、本日はなのはにアリサにすずかの三人がウチに遊びに来てます。それに加えてユーノと今日は先生もいるのだから大所帯だ。

……最近この三人娘の誰か一人がウチに居るような気がするが気の

せいにしておこう。だから部屋の一室に三組のお泊りセットが常備してあったり、洗面所にある色とりどりの歯ブラシも気のせい…気のせいっ！

それは置いといて…実はウチはゲームの種類がかなり豊富なのだ。というのも先生がかなりのゲーマーで、今使ってるプレステはもちろん、セガサターンにドリームキャスト、スーパーファミコン、初代ファミコンまで現役という（押入れの中にはゲームギアとかバーチャルボーイ等、まだ色々あるそうな）

そして、エロゲーやネトゲにまで手を出すという…廃人ですねわかります。

最初はユーノ相手に遊んでたのだが横から見ていた三人娘が触発されたのか、勝負を挑んできた。それをことごとく返り討ちしていくと悔しかったのか、なのはがレイハさんに泣きついのだ。

「うわ～ん！？　レイジングハート～…なんとかしてぇ（泣）」

《そう言われましても…私にはどうしようも…》

「…ふむ、だったら私が遊びで作ったこの変換ケーブルを使ってみるか？」

《えっ？》

「いや、何…昔、デバイス相手に対戦できないかなぁ…と思って作った代物だ。使ってみるか？」

《お願いします！　マスターの仇は私がとります！》

「あの…レイジングハート？」

「レイハさん…たとえあなたが相手でも……向かって来るというのなら容赦はしない！」

《鈴殿…心苦しくはありますが、マスターが討たれたとあっては私とて黙ってはいられません！　マスターの仇をとらせていただきます！》

「私が死んだみたいになってる！」

「何？　あの茶番」

「あはは…私のクロスもあんな風になっちゃうのかな…？」

《ご冗談を》

「僕もレイジングハートがあんな風になるとは思わなかったよ」

「って言うか鈴ったら何でレイジングハートとあんなに仲がいいのよ？」

「鈴曰く、『抱き枕の心をわかってくれたから』…だってさ」

「「どうことなの…？」」

・・・・・・・・・

そんな経緯を経て、レイハさんと対戦することになったのだ。最初のほうは当たり前だが俺が勝っていたのだが相手は高度な演算能力を有するデバイス、徐々に苦戦するようになり、当たり前だが最終的には俺の負け越しとなったのだ。

…ただ、途中からレイハさんの様子がおかしくなっていった気がする。インテリジェントデバイスだから学習するのはわかるけど、一戦ごとに吐く台詞が…

三戦目

《修正プログラム　最終レベル》

四戦目

《全システム　チェック終了》

五戦目

《戦闘モード　起動…ターゲット確認　排除開始》

どこかで聞いたような台詞であり、五戦目にはもうコテンパンにやられてしまったのだ。やっぱり高性能デバイスにゲームで勝負は無理だった。

「さすがレイジングハート、ありがとう！」

《マスターの仇をとる…それが私の使命》

「ちっくしょぉおおおお！！」

・・・・・・・・・・

「悪いなアリサ、買い物に付き合ってもらって」

「いいわよ、別に。今日はご馳走してもらうわけだし」

今の時刻はお昼を過ぎた頃。先生の提案でもうこのまま三人娘も夕食を一緒にするということになったので材料の買い出しに出かけた俺とアリサ。さすがにご馳走してもらうだけでは悪いからとアリサが率先して手伝ってくれたのだ。

一応、他のみんなも手伝うつもりだったらしいが二人いれば十分と言って断った。

「それで今夜は何を作るつもりなの？」

「そうだなぁ……人数も多いし、シチューとかどうだ？」

「ん、文句なし。あんたの料理っておいしいから楽しみにしておくわ」

「おっと、だったらお姫様のために腕によりをかけて作らせていた

だきます」

「なっ！？　お姫様って…（／／／）」

えぇっと…じゃがいも、にんじんはあったけど量が少ないから買い足さないと。鶏肉もだな。今日はホワイトソースから作るから……って、

「アリサ～どうした～？　置いていくぞ～？」

「お姫様……お姫様……ブツブツ……って、あ…ま、待ちなさいよ！」

？　どうしたんだ？

・・・・・・・・・・

「お？」

「どうしたのよ？」

「あれ」

俺の指差した方向、道路を挟んだ向こうには男の子と女の子がいた。二人並んで歩き、互いに話しながら時折笑顔を浮かべ、幸せそうに歩く少年少女の姿があった。

「……リア充爆発しろ（ぼそっ）」

「何か言った？」

「い、いや…あの男のほうの格好に覚えがあって…」

「ああ、なのはのお父さんのサッカーチームのユニフォームね。女の子のほうも、あの男の子といる姿を良く見るわね」

「士郎さんの…ああ、そう言えば、今日試合だったっけ？」

思い出した。士郎さんがコーチのサッカーチームが試合があるから見学に来ないかと以前誘われたんだった。気が向かなかったから丁重に断ったんだけどね。それに行ったらあの人、執拗に俺をチームに入れようとするだろう。勘弁してくれ。

「それにしても仲良さそうな二人ね」

「試合が終わった帰り道に二人でデートとか…リア充、爆発しろ」

「だから何言ってんのよ、あんた？」

そんなくだらない遣り取りをしていると男の子のほうがポケットを弄り、女の子に何かを渡そうとしている姿が見受けられた。

「あれか。給料三か月分で『結婚してください』とかか？　リア充ばｋ…」

「あんた、そろそろ静かにしないと私のデバイスで叩き切るわよ？」

「スイマセンゴメンナサイモウイイマセン」

やっぱりくだらない遣り取りしている内に男の子がポケットから出した物は、青くとても綺麗な宝石のような石で俺たちも見慣れた…

「「って、ジュエルシード!?」」

おいおい。偶然にしたってこんな場面で見つけるとか、ありえん。
プレゼントにするには物騒すぎるぞ。
まぁ、何も知らなければ綺麗な石だもんな。

!?　ジュエルシードから強力な魔力の反応?　まさか!?

「おい!!　そいつから手を離せ!!」

急に魔力反応を感じ、二人に向かって叫ぶが間に合わず、男の子の手の中のジュエルシードは強烈な光を発した。

「クソッ!?」

「グローリー!　起きて!」

《了解》

・・・・・・・・・・

その光景はとても悲惨なものだった。
まず眼に留まるのは、巨大な…とてつもなく巨大な一本の大樹がジュエルシードの発動点から生えていた。その幹から分かれた枝は背の高い建物をなぎ倒し、未だに成長を続ける根は道路を割り、地面を蹂躙し続けている。
大樹が意思を持っているがごとく、街を侵食していっているのだった。

俺は咄嗟に結界を、アリサがプロテクションを展開したおかげで俺たちは無事。現実の街も被害は少なめですむだろうが…

「これは…半端ないなぁ」

そう呟いて隣のアリサを見遣る。

動きを阻害しない程度に覆われた白銀に輝くプレートアーマーに白のブーツ。腰から足元までを覆う魔力保護が施された布地。右手はフィンガーレスグローブ。左手には紋様が刻まれた大きな手甲。長い髪を軽く押し上げるように装着されたサークレット。
さらに右手に持つ巨大なハルバード型のアームドデバイス「グローリー」の存在。

ベルカ式を扱うアリサの防護服「騎士甲冑」を纏うアリサの姿はまさしく神話などに登場するような戦乙女だった。

「……アリサ、起きてしまったことを何時までも悔いてもしょうがない。今は早く解決するように行動するべきだ」

「……うん…わかってる」

「…そうか」

その後、俺たちは樹木から大きく離れたビルの屋上に避難し、この事態を察知したなのはとすずか、フェレット姿のユーノと合流した。二人ともバリアジャケットを纏いすでに準備万端のようだ。

「おまたせ、二人とも」

「大丈夫でしたか?」

「ああ、大丈夫だ。もっとも、街は大惨事な上に、この植物、まだ成長を続けてる」

そう、まだ成長しているのだ。このまま成長し続ければ俺が咄嗟に張った結界内側からを突き破って、現実世界に被害が出るだろう。

「ユーノにすずか。さっそくで悪いんだが、結界を張り直してくれ。そして、今回は二人とも結界の維持に努めてくれ」

「わかった」

「わかりました」

俺の言葉にユーノとすずかは魔法を発動させる。

「封時結界！」

「クロス、結界の再構築を！」

《承知。結界…発動》

二人の結界が発動し、今までの急場凌ぎのものよりもしっかりした結界が張られる。とりあえずはこれで大丈夫だろう。

「それで、どうするつもりなの」

「やっぱり、こういうときは遠距離がセオリーだろ。というわけでなのは、あの大樹に向かって砲撃。あそこがジュエルシードの発動点だ」

「うん、レイジングハート！」

《了解》

なのはがレイハさんを樹木に向けて、魔力のチャージを開始する。前回の時と同様、なのはの砲撃で無理矢理、封印を考えていた時だった。

「!?　みんな跳んで!!」

ユーノの叫びが響き渡る。なのははチャージを中断。ユーノもなのはの肩にしがみつく。俺たちは考えるより先に飛行魔法を使いその場から上空に飛ぶと…

ゴシャァァァン!!　ズズズズズッ!!

さっきまで俺たちの居たビルが幾重もの植物の根によって飲み込まれていったのだ。ユーノの警告が無かったらと思うとゾッとする。

「あ、危なかったの…」

「でも今のって…」

《はい、あの根はマスターのチャージした魔力に反応しました。よってチャージを必要とする大出力の砲撃の行使は狙われるでしょう》

…なんてこったい。って事は俺の遠距離攻撃魔法もダメか。すずかとユーノは結界の維持に。なのはの砲撃は格好の的。となるとあの根や枝を突っ切って大樹に接近してジュエルシードの封印か…。

「アリサ。俺とおまえであの大樹に近づく。ジュエルシードの封印頼めるか?」

「わかった。絶対、封印してみせる」

「あまり気負いすぎるなよ。いざとなって失敗してしまうからな」

「……ありがとう。でも大丈夫だから」

だといいけど…。

「というわけで俺とアリサで近づいて封印をする。なのはは二人の護衛をしててくれ」

矢継ぎ早に告げると俺とアリサは大樹に向かって行く。

・・・・・・・・・・

「このぉぉぉっ！」

「【斬撃】！」

大樹に向かって突き進んでいる俺たちだが思った以上にきつい。自身の危機を察知しているのか無数の根が触手のように襲い掛かってきてその度にアリサがグローリーを振るい、俺も魔法で根を切り落とす。もうすぐで辿り着くんだが俺はともかく、アリサが思った以上にダメージを負っておる。なんかかなり必死になっているという

か…少し、危ういか？

「っと、到着したか…」

大樹の元に到着する。近くで見るとこの大樹の巨大さに圧倒されそうになる。どんな願いがあればこんな大樹になるのか疑問だ…って、

「要救助者、はっけ～んっと」

上のほうを見上げると、枝と枝に守られるように寄り添う男女の二人がいた。意識が無いのかピクリともしないが救助する身としてはやり易い。

二人をゆっくりと抱えるとある事に気がついた。

「ジュエルシードを…持っていない？」

そう。ジュエルシードが無いのだ。ということはジュエルシードは持ち主の手を離れて、発動していると言うことか。

まさか…暴走してる？

そんな予感を感じた時、空気を読んだかのように大量の樹の根が再び襲い掛かってきた。

咄嗟にその一波をかわして、すぐに保護した二人を封時結界の外に転送し身軽になり、次々と襲い掛かってくる根をかわしながらアリサに伝える。

「アリサ！　ジュエルシードが暴走している！　恐らく、この大樹の中だ！」

「大樹の中ってどこなのよ!?」

「今から探査して位置を特定する！　それまでこの場をもたせてくれ！」

「早くしなさいよ!?」

アリサの叫びを耳に、大樹に触れ、魔力の流れを感じる。

何処だ？　…何処だ？　……っ!?　あった!?

「中央だ！　この大樹の中、ほぼ中央！」

「わかったわ!?」

アリサはグローリーを構え、大樹に切りかかるが、

ガキンッ!?

「硬っ!?　刃が通らないわよ!?」

「ちゃんと魔力を通せ!?　【衝撃】!!」

ドォォォォン!?

「って、マジで硬っ!?」

おい、これで軽く陥没する程度かよ…。これじゃあ、なのはの砲撃でも通用したかどうか…。

だが、どうする？　【衝撃】以上の威力の魔法だとチャージが必要

になる。チャージするとなると、根が一気に来てチャージどころじゃ…って、

「やぁぁぁっ!!」

ガキンッ!?　ザクッ!?　ギィィン!?

「何で!?　何でダメなのよ!?」

アリサは何かに取り憑かれたように樹木に向かって、グローリーを振るうがダメージが通ってない。当たり前だ。今のグローリーにはうまく魔力が伝わっていない。それでは、ただの武器としての威力しか発揮できない。デバイスとして使わなければ…。

「アリサ!?　落ち着け!?　ちゃんと魔力を通して…」

「通してるわよ!?　でもダメなのよ!?」

あのバカ!?　熱くなりすぎだ!?

グローリーは使いこなせれば、攻撃力はデバイスの中でもダントツ。もしかしたらこの大樹にダメージを与えることもできるかもしれないが、今のアリサは頭に血が上って使い方を忘れてやがる。おまけに大樹に集中しすぎて周囲の警戒が疎かになってやがる。さっきから何回、アリサのフォローに回ったことか…。

…仕方ない。

「すまん!?」

「何よ！？　ってうわ！？」

アリサを抱きかかえ、一旦上空に退避する。

さて、説教なんてガラじゃないんだが…。

「ちょっと何するのよ！？　まだっ」

パシンッ！？

「っつ！？」

「何で叩かれたか、頭のいいアリサならわかるよな？」

「……」

「本当は気付いてるんだろ？　今のままでは無駄だって」

「…うん」

「だったらこれ以上は言わない…うまくやろうな？」

「…うん、ごめん」

「俺よりもグローリーに謝っておけ」

その言葉を最後に俺は一足先に再び大樹の元に飛ぶ。

…説教じゃなかったような気がする。

『アリサ』

「ねえ、グローリー」

《はい》

「あたし…焦ってたんだ」

《……》

「すずかは初めてでもちゃんと封印できて、なのはは二回も成功させてるのよ」

《……》

「なのにあたしはまだ何もしてない。すずかはともかく、あの運動音痴のなのはに負けたくなかったの」

《アリサ様》

「バカよね…あたし。ジュエルシード集めは…競争なんかじゃない。もっと真剣なもの」

あたしの眼下では鈴が襲い掛かる根を避けながら大樹に攻撃を繰り出している姿が見えた。その表情はあたしの時みたいな焦りなどはなく、ただただ真剣だった。

本当に…。

普通、あの場面は説教するところでしょうが。それをこっちの心を読んだ上で最低限の忠告だけで済ませるなんて…。

「グローリー？」

《はい》

「ごめんね…あんな扱い方して」

《私はデバイスであり道具。そのような…》

「いいえ、あなたはあたしのパートナーであり、仲間。異論は認めないわ」

《…もったいなきお言葉》

「バカなパートナーだけど…お願い、力を貸して！」

《おまかせをっ！》

その言葉と共に、グローリーの刃が淡い光を放った。

光を帯びた刃は、徐々に徐々に発する光を強くしていき、刃から溢

れる魔力が大気を震わせる。
やがて、強烈な光を発する刃はその形を変える。
より鋭く、巨大な刃…

『斧』へと。

「それじゃあ…行くわよ！」

《いつでも！》

上空から大樹に向かって一気に直滑降。ぐんぐんと迫る大樹にあたしはグローリーに持てる魔力の全てを注ぎ、振り下ろす。
途中、幾本かの根が襲い掛かってきたけど、鈴が全て切り落とす。
ナイスアシスト！

「おぉりゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

ズバアァァァァァァ！！

さっきまでまったく通らなかった刃は嘘のように大樹を真っ二つに切り裂く。アレだけ巨大だった大樹はあたしの刃によって綺麗に両断され、左右に分かれ、崩れ落ち、淡い光となって消えていった。

・・・・・・・・・・

「なぁ…」

「何よ？」

「やっぱりこの格好、やめよう」

「？　疲れたんじゃなかったの？」

「いや、だからって…膝枕はちょっと…」

今、とあるビルの屋上で鈴はあたしの膝の上に頭を置き、その身を横たえている。俗に言う膝枕ってやつね。

鈴は今回、かなり魔力を消耗したみたいで戦いが終わった途端、この場に崩れた。少し休めば戻ると言うんでその間、こうしているというわけ。

最初は抵抗してたみたいだけど、動くのも億劫なのか、弱弱しい抵抗だったから無理矢理こうするとやがて諦めて、大人しくなった。

「それにしても…どうしようかしらね？」

「……封印できなかった事か？」

「うん」

今回の事件。結果、私はジュエルシードの封印はできなかった。
というのもあの大樹が消えた後、見つけたジュエルシードは二つになっていた。そう、”真っ二つ”になっていた。
どうやらあの一撃は思った以上の破壊力があって、大樹もろとも斬ってしまったみたい。まさに想定外の出来事。結果は封印じゃなくて破壊。
ユーノ…ごめんね。

「ねぇ…」

「…うん？」

「……ありがとね」

「……なんの」

「次からはもっとうまくやるわ」

「…おう…がんば…れ」

「…鈴？」

見ると鈴は瞼を閉じて、静かな寝息を立てていた。よっぽど消耗してたんだなと思いながらその額をゆっくりと撫でる。
今回はいろいろと鈴に助けてもらった。うまくはやれなかったけど今回のことをバネに次回からがんばろう。あたしは一人、心に決める。

「これは…今回のお礼」

安らかに眠る鈴の額に、

あたしは静かに口づけをした。

・・・・・・・・・・

『なのは』

「……アリサちゃん」

私の眼下では見たくない光景があった。

眠ってる鈴君。身を曲げ、鈴君にキスをするアリサちゃん。

やがて顔を上げたアリサちゃんは顔を真っ赤にしてたけどその表情は微笑んでいた。

ギリッ！

知らず知らずのうちに内唇を噛んでいた。口の中を切ったのか、僅かな鉄の味がする事に驚き、私は力を緩める。

「鈴君の隣は…なのはのモノなの…」

無意識の内に言葉が漏れる。

これ以上二人を見ていられなくなり、私はその場を離れる。

胸の奥から沸き立つ黒い感情に気付かない振りをしながら…。

抱える思いはそれぞれ？（後書き）

諸事情でＰＣに触れる時間が減ってしまった。
…待ってくれる人（いるのか？）には申し訳ないことです。

※どうでもいい設定

すずかのデバイス『クロス』の待機状態は銀の十字架のネックレス

アリサのデバイス『グローリー』の待機状態は銀の指輪のリングネックレス

グローリーにカートリッジシステムは現在は搭載していない。一応はあるが蓮が意図的に撤去。

金髪少女？　間に合ってます！（前書き）

地震による被害、一刻も早い救いを祈ってます。

金髪少女？　間に合ってます！

『鈴』

どうも、主人公の鈴です。

ここ数日の内に起こった様々な困難を乗り越え、かつての穏やかな日常が恋しくなり、時々目頭が熱くなるときがありますが元気にやっています。

さてはて、今日の俺の…と言うより、いつものメンバーの予定ですが、みんなですずかの家に集まりお茶会だ。俺となのはとユーノ＋αが集まり、すずかの家へ。

最近は集まるときはウチという法則ができていたのですずかの家にお邪魔するのは久しぶりだ。すずかの家は少し離れているので、バスに乗って移動。そのバスの車内なんですが、

じぃぃぃぃぃぃぃぃ…

「……なのは…もうちょっと、離れてくれないか？」

「……嫌」

ビキィ！＃

後ろの席に座る＋αである恭也さんの殺気のせいで空気が最悪です。

恭也さんはすずかの姉の忍さんと恋人同士だからすずかの家に行く。

そこまではいいんだが、移動のバスに乗るや否や当たり前のように

俺の隣に座り、身を寄せてくるなのはの姿を見て、俺たちの後ろに座り、俺に殺気をぶつけてくるのだ。シスコン、自重しろ。

なのはもなのはでおかしい。最近は俺の近くに居ることが多くなった。そして必要以上にくっついてくる事も多くなった。そんな時、いつもと同じように見えるが、翳を帯びた表情を時折覗かせる。さすがにこれには変に思い、何かあったのかと聞いたみても「何でもない」の一点張り。

…嘘だとわかっていてもなのはの口から聞けない以上、どうしようもないのでとりあえずはこの問題は保留している。

ともかくこのシスコンのせいで今の俺はひどく居心地が悪い。これがすずかの家まで続くかと思うと胃に穴が空きそうだ。

…いつか本気で殴ってやる！

どうでもいいが我、関せずを貫くフェレット姿のユーノは毛繕いしてました。おまえ、人間だろ…。

・・・・・・・・・・

街の中心部から少し離れた郊外にすずかの邸がある。西洋建築の立派な…それはもう立派な邸だ。これを見るたびに火をつけたくなる

俺はどっか捻くれてるんだろうなと思う。

「恭也様、鈴様、なのは様。ようこそ、お越しくださいました」

忍さんの専属メイドのノエルさんに迎えられ、俺たちは邸の中へと。
恭也さんは突如現れた忍さんに引き摺られて、忍さんの自室に。リア充、爆発しろ。

案内された庭では、アリサとすずかがすでに寛いでいた。こちらの姿を見ると小さく手を振ってきたので、それに応えながら用意された席に着く。

「なのは様は紅茶でよろしいですか？」

「あ、はい。お願いします」

「そして鈴様はいつも通り…」

「緑茶で」

「かしこまりました」

俺の空気を読まない注文にも微笑みながら承るメイドの鑑であるノエルさんは邸の中へと去って行く。
紅茶は苦手なんだよなぁ。

「相変わらず、渋いわねぇ」

日本人ですもの。

・・・・・・・・・・

その後、ノエルとその妹であるファリンが持ってきた茶や菓子に舌鼓をうちながらのんびりとした時間を過ごす。

「おまえら、俺がいつもハイハイと従うイエスマンだと思うなよ？」

じぃぃぃぃぃぃ…

「…なんだその眼は！　気に入らないんだよ！」

じぃぃぃぃぃぃ…

「くっ！　落ち着け！　あんな安っぽい挑発に乗るな！」

にゃあぁぁん♪

「…うおおぉぉっ！　ごめんよーっ、お前たち！　さあ、思う存分食ってくれ！」

猫（アクマ）たちの魅了に負け、鞄からにぼしを取り出し、大盤振る舞いとばかりに手に乗っける。途端に我先にと、にぼしに群がる猫たちに心が癒される。猫はいい。正に神が生んだ最高の癒し動物だ。

「やっぱり猫はいいなぁ」

「ええ、この子達には私も癒されますし」

「まぁ、悪くはないけど、犬もいいものよ？」

「犬も好きだぞ？　俺は」

主にでかいの。

「ウチでは動物は飼えないからなぁ…」

「私の家でも飼えないから羨ましいなぁ…」

ウチは面倒を見れる人が居ない。なのはの家は飲食店営業の関係から。だから動物を飼いたいという欲求があってもどうしようもないのだ。

何かいい案が無いものかと考えていると思考が俺の口から無意識のうちに洩れていた。

「すずかちゃんの家に婿入りすればいいのかなぁ？」

「え？　…えええええっ！？」

「「！？」」

「そうしたらこいつらといつも一緒にいられ…グハァ！？」

突然、殴られたような衝撃が走り、思わず地面に倒れこんでしまう。
何事かと思い、顔を上げるとカップを持ったまま固まり、顔を真っ赤にしているすずかの姿。そして、

ジャキッ！

「「……」」

「あの…なのはさん？　アリサさん？」

グローリーとレイハさんを起動させ、こちらに切っ先を向ける二人の姿があった。見下ろすアリサの表情は怒り？　なのはは……見なけりゃ良かった。何？　あの能面貼り付けたような無表情。眼もハイライトが無かったような…。
とにかく、この危機を脱しなければ。

「あの…よくわからないけど…ごめんなさい」

「「よくわからない？」」

「何か悪いことを言ったのなら謝る！　だから…」

「「…頭、冷やそうか？」」

「えっ？　ぬわあぁぁぁぁぁ！？　」

ピチューン！

・・・・・・・・・・

「いたた…」

やられたことに理不尽を感じながらも俺はトイレで用を足し、邸内の廊下を歩くと曲がり角を曲がったところで、忍さんとエンカウントした。

「やっほ～鈴君。楽しんでる？」

「ええ、ハプニングはあったものの楽しんでますよ」

「そっかそっか。…鈴君、ちょっとだけ時間をもらえないかな？少し話がしたいんだ」

「…かまいませんよ」

俺が了承を示すと、忍さんは傍の部屋のドアを開け、中に入って行く。俺もそれに続き、中へ。

そこは普段は使われない来客用の客室なんだろうが、手が行き届いてるのか清潔感が溢れる内装だった。

「さてと…話ってのは他でもないけど、すずかの事よ。聞いたんでしょ？　私たちのこと？」

「はい、本人から」

「私、最初びっくりしたんだよ。帰ってきたあの子の瞳が紅くなってるんだから」

だろうなぁ。結局、あの眼は元に戻ることの無いままだったからな。

「私たち一族は世間に知られないように生きてるの。もし、知られた場合はその者の記憶を消すか…最悪、この世から抹消される。例外としては契約ってのがあるんだけど、今は割愛するわ」

ありきたりな掟ですね。

「最初、すずかに話したの。君たちの記憶を消すことを。だって、君たちはまだ小学生。いくら頭が良くても何かの拍子で喋ってしまうときがあるかもしれない」

……

「そしたら、すずかったら…」

『私はみんなを信頼した上で話したの。もし、それでも記憶を消すというのなら私は月村を捨てる！　そして、月村と戦います！』

「って。…子供の戯言だけど、あの時のすずかの覚悟は本物だった。だから、君たちを私も信用してみる」

「…それでいいんですか？」

「本当は記憶を消すのが最善なのかもしれないけど、私だってすずかと対立するのは嫌だからね」

「そうですか」

「そして…これが言いたかった事なんだけど…」

そう言って、忍さんはこちらの眼を見据え、頭を下げてきた。

「ありがとう。すずかと友達になってくれて」

「…それって礼を言うことじゃないですよ？」

「ううん、昔の悲観したすずかとは違う、あんなに前を向いて生きるすずかになったのは君たちのおかげ。私はあの姿がうれしいの」

そう言って、頭を上げる忍さん。その顔は本当にうれしいのだろうか、とてもいい笑顔だった。

「このまま、すずかと契約してくれるともっとうれしいんだけどね」

「契約？」

「特別な人になるって事。ぶっちゃけ、伴侶」

「……それは、忍さんが恭也さんに求めてください」

「それは…え～と……あはは」

照れくさいのだろう、真っ赤になってやがる。若いねぇ。青春だねぇ。って言うか…

「恭也さんめ…リア充爆発しろ」

「…それは君が言っていい言葉じゃないよ？」

「何でですか？　事実じゃないですか？」

「…ねぇ、鈴君。スクールデイズって知ってる？」

「？　いや、知らないです」

俺が否定した途端、忍さんはガクッと頭をたれ、ため息を吐きながら首を横に振った。その際、ボソッと聞こえた「ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ」っていう呟きが気になったが無視しろと俺のゴーストが囁いてるので、全力で無視した。

そんな風に忍さんと話してる最中、

！？

庭の方から強力な魔力の反応を感じた途端、念話が届いた。

『鈴！』

『ユーノか！？　もしかして！？』

『うん、ジュエルシード反応！　すぐに来て』

『わかった！』

念話を打ち切り、忍さんに退出を告げる。

「それじゃあ、忍さん。これ以上、みんなを待たすのもアレなんで俺はこれで…」

「うん、ごめんね。引き止めちゃって」

「いえいえ、それでは」

一刻も早く駆けつけるために、挨拶もそこそこにして駆ける。こんないい日に出てくんなよ…と愚痴ってしまうのもしょうがないよな？

・・・・・・・・・・

駆けつけると、辺りにはすでにユーノの結界が張られていて、俺はそれを抜ける。抜けた先に俺の眼に飛び込んできた光景は戦いの場だった。

「ディバインシューター、シュート！」

「ソードシューター、シュート！」

なのは、すずかがそれぞれ用いる射撃魔法を行使する。なのはの魔力弾が、すずかの魔力剣が周囲に生み出され、射出される。撃った先は、

「バルディッシュ…」

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　Ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ　ｆｉｒｅ》

漆黒のマントを身に纏い、輝くような金髪を流し、その手には黒く無骨な斧?を握る、見たことの無い少女だった。
少女は、すずかの無誘導の魔力剣を上空に飛ぶことによって回避。迫る誘導性のあるなのはの魔力弾を同じく魔力弾をぶつけることによって相殺する。
さっきのバルディッシュと呼び、それに反応した武器という事は、あれは斧ではなくデバイスか?　という事はあの少女も魔導師?というよりあの子は誰だ?

「鈴!」

思考は俺を呼ぶ声に遮られた。いつの間にかユーノが傍まで寄ってきていたようだ。

「ユーノ、これはいったいどういう事だ?」

「発動したジュエルシードをあの子に奪われたんだ。みんなはそれを取り返そうと…」

奪われた?　あの少女もジュエルシードを集めているのか?　だとしたら何で?

次々と浮かんでくる疑問を片隅に追いやり、目の前の戦いを見遣る。

「それを返しなさい！」

「…それはできない」

アリサと少女はお互いのデバイスで切り結び、鍔迫り合いをおこす。
アリサは必死に少女に喰らい付くが、少女は冷静にアリサの剣筋を見切り、かわし、受け止め、受け流す。
アリサの怒涛の連撃から有利に見えるが俺の眼から見ると今のアリサの方が不利だ。アリサは連撃を繰り出しているがまだ素人のそれだ。少女の方はそれらを簡単にいなしている。
恐らく、あの少女は本物の戦闘経験者だ。しかし、アリサ含めた三人娘は魔法を使えるだけ。戦闘などの訓練もしていないので、あの少女に勝てる確率はかなり低い。

そして、アリサはそんな少女に業を煮やしたのか、大振りの一撃を繰り出そうとする。
ってあのバカ！？

ドカァッ！？

「きゃあっ！？」

アリサの一撃は当然少女に当たる筈も無く簡単に避けられ、逆に強烈な一撃を叩き込まれ地表に落下していく。

「「アリサちゃん!?」」

あわや、地表に叩きつけられるかと思ったがユーノが咄嗟に魔法を発動させ、アリサを落下から守った。ナイスだ、ユーノ！
アリサはダメージが大きかったのか、気絶していた。そして少女の方は、その様子を一瞥すると身を翻しこの場から逃げようとする。

「待て！　ユーノ、すずか、アリサを頼む！　なのは、追いかけるぞ！」

「うん！」

なのはを連れ立って逃げた少女を追っかける。あの少女が何者かわかればいいんだが、無理だろうなぁ。

・・・・・・・・・・

『??』

目標のジュエルシードも回収を終え、私は追っ手から逃げている。
ジュエルシードの反応を感じたから来てみれば、そこにいたのはジュエルシードの発動体だけでなく、三人の少女。しかも三人ともが魔導師。
状況としては最悪だけど、母さんのためにここは引くわけにはいか

なかった。
幸運だったのは、三人ともが魔導師としての練度が低かったこと。
使う魔法は、それなりだったけどそれぞれの連携もほとんど無く、
あの鎧姿の少女もベルカ式でありながら、接近戦もそれ程ではなかった。
目的も達成し帰還しようとすれば、先程の三人の一人と、見たことの無い少年が追いかけてきた。
少年は見た限りでは、バリアジャケットも纏っていない。デバイスも持っていない。なのに私を追跡できるということは…あの少年も魔導師？
とにかく今は追っ手を撒きたい。二人には悪いが、ここで落ちてもらう。

「バルディッシュ」

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ》

生み出された幾本かの魔力弾が高速で少年と少女にに襲い掛かる。
少女の方はその攻撃に驚き、足を止め、デバイスを突き出し防御魔法を展開させる。少年の方は、

「【盾】！」

まったく足を止めることなく手を突き出し、見たことの無い白い六角形の陣で全弾を防いでみせた。
あれだけの魔力弾を全弾防ぐだけではなく、

「【射撃】！」

デバイスによる補助も無しに少年は詠唱もチャージも無しに魔法を

連続で行使する。こんな見たことも聞いたことも無い魔法を使う少年の存在に疑問が出てくるが後回し。
展開した防御壁で防ぐが、思いのほか威力があり思わず足が止まってしまう。そしてその瞬間を少年は見逃さず再び、魔力弾を打ち込もうとしたところで、

『ここはアタシにまかせて！？』

『アルフ！？』

少年の横から飛び出した狼…私の使い魔であるアルフが少年の攻撃を阻む。驚く少年はアルフの突進をモロに受け、地面を転がる。そんな少年にアルフはさらに追撃をかける。

『こいつはアタシが抑えるから今のうちに逃げて！』

『…お願いね、アルフ』

本当は任せるのも忍びないけどをアルフの行動を無駄にしないため、私はこの場から離脱しようとするがそこで、

「待って！」

今度はさっきの少女が追いついてきた。
…まだ、簡単には逃げられないみたい。

・・・・・・・・・・

『なのは』

この子の突然の攻撃で少し引き離されちゃったけど、ようやく追いついた。途中、狼に組み付かれていた鈴君も気がかりだったけど、あの子を追う事にした。
鈴君は「なのはじゃ勝てない！　引き返せ！」とか言ってたけどそんなこと無い。
私だって戦える。

アリサちゃんよりも…私の方が戦える！

レイジングハートを構え、目の前の子に問いかける。

「その石、返してもらえないかな？」

「…できない」

「それは本当に危ないの。そんな物をどうするの？」

「答えても…意味は無い！」

その言葉を皮切りに女の子はデバイスから光る刃を構築し、切りかかってくる。私もレイジングハートでそれを受け止める。

ギリギリッと鍔迫り合いになり金属同士、噛み合う嫌な音が耳に入る。押し戻そうと腕に力を込める。

クンッ！

「あっ！？」

ガッ！

「っくぅ！？」

力を込めた途端、向こうは軽く身を引き私はバランスを崩す。瞬間、襲ってくる攻撃を受け、弾き飛ばされてしまう。意識が飛びそうになるけど、何とか耐え距離の離れた今、魔法を撃つ。

一発、二発と撃つも女の子はそれらを紙一重で避ける。ディバインシューターも向こうの魔法でそれぞれが相殺されていく。

そして女の子がこちらに向かってきた。私はレイジングハートの照準を定めた瞬間、

フッ！

「えっ？　き、消え…」

ガツンッ！？

後頭部に物凄い衝撃を感じた。さすがにそれに耐えられず自然と視界が暗くなっていく。そんな薄れていく意識の中、なんとか力を振り絞り背後を見遣る。最後に見えたものは…

あの子の悲しそうな表情だった。

・・・・・・・・・・

「ぅ…ぅうん…」

「お、起きたか？」

「ふぇ？…りん…君？」

「おお。鈴君だよ」

眼が覚めるといつもよりも少しだけ高い視点。揺られていることからおんぶされてるんだろう。って

「お、おんぶ!?　はわわ!?」

「ちょっ!?　急にうごくな!?」

おんぶされてることに気付くと急に恥ずかしくなってちょっと暴れちゃった。いつもならなんてことの無いスキンシップなんだけど…とにかく今は大人しくしておく。

無言で歩く鈴君だったけど、私がこの沈黙に耐えられなくなり話しかける。

「鈴君は…大丈夫だったの?」

「何が?」

「あの狼」

「あぁ…軽い電撃魔法流し込んだら逃げだした」

どうやら鈴君はあの狼に勝ったみたい。あんな状態から勝っちゃう鈴君はやっぱりすごいと思う。それに比べて私は…。

「負けちゃったんだね…」

「だから言ったろ。勝てないって」

「うん」

「まったく…どうしてあんな無茶をしたんだ?」

「それは…」

言えるわけが無い。優先事項であるジュエルシードの奪回よりもアリサちゃんよりも戦えるということを証明したかったなんて。証明して、鈴君にアリサちゃんよりも私の方が役に立つって思ってほしかった。

「…まぁ、答えづらかったらいいや。とにかく反省しなさい」

「はぁ〜い…」

その言葉を最後に、鈴君は再び私をおぶったまま歩き出す。本当はもう普通に歩けるけど、この温もりが心地いいのでこのまま。その温もりを感じている途中、あの子の事が気になり呟く。

「あの子、何なんだろう?」

「さあな…」

「あの子…悲しそうな顔してた」

「悲しそうなってそんなのわかるのか?」

「にゃはは…わかるよ。だって」

「昔の私、あんな顔してたでしょ？」

「……」

「鈴君、私、あの子と話してみたいな」

「…話してどうするんだ？」

「わからない」

「わからないって…」

「じゃあ、何で鈴君は昔の私に話しかけたの？」

「それは…」

「気になったから…でしょ？　それと一緒かも」

「…そっか」

「そうだよ」

それっきり今度こそ、私たちはみんなの元に合流するまで無言でいた。

考えることは多い。しなければいけないことも多い。けど、今は鈴君の心地よさに溺れていよう。負けて傷心気味の今、このぐらいの役得は傍受してほしい。

・・・・・・・・・・

※とあるマンションの一室にて

「ア、アルフ？　その髪…」

「いやあああぁぁぁ！？　見ないどくれぇぇぇ！？」

少女が指差した、人間形態となった自身の使い魔。その髪の毛は…

鈴の電撃によって見事なまでにチリチリパーマ、爆発状態となっていた。

「あのガキ！　絶対許さないからね！？」

・・・・・・・・・・

※月村邸の一室にて

「というわけで、鈴君にすずかを人生の伴侶として、推薦しておきました♪」

「お、お姉ちゃん！？　何、言ってるの！？　」

「いや～、だってこのままだと何時まで経っても進展が無さそうだし♪　私って優しいでしょ？」

「よ、余計な事しないで！？」

「ほらすずか、こんなお姉ちゃんを褒めて、褒めて♪」

「……お姉ちゃん……ウゴカナイデ」

「あ、あれ？」

「スコシ、アタマヒヤソウカ…」

「ま、待ってすずか！　って本当に動けないし！　ノエル助けて！？」

いやあぁぁぁぁぁぁぁ…

金髪少女？　間に合ってます！（後書き）

なのはは現在、複雑な心境です。

友達としてありたい。しかし…

といった感じで。

※ちょっと設定

ソードシューター

すずかの使う射撃魔法。誘導性の無い直射型。魔力で構成された剣を撃ちだす。

弾速、貫通性に優れ、切り裂く事もできる。

温泉を楽しむ？（前書き）

いろいろ安定しない…

温泉を楽しむ？

『鈴』

どうも～！　秋月鈴です！
…うん。このテンションは無いわ。自分でやっておいて何だけど…
舌、噛みたくなった。まぁ、許してほしい。

さてと、世間は連休に突入。その連休中はなんと温泉で過ごすのだ。
元々これは高町家の恒例行事なのだが高町家と関わりを持ってからは秋月家も参加するようになった。
だが今回のこの旅行には高町家、月村家、秋月家、アリサ、ユーノという大所帯で、旅館まで車三台動かしての大移動。それぞれが車で楽しく談笑中。先生も機嫌良さそうに鼻唄、歌いながら運転している。旅行って目的地に着くまでの道中でも楽しく思えるから不思議だ。
今回の旅行は本当に助かった。今までのジュエルシード騒動でまともに休めた事がほとんど無かった。今まで、本っっっ当にいろいろあったからな。二泊三日、旅行中くらいは素直に羽を伸ばすぞー！

…これってジュエルシード出現フラグにならないよな？

・・・・・・・・・・

少々山奥の旅館に到着し、さっそく荷物を持って部屋まで移動する。
俺たち秋月家は三人分の荷物なので少量ですむが、他は荷物がかさばって大変そうだ。

「へぇ～、これが日本の旅館か～」

ユーノは旅館が初めてなのだろう、あちこちに眼を遣りながら歩く。
今回のユーノはフェレット状態ではなく、ちゃんとした人間状態だ。
最初は宿泊費もかからないフェレットでいいと主張していたが、先生が「おまえも人間ならちゃんと楽しめ。」とユーノの主張を断る。
その心遣いをユーノは素直に受け取って今に至る。

「ねえ鈴。なんで日本の旅館は卓球場があるの？」

「さあ？」

なんでだろうね？

・・・・・・・・・・

「はぁ～、生き返るぅ～」

「本当、気持ちいいね」

現在風呂場は、俺とユーノの二人だけの状態。他の客も居ないのでまるで貸切のように寛げれるのでもう最高としか言いようが無い。士郎さんと恭也さんは後から入るとの事。

「以前のお茶会と時といい、休暇らしい休暇はほとんど潰れたからなぁ。ほんと、至福のときだよ」

「それについてはごめん。僕のせいで」

「別に皮肉のつもりで言ったわけじゃないって。おまえのせいじゃないし、気にしすぎだ」

「でも…」

「それにその話は終わったろ？　だから何時までも引き摺るな」

「…うん。ありがとう」

「じゃあこの話は終わりだ。今日は存分に楽しめ。なんだったら、背中流してやろうか？」

「はは、遠慮しとくよ」

「そうだ…鈴ってさぁ」

「うん？」

「蓮さんとどう知り合ったの？　保護者って言うのは知ってるけど…」

「ああ、そういう事か」

ユーノの問いにかつての『鈴』になる前の…ほとんどが欠けてしまった記憶をなんとか思い起こす。

「別にたいしたもんじゃないぞ？　俺の本当の母親と先生が友人同士でな。母さんが死んだ後、俺を引き取ったのが先生だったって話さ」

「えっ？　ってことは鈴の両親は…」

「とっくにこの世には居ないさ。父さんも母さんより先に亡くなった」

「…ごめん…気軽に聞く話じゃなかったかな？」

「いや、本当に気にしてないぞ」

『鈴』になる前…『　　』だった頃の話しだしな。正直、この体になる前の記憶は欠けまくってて『　　』だったころの出来事はもう他人事のような感じなのだ。

『　　』は禁術の行使の失敗で魂は砕けバラバラになったが、先生の手により魂の一部を新たな肉体に移して甦った。だがさすがに

先生も失われた魂の復元まではできず、『　　』は記憶や経験のほとんどを失くしてしまっていた。
全てではないので、一部の魔法や経験、記憶は覚えていたがそれも本当に少し。自分は『　　』だと実感できなかった。先生から『　　』の事を聞いて、思い出そうとしたこともあったけど、俺の場合は記憶喪失ではなく、魂の破損による記憶破損。思い出すことは無いだとさ。
それなら『鈴』として新たに生きていくとして今ここにいるのが自分なのだ。（ちなみに『鈴』の名付け親は先生）
そして、さっき述べた両親の記憶など残った記憶は大切にしている。
俺は、この事実を今のところ誰にも話すつもりは無い。必要の無いことだと思ってるからだ。

「…鈴？」

「とりあえずはそのぐらいかな？　次はユーノのことを話してくれよ」

「えっ？」

「俺だけ話すのは不公平だ。次はユーノの番だ」

「うん、そうだね。じゃあ、何を話そっか？」

「じゃあ、ユーノの育った環境とか教えてくれよ」

「いいよ。僕の一族はね…」

それから俺たちはのぼせる一歩手前まで、お互いのことを話しまくった。家では話せなかった事も温泉で気が緩んだのか、気軽にぶっ

ちゃけることができた。
もはやほとんど無くなった遠い記憶を思い出し、少し悲しくなった。

・・・・・・・・・・

『すずか』

お風呂を堪能した私となのはちゃん、アリサちゃんは一足先にあがります。いつも家では一人、たまにお姉ちゃんと二人で入るお風呂もみんなと入るんで、楽しくてついつい長風呂しちゃいました。あがったとき、鈴君に念話で話してみたけど、鈴君はまだユーノ君と入浴中。仲良さそうでなによりです。

「お風呂も入りましたし、これからどうします？」

「う～ん、卓球場があるから行ってみたいかな？」

「なのはは…お土産を見てみたい」

「何言ってんのよ、温泉といったら卓球。これは決まりなのよ！いや、もはや伝統よ！」

「「その理屈はおかしい」」

などと、これからの予定を話し合っていたら前の方から声をかけられました。

「はぁ～い、おチビちゃん達♪」

その声につられ、見てみると見たことの無い女性がいました。年齢は二十歳くらいのグラマラスで野性味を感じる魅力的な女性です。…体の一部を見て、うらやましいと思ってしまったのは内緒です。その女性は私たちをじろじろと見渡し、なのはちゃんを見据えるとニヤリと小さく笑みを浮かべる。その様子に私たちは怪訝な表情を浮かべるも、女性は気にせずに話し始めます。

「この前は世話になったねぇ」

「この前って…？」

「そういや、あの黒髪のガキはいないのかい？　会ったら、ぶん殴ってやろうかと思ったんだけど…」

「あの…あなたは…？」

「おや？　一戦交えた相手も覚えれないのかい？」

「それって…まさか！？」

女性の言葉に思い当たったのか、なのはちゃんは胸元のレイジングハートを握り締める。よくわかってない私とアリサちゃんはその様子に戸惑う。

「なのは、誰なの？　この人」

「…この前話した、鈴君を襲ったあの子の仲間」

「「！？」」

なのはちゃんの言葉に私はクロスを握り締める。隣でアリサちゃんも同じようにグローリーを右手に掴んでいつでもセットできるように構えている。

なのはちゃんから聞いた話では狼の姿だったと言いますが、蓮さんの話ではその狼は使い魔。人の姿にもなれると教えてもらいました。恐らく、目の前の女性はその狼が人となった姿なんでしょう。

女性はそんな私たちに臆する様子も無く、相変わらずニヤニヤと笑みを浮かべる。

「一つ忠告しとくよ」

その言葉を吐くや否や女性の小馬鹿にしたような薄ら笑いの笑みから一転、獰猛な笑みを浮かべる。さらには女性からプレッシャーが放たれる。そのプレッシャーに私たちの体を強張らせる程でした。

「ガキ共は大人しくしてな。それでも立ち塞がる気なら……容赦しないよ」

その言葉と込められる殺気には本気の覚悟が見受けられ、思わず頷いてしまいそうになる。しかし、

「だ、誰が！　あたし達だって、引く気は無いのよ！」

そんな殺気に飲まれそうになりながらもアリサちゃんは精一杯の気力を振り絞り、虚勢でありながら抵抗をする。そのアリサちゃんの姿に私となのはちゃんは続くようにして声をあげる。

「わ、私だって引く気はないの！」

「私もです」

「…そうかい。だったら…ここで潰してあげようかねぇ」

私たちの言葉を聞いた女性は、ゆっくりを手をこちらに向け、

「こらこら、子供を苛めるもんじゃないよ」

私たちの後ろからの声にその手を止める。その声に振り向けば、女性に負けない位の魅力を醸し出す浴衣姿の蓮さんがいた。お風呂から上がったばかりだからか、仄かに赤みのかかった顔やうなじはとても扇情的で思わず見惚れてしまいそうになります。
…うらやましくないですよ。本当ですよ？

「アンタは？」

「なに…この子達の引率者の一人さ」

「…ふん！」

女性は上げようとしてた手を下ろし、私たちの横を通り過ぎて行く。その後姿を私たちはただ見送るだけでした。

「大丈夫か、お前たち？」

「は、はい。ありがとうございます」

「少し、怖かったです」

「……ねぇ、蓮さん」

「ん？」

不意になのはちゃんは蓮さんに尋ねる。

「私たちは…あの人と…あの子とも戦うことになるんですよね…」

「そうだな。……戦いたくないのか？」

「…はい」

「そうか…」

その様子には小さくため息を吐く蓮さん。そして言葉を紡ぐ。

「甘えるなよ、なのは」

「！？」

「おまえは話をしたいと言ってるけど、それは通じないだろうな。言葉だけでどうにかなるほど、魔法の世界は甘くもないし、優しくない」

「で、でも…！？」

「だから…一度、お前の想いをぶつけろ、そのうえで話をしてみろ。つらいだろうが、そうすれば届くかも知れんぞ？」

「……」

「まぁ、でも…個人的にはなのはのその尊い気持ちを応援するけどな」

「えっ？」

「ぶっちゃけ私も…甘ちゃんと呼ばれる部類なんだ……さて、私は

もう行くよ。すまなかったな、きついことを言って」

そう言って、軽く手を振って去っていく蓮さん。その姿にさっきまでの尖ったようなものは無く、いつもの蓮さんのソレでした。
見送った後、隣を見るとなのはちゃんは眼を閉じ、俯いていました。
その胸中にどんな想いが渦巻いているか、今の私には窺い知れませんでした。

「なのは…」

「なのはちゃん…」

「…うん…そうだね…うん！」

暫くすると、眼を開け何かを決めたような、なのはちゃんの顔がそこにあった。

・・・・・・・・・・

『鈴』

風呂から出た俺はユーノと別れ、火照った体を冷まそうと思い、一人で旅館の外の森の中を散歩していたわけだが、

「……」

「……」

先日の金髪少女にデバイスを突きつけられていた。
まぁ簡単な話、エンカウントしたってだけなんだけど…

「君がここにいるって事は…この付近にジュエルシードがあるんだね？」

「…答える必要は…ない」

ＯＫ…その答えだけで十分だ。つまり…あるんだね？　その事実を突きつけられた俺は、

「……ｏｒｚ」

「…えっ？」

地面に手をつき、膝をつき項垂れた。少女はそんな俺のいきなりの行動に戸惑いの声を漏らしたような気がしたけど、構ってられない。

「……」

「え～と…」

「……（ぷるぷる）」

「…あ、あの？」

「……でだよ」

「えっ？」

「何でだよおおおぉぉぉぉぉ！！！」

「ひぅっ！？」

うがぁぁっ！？　と立ち上がり、とりあえず近くの木に八つ当たりする。

「今！　連休中だぞ！　俺は！　今日は！　温泉旅行に！　来たんだぞ！　空気読めや、ジュエルシード！」

ドカァァァン！　メキメキ…ズゥゥゥゥン！

八つ当たりされた木は真ん中からへし折れる。どうやら無意識のうちに【強化】してしまったようだ。

…が俺の鬱憤は晴れる事はなかった。そこに、こちらを怯えた表情で見ている少女を見つけ思わず駆け寄り、その肩を掴む。

「あんたもあんただぁ！　何で今日に限って、見つけたジュエルシードが此処のなんだよ！　せめて日にちをずらして見つけてくれよぉ！　そうすれば俺はジュエルシードの存在に気付かず、ゆっくりと連休を楽しめたのにぃ！」

「ぁぅ、ぁぅ、その…ごめ…ん…なさい」

「謝っても、もう遅いわぁぁぁ！」

「う、うわぁぁぁぁん（泣）」

・・・・・・・・・・

「ひ、ひぐ…えぐ…えぇぇん」

「マジでごめんなさい」

俺の八つ当たりをモロに受けた少女は本気で泣いてしまって、その姿にやっと冷静さを取り戻した俺は土下座を実行。八つ当たりで少女泣かすって俺って…マジで最低の鬼畜野郎だ。超猛省。

「ほ、ほ～ら嬢ちゃん。ラムネあげるから泣き止みな」

「ぇぐ…えぅ…ラム…ネ？」

よし、食いついた！　喉を潤すつもりで売店で買った物だけど、まさかこんな場面で役に立つとは。

「そう、ラムネ。冷たくて、甘くて、古今東西、老若男女に愛されている清涼飲料水！」

ちょっと誇張が過ぎたかもしれないが、この際どうでもいい。とり

あえず、泣き止んでもらうのを優先しよう。
さっそく、ラムネの蓋であるビー玉を押し込む。ポンッ！　という独特の音に少女がビクッ！　って怯える姿がちょっと可愛いかった。

「ほい、溝にビー玉を引っ掛けて飲んでくれ」

「あ、ありがとう…」

両手で受け取り、ゆっくり飲み始める少女。コクコクッと飲む姿は小動物系を思わせ、やっぱり可愛かった。

「あ…初めて飲んだけど…おいしい」

「お気に召したようでなにより」

とりあえず泣き止んでくれた事に安堵し、もう一本のラムネに手をつける。ビー玉を押し込み、さっそく一口。
…うん、うまい。少女の方も静かに飲み続けている。

「……」

「……」

……何？　この空間。

「あ、あの」

「んあ？」

「さっきは…ごめんなさい。いきなり武器を向けたりして…」

「え、ああ、いや…（多分）お互い、対立してるんだから仕方ないって。それに、謝るのは俺の方なんだって」

「いいえ、それでもやっぱりこっちが…」

「いや、それこそ俺のほうが…」

「…！　…！？」

「…！？」

……だから、何？　この空間。

・・・・・・・・・

とりあえず、あのままだと無限ループに陥りそうだったので、強制的に打ち切って別の話題に移る。

「…でね、ジュエルシードって本当に危険なんだ。だから俺たちはそれを回収して、然るべき所に引き渡す予定で居るの。だから…そちらが持っている分を、こちらに渡してくれないかな？」

「それは…できません」

「ですよねー」

当たり前だが、却下されたので、これ以上の催促は止める。まぁ渡

してくれたらラッキー程度にしか考えてなかったから、別に痛くもなんとも無いけどね。

「えっと…それだけですか？」

「何が？」

「いえ、もっと催促してくるものかと…」

「ああ、君も何かの理由があって集めてるんだろ？　俺は別に警察でも管理局員でもないから無理強いはしないよ。それに俺はどちらかと言うと監督役みたいなものだしね」

「監督役？」

「そ。元々、集めると言ったのはなのは達…この前、君に立ち塞がった他の四人なんだけど、あいつらって何処かで無茶をするような性格なんだ。だから成る丈、無茶をさせないようにする監督役が俺」

「…そうですか」

それっきり、会話が途切れる。散歩のつもりが思った以上に時間が経ってしまったので、これを契機にして旅館に戻るとするため立ち上げる。その様子を察した少女も、立ち上がる。

「最後に頼みがあるんだけど…」

「？」

「君が以前、打ち負かした子…なのはっていうんだけど、その子が

君と話してみたいって言うんだ」

「…うん」

「その子がもし、戦いたくない、話をしようっていうんだったら…遠慮なく戦ってあげてくれないかな？」

「えっ？」

「正直、なのはの気持ちは尊いものだし、尊重すべきなんだけど…それではいつか必ず、足をすくわれる。だからなのはには知ってほしいんだ。言葉だけではなく、決意や覚悟を示す場面を」

「…監督役はそれでいいんですか？」

「本音はダメだけど…なのはは魔法に関わりすぎたからね。今更、引き返すことはないだろう。だからこそ余計に知ってほしいんだ」

その点、アリサやすずかは大丈夫だ。アリサは大会社の令嬢、すずかは夜の一族って立場からその辺はある程度わかってるからな。

「わかった。私にも譲れないものがある。だから…遠慮はしない」

さて、どうなるかな？

温泉を楽しむ？（後書き）

ブレまくりですね…。

温泉を楽しめ…ない！（前書き）

戦闘描写なんて…書けるワケがない！

低レベルでごめんなさい。

こんな作品でも地味に伸びてるＰＶとかにうれしく思います。

感謝。

温泉を楽しめ…ない！

『鈴』

その日の深夜、俺たちは森の中で少女と対峙していた。池に架かった橋のその中央にあるのはジュエルシード。まだ封印はしていないってことは俺たちは間に合ったようだな。
今この場の緊迫感が漂う空気の中、なのはが一歩前に踏み出す。

「え～と…久しぶりだね」

「…」

「私の名前は高町なのは。良かったら、名前を教えてくれないかな？」

「…フェイト・テスタロッサ」

「アルフだよ」

フェイトね。今更だけど、俺たち名前を知らなかったんだな。
後、夕方にみんなから聞いたんだが…フェイトの横にいる女性、アルフはどうやら以前、俺が撃退したあの狼のようだ。だからか…さっきから俺をずっと睨みつけてるのは。

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

「ユーノ・スクライア」

各々が自己紹介するこの光景、この後に恐らく戦闘が始まるって感じじゃないよな。って、なんかみんなこっち見てるし。

…あ、そっか。

「秋月鈴だ」

「以上が私の友達。それでさ、私たちはジュエルシードによる被害を抑えるために集めてるんだけど…フェイトちゃんとは…戦うしかないのかな？」

「……」

「ほら、フェイトちゃんが集める理由も知らないし、私たち話し合えば、協力できるかもしれないし」

なのはは懸命に話し合おうとするも、フェイトには届かない。そりゃそうだ。言葉だけでどうにかなるほど世界は甘くもないし、優しくない。

やがてフェイトはデバイスを構え、戦闘態勢に入る。

「言葉だけじゃ、何も伝わらない…」

「…フェイトちゃん」

「覚悟を示して…このジュエルシードを賭けて」

「…いいよ。あと、私たちが勝ったら…いろいろ話してくれる？」

「…いいわ」

あれ？　なのは、意外と乗り気？　最後まで躊躇うものかと思ったんだけど…。

『なあ、なのはの奴、何で乗り気なの？　もっと渋るかと思ったんだけど…』

『昼間、蓮さんから喝を入れられたのよ』

…なんだ…フェイトに頼まなくてもよかったのか。まぁいいや。

フェイトの言葉を身に受け、なのは達はそれぞれのデバイスを構える。ユーノもバリアジャケットを纏う。俺はとっくに準備完了。

そして…長い夜が始まる。

・・・・・・・・・・

「このっ！？」

「この前の借りを返させてもらうよ！」

戦いが始まって俺たちは2チームに分かれた。なのは達三人娘はフ

ェイトに、俺とユーノはアルフへ。
以前は敗北で終わってしまったけど、今回は三人とも以前とは違う。
絶対勝てるとは言わないけど、前回のように、簡単に負けるという事は無いだろう。ならば俺は自分の相手に集中する。

「くたばりな！」

「【盾】！」

アルフの拳を【盾】で受け止める。拳と【盾】の接触により、魔力の奔流が巻きおこる。

「くっ！？　何で壊せないんだい！？」

そりゃ、対応してる術式が違うからだろう。ってかこいつ【盾】を壊す気でいたのか。油断も隙もあったもんじゃないな。
やがて俺の【盾】を壊せないとわかるとアルフはそのまま跳んで後退する。だが逃がさないとばかりに、俺の背後からユーノのチェーンバインドがアルフに向かっていく。まるで、獲物を襲う蛇のような魔力の鎖だが、アルフは持ち前の身体能力で次々とかわしていく。

「はっ！？　そんなもんに捕まるほど、トロくはないよ！」

「いいや、捕まってるよ」

「！？」

アルフの上空に跳んだ俺はそのまま踵を振り下ろす。ガッと足に衝撃が伝わる。しかし、捉えたと思ったそれもアルフの反射神経によ

る賜物か、ガードされる。そして距離をとり、再びお互いが対峙する。

「アタシのバリアブレイクでも壊せないあんたのその魔法はなんなんだい？」

「ひ・み・つ♪」

「…むかつくねぇ」

とりあえず挑発。それにしても、2対1だから、もうちょっとすんなりいけると思ったけど、なかなかどうして…こいつ、本当に強いな…ってことは、こいつの主であるフェイトはもっと強いのか。

…なのは達、勝てるよな？

・・・・・・・・・・

『アリサ』

たいした時間も経っていないのに、もう何合打ち合ったのかわからない。お互いの一撃、一撃をかわし、受け、いなす。あたしとは近

接戦闘を主軸としてるからこうなるのはわかってたけど、神経の削れ具合が半端じゃない。
対するフェイトは…すごいとしか言いようがない。あたしの攻撃だけじゃなく、なのはの援護やすずかのバインドも持ち前の機動性ですべてかわす。一体どれほどの戦闘能力を有しているのか、あたしには理解できなかった。

「このっ！？」

「フッ！？」

ギンッ！　ギンッ！　ギィィンッ！！

「バルディッシュ！」

《Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ》

「！？」

突然フェイトが視界から消える。高速移動魔法だと気付いたのは、フェイトの一撃をうけてからだった。

ドガッ！

「あうっ！」

背後からの強い衝撃を受け、一瞬意識がとびそうになるが、歯を食いしばって堪える。以前と違い、何とか耐えれたが、空中から落下してしまう。だけどやられっぱなしではいられない。

落ちる寸前に左手の手甲に仕込まれている、ワイヤーガンをフェイトに放つ。

あたしの肘まで覆いそうなこの手甲は、それ自体が頑丈で盾のように使えるし、これ一つで対魔法防御の魔法陣を展開することもできる。そして最後のギミックがこのワイヤーガン。相手を絡めとったり、引き寄せたりすることができる。蓮さん曰く、ガンダムを見て作りたくなったとか…。

さすがのフェイトもこの攻撃は予測不可能だったらしく、対処できずにワイヤーはうまく左腕に巻きついてくれた。それによって何とか墜落は免れる。

フェイトはワイヤーを切断しようとするけど、そうはいかない！

「クロス！　バンカーを！」

《承知》

すずかが絶妙なタイミングでバインドを打ち込む。すずか特有のこのバインドは魔力の杭を打ち込むようにして相手を拘束。すずかが吸血鬼なだけあって、皮肉が利いてる気がする。
ともかく、両手足を拘束されたフェイトはこの状況から逃げられない。あたしもワイヤーを切り離しフェイトから距離をとる。

今が絶好のチャンス！

「なのは！」

「うん！　ディバイィィンバスタァァ！」

なのはの十八番の砲撃魔法がフェイトに襲い掛かる。身動きの取れないフェイトはせめてもの抵抗とばかりに防御魔法を展開するも、なのはの極悪なまでの砲撃は防御など意味はないとばかりに容易く貫通して、フェイトは魔力の奔流に飲み込まれた。

・・・・・・・・・・

『アルフ』

上空から高魔力を感じ、見上げると桜色の砲撃がフェイトを貫いていた。

「フェイト！？」

思わず叫んでしまってから、自身の失態に気付いた。

今が戦闘中であることに。

しまったと気付いた時にはもう遅かった。さっきまで相手をしていた黒髪のガキはこちらの懐に飛び込んできていた。構えた右手には魔力を感じる。ここまで接近されたアタシにはそれを防ぐ手立てがない。

「手加減はする…【衝撃】！」

ドォンッ！

「…ガハァ！？」

腹部に物凄い衝撃を受け、そのまま吹っ飛ばされる。地面を一回バウンドして橋の上を転がり漸く動きが止まる。

（迂闊だった。このガキはあの三人と違って戦えるガキだ。それをフェイトに気をとられたからと言って、隙を晒すとはね…）

意識が朦朧とする。体を動かそうとしても思うように動かない。腹部には激痛がはしる。ったくあのガキは…女の腹を痛めつけるなんて最低だね。

うつ伏せの状態から仰向けになって上空を見ると、アタシのご主人はあの金髪のガキに抱えられている状態だった。意識がないのか、ぐったりとして動かない。まるで、命を失くしたかのように…。

その光景を見てアタシの意識は急激に覚醒する。

負けるとどうなる？　ジュエルシードを持って行かれる。アタシ達は回復に時間を要し、その間にあのガキどもは回収を続けるだろう。いや、もしかしたらアタシ達は下手したら、このまま時空管理局に身柄を引き渡されるかもしれない。

そんな最悪のビジョンが脳裏を掠めると、一つの想いが出てくる。

（負けられない！）

負けてたまるか！　今動けるのはアタシだけ！　アタシはいい。け

どフェイトを…アタシの主に不幸が降りかかるのは許容できない！

動け！　動け！　動いてあのガキどもを！

シマツスルンダ！？

奇しくも鈴にやられたアルフの吹っ飛ばされ辿り着いた場所は橋の上。

ジュエルシードのすぐ傍だった…。

・・・・・・・・・・

『鈴』

吹っ飛んだアルフがその場から動かないことを確認すると漸く息をつく。

「ふう…いてて」

今更になって体のあちこちが痛みだす。こちらは致命的な一撃は貰わなかったが、軽いのはいくつか貰っていた。さすがは狼か…動きが速いんだよな。まぁ勝ったからいいんだけど。

さすがに殺しはしたくないから手加減はした。もし本気で撃っていたら今頃アルフはモザイクかかるようなスプラッター状態になっていたかもしれない。

「お疲れ、鈴」

「ん、ユーノも援護ありがとな」

お互いが労いの言葉を交わし、軽くハイタッチを決める。

「こっちも終わったわよ」

その声に気付き上を見上げると、アリサがフェイトを抱えたまま下りてくる。それに続いて、なのは、すずかも下りてこちらまで来る。抱えられたまま動くことのないフェイトの様子を見て思う。

「生きてるよな？」

「非殺傷設定なの！　縁起でもないこと言わないでほしいの！」

「なのはったらひどいわね」

「撃つように合図したのはアリサちゃんでしょ！　二人ともひどい！？」

「「冗談だって」」

「っ！？」

そしてなのははアリサに噛み付き、アリサもそれに応戦する。俺たち三人はその様子に苦笑しながらただ成り行きを見守る。最近は少なくなったとはいえ、この二人は本来こういう関係なんだよなぁと少し懐かしみながら、ふとジュエルシードの事を思い出した。

「すずか、悪いんだけどジュエルシードの封印を……っ！？」

瞬間、ジュエルシードの方から今までに感じたことのない莫大な魔力を感じた。その魔力に俺はおろか、取っ組み合っていた二人もジュエルシードの方に気を取られる。その視線の先には眩い蒼の光。

「■■■■■■■■オオオオオ！？」

言葉ではない…もはや獣の咆哮とでも言うべき雄叫びが衝撃を伴い、周囲に響き渡る。雄叫びでありながらそれに込められた魔力に意識せず背筋が震える。その雄叫びの声は間違える筈がない。さっきまで聞いていたアルフの声。

「まさか…ジュエルシードを…？」

まさかとは思うも、恐らく外れてはいないだろう。あのバカ…ジュエルシードを…。

アルフ自身が望んだのか、ジュエルシードが勝手に反応したのかそれはわからないが、もしアルフがアレと融合し、敵意を向けてきたら相当ヤバイぞ。これは…最悪、先生の手を借りるかもしれないな。

やがて光が治まると、そこには禍々しいまでの魔力を溢れさすアルフがいた。姿は人型のソレだが全身のその肌には赤黒い奇妙な紋様がはしっており、まるで生き物のように蠢き、脈打っていた。そしてその瞳も赤黒い光を宿し、額には埋め込まれたジュエルシードがあった。

やがて荒い息を吐きながらこちらを睨みつけるアルフ。視線だけで殺されそうだった。その視線は…アリサに、性格にはその腕に抱えられているフェイト。

「フェイトに…触るなあぁぁぁーーー！！」

大地を蹴って、こちらに向かって突進してくるアルフ。その速度はさっきまでのものとは比較にならないぐらい速く、それだけでも能力の向上具合を窺えた。

「みんな散れ！　【盾】！」

フェイトを抱えてるため動けないアリサの前に立ち、【盾】を展開する。

ガィィィン！　ビシッ！

「…マジ？」

たった一発。なのはの砲撃も防いだ実績を持つ俺の【盾】がアルフの拳一発で半壊状態。なのはのバスター以上の威力って…。

あまりの光景に一瞬、呆然となるもアルフは知ったことかとばかりに再度拳を放つ。一発で半壊なのだから、二発目を耐えられるわけもなく、

パキィィィン！！

呆気なく砕けた。この魔法に信頼と自信を持っていただけに信じられなかった。俺はその光景にまだ思考が追いつかなく壮大な隙を晒すこととなった。そしてそれは仇となる。

ブォン！　ドガァ！！

「ガッ！？」

「きゃあ！？」

「アリサちゃん！？　鈴君！？」

殴られ吹っ飛ばされた。それはもう盛大に、さっきの報復とばかりに。背後にいたアリサを巻き込みながら吹っ飛ばされ、アリサの腕に抱えられていたフェイトはアルフの腕の中へ。そのままフェイトを転移魔法でどこかに送る。

アリサと共にまだダメージが抜けきらない体を何とか立たせ、アルフに負けじと睨み返す。

「さっきはよくもやってくれたねぇ。悪いけど…ここで全員潰させてもらうよ」

「それはこっちの台詞だ。五対一…勝てるとでも？」

「勝てるさ。コレのおかげで今のアタシは負ける気がしない」

「阿呆が…」

アルフが俺たちを逃がさないようにと結界を張る。これで先生に救援要請が出せなくなった。外部に念話も繋がらない最悪な状況だけど…

俺は周囲に散ったみんなを見遣る。相手の強大さを受け止めながら

も決して逃げようとしない。ふとなのはと目が合う。普段は怖がりなくせに、俺の顔を見て微笑んでやがった。
…そうか決意したんだな。なら…やりますか！

「いくぞ、みんな！」

「「「「うん！」」」」

・・・・・・・・・・

「【衝撃】！」

ドォンッ！！

「っ！？　ハッ！　その程度じゃ、アタシは倒せないよ！」

「嘘だろ！？　さっきまで効いてたじゃねぇか！？」

「こんのぉぉ！！」

ブォン！

「遅いんだよ！！」

「えっ？　きゃあ！？」

「おりゃあ！」

「ハァッ！」

俺とアリサの猛攻にもアルフは退くことなく、過剰なまでに魔力をのせた拳で迎撃する。アルフの異常なまでに向上した魔力もそうだが、厄介なのは狼特有の身体能力と勘。回避率が高すぎてこちら側ばかりダメージを受けるのだ。現に今も、

「ディバインシューター！」

「ソードシューター！」

二人の援護射撃も事前に察知されて距離をとられ、回避される。一度ユーノのバインドがアルフを捕らえたのだが…一瞬で強引に引き千切られた。それにはさすがに驚き、チャンスとばかりに突貫した俺とアリサは手痛い反撃を受けたのだった。

（どうしよう…マジで活路が見出せない）

今はみんな、防御より回避に専念しているのでなんとかもっているが時間の問題だった。スタミナも魔力も無限ではない。加えて向こうはジュエルシードのせいで魔力の枯渇は期待できない。スタミナもこちら以上。攻撃は届かない。防御力も向上とか…チートみたいな奴だ。

（仕方ないか…）

『なのは、アリサ、すずか。大技の準備を頼む』

『えっ？』

『どうするのよ？』

『俺が動きを止める…ユーノは俺が向こうの動きを止めたら、アルフにバインドを頼む。二発目は考えなくていい。全魔力を注げ。それで暫くはどうにかなるはず』

『うん、わかった』

『みんな、最後にするぞ。魔力の温存とか考えるな。これで最後だ』

「レイジングハート！」

《了解》

「グローリー！」

《お任せを》

「クロス！」

《承知》

なのはのレイジングハートはその形状を変えチャージを始める。

アリサのグローリーの刃が光を纏い、大斧を形成する。

すずかのクロスの先端部の十字架が淡く、輝き始める。

それぞれの準備を見届け、身構える。アルフもこちらの様子に気付

き、構える。
今から挑むのは俺とアルフのタイマン。【強化】で限界近くまで自身の能力を向上させる。攻撃魔法は一切なし。肉体勝負。
覚悟を決め、大きく深呼吸。そして突撃！

「おおおぉぉぉ！！」

雄叫びをあげながらの突進。そして殴りかかる。当然、直線的なその動きは当たる筈もなく、体をずらすことによって簡単に避けられる。
逆にすれ違いざまに拳を打ってくるが、俺も地面に飛び込むようにして回避。けどそれだけで終わらせずに、不安定な態勢だが曲芸じみた動きで蹴りを放つ。
腕でガードされたが、一瞬顔を顰めたので多少なりともダメージを与えられたようだ。どうやら、残りの魔力を全部強化に注いだのは正解だったようだ。だが、アルフも負けじと反撃。逆立ちしたような態勢の俺には回避できず、

ドガッ！！

「ガハッ！？」

地面に叩きつけられるが意識は根性で繋ぎとめる。ゾクッ、と嫌な予感がしたので寝そべったまま横に転がる。さっきまでいた場所を踏みつけるアルフがいた。

（子供に容赦なく踏みつけとか…最低だな）

転がった反動で立ち上がり、止まる間もなく再び突貫。拳、蹴りと繰り出せば、回避、防御、反撃とお互いがとことん近接戦を繰り広げる中、俺はそろそろ作戦を開始する。

「なるほどね。あのガキども、たいした魔力だね。あれなら今のアタシに通用するかもね。だけど…当たると思ってるのかい？」

「ばーか、当てるんだよ…こうやって！」

俺はみえみえの大振りなパンチを繰り出す。当然避けられ、できるのは隙。ニヤッ、と嗤ったアルフと目が合う。そして、

ドゴォッ！？　ゴキッ！？

「ゴフッ！？」

体に衝撃が走り、何かがへし折れる音が耳に響いた。同時に口から熱いものがこみ上げ、口の中に鉄の味が充満する。骨の何本かがイッたようだ。覚悟してたことだけど…痛ぇ。こんなことなら、バリアジャケットの生成法を教えてもらえばよかった。

だけど……捕まえたぞ！

ガシッ！

「何！？」

「やれ、ユーノ！！」

「了解！」

俺の合図にユーノはチェーンバインドを行使する。先程アルフを捉えたバインドだが、今度はユーノの持ち得る魔力全てを注ぎ込んでいるので、本数も強度も違う。アルフの腕、脚、胴、首、絡められるところを余すことなく絡めていく。俺はそのバインドの内の一本でサルベージされ、アルフから引き離される。

そして、もう後のない…最後の一手だ！

「みんな！　一斉射撃用意！！　てぇぇーーーー！！」

なのはの溜めた魔力が解き放たれる。

「ディバィィンバスタァーー！！」

アリサの輝く刃が振り下ろされる。

「スラァァッシュ！！」

すずかの切った十字が光となり放たれる。

「グランド…クロス！！」

なのはの砲撃魔法が、アリサの魔力斬撃が、すずかの広域魔法がバインドで縛られているアルフに容赦なく放たれ、いまこの瞬間勝負は決した。

・・・・・・・・・・

「アタシの…負け…か…」

地面に倒れたまま、アルフが呟く。さっきまで感じた膨大な魔力はすでに無く、アルフ自身は息も絶え絶えな状態。今なら、止めをさす事も可能だ。まぁするワケないがな。ってか非殺傷とはいえ、アレを受けて意識があるってどんだけタフなんだよ。

「はぁ～…あんたらみたいなガキに負けるとはね…」

「いや、どちらかというと…引き分けかな？」

「はぁ？」

「こっちもみんな、もうまともに戦えねぇんだわ。俺は満身創痍、他は魔力がほぼゼロ。そして何より……賞品のジュエルシードはもう無いしな」

そうなのだ。”また”ジュエルシードが砕けたのだ。アリサのときと同様、威力がありすぎて封印通り越して破壊とか…。またユーノに頭を下げる作業が始まるお…。

「まぁそんなわけだ。今回はこれで終わり。解散。は～い撤収、撤収ってことで」

「…ここでアタシに止めをささなくていいのかい？」

「冗談。戦いはしても、殺す気はねぇよ」

「今後、あんたらとまた衝突するかもよ？」

「そん時は……また撃退するだけだよ」

その言葉と共にみんなを見渡す。みんなも俺の言葉に頷く。
そして俺たちは撤収とばかりにこの場から離れる。骨がイッてるせいで痛くて歩きづらいからユーノの肩を借りる。ユーノとすずかの治癒魔法があればマシになるんだろうけど二人とも魔力は限界。よって、このまま旅館に帰還。帰ったら先生に治療してもらおう。
くそう…波紋で痛みを和らげれたらなぁ～なんてくだらない事を考えながら帰路につく。あ、そうだ。

「フェイトによろしくって伝えといて」

じゃあ今度こそ、シー・ユー・アゲイン！

鈴たちの帰った後…

「…アルフ」

「フェイ…ト？」

「だ、大丈夫？」

「まだ…動けない…けど…大丈夫」

「すぐに治すから」

「たす…かるよ」

「……」

「……」

「…負けちゃったね」

「ああ、アタシたちの…負けだね」

「……」

「それで…どうするんだい？」

「あの子たちには悪いけど…私は諦めない。母さんが望むかぎり…」

「フェイト…」

「その前に…一度、あの子たちと話をしてみたいかな」

「…そうかい」

その時のアルフは小さく笑っていた。

旅館にて…

「今回は、本当に危なかったみたいだな」

「そう思うんなら手伝ってくださいよ…」

「お前たちの決めたことだろう？　私の出る幕ではないさ」

「…それでもフォローすべきトコはする先生は甘いですね」

「鬼にはなりきれんのだ」

「そっすか…」

「そういや、相手の正体が判明したんだって？　なのはが嬉しそうに言ってたぞ」

「名前だけですけどね。使い魔がアルフで、その主がフェイト・テスタロッサです」

「そうか。フェイト……テスタ…ロッサ？」

「？　どうしました？」

「…いや…なんでもない」

「？」

「…テスタロッサ…まさか…嬢ちゃんか？」

旅館にて…2

「は～～い～～る～～の～～！」

「い～～や～～だ～～！」

柱に必死にしがみつく俺。それを引っ張るなのは。そしてなのはの先にあるのは

『家族風呂』

冗談じゃねぇ。子供といえど一緒に入れるか！　恥ずかしいんだよ！

つーか、こっちは【強化】してんのに何で競り負けしそうなんだよ！　なのはどんだけ力込めてんだよ！

そんな攻防を繰り広げていたら、廊下からユーノが現れた。チャンス！

「ユーノ、助けてくれ！」

「ユーノ君、手伝って！」

「え、え～と…」

「ユーノ、頼む！」

「ユーノクン…テツダッテクレナイカナ？」

「ごめん！　鈴！」

途端にユーノのバインドで締め付けられた。畜生！　信じてたのに！？　ユーノは今度、玉ねぎとヤモリのフルコースを食わせてやる！

「それじゃあ行こ。鈴君♪」

ずるずるずる…

「アッーーーー！！」

「ごめん、鈴…弱い僕を許して」

温泉を楽しめ…ない！（後書き）

やっぱりシリアスはダメですね…（泣）

いつかちゃんとした設定とか載せる予定

※ちょっと設定

スラッシュ

魔力による刀身で斬撃。スパロボＯＧ、ゲルミルの「星薙ぎの太刀」参照

グランドクロス

悪魔城ドラキュラ月下、サブウェポン「十字架」のアレ

※シリアス続きの反動でできた一品　つまりラクガキ也（前書き）

タイトルどおり

製作時間は一時間程度

つまり駄文也

※シリアス続きの反動でできた一品　つまりラクガキ也

『秋月家の一日』

ピピッ！　ピピッ！　カチッ！

「ん～…」

秋月鈴、起床。

・・・・・・・・・・

「ふわぁ～、おはよう、鈴」

「おはよう、ユーノ。もうすぐ朝食ができるから、先生を起こしてきてくれ」

「うん、わかった」

・・・・・・

・・・・

・・

・

「ぎゃあぁぁぁ！！」

「!?　どうした、ユーノ!」

二階の蓮の部屋では…

「我が眠りを妨げるのは、貴様か…」

「痛い!　痛い!　助けて、鈴!」

「いかん、寝ぼけてる!　先生、起きて!」

・・・・・・・・・・

「いや～、すまんなユーノ」

「うぅ…関節の可動域が広がるところだった…」

「すまんな、ユーノ。先生は低確率で、ああやって寝ぼけるんだ。俺も何回か被害にあった」

「うぅぅぅ（泣）」

・・・・・・・・・・

「それじゃ、後を頼んだぞ」

「うん、まかせて。行ってらっしゃい」

「はげめよ～、鈴」

「行ってきます」

鈴、小学校へ登校

・・・・・・・・・・

「それじゃ、家事を済ませますか。蓮さんも手伝ってくださいよ？」

「わかってるって」

ユーノ家事中…

「ふう、とりあえずはこんなものですね」

「そうだな。さてと…」

「何です？　それ」

「録画したアニメのＤＶＤだ。そろそろ録り溜めしたのを消化しようかと思ってな。一緒に見るか？」

「いいんですか？　じゃあ遠慮なく」

ＤＶＤにペンで書かれたタイトル

『魔法少女まどか☆マギカ』

視聴中…

「うわあぁぁぁぁぁん（泣）　僕は違うんだぁぁぁ！！」

ユーノは逃げ出した！

「あ～…知らなかったとはいえ…悪いこととしたな」

・・・・・・・・・・

お昼時、小学校にて…

ピリリッ！

「うん？　メール…先生から？」

『傷心気味のユーノのために今日の夕食は豪勢にしてやってくれ』

「朝のアレか？　え～っと……送信っと。それにしても…」

「アリサちゃん…そのフォークを放すの。これはなのはが鈴君から貰ったおかずなの…」

「なのはこそ…あんた以前、あたしのを横取りしたわよね？　だったら今回は譲りなさい…」

「では、僭越ながら中立な立場の私が♪」

パクッ！

「「あぁーーーー！！」」

「平和だねぇ～」

・・・・・・・・・・

鈴＆三人娘、帰宅

「ただいま～って、うお！？」

「「「おじゃましま～すって、ぅわあ！？」」」

「ぼくはちがうぼくはちがうぼくはちがう…ブツブツ」

「先生、何があったんですか？」

「ある奴に自分を重ねてしまったんだ…」

「はぁ？」

「それより、お前たちは今日も泊まるのか？」

「はい、明日はお休みですしね。ちゃんと許可はもらいましたよ」

「そうか…じゃあ今日の夕飯は賑やかになるな」

「そうですね。それじゃ、俺は夕飯の準備をしてきます」

「あ、手伝います」

「私も手伝うの！」

「あたしも…」

「すずか一人で十分だって」

「「ずるい！」」

少年少女夕食準備中…

・・・・・・・・・・

居間にて…

「あ、ＤＶＤがある」

「そうね。タイトルは…まどか☆マギカ？」

「それ聞いたことあるの。確か…魔法少女モノだったはず」

「へえ～、あたし達と同じね。夕飯ができるまで見てみましょうか？」

「うん。鈴君、ＤＶＤプレイヤー借りるね！」

少女達視聴中…

・・・・・・・・・・

「お待ちど～、夕飯ができて…って、うわぁ！？」

「鈴君？　どうしｔ…きゃあああ！？」

「ぼくはちがうぼくはちがうぼくはちがう…ブツブツ」

「あたしはちがうあたしはちがうあたしはちがう…ブツブツ」

「わたしはちがうのわたしはちがうのわたしはちがうの…ブツブツ」

「……レイハさん、何があったんです？」

《…触れないであげてください》

「…グローリー？」

《黙秘権を行使》

「？」

夕食はお通夜の如く、静かなものだった…

・・・・・・・・・・

秋月家、客室にて…

「前々から思ってたんだが…」

「？　どうしたの？」

「ここって…ウチの客室だよな？」

「何言ってるのよ。当たり前じゃない」

「だったらさぁ～」

「どうしたんです、鈴君？」

「何で当たり前のように自分達の洋服が入ったタンスがあったり、人形が置いてあったり、自分用の枕があったりするんだ？」

「「「……」」」

「なぁ、何か言ってくれ。せめてこっち向いてくれよ」

秋月家、侵略されてます…

・・・・・・・・・・

夜中にて…

（…もういいよ。諦めたよ）

「すぅ…すぅ…」

（グローリー、どうしてこうなった？）

《アリサ様の望みです。どうかお情けを》

（がんばれ…俺…）

翌朝、アリサの抜け駆け同衾のせいでまた一悶着。

魔法を知って以来、秋月家は賑やかです…

・・・・・・・・・・

とあるマンションの一室にて…

「アルフ、調子はどう？」

「うん、もう大丈夫。これなら支障はないよ。心配かけたね」

「よかった。でも、これからはこんな無茶はしないで…」

「はいはい、わかってるよ。……ところでフェイト」

「うん？」

「その積み重なったダンボールは何だい？」

「これ？　ラムネ。近所のスーパーで安かったから」

「……フェイトェ」

鈴、意図せず餌付け完了？

・・・・・・・・・・

「本艦はこれより、進路を第９７管理外世界『地球』へと向かいます。目的は観測されたロストロギア反応と小規模の次元震の調査。…場合によってはクロノ、頼むわね」

「任せてください、艦長」

※シリアス続きの反動でできた一品　つまりラクガキ也（後書き）

あのアニメを見てできたネタ。

脚本家を知って、いろいろ納得してしまった。

…ちゃんと本編も書いてます。

黒幕会議？（前書き）

短いのを一つ

今回は（今回も）うまく書けませんでした

すいません

黒幕会議？

まだ日の高い昼時、とあるビルの屋上に二人の人影がある。
片方は日の光を浴びて輝く金の髪の少女、フェイト・テスタロッサ。
もう片方は野性味溢れる雰囲気をもつ女性、アルフ。
フェイトは魔法陣を展開させ、呪文を詠唱していた。その口から紡がれる言葉は途切れず、かなり長い詠唱を必要としていた。そして、最後の詠唱を紡ぐ。

「開け、誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ」

二人の姿は光に包まれる。光が静まる頃には二人の姿はなかった。

と、そこに再び一人の女性が現れる。
白の髪と黒の瞳。格好は黒のシャツにGパンという女性にしては少々ラフな格好。ご存知、鈴の師匠であり、保護者でもある『秋月蓮』である。

「今の少女がフェイトか…なるほど」

蓮は少しの間、物思いに耽る。だが、ソレもほんの少し。

「さて…それじゃ、案内してもらおうか」

と、蓮はおもむろに靴のつま先で地面を一度鳴らす。カツンッと乾いた音が響き渡った直後、一瞬にして蓮を中心として魔法陣が展開される。なのはやすずかのミッド式とは違う…かと言ってアリサのベルカ式とも違う。六角形に紋様を刻んだような陣だ。

それだけで彼女の使う魔法はミッドやベルカと違うものと推測される。

「追跡完了…行くか」

蓮はもう一度、地面を鳴らすと魔法陣が一際強く輝き、彼女を飲み込む。そして、光がはれた後にはフェイトの時と同様、彼女の姿はなかった。

・・・・・・・・・・

ビシッ!!

薄暗い大広間の中、妙齢の女性の平手がフェイトに打ちつけられる。

「あぅっ!!」

「あれだけ時間をかけて集めたのはたったの三つ…あなたは何をやってたの?」

「ごめん…なさい」

「謝る暇があるのなら、すぐに残りのジュエルシードを見つけてきなさい。母さんを失望させないで。必要ならこの城から何体かの人形を連れて行きなさい」

「はい…」

その言葉を最後にフェイトは静かに部屋を去る。沈黙の訪れる部屋の中、妙齢の女性…プレシアは静かに嘆息していた。

本来なら、この程度のことはあのフェイトでもこなせると思っていた。しかし、いざ成果を聞いてみればたったの三つだけ。しかも他にもジュエルシードを集めている輩がいるという。全員が魔導師でありながらその数は五人。

想定外だった。管理外世界でありながら魔導師が存在し数もいる。さらにその魔導師はジュエルシードを破壊したとフェイトの報告もあった。つまりは一人は高ランクがいるという事実。プレシアにとっては悪い方に状況が転がっている。

しかしプレシアには引き返すという選択肢は無い。それは自身の望みのために…。残り少ない時間を無駄にはできなかった。

「そう…もう引き返せないのよ」

「何が引き返せないって？」

「！　誰！？」

いきなり返ってきた返答にプレシアは驚愕した。今、この場には自分しかいない筈なのだから。

侵入者はどうやってこの座標をどうやって知ったのか…。

侵入者用のセキュリティが反応してないのは何故か…。

侵入者は何者なのか…。

様々な疑問が一瞬にしてプレシアの思考を埋め尽くすがそれらを後にし、声のした正面の通路を睨みつける。

薄暗い通路から現れたのは見た目二十台前半の女性であった。格好はとてもこの場に相応しいとは言えない格好で、光を透かすような白の髪。その女性…蓮はプレシアの正面、大広間の中央まで堂々と歩いて、足を止める。

プレシアはその蓮をみて一瞬怪訝な表情を浮かべたが、すぐに驚愕へと変える。ありえないと、信じられないといった思考が頭の中を駆け巡る。

まさか…まさか、まさかまさか…

だがプレシアにとって目の前の人物は見間違える筈がなかった。何故なら…

「久しぶりだな、プレシア嬢」

「カレン……師…匠…？」

「今は秋月蓮だ、プレシア」

一時期とはいえ、かつて教えを乞うた人物なのだから。

・・・・・・・・・・

「本当に久しぶりだな。最後に会ったのはお前がまだ十代だった時か…いやはや月日が経つのは早いな」

「な、何故師匠が此処に？　それにそのお姿…何故あの頃のままなんですか？」

今のプレシアをフェイトが見ると驚くであろう。いつもの尊大とした様子は無く、ただ一人の人間として本当に驚き戸惑う姿。珍しいなんてものじゃない。

「姿は…あ～、仕様だ」

「仕様って…いえ、『魔女』と呼ばれた師匠なら納得できそうです」

「『悪魔の女』か…」

プレシアの記憶ではこの師匠…蓮は魔導師として、格どころか次元の違う存在だった。そしてそれだけの実力がありながら、決して表舞台に立つ事は無く、裏の世界でも知る人ぞ知るという人だ。短い期間だったとはいえ、この人の師事がなければ大魔導師と呼ばれなかったかもしれない。それほどだった。

「それにしても…さっきのお前の娘なんだが…本当におまえが”腹を痛めて生んだ子”なのか？」

「！？」

「やっぱりな…」

「…な、何故ですか？」

「おまえとあの子の魔力の質に違和感を感じたからだ。それに私もあの子と似たような子を知ってるからな」

そう言ってプレシアを見据える蓮。その口には何時の間に取り出したのか例の煙草が銜えられていた。ただ火をつけてない処をみると、喫煙者のマナーとして気遣ってるようだ。しかしプレシアに刺さる鋭い視線は揺るぐことはなかった。

そんな蓮の前にプレシアは、逆らう事ができずにいた。

「さて、お互い積もる話もあるだろう。昔話、世間話、あれこれ話そうか」

「…はい」

・・・・・・・・・・

「そうか…そんなことが…」

「…だから私はもう引き返すわけにはいかないのです」

「好きにすればいいさ」

「えっ？」

「私は今回の件には深く関わっていない。だからお前の行動にあれこれ言わないさ。今回、此処に来たのもこの件におまえが関わっているか確かめたかったからだ」

その言葉にプレシアは内心、安堵の溜息を吐く。なぜならば蓮がこの件に関われば間違いなくプレシアにとっては不利どころか、高い確率で負け戦になるからだ。この自身の持ち得る戦力、全て廻しても勝てるのか？　それほどの実力者なのだ。

「だいぶ長居したな、そろそろ御暇するとしよう。」

「そうですか」

「それとな…」

「？」

「さっき言ったフェイトと似たような子は私の今の弟子だ。そいつはこの件に関わっている内の一人だ」

「お弟子さんがいたのですか！？」

プレシアにとっては驚愕の事実だ。蓮は弟子をとることなど無いに等しい人物だったからだ。短期間とはいえ、自分がこの人から師事を受けれたのも奇跡に近いと今でも思っている。

そんなプレシアの驚愕を気にせず、蓮は言葉を続ける。

「そいつも純粋に生まれた子ではない。でも私は師匠として、保護者として大切な奴の一人だ」

「…何が言いたいんですか？」

「不器用な愛情ばかり向けるなってことだ。生まれはどうあれ、親なんだろ？」

「……」

「じゃあ、また会おう。それと体は大事にしとけよ」

そう言葉を残し、蓮はカツンッと靴を鳴らし転送魔法を起動させ大広間から消える。再び、沈黙の訪れた大広間の椅子にプレシアは深く身を沈める。右手で顔を覆い、大きく息を吐く。

プレシアは内心ずっと我慢していたことがあった。それは自身の望みに蓮の手を借りれないかと口にすることだ。しかし、ここまでやってしまった自分がどの顔をさげてそのような事を口にできようか。自身は気付いていないが、それはプレシアに確かに存在した良心だった。

「それにしても…相変わらず…師匠に隠し事は通用しない」

右手をどけたプレシアの顔に浮かんでいたのは、いつもの険のある表情ではなく、珍しく小さく微笑んだ表情だった。

・・・・・・・・・・

「そしてプレシア。お前も大切な奴のひとりだ」

どこかのビルの屋上、呟かれたその言葉は蓮の煙草の煙と共に風に運ばれていった。

黒幕会議？（後書き）

プレシアさんの口調についての突っ込みは…勘弁してください

師弟だとこんな感じかな？って妄想ですから…

どうかご容赦のほどを

※設定というより人物紹介（前書き）

タイトルどおりで…

記述してない分は原作と大差ないと思っていただければ…

※設定というより人物紹介

『秋月　鈴』

主人公。生前は魔法の失敗により死亡。しかし、師匠である蓮の手により新たな肉体で蘇る。その際、記憶などの大半を失う。かつての自分を実感できなくなったので新たに『鈴』として生きるようになる。
三人娘をほっとけないがためにジュエルシードの探索を手伝う。

※ちなみに名前を「ちゃん」付けされると怒る。

※戦闘では近接が多いが実はオールラウンダー。大体はこなせる。強いように見えて実はそうでもない。あくまで扱う魔法が他と違い高性能過ぎるだけ。

『秋月　蓮』

鈴の魔法の師であり保護者。かつての個人情報は謎。しかし、最近の得た情報から地球出身ではないと判別された。鈴の母親とは親友であった。その親友の死後、鈴を引き取る。鈴を蘇生させ、名前をつけた人。魔法だけでなくデバイスを弄ったり、限定条件とはいえ、鈴を蘇生させたことからかなりの能力を有しているのがわかる。

※なのはに教えたディバインバスターを蓮が撃つと、「アレはスターライトブレイカーではない、余のディバインバスターだ」状態になる。パネェ。

※かなりのゲーマー。他にアニメを観たりと、オタク文化を普通に楽しんでいる。ガンプラも作れる。作者的にはチートな人。

『高町　なのは』

幼い頃に鈴と知り合って以来、鈴にべったりな子。自分の我侭を家族ではなく、鈴に吐き出したりしてるので、原作ほどは内にアレコレ溜め込んではいない。
自分と鈴の間に入ってくるアリサとすずかに不満を抱いていたが付き合う内に仲良くなる。しかし最近は
無意識の内に溜まり始めた二人に対する嫉妬により再び…。
好物はたい焼き。

※魔法はユーノや蓮から教わっている。よって原作より成長は早い？

※相棒のレイジングハートは周囲の影響で原作より人間臭いＡＩに育ってきている。余談だが鈴の嫁さんにしたい人（？）Ｎｏ１である。デバイスに抜かれる三人って…。

『アリサ・バニングス』

一番原作と変わらない子。幼い頃に不思議な体験をする。鈴と知り合って以降、無自覚で鈴の隣にいる事が多い。曰く、「傍に居て当

たり前のような感覚」らしい。鈴に密かに想いを寄せるも自身の性格のせいで素直になれなかったり。
扱う魔法はベルカ式。戦闘はバリバリの前衛型。

※最近はハルバードの扱い方をいろいろ研究中。今まではグローリー内の記録を参照にしていた。

※そのグローリーを扱うせいで、体が筋肉質になってきたのが悩み。

『グローリー』

アリサのデバイス。ハルバード型のアームドデバイス。ＡＩも備わってはいるがインテリジェントデバイス程、高性能ではない。（それでも蓮の手が加えられているので通常とは段違い）
斧頭、槍の穂先、ピックのついた一般的なハルバードの形状。魔力を流し込むことでそれぞれの武器の攻撃力を特化させる事が可能。
魔力の刃がそれぞれの形状を象る。その際、バルディッシュのようにギミックで形態を変えたりはしない。
現在のアリサは未熟な為、その性能を持て余している。
実は女性型ＡＩ。作者はちょっとお堅い女戦士をイメージしている。
主人と鈴の仲を密かに応援している。

『月村すずか』

吸血鬼である夜の一族の子。最初は他の三人と距離を置いていたが、三人に秘密を打ち明けて以来、その距離も無くなり、自分の生まれ

を嘆くことも無くなった。バリアジャケットのデザインはそれに対する気概の表れ。原作と違い、瞳の色は紅。密かに一族特有の魔眼も扱える。
扱う魔法はミッド式。戦闘は後方支援型。

※機械を弄くるだけあって、最近はデバイスのノウハウを蓮から教わっている。簡単なメンテもできる。

※秘密を打ち明けて以来、鈴に対する想いもあまり隠さなくなってきた。

『クロス』

すずかのデバイス。杖型のインテリジェントデバイス。後方支援に秀でたデバイス。
形状は先端部に十字架が取り付けられたレイジングハートよりも杖らしい形状。今のところは形態変化の様子は見られない。
ＡＩは男性型。作者はすずかに付き添う、洗礼された老執事をイメージ。すずかの手により、メンテされることを密かな楽しみとしている。爺と孫とか言ってはいけない。
だが同時に自身を手に取り、「パイルバンカーを…」とか呟いた主人に魔改造されるかもしれないという恐怖を抱いている。

『ユーノ・スクライア』

原作とあまり変わらない子。嫌いなものは玉ねぎとヤモリ。

『フェイト・テスタロッサ』

原作とあまり変わらない子。原作よりちょっとカリスマブレイク状態。

『プレシア・テスタロッサ』

かつて大魔導師とよばれた女傑。望みのためにジュエルシードを収集。娘であるはずのフェイトに冷たくあたってるようだが…？

短い期間だが過去に蓮とは師弟関係にあった。

※設定というより人物紹介（後書き）

後々、項目が増えるかも…

魔法？　いいえ、ＳＦです！（前書き）

今回ほど、ご都合主義万歳と思ったことはなかった

腹芸や心理描写など書ける訳もなく…

ごめんなさい

魔法？　いいえ、ＳＦです！

『鈴』

夕日に照らされる公園とはかくも儚く感じてしまうのは何でだろうかねぇ。

あ～っと、いきなり変なことを言って申し訳ない。毎度の如く、鈴です。

あの温泉の日から幾日も経ち、その間もいつものようにジュエルシードの探索を行っておりました。けどこれまたいつものように見つからず、心が折れそうだと呟いてた矢先、ジュエルシードの反応があった。現場はさっき言ったこの公園。俺たち五人は現場に駆けつけたと同時にフェイト達とも遭遇。ジュエルシードの発動体を撃退して、現在はジュエルシードを挟んで、フェイト達と睨めっこの途中ってわけでして。

「数日振りだね、フェイトちゃん」

「高町…なのは」

「なのはでいいよ」

「…そう」

「それでね…今からこのジュエルシードを賭けて戦うんだろうけど、その前に教えて。ジュエルシードを集める理由」

「……」

「今回はダンマリはだめだよ？　以前は私たちが勝ったんだから約束どおりに話して」

なのはの言葉に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるフェイト。
まぁ仕方ない。前回はそういう取り決めだったしね。
俺は引き分けだったと考えているけど、なのは達や向こうはそう思ってはいないだろうからな。

「私はある人のために集めてる。そしてその人は言った。障害は取り除けとも。その人のためなら私は…何でもする」

そう言葉を締め、構えるフェイトに狼形態のアルフ。そしてその周囲に武器を持った鎧が三体現れる。驚きはしたがそれに応じて、みんなもデバイスを構える。そんな中、俺はフェイトに少し違和感を感じていた。
なんというか…切羽詰ってるとか、追い詰められてるような印象を受ける。この数日の間に何かあったんだろうか？　とにかく前回と違い、今回は向こうも数を揃えている。気を引き締めないとな。

そして戦闘に突入する俺たち。だが今回は思いもよらぬ結果となった。

・・・・・・・・・・

それは戦闘が開始して、すぐだった。

アリサがフェイトと接近戦を繰り広げようと、加速してフェイトに突っ込む。俺はそれに合わせて援護と威嚇のつもりで【射撃】を放つ。
すると何ということでしょう。互いがぶつかり合うと思った瞬間、二人の間にいきなり一人の少年が現れたのだ。

【射　撃】　の　射　線　上　に！！

「ストップ！　時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！　これ以上の「しょうねーーーん！　避けてー！　超避けてーー！」…えっ？」

どぉぉぉぉぉんっ！！

…うん。フェイトへの威嚇のつもりで撃った【射撃】が突如現れた謎の少年に直撃してしまったのだ。
だ、だって仕方ないじゃないか！　まさかいきなり現れるなんて！
そう、これは事故！　決して悪意や作為があったわけじゃないんだからね！　飛び出し注意！！

少年は当たり所が悪かったのか気絶してしまい、俺はパニックに、みんなは呆然としている中、いち早く我にかえったフェイトたちはジュエルシードを掻っ攫ってそのまま逃走。後に残ったのは「衛生兵を呼べー！」とか叫びまくってる俺（錯乱中）と気絶した少年、あたふたしてる三人娘に必死に「落ち着いて！」と走り回るユーノの姿とすんごいカオスな空間あった。

結局その場はいきなり空間に出現したモニター？に映った、これまた謎の女性に宥められることで落ち着きを取り戻した。

ね？　思いがけない結果だったでしょ？

・・・・・・・・・・

それから俺たちは復活した少年に連れられ、巡航艦『アースラ』という艦に乗ることになった。これから俺たちはこの艦の艦長と話をすることになっている。それまでにいろいろと事情を聞いた。

この少年は時空管理局執務官であること。今回は次元震の調査で赴いたこと。その際、危険な戦闘行為を行う俺たちを止めようとして、撃ち落された（この時、すんごい睨まれた）

…何だよ。謝ったじゃないか。むしろ飛び出してきたそっちが悪いじゃないか。

時空管理局という組織については俺たちは以前、ユーノから話を聞いていた。簡単に纏めると、いくつもの次元世界を管理する警察と裁判所だとか。

…それって組織としてどうなんだ？ってのが俺の感想だ。ぶっちゃけ素直に信用すれば痛い目をみそうだと感じた。なにより、先生は時空管理局についてあまりいい顔をしなかったのも覚えている。

三人娘はこの珍しい光景に上京したての人みたいに、あちこちに視線を飛ばしている。特にすずかの興味津々ぶりは凄い。それよりも…

「ほぇ～、すごいね～」

「ほんと、Ｂ級映画のワンシーンで使われそうな所ね」

「そうですね…鈴君？　どうかしました？」

「……ファンタジーじゃなくてＳＦだったでござるの巻」

杖と称した精密機械の塊のデバイスに続いて今度は艦ですか。もうこれ魔法の名を借りた科学だよ。次からタイトルを『科学少女リリカルなのは』に変えようぜ（メタ話）

俺？俺はまだマシだよ。デバイスも使わないし、戦闘用の魔法だけでなく、生活に役立つ魔法も使えるんだから。

とかなんとか遣り取りしている間に艦長室に到着。そして室内を見た俺たちは唖然とした。

盆栽、ししおどし、畳、とか日本文化詰め込みすぎって言いたくなる部屋。そして中央に正座しているさっきのモニターの二、三十代の女性。成程、艦長だったのか…とりあえず、

「日本人に謝ってください」

「はい？」

これだけは言っておきたかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「『アースラ』へようこそ。艦長のリンディ・ハラオウンです」

「僕も改めて自己紹介しよう。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

同じだ。親子か？

「高町なのはです」

「アリサ・バニングスです」

「月村すずかです」

「ユーノ・スクライアです」

「……秋月鈴」

紹介も終わって事情聴取という名の会話が始まった。

お互いがそれぞれの情報を提示する。

「以上が事の経緯の全てです」

「成程…一人でやろうとするその気概、立派だわ。だけど…」

「無謀だ」

ユーノの説明の説明が終わった途端にこの言葉。先生の時と同じだな。それを思い出しているのか、ユーノも複雑な表情をしている。そんなユーノを置いといて、俺はジュエルシード…ロストロギアの話に思考を移した。

次元干渉型のエネルギー結晶体…それがジュエルシードの正体。他の世界にも影響を与える次元震、果ては崩壊させる次元断層を引き起こす可能性を秘めた代物。

…最悪だな。そんな危険なものをだったとは…。これは認識を改めざるをえない。こんな事なら先生にしっかりと調査してもらうんだった。しかも俺たちは二つ、壊してるんだよな。それが切欠で大災害を引き起こしたかもしれないとか…運が良すぎだ。

「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君たちは今回の事は忘れて、戻って元通りの生活に戻るべきだ」

「待ちなさいよ！　それじゃ納得できないわ！」

「君たち、民間人の出る幕じゃないんだ」

喰ってかかるアリサをクロノは切って捨てる。なのはもすずかも同じなようで表情は暗い。

「まぁ、急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう。一度家に帰って、みんなで話し合うといいわ。その上で、改めてお話ししましょう」

リンディさんはそう言って締めくくるが、その言葉に俺は違和感を抱いた。だから思わず、口に出してしまった。

「何かおかしくないですか？」

「鈴君？」

「鈴？」

「おかしい…とは？」

「民間人がでる幕じゃないんだったら話し合う必要はないじゃないですか。問答無用で強制退去が普通ですよね？」

「…そうね」

「……もしかして……俺たちを誘導しようとしてました？」

「…っ！？」

「なんて事を言うんだ君は！？」

クロノが険しい顔でこちらを睨むがそれどころじゃない。リンディ

さんは艦長という役職に就いてるんだ。腹芸がができても不思議じゃない。

「ぶっちゃけ、俺たちは厚意で探索を手伝った。イコールお人好し。現に今もなのは達はあなたの決定に納得してないしな。そんなお人好しは今回の件を見過ごせない」

「……」

「そんな使える人材である俺達にあなたは立場からか協力してくれとは言えない。ならこちらから協力させようとした…とか？」

そうすれば身柄は向こうのものになり、あれこれ命令もできるようになるしな。

気がつけば、室内は異様な静寂に包まれていた。なのはもアリサもすずかもユーノも真剣な表情を向こうに向ける。リンディさんは真っ直ぐにこちらを見つめている。俺はそれを真っ向から受け止める。下手したらさらになのは達を危険な目に遭わせられるのだ。

やがてリンディさんは小さく溜め息を吐いた。

「…ふぅ、その通りです」

「艦長！？」

「正直、このロストロギアをまともに封印できるのは、私かクロノしかいません。他にも集めている輩が居る以上、コトは迅速に行わなければなりません。戦力は一人でも多いほうがいいですからね」

「やけにあっさりと白状しましたね」

「下手に隠して、信用を失うよりはという結論よ」

「その言葉…イエスだね」

どうやら、この人自身はある程度信用しても大丈夫な人らしい。腹芸は得意じゃないからどの辺まで信用していいかわからないけど。

「では、協力でどうでしょう？」

「協力？」

「はい、こちらが与えるのは戦力と確保したジュエルシード。そちらはジュエルシードの位置特定と下手な詮索や命令はしないということです。そちらにとっても、悪い話ではないと思いますが？」

「……何だか最後の一文に凄くイラッときたぞ」

おおう、オーメルの仲介術のウザさは次元を越えても健在のようだ。まぁとにかく、向こうは戦力とロストロギアの両方が手に入る上に、損することは全くと言っていいほど無い。取引の天秤は釣り合っていないが、元々報酬とかを期待してやってたことではないので、こちらも損得は気にならない。要はジュエルシードを何とかしたいだけだ。

「で、どうでしょう？」

「…いいわ。それで手を打ちましょう」

交渉成立っと。

「勝手に話を進めてしまったけど、みんなもそれでいいか？」

「うん、いいよ」

「別にかまわないわよ」

「はい」

「僕もそれでいいよ」

「というわけなんで今後、よろしくおねがいします」

当面はこれでいいけど、後は…フェイトの問題だよなぁ。フェイトの言った『ある人』ってのがねぇ。誰だか知らないけど、よほど大切な人らしい。

向こうからこちらは障害認定されちゃったし……どうしよう？

ブリッジにて…

「すごいよクロノ君。さっきの戦闘で検出したんだけど、なのはちゃんとすずかちゃん、それとあの黒衣の女の子に至ってはＡＡＡラ

ンク。アリサちゃんはAランク程度だけど、最大出力値はSに届きそうな勢いよ！　それにこのユーノ君も中々に優秀だよ！」

「管理外世界で、これほどの魔導師が居るとはね…」

「それと気になったんだけど…」

「何かあったのか、エイミィ？」

「この鈴って子の数値なんだけど…Eなの」

「は？　それはおかしい。この映像だけで見れば彼の魔法はＡＡ以上のものだ。とてもEランクの扱えるものじゃない」

「で、でも彼の魔法は私達でも見たことの無いものなんだよ。ということは…」

「彼の魔法は…僕達のものより遥かに優れている未知の魔法…」

「それについて彼に聞いてみたりした？」

「したよ。そうしたら…」

「だってさ」

「…それって嘘なんじゃ？」

『あれは日本に古代より伝わりし一子相伝の秘術…陰陽術です』

「ああ、嘘だろうね。でももう下手な詮索はできない。全く…腹立たしいよ」

「…どこで覚えたんだろう?」

「さあね…」

「あ、あとね、彼とアリサちゃんの魔力の波長や質がほとんど一緒なのよ」

「……不可解だらけだ」

「本当に何者なんだろうね?」

魔法？　いいえ、ＳＦです！（後書き）

いろいろ矛盾が発生しそうだ…

偶には昔を想い返して？（前書き）

ついつい魔がさして始まったこの作品

実は十話程度で終わらす予定だった

何方かくどい文章をソフトに纏める方法を教えてください（泣）

偶には昔を想い返して？

『なのは』

私たちがアースラにお邪魔になって暫くが経ちました。そこで過ごす日々はいつもと同じくジュエルシードを封印する日々です。今までのように闇雲に探すのではなく、アースラの探査もあるので体力の消費が少なくて済みます。今日だって、大きな鳥を退治してジュエルシードを無事に確保できました。

学校や家のみんなにはこちらの事情を知っている蓮さんのフォローもあり、うまく誤魔化すことができたけど、ちょっと後ろめたいかな。

現在、私たちのジュエルシードは五つ。そしてフェイトちゃんの方は、すずかちゃんの家と公園で奪われたので最低二つ以上はある。そして壊したのが二つ。だから残りは最高でも十二個。まだまだ道のりは長そうです。

そんな私たちは今、休憩時間をアースラの食堂で過ごしています。いつものメンバーに加えて今日はクロノ君とリンディさんも交えてなので賑やかです。

「ハグ…ハグ…ん～、おいしいの！」

「ほんとね。餡子は甘さ控えめってのがいいわ」

「お店で出せますよ、鈴君」

「今更だけど鈴の家事能力って凄いね」

「本当にこれは君が作ったのかい？」

「最近の子供って凄いのね」

「御好評で何より。作った身としてはうれしいぞ…って、こら！お茶に砂糖を入れるな！　日本人としてそれは見過ごせん！」

食べているのは私の大好物、たい焼き。鈴君のお手製です。なぜか食堂にあった金型を鈴君が拝借して作り、みんなに振舞ってます。鈴君はあとでこの艦のクルーにも振舞うつもりみたい。

「なのはさん凄いわねぇ～。もうそれで三つ目でしょ？」

「なのはちゃんはたい焼きだけは別腹みたいですから」

「たい焼き大好物だもんね」

「昔、なのはにあげた時からだよな？」

「うん。今でも覚えてるよ」

「それ以来、ウチにちょくちょく遊びに来るようになって…」

「懐かしいね」

「…あら、おもしろそうね♪　良かったら聞かせて、あなた達の出

会い」

リンディさんが思いっきり身を乗り出して尋ねてくる。ちょっと怖い。

「ええと、鈴君と初めて会った時なんだけど…」

そして私は、嘗て日々が変わったと感じた日、鈴君との出会いの日を語る。

・・・・・・・・・・

当時の私は一人だった。家族が居なかったワケではない。お母さんも居たし、優しいお兄ちゃんにお姉ちゃんもいた。だけど、お父さんが居なかった。亡くなったとかそんな不謹慎なことじゃなく、大怪我を負って病院に入院していて家に居なかったのだ。

ウチは喫茶店も経営していているので、お母さんはお店を経営しながらお父さんの看護もこなし、必死に両立させていた。そんな両親を支えるのが、お兄ちゃんとお姉ちゃんの二人。

結果、三人ともが家を空けることが多くなり、必然と私は一人になる事が多かった。

幼すぎた私は誰の手伝いもできなくて、せめて『イイコ』で居て手

のかからない子になることが唯一のできることだった。

だけど理解はできても心が納得できなかった私はある日、一人で外に出たのだ。お母さんからは危ないからと外出はダメと言われていたけど、家の静かな空間は孤独感を否応無く突きつけ、耐えられなくなったのだ。この時の私は『ワルイコ』だった。

そして歩いて、歩いて、歩いた先は公園だった。何故此処に辿り着いたのかはわからない。ただ人の居る場所だったら何処でもよかったのだ。この孤独感を紛らわせれるのなら。

しかし、それは無駄だった。確かに公園には人は居たが、親子の散歩だったり、見知らぬ子が友達と遊んでいたりと、私を気にかけるような人はいなかった。むしろ親子連れの人たちを見せつけられて羨ましく感じて、余計に孤独を感じた。

もう歩くのも億劫になってベンチに座り、ただただ公園の風景を眺める。

周りに人は居る。だけど、私は一人。

私は世界に一人だけ隔離されたような気分になる。そう考えると、とても悲しくなり、涙が零れそうになる。

これは『ワルイコ』になった私への罰だ。ごめんなさい、お母さん。言いつけを守れなくて。明日からまた『イイコ』に戻るから…だかr

「こんにちは」

不意に声をかけられる。俯いた顔を上げると、左腕に小さな紙袋を抱えた男の子が立っていた。最初は自分が話しかけられたと思わなかったから、自分を指差すと男の子は頷いた。

「ちょっといいかな？」

「えぇと…」

どう答えようかと思ったけど、結局はうんと頷いた。その返答を聞いた男の子は私の隣に座る。ちょっと動きがどこか、ぎこちなかったけど怪我でもしてるのかな？

「突然なんだけど…君、お腹空いてない？」

「えっ？」

「いやね…あそこの屋台でたい焼きを買ったんだけど、買いすぎちゃってさ。もし良かったら、一緒に食べてくれないかな？　捨てるわけにもいかないし、返すのも気がひけちゃうし、持って帰っても冷めちゃうしね」

そう言って男の子は紙袋をこちらに見せてくる。焼きたてなのか、いい匂いが袋の口から漂ってきて、その匂いを嗅いだらお腹が小さく鳴った。
その音が聞こえたのだろう、男の子はクスクス笑ってて、私はすごく恥ずかしくなった。今の私は顔がすごく真っ赤になってると思う。うぅぅ…正直な自分のお腹が恨めしいの。

「気にしなくていいよ。遠慮なく食べて」

「…いただきます」

もう聞かれたんだしと、どこか開き直りながら男の子からたい焼きを貰い口に運ぶ。私が食べたのを見て男の子もたい焼きを齧る。

「…おいしい」

「ほんとだ。あの屋台のおっちゃん、いい仕事してるなぁ」

それからは夢中になってたい焼きを食べた。男の子はまだ一つ目のたい焼きを見ながらブツブツと呟いている。「焼き加減が…」とか「そもそも生地が…」とか聞こえたような気がしたけど、私は一心不乱にたい焼きを堪能していた。

この時の私は忘れていたけど、間違いなく『一人』ではなかった。

・・・・・・・・・・

「じゃあ、なのはってあの家の子？」

「うん、そうだけど…鈴君は知ってるの？」

「だってウチはその近所だし…」

「え、そうなの！？」

「うん、そう。…で、そんな子が何で一人でここに？」

「…それは」

話そうかどうか迷ったのは一瞬だけだった。なぜか鈴君には素直に話してもいいという感情が私の中には生まれていた。多分、鈴君の雰囲気に安心しきっていたからだと思う。

「なるほど、そんな事情がね…」

「うん…で、でも大丈夫だよ。普段はちゃんとお留守番できるから！」

「ふむ……なのは」

「はい？」

「今からウチにおいで。夕飯にご招待しよう」

「…はい？　はい？」

「よし、決定。拒否は認められません。大丈夫、家は近いんだから問題は無い」

「…え～と…そうなのか…な～？」

「そうなのだー…というわけで帰りましょう」

強引に決定しちゃいました。私と鈴君は公園を後にします。それにしても鈴君の動き…

「どこか怪我でもしてるの？」

「うん？　あ～…まだこの体と完全に結合してないだけ」

「？」

何だかよくわからない答えを返されたの。

・・・・・・・・・・

「ただいま戻りましたー」

「お、お邪魔します…」

鈴君の好意に甘え、私は夕食をご馳走になることにしました。一応、

電話でお母さんに連絡をして了承も貰いました。その際、お母さんの声が喜んでいるようにも聞こえた。
そしてリビングの扉をくぐると、

まるで御伽噺のような人と出会いました。

まず目を引いたのは光を透かすような白い髪。お年寄りの白髪のようなものではなく、もっと自然に近い水晶のように綺麗な髪。次にその瞳。髪が水晶ならこっちは黒水晶。お互いの白黒のコントラストが余計にこの人の神秘性を高める。顔も整っていて、スタイルも抜群。同性をも魅了するような雰囲気の女性です。かく言う私も見惚れていました。
鈴君が事前に言っていた親代わりの人なんだろう。そんな女性は…

「良し！　最速レコード更新。さすが私だ！」

マリオカート（ＳＦＣ版）に熱中していて色々台無しでした。

・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

「ほう、高町さんのところの子か…」

「は、はい！　初めまして、高町なのはといいます！」

「うん。初めまして。私は鈴の保護者の秋月蓮だ。あとそんなに緊張しなくていいぞ」

「い、いえ、そんな…」

「ふふ、正直な子だな」

蓮さんの小さな微笑みはやっぱり見惚れるような魅力を感じます。とてもさっきまでコントローラー片手にガッツポーズを決めていた人とは思えないです。

「先生、なのは、夕食はパスタでいい？」

「ああ、かまわないぞ」

「…あれ？　鈴君が作るんですか？」

「そうだ。鈴の作る料理はなかなかだぞ」

もしかして、蓮さんは家事のできない人なのかな？

「できるぞ（鈴曰く”雑”だが）」

「心を読まれた！」

「顔に書いてたぞ」

「あうぅ…」

・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

「おいしい…」

「お気に召したようでなにより」

今日は何かとおいしいものに縁がある日みたい。しかも作ったのは同い年の男の子。凄いなぁと素直に思う。
それに比べて今のなのはは…

「また暗い顔してる…」

「ふぇ？」

ふぅ…と鈴君は小さく溜め息を吐き、食事を中断して蓮さんに視線を移す。蓮さんはそれに対して「好きにしろ」と言ってたけど…。

「今日…寂しさは紛れた？」

「えっ？　う、うん…」

これは本当だ。鈴君と出会って、まだ一日も経っていないけど少なくとも一緒に居るときは寂しいと感じたときは無かった。

「だったら、明日も遊ぼう」

「えっ？」

「明日だけじゃない。明後日も、明々後日も、その次の週もだ」

「えっ？　えぇっ？」

「ぶっちゃけ俺は家族としての寂しさを紛らわす事はできない。だから…”友達”としてなのはの寂しさを紛らわす」

まぁ自己満足だよなと呟く鈴君だったけど私は鈴君が友達と言ってくれたことが衝撃的だった。

友達…この単語に私はとても新鮮だった。物心ついた時、一人だった私には程遠い言葉だった。だけど、いざ受け入れてみるとすごく心地よくて、安心する。

「ふぇ…」

「ふぇ？」

「ふぇぇ～ぇん（泣）」

「ちょっ！？　何で泣く！　何処に泣く要素があった！？」

「な～かした～♪　な～かした～♪」

「シャラップッ！！」

初めて知った。人って嬉しくても涙を流せるんだって。

・・・・・・・・・・

「それ以来、鈴君の家に毎日のようにお邪魔するようになっちゃったんです」

「まぁまぁまぁ♪　若いっていいわねぇ」

「うわぁ～…俺ってそんなクサイ台詞吐いてたのか…」

でも私はその鈴君のおかげで寂しさを感じることなく、昔の日々を楽しめた。それについては鈴君や蓮さんにはいくら感謝しても足りないぐらいだ。

もちろん、今も私と鈴君は友達だ。でも最近の私はその友達だけじゃ満足できなくなってきている。

それは私がアリサちゃんとすずかちゃんと友達になった時から生まれてきた感情だ。今まで、私に向けていた鈴君の優しさが他の二人に向けられるのが嫌だった。二人に向ける笑顔を独占したかった。

鈴君を私のものにしたかった。

この黒い感情は今までもあったけど、最近になってだんだんと大き

くなってきている。
そして、大樹のジュエルシードを封印したあの日…アリサちゃんが眠ってる鈴君にキスをした日の夜、

アリサちゃんに憎悪の感情を抱いてしまった。

すぐに思い直した。しかし一度、自覚してしまうと後から、後から、黒い感情は際限なく湧き出てくる。その度に、私はそんなことは無いとまるで暗示をかけるように否定する。そして鈴君に構ってもらうことで、誤魔化している。必死に目を背けている。

「私…まだ『ワルイコ』なのかなぁ…」

なのはの心の天秤はどう傾くのか…それはなのは自身もわからない…。

※エースになぁれ＾＾

「エース？」

「そう！　なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが、もし管理局に入れば間違いなくそう呼ばれるだけの実力があるのよ！」

「実際、彼女達ほどの魔力量を保持する存在は稀有だからね。正直、スカウトしたいぐらいなんだよって言うかするね」

「実力派美少女三人が組んで、事件を華々しく解決！　う～ん、画になるねぇ」

「ふ～ん…」

リンディさんから分けてもらった緑茶を啜りながら、その画を想像してみる。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・

三人がバリアジャケットを纏い、各々のデバイスをビシッ！っと構えてカメラの前で一言。

「「「これがエースの実力である＾＾」」」

＼キャーナノハサーン！／　＼キャーアリササーン！／　＼キャースズカサーン！／

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

「ブウゥゥゥッ！！」

「あっつぅぅ！！」

飲んでる緑茶噴出してしまった。クロノにこうかはばつぐんだ！

偶には昔を想い返して？（後書き）

昔のなのはは私じゃなく、名前で呼んでたような…

まぁ、回想ってことで…

後、最後のエースネタは魔がさしただけの産物

ごめんなさい

知り合いと友達の境目って何処？（前書き）

最近、また遅筆になってきて申し訳ないです。

…えっ？　元から遅筆？

知り合いと友達の境目って何処？

『鈴』

自室で魔法の鍛錬を行っていた俺は艦内に響いたアラートに突き動かされ、ブリッジに走る。俺が到着とほぼ同時にみんなもなだれこんで来た。

「なんじゃこりゃぁ…」

思わず漏れてしまった言葉通りの光景がモニターに映し出されている。

場所は海鳴市の海上。だけどそこで起きてる現象は天変地異のようだ。数えるのが面倒なほどの竜巻が発生、鳴り止まぬ雷鳴のおかげで海面は激しくうなり、休まることが無い。

そんな見るからに危険地帯の中、映し出されたのはフェイトとアルフの姿。

「…もしかして？」

「君の想像通りだろうな。彼女は海底に沈んでる残りのジュエルシードを強制発動させたんだ」

「何やってんのよ、アイツ！？」

「検知されたジュエルシードっていくつ？」

「九つだ」

それだけのジュエルシードを強制発動させるってどんだけの魔力を使ったんだよ…。

九つも封印できるのか？もしかしてその後の事を考えてなかったのか？

「面倒なことになったな……何とかするか。ユーノ、転送を頼む」

「了解」

「待て！　何処に行くつもりだ？」

「？　現場ですけど何か？」

「必要ない。あの少女は敵だ。あの様子だと勝手に自滅する。それに封印したとしても、消耗してるだろうからそこを捕らえればいい」

なるほど…組織としては最善の選択肢かもしれないな。けど…

「ユーノ？」

「うん、準備完了だよ」

「よし。みんな、行くか」

「「「うん！」」」

俺は組織の人間じゃない。俺は…

「待て！　聞こえなかったのか、その必要は無い！」

「命令はしない。そういう契約内容」

「っ！　艦長！？」

「…いいわ。行きなさい、そういう契約だったものね」

「母さん！？」

「ありがとうございます、リンディさん。俺って、顔見知りの人間を見捨てると寝覚めが悪いんだ」

「フフッ、だと思ったわ」

微笑んでるリンディさんの理解と寛容の良さに内心、感謝する。俺達がこの組織に身柄を預けていたら、こうは行かなかっただろう。艦長の権限を使って、相手を見捨てることを選択させるだろう。

「んじゃ…ユーノ、よろしく」

「転移開始！」

転移が完了した俺達は海上の遥か上空に転移した。

途端、重力に引かれ自由落下を始める。他の面々は慣れたもので、

すぐにデバイスを起動。バリアジャケットを纏う。そのどちらも無い、手持ち無沙汰な俺はとりあえず…

「アイ！　キャン！　フラァァァイ！！」

言ってみたかった台詞を言ってみる。

…周りのみんなの視線が生暖かかった。

・・・・・・・・・・

『フェイト』

今回の封印はさすがに無謀すぎたと自分でも思っている。だけど、母さんの期待に応えたいという想いとあの子達より先にという想いが『焦り』を生み、『慎重』という選択肢を除外させた。

九個のジュエルシードの強制発動。それは明らかに自分の限界近くの魔力を以って成し得た。だがそこから起こった現象は想像以上の

規模のものだった。竜巻は荒れ狂う龍となって無秩序に発生。その龍が纏うように雷を奔らせる。
そんな中を避けながら封印を施すのはもはや至難を通り越し、不可能の域までになっていた。
だけど、ここまでやってしまったからにはあの子達も必ずこの魔力を感知して来るだろう。だから、こちらが先にいただくしかない。
ほとんど魔力は残ってないけれど、やるしかなかった。

「無理だよ、フェイト！　一旦戻ろう！」

「それは…できな…い！？」

アルフの言葉に気をとられた一瞬。その一瞬で私の生死は左右された。
一条の雷が私の体を貫く。雷に対してある程度の耐性がある私でもジュエルシードの魔力を以って生まれた雷には耐え切れなかった。

「フェイト！？　くっ！？」

動きが一気に緩慢になり、それを見計らったかのように幾条もの雷が再び私を射抜こうとする。迎撃しようにも魔力はほとんど残っていない。アルフは間に合いそうに無い。
迫り来る『死』への一手。その一瞬で湧き上がったのは諦め。スローモーションのように迫ってくる雷を見ながら思う。

（母さんは私が居なくなってら悲しんでくれるのかな？）

（期待に応えられなくてごめんなさい）

（アルフ、こんな主でごめんね）

そして、色々とひどい事をしてしまったあの子達に対して…

（謝れなくて、ごめんなさい）

その思いを最後に潔く『死』を受け入れようとした。

上空から降り注いだ幾条かの光の弾丸に助けられるまでは…。

・・・・・・・・・・

カットバックドロップターンなど、交響詩篇のごっこ遊びをやっている内に下降に見えてきた天変地異の如き危険地帯。そしてフェイトとアルフの姿。

雷がフェイトを討とうとしてたのを【射撃】で撃ち落とす。討たれ

ると思って身構えていたフェイトだったが、俺の魔法に気付きこちらを振り向く。

「大丈夫か、フェイト」

「あなたは…鈴？　どうして此処に？」

「知り合いを見捨てるのは忍びないからな。とりあえずこの状況を何とかするぞ！」

「どうするのよ！？」

「すずか！　ユーノ！　バインドでこの竜巻を可能な限り拘束しておいてくれ、できるか！？」

「やってみます！」

「まかせて！」

「俺となのはとアリサはジュエルシードを無理矢理黙らせるぞ！」

「わかったわ！」

「がんばるの！」

「ちょ、ちょっと待って！？」

「どうした？　危ないからアルフと一緒に下がってろ、フェイト」

「そうじゃなくて、何で私を助けたの？　私たちは敵同士だよ」

「ラムネを飲み交わした仲じゃないか。そんな知り合いを見捨てるのは心苦しかったんだよ。はい、自己満足だ。ジュエルシードの取り分とかは後でな」

俺は会話を打ち切り、この惨状をどうにかするべく行動を開始する。

「クロス、チェーンバインドを！」

《承知》

「チェーンバインド！」

早速、すずかとユーノはバインドでこの荒れ狂う竜巻を拘束し始める。ユーノの結界魔導師としての能力の高さは知っていたが、すずかの能力はそれ以上だった。潜在能力が高いためか、バインドの本数や強度はユーノ以上の物を展開している。

ユーノもそんな素養の高い三人娘に触発されたのか、魔法の鍛錬を行っているけど、如何せん才能の違いが出てきている。

…本当にエースになれる素養があるのかもしれないな。でもエース＾＾だけは勘弁な！

そして視線を移した先ではなのはとアリサが魔力のチャージを行っている。なのはのデバイスには円環状の陣が取り巻き、アリサのデバイスは刃が薄く輝いていたりと着々と準備できているのが伺える。

この様子なら、あっちは大丈夫だろう。

（さてと…）

「久しぶりに大技いきますか」

右拳を握りこんで真っ直ぐ海面に向ける。銃身を支える土台のように、左手で右腕を掴み支える。

術式を展開した途端に、構えた拳の先に小さな六角形の魔法陣が展開される。

俺の…先生の魔法には基本、詠唱もチャージも必要としない。起動する際のトリガーキーも本来なら口にする必要は無い。イメージや術式はあるものの、それらの構築はほぼ一瞬で済むのでタイムラグは有って無いようなものだ。だからそれぞれ違う術式を連発で放つ事も可能だ。そのくせ、魔力の燃費はミッド式やベルカ式と比べて、超優秀ときている。反則だね。

ただ、俺のこの体は以前の体とはちょっと違うので、例外も存在する。

これから放つのはそんな例外の中の一つ。超出力の砲撃魔法【波動砲】

威力も射程も申し分無し。破壊力は俺の所有する魔法の中でも、間違いなく上位に位置する。けど今の俺はこの魔法を放つのにチャージが必要となる。先生だったら、チャージもほとんど必要としないだろう。

…以前の俺だったら、問題なく撃てたんだけどなぁ。

「よし、チャージ完了。二人とも、そっちはどうだ！？」

「うん！　ＯＫだよ！」

「いつでもいいわよ！」

よし。…さーて、九つのジュエルシード、さすがにこれだけの魔力を叩きこんだら大人しくなるだろう。

合図は必要なかった。お互いが心通ってるかのように、俺達は同時に溜め込んだ魔力を叩きつける。

「ディバインバスタアァァ！！」

「スラァァッシュッ！！」

「ヲヤスミ、ケダモノ……【波動砲】！！」

なのはと俺の砲撃が、アリサの斬撃が海面に叩きつけられる。

ドッゴォォォォォンッ！！

爆音が響き、ほぼ同時に海面が盛り上がり爆ぜる。爆ぜた海面から打ち上げられた海水がまるで雨のように降り注ぎ、全員の体を濡らす。

やがて、海水の雨が収まるとそこには、あれだけ荒れ狂っていた気象は無く、穏やかに波打つ海面が見て取れた。そして俺達の（正確にはなのはとアリサの）魔法によって、無理矢理、封印処理の施されたジュエルシードが九つ。

これで次元断層が起こらなくてよかったと心底思う。

クラッ…

「あ、やば…」

突如、襲ってきた眩暈と眠気。それによって一瞬体が崩れ落ちてしまう。

俺のこの体が抱える欠点。それはこの人造体の維持に魔力を必要とすること。

俺の体は先生が昔造ったと言う『限りなく人間に近い人造体』の試作品。だが先生曰く、魔力を必要とする時点で『人間』には程遠い

仕上がりになってしまったらしい。試作品だから仕方ないね。
かと言って、一度魂の移し替えを行っている俺の魂を再び移し替えるのは大変危険なので、俺はこの体で生きるしかないのだ。

まあ、それは置いといて…試作品だからか魔力の内容量は少ないが、扱う魔法の燃費がいいため、普段は気にならない。けど今回やあの大樹の時みたいに魔力を消費し過ぎると俺の意思に関係なく、体が維持を優先し、魔力回復のために強制的に休もうとする。強制スリープモードとでも言うべきか。今、起きている不調の原因がこれだ。特に今回の【波動砲】には調子に乗って魔力を乗せ過ぎた気がする。次回から自重しよう。

（一応、魔力の内容量は鍛錬や体の成長と共に増えるらしいが、たかが知れてるというのが先生の談）

とにかく、どうしようか？
あまりみんなに心配をかけたくないし、かと言ってこのまま眠りに落ちて海中に沈んで、「貴様には水底が似合いだ」とかの水没少年にはなりたくないし…。
それにフェイトとも話をしなくちゃいけないし…。
とか考えていたら横から誰かに体を支えられた。閉じそうになる目蓋を我慢して、振り向くとアリサだった。

「アリサ？」

「…あたしが抱きかかえておくから、寝てていいわよ」

「…何で？」

「蓮さんが教えてくれたのよ、あんたのその欠点。大丈夫、知ってるのはあたしだけだから」

先生が？　何でアリサだけに…？

「偶にはあたし達の事ばかりじゃなくて、自分の体も省みなさいよ。」

「…アリサ」

「ほら、早く休みなさい。他のみんなにはあたしがうまく言っておくわ。フェイトとの事もあたし達が何とかしておくから」

「…ああ、ありがとう」

正直、もう限界だったのでアリサの好意に素直に甘えておく。そう決めた途端、一気に意識が落ちる。アリサから香る女の子特有の優しい匂いが妙に心地よかった。

「お休み、鈴…ああ、すずか？　うん、大丈夫よ。こいつ、夕べ夜更かしして寝不足だったみたい」

「……」

「お疲れさまです、なのはちゃん」

「……」

「なのはちゃん？」

「……」

「？　…アリサちゃんがどうかしました？」

「…ふぇ？　え、すずかちゃん？」

「どうしたんですか？　怖い顔して」

「怖い顔？　私、そんな顔してた？」

「うん。　こう…睨むような？　アリサちゃんとまたケンカでもしたの？」

「してない！　してないよ！」

「それならいいんですけど…それにしても」

「？」

「アリサちゃんと鈴君の仲の良さ…ちょっと妬けちゃうね」

「…違うの」

「？」

「鈴君と一番仲がいいのは……私なの……私のモノなの…」

「なのはちゃん？」

「……」

「さてと、向こうはとりあえず置いといて、ちょっと話をしようよ」

「……」

「そんなに警戒しないでよ。ジュエルシードをどうするか話し合いたいだけだから。それに、僕もみんなと一緒で君達とはできれば戦いたくない」

「…わかった」

「フェイト！？」

「アルフ、わかって。向こうは大人数。比べてこっちは魔力もほとんど残ってない。だったら戦うより、話したほうがまだいい」

「…わかったよ、フェイトがそう言うなら。」

「ありがとう、アルフ」

「理解してくれてありがとう、じゃあちょっと話そうか？」

知り合いと友達の境目って何処？（後書き）

展開が遅いなぁ…。

※ちょっと設定

鈴がバリアジャケットをしない理由はミッド式やベルカ式を扱うと、すぐにガス欠

になってしまうため。

RPGの決戦前日イベントみたいなそんなノリ？（前書き）

書いてる途中で、キャラの問答などで作者の頭が混乱した。

それらを無理矢理纏めたような感じになってしまったので、矛盾点などが出てくる

かも…って言うか出る。

間違いなく全話中、一番の修正候補の回。

後は…おや？　なのはの様子が…。　ＢＢＢＢＢＢＢＢ

『鈴』

「あ、起きた？」

うっすらと目蓋を開くと、最初に写ったのはこちらを覗き込んでるなのはの顔。

いきなりの場面に少し驚いたが、よくよく考えてみれば今までの人生でも結構な頻度であった事なので慣れたのか、すぐに冷静になれた。

周りを見渡せば此処は艦内の自分に宛がわれた部屋だ。そしてこの部屋に居るのは俺となのはだけ。あの強制スリープの後にアリサか誰かが運んでくれたのだろう。そして、なのはは付き添いってところか？

「…おはよう」

「ちょっと違う気もするけど、おはよう」

「他のみんなは？」

「リンディさん達と一緒にブリッジにいるよ」

「そうか…あの後、どうなったんだ？」

「それなんだけど…」

ちょっと言いづらそうにしたなのはだけど、すぐに事の顛末を話してくれた。
俺がオチた後、ジュエルシードの処遇についてどうしようかと言う時に、横槍が…何者かが放った強力な魔法が入って、場をかき乱す。その際、ジュエルシードをいくつか奪われ、フェイト達も混乱に生じて姿を消したのだと言う。そしてみんなは帰還し、現在はその横槍を入れた人物の特定を急いでいるのだと言う。
ジュエルシードは全てを奪われたわけではないとなのはは言っているけど、全然楽観視できない。確保したのは三つ。これでこちらのジュエルシードは計八つ。向こうも最低でも八つ以上。いや、最悪残りの全てを回収したのかもしれない。
そんな思考に耽っていたらいきなり、部屋の空間に例のモニターが出現した。そこに写るのはリンディさん。

『なのはさん、彼は…あら？　起きてたみたいね』

「あ、はい。ついさっき」

「どうも、見苦しいところをお見せしたみたいで…」

『フフッ、そんな事ないわよ。それより、事の顛末は聞いたかしら？』

「はい、なのはから」

『そう。なら起き抜けで悪いんだけど、ブリッジまで来てくれないかしら？』

「了解しました」

「はい、すぐ行きます」

『待ってるわ』

そう言い残し、モニターが消える。このシステムって何時見ても、便利だなぁって思う。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

ブリッジに入るとみんなが居た。すずかやユーノは「大丈夫？」と心配の声をかけてきたが、好調さをアピールする。クロノからは「体調管理ぐらいしっかりしろ。軟弱者」とありがたい言葉を貰った。よし、いつか殴る。そんな光景をリンディさん、エイミィさんは微笑ましく見守る。
いい雰囲気だけど、いつまでも浸るわけにはいかないので本題に入る。

「さてと、ここに呼んだということは何か進展があったんですか？」

「ええ、なのはさんから聞いたと思うけど、あの大規模な魔法を行使した人物を調べてたの。そしてやっと特定ができたわ」

「これを見てくれ」

クロノの言葉にエイミィが映し出した映像の人物。黒髪の女性。なんとなく陰気な雰囲気の漂う女性だった。

プレシア・テスタロッサ

ミッドチルダ出身。非常に優秀な魔導師でミッドの中央技術開発局の第3局長だったが、研究中の事故による失態で地方に異動させられる。その後、行方不明。

まだ完全には情報が集まっていないから、簡潔なモノのみだった。やっと掴んだ向こうの首謀者らしき人物。テスタロッサの名からして、推測されるのはフェイトの母親であること。フェイトがいつか言っていた『ある人』とは多分この人だろう。
でも首謀者は特定できても、目的がわからない。

再び、返り咲くためにジュエルシードを収集？　それはナンセンスだな。

地方に追いやった管理局に復讐するため？　こっちのほうがらしいな。

様々な可能性が出てくるがそのどれもが所詮、憶測でしかない。もうすでに向こうには最低でも八つ以上、奪われているのだ。何をしでかすかはわからないが黒幕も見えてきた以上、この事件の終局は近いと考えていいだろう。
この事件がどう転ぶかはわからない。けど、後味の悪くなるような

結末だけは嫌だな…などと、俺は甘すぎる願望を抱いてるのであった。

・・・・・・・・・・

さらに詳しいデータが集まり次第、本格的なミーティングを開始すると言うことになった。
ブリッジで各々が解散の後、場面は変わってここはアースラの艦内通路。そこを歩くのは俺となのは。

「……」

「……～♪」

「……」

「…～～♪」

「……なぁ、なのは」

「ん？　なぁに？」

「ずっと黙ってたんだけど…何で部屋からブリッジ、そして今も俺について来てるの？」

「ん～～そうしたいから♪」

「いや…俺、今からトイレに行くんだけど」

「じゃあ、外で待ってるの」

「…そうじゃなくて…あの…さすがに他所に行ってくれない？」

「……」

グイッ！？

「うおっ！」

いきなりなのはは俺の襟を掴んで引き寄せる。そして俺を見つめるその表情は、さっきまでの機嫌の良さそうな顔は消え失せ、変わりにあるのは何も映さない無表情。

今まで、なのはと一緒にいることが多かったけど…こんな顔したことあったっけ？

「鈴君は…なのはが邪魔？　嫌いなの？」

「えっ？　えっ？」

「…どうなの…かな？」

「い、いや、邪魔ではないぞ。うん、好きだぞ」

「なら問題ないよね♪」

途端に手を離し、さっきの機嫌良さげな表情を浮かべるなのは。
つい反射的に返事してしまったけど…何だアレ？初めて見るなのはの一面に驚いたぞ、こんちきしょう。
俺が寝ている間になのはがこうなるナニカがあったんだろうか？…やっかいな事にならないよな？

・・・・・・・・・・

『フェイト』

「フェイト」

「…はい」

母さんの魔法のおかげで、あの場を脱することができた。最初は母さんが助けてくれたとうれしく思ったけど、戻ってみれば何という

ことはない、「私の手を煩わせて！」と平手の折檻を受けた。だからこれは自分に対する罰なんだと潔く受け入れた。
その後、自室に戻り泥に沈むような眠りにつき、再び母さんに呼ばれてこの場に立っている。

「ここに呼んだのは他でもないわ。恐らく、管理局にこちらのことがばれたと思ってもいいわ」

「そんなっ！？」

「近いうちに、此処にも管理局の手が伸びるでしょうね。でも、母さんは屈するわけにはいかないのよ。私の悲願のために」

「……」

「もはやあちらのジュエルシードを奪うほどの時間がないわ。だからあなたは…乗り込んで来るであろうあの者達をここで迎え討ちなさい。できるわね？　フェイト」

自分でもわかる、ここは分岐点なのだと。引き返せるか、否か。
そんな考えが一瞬浮かんだけど、本当に一瞬だった。すぐに霧散する。なぜならずっと以前に誓ったからだ。
母さんの笑顔を見るためだったら何でもすると…。

「はい…母さん…」

・・・・・・・・・・

『アルフ』

折檻を受けたフェイトが自室に戻ったのを見計らい、アタシはあの女の処まで向かった。真意を問いただすために。なぜ、あんなことばかりを!?…と

しかし、いくら言葉をぶつけようともあの女は喋りもしなければ、こちらを振り向きもしなかった。その様子にブチ切れたアタシは殴りかかるも、障壁によって弾かれ、バインドで拘束され、そしてあの街に跳ばされた。

跳ばされた先は海が見える公園。あのガキ共と対峙した場所だった。暫くその場に立ち尽くしていたアタシだったけど、ここがあの街だと思い立つと以前から考えていた計画を開始した。

アタシはある願望を抱いていた。フェイトをあの女から助けたいと。しかし母親であるあの女に囚われ、依存しているフェイトをこのままでは助けることはできないと考えていた。

そんな中、現れたのはあのガキ共だ。あたし達の邪魔ばかりする憎たらしい連中だったけど、意外だったのはそれにフェイトが興味を示したことだ。母親が全てと言っても過言でなかったフェイトがい

つだったか言ったのだ。話してみたいと。そして、湧き上がった一つの希望。

そんなフェイトの心を動かしたあの連中ならフェイトを救いだせるんじゃないか？

あの女に逆らった今、開き直ったアタシはその希望に縋ることにした。

今まで敵対していた連中に対してムシが良すぎるという事はわかっている。けどフェイトを救うためなら形振り構ってはいられなかった。

覚えのある魔力を追って、辿り着いた先は一軒の家。架かる表札には『秋月』の字。それによって確信を得たアタシは意を決してフォンを鳴らした。

・・・・・・・・・・

今回の黒幕的存在、プレシア・テスタロッサの逮捕がリンディさん達の間で決定した。現在はその居所の特定に力を注いでいるため、ジュエルシードの収集は一旦中止。特定するまでの間、俺達は一時的な帰宅の許可がでたのでこうして久しぶりの我が家に帰ってきた。うれしいことはうれしいのだが、この一時帰宅の後を考えるとどうにも素直に喜べないのだ。と言うのも…

最初は敵本拠地の乗り込むのは俺達の仕事じゃないなと傍観してたけど、

「あなた達の仕事はジュエルシードの収集でしょ？」

というリンディさんの言葉に俺は苦い顔をした。

そう、ジュエルシードの収集。それはフェイトが奪った分の収集も含まれるのだ。

さすがに敵本拠地に乗り込んでまでは危険すぎるから、俺だけがやるつもりだったが他のみんなは「ここまできたら最後まで！」という事で俺だけがやるという案は却下された。

その逞しさに「やだ…惚れそう…」ってありえん思考が一瞬湧いたものだ。

というわけで、本拠地に乗り込むという作戦を控えた身としてはこの帰宅はもしかして最後の晩餐のような死亡フラグ？とか考えちゃ

うわけです。
それでもいざ帰り、先生から「おかえり」と言ってもらった時にはそんな考えも吹き飛んだ。ああ、やっぱり家が一番だな。
…同じく、それぞれの家に帰ったみんなも今頃こんな気持ちを抱いてるんだろうなぁ。
ちなみになのはがまたウチに泊まると言い出したときは、さすがに却下した。その際、相当駄々を捏ねたけど、家族を安心させてやれと言ったら渋々と頷いた。マジでなのはの心境に何があったんだ？

「鈴、僕のこと忘れてない？」

…そうだった忘れてた。ごめん、ユーノ。でも今のお前の家もここだから同じ気持ちを共有してくれ。

ピンポ～ン♪

「あ、来客かな？」

「俺が出てくる」

・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

さて…現在ウチの居間は何とも言えない空間と化してます。

その原因は目の前に座るアルフだ。出した紅茶と菓子にも手をつけず、ずっと俯いている。それを黙って見る、俺とユーノと先生。
いきなり来訪した途端、一言。

「助けてほしい」

最初は混乱の極みに至ったが、言い放ったアルフの表情は紛れも無く真剣で、でもどこか追い詰められていて。そんな顔をされると無碍にするわけにもいかず、こうして中に招いた。相手が相手でもお茶を出した俺は主夫だな。
とにかく、いつまでも黙っていられるとどうしようもないのでこちらからアプローチしてみる。

「あ～…助けてほしいってのはどういう事だ？」

「……フェイトのことさ」

それからアルフの口から堰をきったように次々と語られるこれまでに起きたこと。
母親のためにジュエルシードを集めるも報われることがない。そんなフェイトをアルフは助けたかったが、言葉も届かずどうしようもなかった。そして痛めつけられる自分の主人の様子に堪えきれず、プレシアに刃向かうも届かず、この街に跳ばされた。
そして本当は優しいあの子を助けてほしいという言葉で締め括られた。

その話を聞いて、俺は居た堪れない気持ちになる。隣を見るとユーノも苦い顔をしていた。ついでに覗き見た先生は手で顔を覆って、

溜め息を吐いていた。

ジュエルシードやプレシアも気になってはいたが、フェイトの事は俺の中でも一番懸念していた事だ。

お互い何回も衝突はしたけど、フェイトは決して悪い子ではないとほぼ確信していた。そしてアルフの話を聞くにその読みは当たっていた。

にも関わらず、母親のためにその優しさを殺し手を汚す。これだけでフェイトの中でプレシアがどれほど占めているのかが窺える。そんなフェイトを助けてほしいって言っても…生半可なモノじゃないぞ？

とりあえず、抱いていた疑問をぶつけてみる。

「何で俺達を頼ったんだ？」

「…あんた達がフェイトの心を動かしたからさ」

「えっ？」

「あの温泉の一件以来、フェイトが時々あんた達のことを楽しそうにアタシに話してたんだ。暫くして、あの女の叱咤を受けてからはナリを潜めたけど、あの時のフェイトは本当に楽しそうだった」

「……」

「そんなあんた達なら…フェイトを救えるかもしれない。そう思ったからここに来たんだ」

そう言い切った途端、アルフは勢いよく頭を下げた。

「ムシがいいのはわかってる！　でもアタシじゃどうしようもない以上、あんた達に頼むしかないんだ！お願いだよ…フェイトを…フェイトを助けてやってくれないか！？」

「いいぞ」

「何でもするか…えっ？」

「ユーノも異論はないだろ？」

「うん」

「…自分で頼んでおいて何だけど、そんなにあっさりと引き受けていいのかい？」

「フェイトは元々悪い奴だとは思っていなかったしな。それにどうにかしようと思ってたことだ。今回のはいい機会だ」

「それを聞いて見捨てられる程、僕も非情では無いつもりだよ。自分で言うのも何だけど…」

「「鬼にはなりきれないんだ」」

「……苦労するよ、アンタ達」

「「承知の上！」」

「……礼を言うよ」

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・
・

「さて…引き受けたはいいが、具体的にはどうすればいいんだ？」

「僕達も特に何かしたつもりも覚えもないからね。やった事って戦った事ぐらいだし」

（俺は八つ当たりとラムネの献上？　笑えねぇ…）

「アタシも何がフェイトの琴線に触れたのか、わからないからねぇ…」

「ここは少年漫画みたいに決闘とかどうかな？」

「誰がやるんだよ、それ…」

「……プレシアをどうにかしろ」

「「「えっ？」」」

それぞれが案を出す中、意外にも先生からアプローチが来た。

「プレシアはフェイトを嫌っているわけではない。愛情が素直に出ないだけだ。だからアイツの親としての愛情を素直に出させればいい。だから…」

「ふざけた事を言うんじゃないよっ！！」

先生の言葉を遮ったアルフの激昂。萎縮するような怒声だがそれを受けた先生は尚も涼しげな表情だ。

「あの女がフェイトに親として愛情を抱いてるだって？　だったら何であんな仕打ちができるっていうんだい！？」

「認めたくなかったからだ」

「どういうことですか？　先生」

先生は慣れた手付きであのお手製煙草を取り出し、火をつけ、紫煙を吐き出す。

「本来なら私の口から話すのはタブーなのだが…これから話すのはこの一連の真相と言っても過言ではない。もちろん虚偽なども混ぜない。それらをわかった上で聞け」

そして先生から語られるのは驚くべきことばかりだった。

・・・・・・・

・・・・・

・・・

・

「…フェイトが…あの女の本当の娘のクローン？」

途中までの話を聞いたアルフはさっきまでの激昂も消え失せ、どこか呆然としていた。気持ちはわかる。俺もユーノもまだ頭の中では理解が追いついてないから。

だがそれでもまだ全ては語られていないのだ。

「そうだ。死んだ自分の娘、アリシアの記憶を移植されたクローンの人造生命体がフェイトだ」

…俺と同類になるのか？これって。

まぁ俺の場合はベースのあるクローンじゃなくて、完全に一から造られた生命体だけどな。おまけに移植されたのは記憶ではなく魂。

「だがそれはアリシアの記憶を持った似た姿の別人となる。それだったらプレシアもフェイトを完全に嫌悪することができた。しかし時折アリシアと全く同じ仕草、発言をするフェイトにプレシアは完全には嫌悪できなかった。最初は自分の試みが成功したのではないかと希望を抱いていたそうだ。だが時折重なるというだけで決してアリシアが生き返ったわけではない。そう結論付けたプレシアは今度こそアリシアを生き返らせるべく次の計画を試みる。それがアルハザードの…失われた秘術の眠る地への到達。ジュエルシードはその地へ赴くための手段のために必要と認識した物だ」

ひとしきり話し終えた頃には先生の煙草も短くなっていた。それを灰皿に押し付け、先生は続きを語る。

「だがその頃にはプレシアはフェイトに愛情を抱いてしまった。そ

れは自分でも予想外のことだったらしい。そして恐れてしまった。このまま愛情を抱いてフェイトに傾向してしまい、アリシア復活の成就の妨げになってしまうことを」

「それからフェイトには非情に接することで嫌われることを望んでいたが、これまた予想外のことでフェイトはそれでもなおプレシアを母と慕う。それがまた、プレシアの決意を揺らがせる。そしてさらに嫌ってほしく非情に徹す。もう負の連鎖さ」

愛ゆえに嫌ってほしい親とその親に慕ってほしい子か…。成程、先生の言ったとおり素直にさせればケリはつきそうだな。

アルフはまだ認められないのか、弱弱しくも反論する。

「けど、アンタの言ってるのは憶測だ…」

「憶測ではなく、本人から聞いた本音なのだがな…」

「「「えっ？」」」

本人からの本音ですと？ってことは…

「先生、プレシアと面識があるんですか？」

「…私の元弟子だ」

「「「なにいいいいいいいいいいいっ！？」」」

超驚愕の新事実に俺達一同大絶叫。

「…うるさい」

「「「あばばばばばばばばっ！」」」

気分を害したようで、電撃魔法を撃ち込まれました。

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

・

先生の電撃でひとしきり落ち着いた俺達は改めて居住まいを正す。

リビングにちょっぴり焦げたような香ばしい香りが漂うのはご愛嬌だ。

そんな中、アルフはさっきまでの激昂は何処へやら…それでも弱々しくも反論する。

「…アンタの話を聞いて思うところもあるけど…あの女がやった仕打ちに対する事実は決して消えない」

「ああ。だからプレシアがフェイトに対して素直に愛情を示せるようにすれば、フェイトは救われ、フェイトに対する贖罪にもなるんじゃないか？」

「……」

先生の言葉に沈黙するアルフ。どうやら肯定と判断したらしい。

そして先生は俺のほうに振り向き、見据える。その表情は普段の日

常で見せるソレではなく、師匠としての顔だった。

「鈴、師として命ずる。おまえの思うとおりに動け」

「……」

「どのような結末を迎えることになろうとも、お前の為したいように為せ」

「…承りました」

先生の弟子として俺も応える。

やるべき事はたくさんある。交錯する想いも様々。そんな中でも、俺は為すべきことを為すのみ。

その夜ベランダにて…

「……いつまで見ているつもりだ？　管理局の者」

『！？』

「いつまでも覗き見は趣味が悪いぞ」

『…気付いていたのですか』

「鈴が帰宅した時からな…先に言っておくがここは管理外の世界だからな。私は任意同行も事情聴取も受け付けない。かと言って、敵対するつもりもさらさら無いから安心しろ」

『…失礼をいたしました。時空管理局提督にしてアースラ艦長のリンディ・ハラオウンです』

「鈴の保護者で師の秋月蓮だ」

『…あなたついては色々と聞きたいことがあります。しかし、こちらの法が届かない以上は教えてはもらえないでしょうね』

「さっきも言ったが受け付けないぞ」

『なら今回は諦めましょう』

（今回は…か。それでも自分で調べるだろうな。無駄だろうけど。）

「それと…プレシアの処遇はどうするつもりなんだ？」

『それは…お教えできません』

「昼間の盗み聞きした私の話の対価として教えてほしい」

『！？　あなた…わざと筒抜けにしてこちらに聞かせましたね！？』

「さぁてね？　それで…どうなんだ？」

『……時空管理局法違反の疑いとロストロギア不法所持ですから…重い処遇となるでしょう』

「……」

『しかし、あなたの話の通りになればプレシアはまだ良識があると判断される可能性も出てきます。そうなれば私も弁護の余地が出てきてマシなものになるでしょう』

「意外だな。提督様自らが弁護とは…」

『あなたの話が本当ならば、彼女もまた一人の被害者。なればこそと思ったからです』

「……どうやらあなた個人は信用できそうだな」

『褒め言葉と受け取っておきます』

「褒めてるんだ…さて、私はそろそろ休む。さすがに寝室までにサーチャーは止めてくれよ？」

『そこまでしません！　では、これで』

「ふぅ…全てはアイツらの頑張り次第…か」

RPGの決戦前日イベントみたいなそんなノリ？（後書き）

腹芸や心情とかどうしたらうまく書けるんだろう？

上手に書ける人は本当に尊敬します。

秋月少尉（？）突貫します！（前書き）

書いては消して、書いては消してを繰り返し、気がつけば時間が経っていた。

これが…スランプ…なのか？　とにかくごめんなさい。

そして出来上がったものは…ちょっと意味不明？　さらにごめんなさい。

後、なのはのキャラ崩壊注意です。

『鈴』

俺達の帰宅許可が出てから二日程経った。その間に、以前俺達の間で話した先生やプレシアの事をなのはとアリサとすずかにも話しておいた。その話を聞いた一同は大層驚いていた。そして話し合った結果、俺達の方針は『プレシアをどうにかする』の形で決まった。

まぁ、お人好しの俺達だとその形に落ち着くわな。

後、盗み聞きしていた管理局の…リンディさんとも話し合った。

盗み聞きしていたんだから、こちらの

要望も検討しておいてくれと。そうしたら、

『はぁ～。あなたも彼女と一緒なのね…』

とか言われた。聞いてみると、先生とも似たような遣り取りを行ったらしい。って言うかあのサーチャーに俺が気付いて先生が気付かない道理は無いもんな。

そんなわけで逮捕は避けられないだろうけど、プレシアの可能な限りの弁護を頼みますと要望しておいた。ついでにプレシアの本音とかはあなたの胸の内にしまっておいてくれとも。フェイトについては悪いようにしないでとアルフ共々進言しておいた。

そんな遣り取りを終わらせた後の過ごした日常は短いながらも、色々と波乱万丈を過ごした俺達にとってはまさしく大切な物だと改めて実感した。さっさとジュエルシードを集め、全てを終わらせてこの平凡だけど大切な日常を再び謳歌したいものだと思った。

そんな日常を過ごしていると、とうとうリンディさんから連絡が入った。明日、作戦を開始すると。

・・・・・・・・・・

朝、いつもより早い時間に目覚めた俺はいつも過ごす日常のように手っ取り早く、朝のやるべき事を終わらせる。そして作戦決行日である今日、着替えるのは学校に行くための制服ではなく、戦いを終わらせるための服。先生が好んで着る上下白黒の服。机からフィンガーレスグローブを取り出し、嵌める。

鏡の前に立ち、気持ちを整える。それらの準備を終わらせて、自室から居間に。そこにはすでに準備を終わらせたユーノがいた。ユーノはいつも俺が貸す私服ではなく、初めて出会った時のあの服だ。その顔も凛々しいものだ。

「何かいつもより気合入ってるな」

「うん。僕のせいで始まった一件だからね。気を引き締めないと」

「…それは言わない約束だろう」

「あいたっ！」

阿呆な事を言うユーノに軽くデコピンをくらわせる。額を押さえ痛そうにしているが顔は笑ってるのでちょっとは力も抜けたのだろう。苦笑してしまう。

そして、共に頷く。

「「じゃあ、行きますか！」」

・・・・・・・・・・

『なのは』

自分の部屋で手早く着替え、レイジングハートを首にかける。昨日、リンディさんから連絡があったとおり、今日が作戦の決行日。準備を終わらせて外の門で鈴君たちを待つ。

少ししたらいつもの道路から鈴君とユーノ君がやってきた。挨拶もぱっと終わらせて鈴君の隣に立ち、さも当然のように手を繋ぐ。

鈴君は繋がれた手をいつもの事と思って、やれやれといった感じで苦笑しながらも受け入れている。

まるで手のかかる妹に接する兄のように…。

今、考えてみると鈴君はいつもこうだった。なまじ昔からの付き合いがあるせいか、私を妹のように扱う傾向がある。以前は盲目的に甘えられたけど、今の私はこれで満たされない。もっと私を意識してほしかった。

これがアリサちゃんやすずかちゃんだったら、鈴君は違う反応を示す。あの二人には鈴君は対等の友人のように接してる。それが今の私にはすごく不愉快だ。まるで私は除け者のようだ。

「なのは…痛い…もうちょっと手を緩めて」

暗い気持ちに入ってしまったせいか、いつの間にか握力を強めてしまったみたい。だけど緩める気は無い。むしろ放す気はないぞとばかりに力を込める。

暫くそうしてると、鈴君も諦めたようでそのままで行くようになった。

うん。それでいいよ。鈴君を放す気は無いんだから。

私のモノなんだから……。

・・・・・・・・・・・・・

『アリサ』

短い帰郷だったけどこの上なく充実した日常を謳歌したあたしは、鈴達との合流地である公園まで車で送ってもらう。その車の中であたしはこれからのことではなく、以前あった蓮さんとの遣り取りを思う浮かべていた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

『鈴のフォロー…ですか？』

『そうだ。あいつの体質はちょっと特殊でな。魔力の過度な消費は最悪、命に関わるんだ』

『！？』

『だから今回の戦い…もし仮にあいつがその最悪に直面した場合は、

おまえが助けてやってくれ。これは鈴と同じ魔力をもつおまえにしかできないんだ。何、魔力を供給するだけの簡単なお仕事だ』

『…あたしが鈴の魔力を持っているからですね？』

『そう。おまえの幼少の時の出来事。その時に取り込んだんだろうな』

『それにしてもすごい偶然ですよね。あの時の出来事が今になって判明するんですから。鈴の魔法の失敗でしたっけ？　鈴はそんな昔から魔法使いだったんですね』

『まあな』

『でも、魔力の供給ってどうやるんですか？　あたしはまだ教わっていませんが…』

『ああ…それはだな…』

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

そこまで思い浮かべてあたしはハッ！となる。次いであの時の蓮さんの教えてくれた『方法』を振り払う。頬に手を当ててみると体温が上がってるのがわかる。きっとあたしの顔も赤くなってることだろう。

《アリサ様？　いかがなされました？》

『え？　あっ！　な、何でもないわよ、うん！』

《しかし、心拍数、体温の上昇を感知致しました。僅かに発汗もしてるようですが…》

『何でもない！』

突然のグローリーからの念話に戸惑いながら、何とか凌ぐ。

いけないいけない。これからあたしは戦場に赴くんだ。ジュエルシードやテスタロッサ親子の事もあるんだから、気持ちを切り替えないとね。

ちなみにそんな挙動不審なアリサを運転手の鮫島は生暖かい目で見守ってたそうな。

・・・・・・・・・・

『すずか』

どうも、月村すずかです。今、私は集合場所であるいつもの公園でみんなを待っています。ちょっと来るのが早すぎたみたいですね。

手近のベンチに腰掛けてこれから起こるであろう戦いに向け、僅かに揺らいでいる心を落ち着かせます。

リンディさんから作戦決行の旨を伝えられた時から覚悟していたとはいえ、行うのは最悪、命の遣り取り。いくら闇を知る夜の一族の私でも、自身がそれを経験するとなると怖くなってきます。

鈴君から伝えられた『テスタロッサ親子をどうにかする』という決定。話し合いで解決できたらそれに越した事はないんですが…ダメでしょうね。以前のなのはちゃんではないですけど、話し合いでどうにかなるほど、甘くはありません。力に頼ることになりますね。

だからこそ、固めた”覚悟”なんですけど…。

そうこう考えているうちに、心もいつの間にか落ち着いてました。そしてこちらにやって来る、待ち人であるみんなの姿も見えてきました。

腰掛けていたベンチから立ち上がり、手を振ります。それに応えるのは鈴君。

まるでいつもの日常のようですが、今から赴くのは戦い。それぞれの想いや思惑が交差する場所。どのような結末になるのかわかりません。しかし、私たちは全力で事に当たるのみです。

余談ですが、鈴君と手を繋ぐなのはちゃんの姿ちょっぴり妬いて、心が揺らぎそうでした。

・・・・・・・・・・

『鈴』

みんなと合流して、リンディさんと連絡をとり、一同アースラへ。
管理局が身柄を引き受けているアルフと対面、合流した後に、リンディさんやクロノとも対面。挨拶もそこそこに早速作戦内容の確認。
最初に先発隊の武装局員が乗り込んで可能ならプレシアの逮捕。
そして後発で俺達といった具合だ。
…先発隊でどうにかなったらそれに越した事はないんだけど、無理だろうな。

そしてリンディさんの激励の言葉を最後に作戦会議は終了し、いよいよ作戦決行である。

・・・・・・・・・・

はい、予想通り、先発隊はやられました。それも本拠地の『時の庭園』の建物内部に入ることなく。抵抗はあると予想していましたが、その規模は想定外だった。

武装局員が庭園の入り口に転送された途端、そこから魔力反応を感知。同時に地面から様々な姿形をした鎧甲冑が出てきて、武装局員をなぎ払ったのだ。

数体程度ならどうにかなったのだろうけどそれがパッと見、3桁の数ならもはや数の暴力。しかもまだ増えているようだ。おまけにその鎧甲冑（傀儡兵というらしい）の力は1体でもAランク相当だってさ。

対して、武装局員はBランク程度。隊長格でAランク。ということはこの結果は当然の帰結だったのかもね。その後、武装局員は転送で撤退させられる。

つーわけで、リンディさんから俺達に出動要請がかかりました。

「いやはや、やっぱり俺達も出向くしかないのね」

「…君達にはすまないと思っている。本当は僕達で解決しなければならないことなのに」

「気にすんなって。元々、俺達も出向くつもりだったし」

「そうそう、あんまり気にしすぎると若いうちからハゲるわよ」

「クロノさん、ストレスは溜め込んではダメですよ」

「胃に穴が開くよ？」

「…なんだろう。気を使われるのに妙にありがたみを感じない」

軽い遣り取りの後、エイミィさんから転送準備が終わったと伝えられた。その一言でみんなの表情はこれから戦場に赴く魔導師のソレになった。かつてはただの一般人だったみんなもこんな表情ができるようになったことには頼もしさと同時に、悲しさを感じる。

なぜならそれは”非日常”を知ったという証だから。

・・・・・・・・・・

先発隊と同様、入り口跳ばされた俺達はさっきの傀儡兵とご対面。そのまますぐさま交戦状態に移行。先発隊と違って、こちらの面子は俺、なのは、アリサ、すずか、ユーノ、アルフ、クロノの7人。どいつもこいつもランクなら上位の面子ばかり。傀儡兵を問題なく、駆逐していく。

そしてあらかた殲滅して建物内部に乗り込んだのだが、問題が発生した。

「内部の構造が…変わってる」

この庭園の事情を知るアルフに先導を任せる手筈になっていたのだが、この台詞の通り構造が変わっているらしく、先導は無理と判

断された。

「ごめん。さすがにアタシもこんな仕掛けがあったのは知らなかったよ…っていうのは言い訳だね…」

「気にしないでよ、アルフ。僕達はこんな事では動じないから」

「ユーノ…」

「クロノ、サーチャーや探索魔法はどうだ？」

「…ダメだ。何か仕掛けがあるのか、悉く妨害されている。念話や通信の類もだ」

「という事は？」

「しらみつぶしに探すしかないってことさ。とりあえず、ここから二手に分かれて進もう。やることは二つ。プレシアの逮捕とこの庭園の駆動炉の停止だ。こんな大掛かりな妨害だ。恐らく、エネルギーは駆動炉から供給されているはず。駆動炉を停めれば仕掛けも停止して念話等の機能も使えるようになるはずだ」

「了解っと。で、どう分ける？」

「それなら考えてる。僕となのはとすずかとアルフ。そして君とアリサ、ユーノのチームだ」

「前衛、後衛、はっきりしてるな。なら「ダメッ！？」…なのは？」

「ダメ！　それはダメ！　鈴君はなのはとっ！？」

「ちょ、おい！　落ち着け、なのは！？」

焦った。本当に焦った。急になのはがこんな癇癪を起こすとは思わなかった。おかげでこっちも少々混乱してしまった。

俺はどうにかなのはを宥めすかし、落ち着かせ、どうしたのかと聞いてみる。すると返ってきた答えは私と一緒にいろとの事だ。

…最近のなのははどうも不安定だ。本当に何があったんだ？　この場面でこんな我侭を言う子ではなかったと思ったんだけど。この年頃の子ってこんなに難しいのか？

その後、クロノがいろいろと叱咤してきたけど、何とか頼み倒して編成の変更を承認してもらった。そしてなのはにもちょっとばかし、妥協してもらった。結果、

なのは、アリサ、すずか、クロノのチーム。

俺、ユーノ、アルフのチームとなった。

終始、なのはは不満げにしていた…が、この重要な場面では何時までも構ってはいられなかった。なのはには悪いけど、時間も押しているので我慢してもらおう。

「じゃあ、どちらかが駆動炉を停めたら念話で連絡を入れてくれ」

「了解だ。ヘマすんなよ」

「君達もな」

互いに激励を交わし、俺達は再び庭園内に突入する。

・・・・・・・・・・

『なのは』

「ディバィィンバスタァァー！」

私たちの前に現れる傀儡兵を文字通りなぎ払う。クロノ君からは魔力を温存しろと言われたけど、正直知った事じゃない。私は今、非常に不機嫌なのだ。正直に言うと、このままフェイトちゃんと戦う事になってしまったら、私は自分を抑えられないかもしれない。だから傀儡兵で少しでもこのイライラを発散しておきたかった。

「ハァァッ！！」

私の前方ではアリサちゃんがグローリーを振るい、傀儡兵を一体、また一体と確実に両断していく。その動きは最早、最初の頃の素人のそれではなく、クロノ君お墨付きの『騎士』だった。鈴君もそんなアリサちゃんをすごいなと褒め称えていたのを覚えている。

そして、そんなアリサちゃんに嫉妬したのも鮮烈に覚えている。

うん、もう『イイコ』はやめよう。私、高町なのはは今、アリサちゃんがすごく嫌いだ。

当たり前のように私の定位置である鈴君の隣に居座るアリサちゃんが嫌いだ。

当たり前のように鈴君と笑いあうアリサちゃんが嫌いだ。

そして鈴君が全面的に信頼を寄せているアリサちゃんが嫌いだ。

もういっその事、アリサちゃんなんて『　　』しまえばいい……。

「なのはちゃん…」

傀儡兵もあらかた片付き、クロノ君とアリサちゃんが残りを討伐している時、自身の醜い思考に埋もれていた私を呼び戻したのはすずかちゃんだった。

黒いバリアジャケットのせいか、すずかちゃん一族の特性か全体的に黒の雰囲気を纏うすずかちゃん。そして、その中でも爛々と輝く紅い瞳はこちらの全てを見透かしてるかのようだった。

「……そんなに嫌いですか？　鈴君に程近い、アリサちゃんが」

否、見透かされていた。でも大して驚きもしなかった。自分の闇を認めてしまったからか妙に肝が据わったような気がした。

「…ちょっとひどい事をいうね、なのはちゃん。鈴君はみんなを大切に想ってるの。そしてそんな鈴君は誰のモノでもない。アリサちゃんのモノでも、私のモノでも…なのはちゃんのモノでも」

「ッ！？」

次の瞬間、私はすずかちゃんにデバイスを向けていた。すずかちゃんは全く動じることなく、こっちを真剣に見据えている。

今の言葉には聞きたくない事があった。鈴君がなのはのモノではないという事と…すずかちゃんのモノではない？

「…すずかちゃんは…鈴君の事…」

「好きです」

何の迷いも躊躇いも無く、ハッキリと告げた。私の聞きたくない言葉を告げた。

「私、月村すずかは秋月鈴が好きです」

・・・・・・・・・・

『鈴』

「【衝撃】！　【射撃】！」

「チェーンバインド！」

「ガアァァ！」

三者三様の攻撃で数多の傀儡兵を蹴散らしていく。クロノ達と別れてからかなり奥に進んだ。魔力を温存するため可能な限り戦闘を避けているが如何せん数が多い。どうしても戦闘の頻度が上がってしまう。

「いい加減、何かしらの変化が欲しいよね」

「本当にね、同じ部屋ばかり通り抜けた気がするよ」

「結構、上まで来たような感じはするけどな…」

どうも俺達のルートは上の方に行ってるみたいで、階段やエレベーターを使うことが多かった。その途中の部屋は尽くハズレ。いい加減、ダレてくる。

とか言っていたら、扉を抜けた先に現れたのは長い長い廊下。そしてその先には一際大きな扉。

「如何にもって感じだな」

「うん」

「ならさっさと行くよ！」

アルフに急かされて一直線に走り出…そうとしたが俺は突然、妙な魔力を感じた。アルフとユーノは感じないのか気にせず先を走っている。

「ちょっと待て！　何か…」

二人を止めようと声をかけるが遅かった。前方を走っていた二人の足元に突然、魔法陣が出現したのだ。驚いている二人を他所に魔法陣の輝きは強くなり、一際強く輝くと二人の姿は消えていた。

「…畜生…やられた」

罠だ。転移系の。設置して対象を捕捉。そのままどこかに跳ばすという典型的な物だ。しかも…

「ガーディアンのおまけ付きですか…」

扉の前には一体の傀儡兵が現れていた。まず目を引くのはその巨大さ。今までの傀儡兵も確かに大きかったが、この傀儡兵は正に巨人と呼ぶに相応しい。手にしている得物も破壊力ありそうな大鎚。更にその背中には二門の砲身。言葉で表すなら、ハンマーを持った青いジム・キャノン？だ。

次いで、これが重要なんだが…感じる威圧感と魔力が半端ない。

今までの傀儡兵とは明らかにランクが違う。額から冷や汗が出てるのを自覚できる。

一瞬、頭の中に逃げるの選択肢が出たがすぐに除外。これだけ傀儡兵が動いているという事は、プレシアに俺達の存在がばれたも同然。ならば向こうが何らかのアクションを起こすまでに到達しなければならない。

ユーノとアルフの安否も気になるが、あいつらも素人ではないから自分で何とかするだろう。

そして目の前のこいつが門番である以上、ここで選ぶ選択肢は…

「当然、撃破だな」

腰を落とし、構える。向こうも俺の気概を感じたのか臨戦態勢に入っていた。上等…ならば、

「レッツ、パァァリィィィッ！！」

最強の大統領や奥州筆頭の真似して自身を鼓舞してみる。

・・・・・・・・・・

『クロノ』

もうどのくらい進んだのだろうか。僕達は傀儡兵の妨害を退けながらも突き進んでいた。だけど決して順調ではない。数の多すぎる傀儡兵を捌くのに、魔力を消耗してしまう。他のみんなも魔力量は高いとはいえ、無限じゃない。現に今も息を切らせている。更には、

「なのは…大丈夫なのかしら…」

「……酷な事を言うけど、今は一刻を争う。戦えない魔導師を連れて行ってもかえって危険だ」

彼女、高町なのはが離脱してしまった事が痛手だ。

先程の広間で僕とアリサは傀儡兵をあらかた片付けた後、さっきまでいたはずの高町なのはの姿が見えなかった。事情を知っているであろう月村すずかに聞いてみると、一人にしてあげてほしいと言ってきたのだ。

普通なら執務官としての立場上、すぐに呼び戻す所なのだが、僕はそうしなかった。

高町なのははここ最近、どこか不安定な状態だった。出会った当初はこの事件に対してまだ積極的な動きを見せていたが、あの海上で封印の一件以来、変化があった。

以前の積極性は消え、彼…鈴の事を気にかけすぎていた。それはこの事件をそっちのけにしてしまう程に…。

僕としては雑念を捨てて事件に集中してほしい所だったが、お互いの契約上の立場、それを抜きにして彼女の持ちうる実力を考慮して、何も言わずにいたのだ。

つまり僕は彼女のここ最近の不安定さを見越した上で、この作戦に戦力として数えていなかったのだ。

冷たいと思うなかれ。この作戦は決して失敗できない。不確定要素を戦力と見据える程の余裕はないのだ。

だから最初、彼女は一先ず置いて先を急ごうと言ったら、アリサ・バニングスにひどく責められた。

だが、この作戦の重要性と一刻を争うという事を諭すと彼女は渋々と頷いてくれた。月村すずかはその事については何も言わなかった。

そして進むうちに、今までよりも大きな扉の前にでた。今までの物と違うことから気を引き締め、扉を開く。その先は少々薄暗く、一際広いホールだった。そしてその広いホールの中央。

フェイト・テスタロッサの姿があった。

彼女はこちらが来るとわかっていたのだろう。そして最初から迎え撃つつもりだったのか、バリアジャケットを纏い、その手にはすでにデバイスがあった。その様子だと聞くと思えないが、一応問いかけてみる。

「管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。フェイト・テスタロッサ、重要参考人としてご同行願えますか？」

「…私は命じられた事をただ実行するだけ。同行は…できない」

結果は失敗。彼女は手に持ったデバイスを構え、こちらを見据える。そして更には彼女の両隣に二体の大型傀儡兵が現れた。

「待ちなさいよ！　私達はアンタとその母親を助けに来たのよ！少しは話を聞いたっていいんじゃない！？」

「私達はアルフさんに頼まれたんです。あなたを助けてほしいと。だから…」

「必要ない」

アリサやすずかの言葉は無碍に切り捨てられる。

「…言っておくね。私はテスタロッサじゃない。ただのフェイト。私は…あの人の生み出した人形だから…人形はただあの人の命令に従うだけ」

「…あんた…まさか自分の…？」

「…それでもどうにかしたいなら…力づくで来て。私達はいつもそうだったでしょ？」

「でも…」

「無駄だ二人とも。彼女の言う通り、力づくでどうにかするしかない」

僕もキッパリと告げる。あそこまで言うんだ。これ以上の言葉が

通じるとは思えない。それに彼女は何処か意固地になっているような印象を受ける。だからちょっと、頭を冷やしてもらう。

こちらの二人も躊躇したのはほんの少し。すぐに思い直して、デバイスを構える。

それらを見届けた上で改めて向こうの戦力を確認する。ＡＡＡランクが一人。両隣の大型傀儡兵は不明だが、今までの奴とは違うというのはわかる。それに比べてこちらは消耗した魔導師二人。騎士一人。しかも二人は成長しているとはいえ、経験は浅め。正直、分は悪い。

それでもやるしかない。そのために僕達はここまで来たんだ。

「それじゃあ…行くよ！」

「「了解！」」

秋月少尉（？）突貫します！（後書き）

なのはのキャラがアレな事になっていますが、決してなのはが嫌いなワケではありません。どちらかというと、好きの部類。

自分はハッピーエンド至上主義者なのです。

後、すずかの出番をもっと増やさないと…。先生も…。

情ケ無用！　戦闘開始！（前書き）

時間がかかりすぎてすみません。

途中から本当に書けなくなって難儀しました。構成はできているのに…。

後、先に言っておきます。

すずかが強くて何が悪い！　……すみません。

情ケ無用！　戦闘開始！

『プレシア』

薄暗い部屋の中、目の前の生体ポッドに漂う私のかわいいアリシアはただ眠っているだけのように綺麗なもの。とても命が宿っていないとは思えない。

いや…必ず命を宿らせる。そして、あの優しかった日々をもう一度手にする。

侵入者などに邪魔はさせない。そのために万全を期したのだ。その上、実力だけは本物のあの人形も…

- - - - 本当に人形？私を慕うもう一人の娘じゃないのか？

「…違う。あれはアリシアじゃない。私の娘なんかじゃない」

- - - - 本当にそう思ってるのか？

「違う…違う……違う！」

----私は本当はフェイトを…

『不器用な愛情ばかり向けるなってことだ。生まれはどうあれ、親なんだろ？』

「違う！！」

自身の叫びが木霊する。意図せずして、咳き込んでしまう。

そう…違う。あの人形は娘じゃない。そのために決別の意を込めて出生の真実を語ったのだ。

しかしあの日、カレン師匠に再会した日、指摘されたその時から私の中でハッキリと形になり渦巻く想いはまだ燻っていた。だがそれを必死で否定して今の自分を保つ。

狂ったままの私で在れと…

・・・・・・・・・・

『鈴』

「あーー…うん、まずいな…」

門番っぽい青の傀儡兵と戦闘に入って結構経った。向こうはその巨体に似合わず、結構な速度で動くし力も半端じゃない。砲撃は最早ビームだし、装甲も半端じゃない。

こっちも【衝撃】や【射撃】等、高威力の魔法を駆使して応戦していたのだが、如何せん効いているのかどうかがわかりづらい。で、途中で思っちゃったわけですよ。

いくらなんでも、こいつ…強すぎじゃね？って。

何だか嫌な予感がしたので、動力のような物がないかサーチしてみるとビンゴ。胸部の装甲の奥に高魔力反応を検知。【衝撃】を連発して、胸部の装甲を一部、何とか剥がすことに成功。そして露出したそのコアは…

ジュエルシードでした。

最悪な状況キターー！！って感じだったね。どおりで他の奴より抜きん出た性能を持ってるワケだよ。しかもこれは俺達が見つけていなかった最後の一個だ。見つからないと思っていたら向こうが既に回収していたとか…泣けてくる。

「っと、【盾】！」

傀儡兵は知った事かと言わんばかりに再び攻撃を仕掛けてくるが【盾】で凌ぐ。

いけない、いけない。戦闘中に考え事とか命取り過ぎる。とりあえず今この場をどう乗り切るか？

跳ばされたユーノ達は場所がわからない以上、期待できない。他のみんなにしてもそうだ。って事はやっぱり俺一人で切り抜けるしかないのか。実は俺も結構なダメージを受けている上に、魔力も消費しているんだけど。

おまけにこのジュエルシード。今までの暴走体のようなのではなく、プレシアの手が加えられている以上、効率良く運用できるように調節されているはずだ。

…うん。泣き言もそろそろやめよう。どの道、時間も押してるだろうし後退は無い。前進あるのみ。今からは魔法も考えて撃たなければ。でないと、魔力切れを起こしてそのままＴＨＥ・ＥＮＤを迎えてしまう。

「それに…あいつらもがんばってるのに俺だけみっともない事できないでしょうが！！」

目の前の傀儡兵に再び突貫を仕掛ける。

・・・・・・・・・・

『アリサ』

「だからっ、話をっ、聞きなさいって！」

フェイトの連撃を捌きながら言葉を投げかける。あたしも成長したもので、以前は追いつけなかったこの猛攻を凌いでみせている。

でも話しながらだと正直きついけど、うまくすれば戦わずに済むかもしれないと淡い期待感もある。

「あんたは優しい母親に戻ってほしいんでしょ？　プレシアだって本心からあんたを嫌ってるわけじゃない。だから…」

「その言葉の何処に信じられる要素があるの？」

その一言に言葉を詰まらせてしまう。それはそうだ。証拠も何もないのにそのような事を言われても、敵対しているフェイトからすれば、自分を惑わそうとするただの虚言にしか聞こえないだろう。

でもだからと言って…。

「あんたはそれでいいの？　ただ従うだけの『人形』のような生き方で！」

「……かまわない。『人形』だと知った今の自分にはそれが存在意義だから」

その言葉を聞いた瞬間、あたしの胸の内から怒りが湧いてきた。

「っ！？　あんたねえ、いい加減に…」

ドガガガガァァァンッ！！

突如として、室内に耳をつんざくような轟音が響いた。あまりにも突然だったので、戦闘中であるにも関わらず、各々がその轟音の出処に目を向ける。そして次にはあの戦い慣れしたクロノやフェイトでさえも驚きの表情を浮かべる。

なんと轟音の出処はすずかの方からだった。フェイトはデバイスを突き出すように構えたままの姿勢。そしてその矛先には、

無数の光剣にその巨体を貫かれた傀儡兵の姿があった。

その姿は悲惨なもので、巨体である事も合わさり、御伽噺などで聞く地獄の針山のような様相と化していた。一目でわかる。この傀儡兵は最早、行動不能であると…。

そんな前衛的なオブジェを作り上げた当の本人は、構えを解いてこちらを…正確にはフェイトへと顔を向けていた。

背筋が寒くなるようなとてもキレイな笑顔で。

戦闘中であるはずなのに、誰しもが動けないでいた。無意識の内に、気圧されてしまう。それほどまでに良い笑顔なのだ。その笑顔のままこちらに歩み寄ってきたすずかは口を開く。

「アリサちゃん。クロノさんが苦戦してるみたいですから、フェイトちゃんは私にまかせてクロノさんの援護に行ってもらえませんか？」

「えっ！？　僕！？」

「わ、わかりました…」

「お願いしますね。後、絶対に手出しは無用だからね」

思わず、敬語で返事を返してしまった。何だか…逆らってはいけないような雰囲気だった。いそいそと大人しく、向こうにいたクロノの元へ移動する。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・

「彼女はどうしたんだい？」

「あれは多分…怒ってるんだと思う」

「怒る？」

もしかしたらあたしと同じ理由で怒ってるのかも…。

・・・・・・・・・・・・・・

『フェイト』

目の前の少女（すずかって言ったかな？）に己のデバイスを振るうも悉く受け止められ、弾かれてしまう。その動き自体は洗練されたようなものは無いが、反応速度が異常だった。信じられないことに、この子は自身の身体能力で、私の連撃を捌いているのだ。しかも、

「バルディッシュ！」

《Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ》

超高速移動魔法を駆使して、背後に回り込んでも、

ガキンッ！

（っ！　また防がれた!?）

今の攻撃で確信した。この子は間違いなく、この速度に反応した。それは並の魔導師…いや、人間には不可能に近い。これを防がれたとあっては、魔法で主導権を握るしかない。でも…。

（できるの？　私に…）

さっきの魔法を見るに、この子は魔法もかなりのものだ。それに今まで戦ってきた時でもこの子の魔法はどれも強力であり、備えた魔力量もあのなのはに引けを取らない程だ。

想定外だった。この子は後方支援タイプの魔導師だと思っていたが、いざ蓋を開けてみれば高い身体能力を備え、近接戦もできるとは…。

この子から勝ちを奪えるのか？

もし勝てなかったらどうなる？そんな考えたくもない事が浮かんでくる。今の自分は侵入者を退けるだけの『人形』。だけどそれさえも果たせなかったら…私の存在意義は…。

嫌だ。

嫌だ嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「っ！？」

ガキィィンッ！！　キィンッ！！

「私はっ！　負けるわけにはいかない！　あの人にとっての私は…戦うしかないの！」

「……フェイトちゃん」

「ここで負けたら…私は…本当に不要な存在になってしまう…」

「……」

「くっ！　だから…」

「いい加減にして！」

ガィンッ！！

「あっ！　っつぅ！？」

私の攻撃も結局は全て凌がれて、逆に大きく弾かれてしまった。

「フェイトちゃん…はっきり言いますね？」

「何…をっ！？」

「フェイトちゃんがどんなに今のプレシアさんのために頑張ったと

ころで、振り向いてもらう事なんてありません」

・・・・・・・・・・

『すずか』

私は自分でも珍しい怒りの感情を抱いてました。それは本来は優しい子であるはずのフェイトちゃんをこんな風にしたプレシアさんにではなく、フェイトちゃん本人にです。

「フェイトちゃんはプレシアさんに対して何をしましたか？」

「何を…言ってるの？」

「プレシアさんの言う事を聞くだけで聞く。そうすればプレシアさんはいつか自分を褒めてくれる。そう思っていたみたいですけど、そんなの……プレシアさんからすれば本当に都合のいい人形でしかありません」

「っ！？」

「それでもフェイトちゃんはいつかは…いつかは…と自分から動こうとせずに受身の姿勢。それではいつまで経っても振り向いてもらえません」

「……ま…れ」

「なんでプレシアさんに本音でぶつからないんですか？　自分の居場所を自分で作ろうとしなかったんですか？　フェイトちゃんは本来、そういう強さを持っているでしょう」

そう、私がフェイトちゃんに対して怒っていたのはコレ。プレシアさんに本音でぶつかることでまた違った結果を…居場所を得られたかもしれないのに、彼女はそれをしなかった。本来はそのぐらいの強さを持っているはずなのに。

かつての私もそうだった。

同族嫌悪…とは違うけど、似たようなものかもしれません。本心は繋がりを求めているのに、自分から動こうともせずに求めてばかりいる。

でも私はあの日、鈴君に打ち明けた日以来、強くあろうとしてみんなに、果てはお姉ちゃんにも自分の想いの丈をぶつけた。それは見事に受け入れてもらい、私はかつて嫌っていた自身の血を嘆く事も無くなった。

フェイトちゃんは決して自分で生き方を決めず、今の『人形』としての生き方に逃げている。

「それにその生き方の先にはあなたやプレシアさんにも救いなんて無いです」

「だまれぇぇぇぇ！！」

「！？」

ギィィィンッ！！

突然の叫びと共にこちらに飛び掛ってきたフェイトちゃん。その速度はさっきまでのものと違い、速かった。防ぐことができたのは自身の反射神経による賜物です。

そこからはもう無茶苦茶でした。フェイトちゃんの連撃は癇癪を起こした人のソレで構えも型もあったものじゃないです。ただ爆発した感情をぶつけているのみ。

「私だって…私だって本当は母さんと笑っていたかった！　でも…私は…あの人の娘じゃない！　だから…」

「血の繋がりだけが家族の繋がりじゃないです！　それに何度も言ってますが、プレシアさんだって本心ではあなたを慕ってます！」

「あれだけの事をされてるのに…信じられるわけない！」

「だから私たちはフェイトちゃんだけじゃなく、プレシアさんも助けにきたんです！」

「あなた達に何ができるっていうの！」

「少なくともウジウジとして、何もしないフェイトちゃんよりは何かができます！」

「っ！？　もういい！！」

大振りの一撃を防ぎ、後方に大きく弾かれます。再び距離を詰めようとしましたが、急に手足が動かなくなる。見てみると、金色に輝くバインドで拘束されていた。

「すずか！」

「くっ！？　今、助けに…」

「来ないでください！！　これは…私とフェイトちゃんとの勝負。手出しは無用です！」

声の方をみると、お互い傷つきながらもこちらに駆けつけようとする二人の姿。奥の残骸を見るに、傀儡兵を倒せたみたいですね。だったら…次は私の番ですね。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「…見守りましょう。ああなったらすずかは頑固なのよ」

「君はっ！？　彼女が心配じゃないのか！」

「心配してるわよ。でもそれ以上に…信じてるのよ」

「っ！？　…だったら僕も信じてみるよ」

「…ありがとう」

「ふんっ！」

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「アルカス・クルタス・エイギアス…」

フェイトちゃんは大掛かりな魔法を行使するみたいです。バインドはそのための布石みたいですね。バインドを解除しようにも、込められている魔力が強いのかうまくいきません。

まな板の上の鯉のような状態なのに、不思議と取り乱さない自分は慣れてしまったという事なのでしょうか…。

逃げられないのなら、真っ向から受け止めます！

「来なさい！　フェイト・テスタロッサ！！」

「フォトンランサー・ファランクスシフト…撃ち砕け、ファイアー！！」

金色の光と轟音が室内を染め上げた。

・・・・・・・・・・

『フェイト』

「はぁ…はぁ…」

やってしまった…。

持ちうる魔法の中でも最高のモノを撃ち込んだ。もはや侵入者撃退の任を半ば忘れて、彼女の言葉に対して八つ当たり気味に攻撃してしまった。彼女の発した言葉の一つ一つが私の胸に突き刺さっていた。彼女の言葉を冷静に、そして素直に受け止めていれば、私はまた違う道を選んでいたのだろうか…。

けどもう遅い。終わってしまったのだ。それにまだ戦いは終わっていない。残り後二人。残っている魔力はほとんど無いがこの命、刺し違えてでも…。

「ケホ…ケホ…さ、さすがに効きました…」

……嘘。

信じられない。あれだけの魔法を受けたのに、なんでまだ立っていられるの？

暫く咳き込んでいた彼女は、落ち着きを取り戻しこちらを見る。バリアジャケットはボロボロ。見える素肌にも多少なりとも、裂傷ができている。しかしこちらを見据える紅い瞳は微塵も揺らいでいない。

「…次は…私の番ですね」

そう呟き、彼女はデバイスを構える。
マズイ。こちらにはもう魔力もほとんど残っていない。ならば撃たせる前にと考え、前に出ようとするのだが、何故だか体が動かなかった。
思考は問題なく働いている。けど、体が脳の命令を受け付けない。
何故？　どうして？
彼女の紅い瞳を見ただけなのに
「Ｉｎ　ｃｅｒ　ｄｏｒｎｉｃ　ｖｏｃｅ…」
彼女の呪文と共に高まる魔力。それは下手をすれば私をも超えるほど濃密なモノ。そして私の遥か頭上には広大な魔法陣。その陣の中央からは紅く輝く巨大な光剣の刃が覗いていた。
「Ｈａｉ　ｓａ　ｍｅｒｇｉ！！　ブラッディィティアァァズ！！」
避ける術のない私は紅の剣に貫かれる。

・・・・・・・・・・

『クロノ』

僕は目の前の惨状に戦慄していた。
この広大な大広間のほぼ中央にできたクレーター。その真ん中でフェイト・テスタロッサは仰向けでその身を投げ出している。かなりのダメージを受けたのか、その姿は弱々しいがちゃんと生きている。
そして彼女にその結果を与えた張本人、月村すずかはそんな彼女の傍に歩み寄る。

「私の勝ち…ですね」

「…うん。私の負け……ねぇ？」

「どうしました？」

「何で…負けたんだろう？」

「……前を向いて歩いているか、いないかの違いですよ」

「……前を向いて…」

「…フェイトちゃん。私は純粋な人間じゃありません」

「…え?」

「私はそんな自分が大嫌いでした。強くなろうともしないのに、ただ自分の血を嘆いてばかり」

「……」

「そんな時、鈴君に出会いました。そして彼は言ったんです。強く在ろうとするんだったら周りを頼れと」

「……」

「フェイトちゃん。私たちを頼ってみませんか?」

「…えっ?」

「一緒にプレシアさんに会って、彼女の本心を聞きましょう。あなたはまだ…フェイト・テスタロッサは始まってすらいません」

「……できるかな?」

「やるんです」

「……ダメだったら…」

「だからこそ周りを…私たちを頼ってください」

「でも…」

「そこまでです。フェイトちゃんはどうしたいんですか？　正直に答えてください。ちなみに敗者に拒否権なんてありませんよ」

「……あなた達を…一度、信じてみる…私は…母さんに問いただしたい。本当は私を…どう思っているのか」

「なら決まりですね」

どうやら彼女達の間で話が終わったようだ。それと同時にすずかはフェイト・テスタロッサに治癒魔法をかけ始める。どうやら魔力も分け与えているようだ。どれだけの魔力量を秘めているんだろう。

本当は執務官として彼女の身柄を拘束するべきなんだろうけど、それをするのは何故か躊躇われた。彼女達のお人好しが感染ったんだろうか？

「おつかれ、すずか」

「あ、アリサちゃん。クロノさん。お疲れ様です」

「さて…かなり時間がかかった。早く奥に進もう。フェイト・テスタロッサ、君にも同行、案内してもらうよ」

「うん。わかった」

どうやらすずかの治癒も終わったようだ。そして先を急ごうとすると、突然、僕達が入ってきた入り口が開く。

「フェイト！　大丈夫かい！？」

「みんな、無事？」

入ってきたのはユーノとアルフの二人だった。二人の姿はかなりボロボロで、ダメージを負っているようだったがこの様子をみるにまだ大丈夫そうだ。

アルフはフェイトの姿を確認した途端、目尻に涙を浮かべながら彼女に抱きつく。久々の再会でお互いの無事を喜んでいるそうだ。

その姿を横目に僕はユーノに疑問をぶつける。

「ユーノ。彼は…鈴はどうしたんだい？」

「それが…僕達だけが罠に掛かって、分断されたんだ。その後、手当たり次第に進んでここに辿り着いたんだ」

「なんだって！？　じゃあ、彼は一人、孤立してしまったのか！？」

「ごめん…僕達の思慮が足りなかった」

「…いや、謝る必要は無い。彼だって素人じゃないから恐らく無事だろう。それともう一つ、来る途中で高町なのはを見なかったかい？」

「？　いや、見てないけど…何かあったの？」

「それは…」

この出来事を話そうかどうか悩んでいると、突然念話が飛び込んできた。

『あ～あ～、聞こえるか？　みんな？』

それは今しがた、安否が問われた彼の声だった。

『鈴、君は大丈夫なのか！？』

『その声はクロノか？　ああ、大丈夫だ。念話が通じるって事はうまく停止できたみたいだな』

『よくやってくれた。これでアースラとも連絡が繋がる。それとこれからなんだけど…』

僕は鈴に現在の状況を簡潔に説明する。周りの連中は彼の無事を素直に喜んでいるようだった。

『そんなワケで、僕達はこれから最奥部に突入する。君はどうする？　救助は必要かい？』

『あ～…必要ない。こっちは行き止まりみたいだから、一旦、戻ってから追いかける。だから先に行っててくれ』

『わかった。なら先に行く。そっちは一人なんだから無茶はするなよ』

『大丈夫だって。それじゃあ、頑張ってくれ』

『お互いにね』

激励の言葉と共に念話が途絶える。話を聞いていたみんなも表情を再び引き締め、これからに向けての決意を新たにしたようだった。

「よし！　行こう、みんな！」

・・・・・・・・・・

同じ頃…

『なのは』

（みんな…鈴君が…好き…）

思い出すのはすずかちゃんの告白。その堂々とした立ち振る舞い、

言葉に、私は居た堪れなくなってその場から逃げた。
そう…私は逃げたのだ。追ってこられたら私はすずかちゃんにどう接すればいいのかわからなかったので、一人にしてくれたのはありがたかった。

そこから私はこの胸の内から際限なく湧き上がる黒い感情を撒き散らかすかのように傀儡兵を蹂躙していった。現に今居るこの部屋は足の踏み場が無いくらいに傀儡兵の残骸が転がっている。
けどこれだけ鬱憤を撒き散らしても、私の黒い感情は消えない。放っておくとこのまま飲まれてしまいそうだった。自分が自分でなくなっちゃいそうだ。

「助けてよぉ…鈴君…怖いよ…」

こんな時でも鈴君に頼ろうとする私はもうダメなんだろう。ダメだとわかっていても鈴君の温もりを手放したくない。誰にも渡したくない。私だけのモノにしたい。
いつだったか、そこまで依存していないと思っていたが現実は違ったみたい。

暫く、塞ぎこんでいたら念話が響いた。それは私が望んでいた彼の声。

（鈴君！）

思わず、顔を上げる。彼の声を聞いただけで、さっきまでの黒い感情を忘れる事ができた。なんて現金なんだろう。
彼の話を聞くと、一旦戻るとの事。私は鈴君に会うために即座に来た道を引き返し、鈴君の元に走る。

事実から逃げている事は自覚している。

それでも私は…鈴君を求めて走る。

そして後に、私はこの行動を激しく後悔することになる。

・・・・・・・・・・

『鈴』

「後から…追いかける…ね」

そう呟き、さっきまで稼動していた駆動炉にもたれかかる。その際、駆動炉に血がベッタリとついてしまうが知ったことじゃない。

ふと霞む視界にさっきまで戦っていた傀儡兵が映りこむ。

今までの雑魚のように破壊されているわけではない。まるで事切

れた人形のようにキレイな状態で倒れこんでいる。そして少し遠くに転がっているのは、ジュエルシード。

結局、俺はこいつを破壊することは不可能だった。ならばと考えた結果は動力…つまりジュエルシードの除去だった。念入りにサーチした結果、こいつの動力がそれだとわかったからこその作戦だった。

で…結果は成功したのだが、払った代償が大きかった。

体はもうほとんどボロボロ。ぶっちゃけ全身血まみれだ。左腕も折れてるな。目も霞んできている。

けど一番の問題は魔力がもう尽きた事だ。体が訴える強制スリープを無視して戦ったんだから当然の結果か。あぁ…だるい…。

そんな状態でも駆動炉を停めたんだから自分を褒めてやりたいね。

「…っと…さすがに…限界…か」

うん。もう目もほとんど見えない、なんか寒い。これは失血とかじゃないな。魔力が無くなったんで体がゆっくりと死んでいってるんだ。

最後に思い浮かんだのはみんなの事。

作戦の成功を疑っていないけど、念のために心配かけないよう虚勢を張って念話もしたんだから大丈夫だろう。あ、でも絶対みんな怒るな。無茶しすぎって。後が怖いなぁ…。

「まぁ…頑張ったん……だから……許して…くれ……よ…」

その呟きを最後に、鈴の意識は途絶える……。

情ケ無用！　戦闘開始！（後書き）

主人公があまり活躍しないこの小説……どうしよう？

※ちょっと裏話

すずかの呪文はコナミの名作「悪魔城ドラキュラ」のとある歌の歌詞から。

名前についても同じく「悪魔城ドラキュラ」の曲名から。

作者の頭の中でドゥエリストのすずかというアホな妄想があった…。

譲れない想いだからぶつかりあう（鈴、アリサ、なのは編）（前書き）

時間と文才、その他諸々が足りない作者です。

今回は完全になのはのキャラ崩壊注意です。

不快に思われる方は絶対にバックを推奨します。

耐性のある方、寛容な心をお持ちの方はそのままどうぞ。

譲れない想いだからぶつかりあう（鈴、アリサ、なのは編）

『アリサ』

「どうやらプレシアは既にジュエルシードを発動させているらしい」

「何ですって!?」

「艦の方では小規模ながら次元震の発生も確認している。今は母さ…艦長が現場に出て次元震を抑えているみたいだから大きな被害は出ていない。けど…」

「けど、何よ?」

「いくら艦長といえど、十個のジュエルシードを長時間、完全に抑えるのは無理だ。僕達が思っている以上に時間は残されていない」

鈴が動力炉を停めてからすぐに、クロノにアースラに現在の進行状況を報告。応答したのが、リンディさんではなくエイミィさんだったのはリンディさんが現場に出ているからみたいね。

そしてさっきのクロノの話を聞くに本当に時間は残されていないみたい。

「とにかく急ごう」

「そうね」

クロノの声を受け、駆け出そうとするみんな。あたしも走り出そ

うとする…が……

「っ！？」

突然、あたしに怒涛の如く押し寄せてきたよくわからない感覚に足を止めてしまう。

「？　アリサちゃん？」

足を止めたあたしに真っ先に気付いたのはすずか。疑問の表情を浮かべ、声をかけてくるけど耳に入らない。それどころではない。他のみんなもあたしの突然の異常に足を止める。

「っ！？　っあぅ！？」

「アリサちゃん！？　どうしたんですか！？」

「ど、どうしたっていうんだ！？」

わからない。けど…この感覚は…。

焦燥感？

動悸が激しい。呼吸がしづらい。立っていられない。無意識の内に膝をつき、両手で胸を押さえる。そしてあたしの頬を伝うこの水は…涙？

胸の奥底の『何か』が訴える。そして、その訴えは知らず知らずの内に、口から洩れていた。

「…り…ん？」

「えっ？　鈴君？」

「鈴が……鈴！？」

次の瞬間には駆け出していた。元来た道へと。

「お、おい！　何処にいくんだ！？」

「アリサちゃん！？」

「私に構わず、先に行ってて！！」

みんなの制止を振り切って走る。自分でもよくわからない。根拠も無く『鈴の身に異変が起きた』と確信したからだ。それもかなり重大な…。

この一大事の時に何をと思うかも知れないけど、あたしの中の『誰か』が警鐘を打ち鳴らしている。それに何となくだけどわかる。

これに従わないと取り返しのつかない事になる…と。

そして戻ってきたのは通過した広間の内の一つ。鈴の居所は……

…ここから上階ね。

「グローリー、フルパワー！！」

《了解。コーティング開始》

グローリーの先端部…つまり槍の穂先部分から徐々に光り輝く魔力に覆われる。そしてコーティングが終わり、そこにあったのは輝く魔力の刃を備えた一本の突撃槍。

その突撃槍の形態をとったグローリーを両手で構え、体を引き絞り溜める。目指す先には天井。

「チャージ！　いっけぇぇぇぇ！！」

ドォォンッ！！

重い轟音が響き渡り、あたしの跳躍によって先程まで立っていた足元が深く陥没する。グローリーを突き出し、自身を弾丸と化する事で天井を一気に打ち抜いて行く。

階層を隔てる天井一枚分を貫いた程度では止まらない。そのまま一枚、もう一枚と階層をどんどん昇って行く。

数階分を貫いたところで、その辺の壁にワイヤーガンを打ち込んでブレーキをかける。それと同時にグローリーの魔力の刃を霧散させる。この技ってブレーキに難があるのよね…。

ともかく、さっきの感覚を頼りにすればここに鈴がいるはず。

改めて部屋を見渡す。目の前にはとても巨大な炉のような物がある。多分、これが駆動炉なんだろう。鈴が停めたおかげで、今は光も灯さず、ただの冷たいオブジェと化してる。その駆動炉の周辺をくまなく歩き回る。途中、巨大な傀儡兵を見つけてビックリしたけど、動かない様子に安堵の溜め息を吐く。

そして見つけた。無残に変わり果てた大切な人。

「鈴!?」

一目散に駆け寄る。傍から見ても、鈴の状態はとてもひどいものだった。血の気が通っていないためか顔色は驚くほど白く、体中の至るところに、傷が走り血が滲んでいる。左腕は半ばから妙な方向に角度を変えている。投げ出した四肢はまるで死人…。

普通であればもう事切れていると判断されるだろうけど、あたしにはわかる。鈴はまだ生きていると。

囁いているのだ。あたしの中の『誰か』が鈴はまだかろうじて現世に命を繋いでいると。

「グローリー、鈴はどんな状態?」

《非常に危険な状態にあります。傷からの失血もそうですが、何より魔力を感じません。これは以前、蓮様が言っていた魔力の枯渇による心肺機能停止かと…》

「っ!?　本っ当にこのバカはっ!?」

そんなに無茶をしてどうするのよ。素直に逃げるか、私達を頼ってもいいじゃない。あたし達をそんなに頼りなく思っているの?

…って、違うわね。こいつの事だから、あたし達の手を煩わせないようにするってところかしら。この戦いが終わったら一度、殴らなきゃいけないわね。

《とにかく、先に魔力の供給を。その後に治癒魔法を施す事で、一旦危機は乗り越えられるはずです》

「それしかないようね。治癒魔法は苦手なんだけど…」

グローリーの言うとおり、今の鈴は魔力の枯渇が一番の問題。ここまで消費してしまった上に、心肺機能の停止だから、自己での魔力回復は機能していないでしょうね。となると…外部からの魔力の供給で回復を試みるしかないのね。

そう、これはいわば緊急事態による救命措置。だから何も疚しい事なんて無いんだから。蓮さんから教えてもらった鈴への魔力の供給方法がたまたま『ソレ』だったって話なんだから！　だからと言って、決して嫌ってわけじゃないのよ。むしろ、うれし…っじゃなくて！

《アリサ様！》

「わ、わかってるわよ！」

グローリーの一喝で現実に引き戻される。そうだった。今は一刻を争う事態だった。

「起きたら…絶対殴ってやるんだから…」

一度、大きく深呼吸をする。そしてあたしは覚悟を決め、

大切な…愛おしい人の唇を自身のソレで塞ぐ。

・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

『キ、キキキ、キスゥ!?』

『そうだ。キス。接吻。ベーゼ。呼び名は様々だがやる事は一緒だな』

『何でキスが魔力の供給方法になるんですか!?』

『魔法という定義のある世界においては結構、浸透している方法だぞ。童話とかでもキスで目覚めたり、呪いを解いたりとあるだろう？　あれも又、魔力の受け渡しによるものという説もある』

『ほ、他に方法はっ!?』

『ミッド、ベルカの魔法であるにはあるが、お前は補助系統の魔法苦手だろう?』

『うっ！　そ、それは…そうですけど……だからって…あたしが…鈴と…ぶつぶつ…（／／／）』

『（ニヤニヤ）』

『はっ！？　な、何を笑ってるんですか、蓮さん！！』

・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

あたしの中に宿る魔力が唇を通して、鈴の方へ流れていくのを自覚できる。それと同時にあたしの中の『誰か』が消えていってるようだった。

ゆっくりと唇を離し、鈴の顔を見遣る。さっきまでの白い顔色はほんの少しだけど、赤みがかかっている。その事実に気が緩みそうになるけどまだ終わっていない。次いでは傷の治療だ。補助系統は本当に不得手だからこの治癒魔法も正直、気休めな感じだけどやらないよりはマシだ。

「…よしっと。グローリー、鈴の様子はどう？」

《体内での魔力の循環を確認しました。傷の方は……仕方ないとして、とりあえずは大丈夫でしょう》

「そう。よかった」

グローリーの診察結果を聞いて気を緩める。本当に一時はどうなるかと思ったけど、結果無事で何よりだった。

……そうだ。さっきまであたしの中の『何か』をもう感じることがないけど。あれは何だったのかしら？　というより、『誰』だったんだろう？　あたしがもっていたのは鈴の魔力だったわけだし…。

そんな風に考えていると、突然あたしの後方からとてつもない魔力の奔流を感じた。何事かと思ったけど、この感じは覚えがある。あたし達が幾度となく経験したことのある、ジュエルシードが発動した際のあの独特の魔力。

まさか傀儡兵かと警戒して、デバイスを構え振り向く。するとそこに居たのは…

「…なのは？」

・・・・・・・・・・

『なのは』

来た道を戻り、鈴君と別れた分岐路から上を目指した私は終着点と思われる扉（半壊していて、扉としては機能していないけど）の前に立っていた。さっきの念話で鈴君は戻ると言ってたけど、すれ違っていないからまだここにいるんだと思う。

中に入ると、最初に目に入ったのは横たわった巨大な傀儡兵。これにはびっくりしたけど、動く様子がないから近づいてみると、機能を停止しているのがわかる。

コツンッ…

その拍子に何かを蹴った。何かと思い、ソレを拾い上げてみると、

「ジュエルシード？」

何でこんな所に？　しかもこのナンバーは…まだ私達が見つけていなかったのだ。

とりあえず先に鈴君を…と思いそれを片手に部屋の中を探す。そして大きな炉を半周したところで…

「……えっ？」

見つけた。けど…それと同時に見たくない光景があった。

あれ？　鈴君と…アリサちゃん？　何でアリサちゃんが鈴君にキスしてるの？

途端に、胸の奥から湧き立つ嫉妬の感情。どうしようもないほどに私を黒く塗りつぶす黒い負の感情。

「……あ…う…」

見たくない。こんな光景は望んでいない。私は鈴君に会いに来ただけなのに…何でこんなひどい光景を見せられなくちゃいけないの？　しかもまたアリサちゃんが…。

……またアリサちゃん？

……やっぱり…アリサちゃんは…いつも…いつも…。

どうして鈴君に纏わりつくの？　なのはのモノなんだよ？

〝みたくない？〟

見たくない…

”とられたくない？”

盗られたくない…

”じゃあ、かんたんだね♪”

”とるひとがいなくなっちゃえばいいんだよ♪”

……でもそれって。

”きらいなこなんでしょ？　だったらためらうことないよ”

……そっか。そうだね。

”そうそう。わたしもちからをかすからいっしょにやろうよ”

うん、ありがと。…ねぇ、あなたは誰？

”わたし？　わたしは…”

”たかまちなのは”

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

気がついた時には私の体に変化が起きていた。
手の中のジュエルシードは右手の甲に埋め込まれていた。バリアジャケットにも変化があった。真っ白だった色がくすんだ灰色に。
その灰色はレイジングハートにも及んでいた。
そして一番の変化は魔力だ。体の中を熱いぐらいの魔力が絶え間

なく溢れるのを感じる。それは…とても高揚とした気分になる。

そんな魔力にやっと気付いたアリサちゃんがこちらを振り向いた。デバイスを向けているのはとても不愉快に感じる。

「…なのは？」

私の顔を見るなり疑問符を浮かべるアリサちゃんはとても失礼だと思うの。そんなことよりも…

「鈴君から…離れて…」

フラッシュムーブを使い、アリサちゃんの目前まで一気に跳び、渾身の力を込めてレイジングハートを振るう。

ガァンッ！！

「キャァ！！」

日々の訓練の賜物か、アリサちゃんはうまくデバイスで受け止めたようだけど、衝撃までは殺しきれなかったようで向こうまで大きく弾き飛ばされ、地面を転がる。

そんなの知った事ではない私は傍に横たわっている鈴君を屈んで抱き起こす。ようやく愛おしい人に触れることができる喜びに身が震える。

あぁ…やっと会えた。

やっぱり私は、鈴君に触れていないとダメみたい…。

もう離さない。彼を…誰にも渡してなるものか…。私のモノなんだから…。

「何すんのよ、なのは！！」

私の感動に水を差す失礼なアリサちゃん。何を怒ってるんだろう？　私のモノを盗ろうとしたんだからアリサちゃんに怒る筋合いは無いのに…。

う～ん……あ、そうか。鈴君は私のモノっていう証明が無かったんだ。だからアリサちゃんは盗ろうとしてたんだ。失敗、失敗。

じゃあ、アリサちゃんに鈴君は私のモノって証明しないとね。

「アリサちゃん」

「何よっ！！」

「鈴君は…私のモノだから」

「はぁ？　何を言って…」

アリサちゃんの言葉を遮るようにして、私は鈴君の唇にキスをする。

「なっ！　な…ななっ！！」

「…んっ……はぁ♪」

存分に鈴君とのキスを堪能した。初めて鈴君としたけどこれは…クセになりそう。アリサちゃんの後っていうのに嫌悪感を感じるけど、それを上回るほどの甘美さだ。いや…これはアリサちゃんの匂いを消す行為だと思えば…。

「な、なな、なのはっ！　あ、あんた何をしてっ！　それにその格好は…！！」

「……うるさいの……ディバインシューター」

うるさく喚くアリサちゃんを黙らせるために、魔法を放つ。四つの魔法弾は不規則にアリサちゃんに襲い掛かるも、少しこちらに警戒していたのか問題なく対処し、全部グローリーで斬り払われた。

「……どういうつもりよ、なのは」

「どういうつもりって…アリサちゃんがいけないんだよ？　私の鈴君を…盗ろうとしたんだから」

「盗るって…」

「私ね……アリサちゃんが嫌い。いつも鈴君の隣に居て私の場所を奪うし、私に向けるはずだった鈴君の笑顔を奪うし……そして今度は鈴君そのものを奪おうとしてる。だから思ったんだ。奪う人がいなくなればいいんだって。そうしたらね……ジュエルシードが力を

くれたの」

右手の甲に埋め込まれたジュエルシードをアリサちゃんに見せる。

「!?　あんた、ソレ！」

「ジュエルシードがこんなに良い物だって知らなかった。これがあれば、負ける気なんてしないね。だからアリサちゃん…私から鈴君を奪おうとする泥棒さん♪」

「……」

「覚悟してね♪」

渾身の魔力を込めたディバインバスターをお見舞いしてあげた。

・・・・・・・・・・

『鈴』

真っ黒な、よくわからない空間に俺は居た。右も左もわからない。上か下かも自分が立っているのかさえも疑わしい感覚が纏わりつく。

「……ふむ？」

俺は何でここに居るんだ？　ここに来る前の俺って何をしてたっけ？

「……だめだ。全然、思い出せない」

思い出そうとしても、頭の中に霞がかかったかのようで思い出すことができない。思い出さなければいけないような気がするのに思い出せないこのジレンマ。もどかしい…。

「とりあえず……歩いてみるか」

この真っ黒な空間だけど、よく見ればずっと向こうの方に僅かに光源が見える。行っていいのかわからないけど、何もしないよりはマシだろう。

「というわけで、出発！」

「こらこら、何処へ行く？」

「えっ？　とりあえず、あの光に向かって…」

「いやいやいやいや、ダメだから。あっちは黄泉とか冥界とかそういう類の世界だから」

「まじで！？　っていうか誰！？」

「今更かい！？」

少しばかりの漫才を繰り広げ、声の主に向かって振り返る。

そこに居たのは一人の青年。黒い髪を適当な長さに刈り込んだような髪。少しだけ吊り上った目尻。怖いとかの印象ではなく、凛々しい印象を受ける。

その青年に俺は見覚えがあった。というか忘れる事のできない人物だ。なぜなら…

「俺？」

「そう、俺だ」

俺が『秋月鈴』になる前の俺だった。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

・

「つまりここは現世とあの世の境目のような場所。そういう認識でOK？」

「ああ、とりあえずはそれでいいぞ」

「それで、そんな場所になんで俺が居るの？」

「おまえ、死にかけてたんだぞ。覚えていないのか？」

「……少しずつ思い出してきた」

そうだった。俺はあの傀儡兵との戦いで重症を負った上に、魔力を使い果たして…。

「思い出したか？」

「まあな。なら次の質問だ。アンタ…生前の俺が何で今の俺の前に居る？」

「帰ってきたからだよ」

「帰ってきた？」

「お前は『秋月鈴』になる前の…あの魔法の失敗の時の出来事を覚えているか？」

「……一応」

時々、夢で見るほどの…自分の死を感じた出来事だったんだ。忘れられるはずがない。

「あの時、消滅するはずだったおまえの魂の一部を消滅しきる前に先生が採取。それを先生が過去に造った人造生命体に入れる。それが今のおまえ…『秋月鈴』だというのはわかるな？」

「そりゃ当然…ね」

「俺はその採取し損ねた魂の一部だよ」

「えっ？　全部消えたんじゃないの？」

「お前はあの消滅の時、諦めていたみたいだけど本心では強い生存本能が働いていたんだよ。その結果、全て消滅せずに僅かながら残ったんだよ」

「…なんとまぁ」

「だけど、そのまま放置されていたら消えてたんだが、そこに予定外の人物が現れた。それがアリサ・バニングスだ」

「アリサが？」

「そう。あの森林はアリサの館の付近だったからな。偶然、アリサは消えゆく魂の灯を見て、それに惹かれてあの場所へやってきた。強い魂の灯は何かを惹きつける輝きを放つからな。誘蛾灯みたいなもんだ。そこで生存本能の働いていた残った魂はアリサを依り代とすることで消滅を免れる」

「……寄生虫みたいだな」

「うるせえっ！　話を続けるぞ？　現在、アリサが保持している魔力は、その魂に中てられた彼女の体が新しく生成したリンカーコアから生み出されているモノだ。まあ、お前の魂からから生まれた副産物みたいなものだ。だからアリサはおまえと同じような魔力を持

っているわけ」

「俺が原因かよ…」

「で、俺がここに居るわけは、傀儡兵との戦いで魔力の尽きたお前にアリサが魔力の供給を行ったからだ。その際に俺も…魂もお前の元に帰ってきたというわけだ」

「そっか…アリサに助けられたのか。礼を言っておかないとな」

「俺が散々訴えたからな。鈴が危ないって。俺にも感謝しろよ」

「へいへい。感謝します。ありがとうよ」

「なんか敬意が足りないけど、まぁいい。それじゃ、俺はそろそろ消えるから、さっさと起きてお前の大切な友人を助けてやれ」

「消えるって…」

「俺は魂の欠片。大元の魂であるお前に帰るのが摂理なのさ」

「……そっか。ありがとうな、助けてくれて」

「気にすんな、じゃあな『秋月鈴』」

そう言って背を向け、ヒラヒラと手を振りながら真っ黒な空間に溶け込むように消えていく、かつての俺。その姿を最後まで目を背けること無く見送る。

「じゃあ、起きますか」

あいつが言っていた『助けてやれ』って言うのがどういった状況を差すのかもわからないが、助けてもらっておいて無碍にするほど俺は冷血ではない。

ゆっくりと息を吐き、俺は魔法を行使する。

「【覚醒】…」

・
・・
・・・
・・・・
・・・・・

一気に意識が戻る。最初から脳が活動していたかのように頭が冴えている。体は横たわっていたので上体を起こそうとして、

「痛ってぇ!!」

左腕から激痛が走った。痛覚を自覚すると、体中のそこらから痛みを感じる。そうだった…俺は怪我人だった。とりあえずは…

「【治癒】」

治癒魔法で傷を癒す。掌から生まれた淡い光を当てると、徐々に傷が塞がっていく。そのまま治癒を続けて、ようやく痛みが引いてきた。手を握ったり、開いたりして状態を確認していると、

ズズゥゥゥゥンッ！！

大きく地面が揺れた。何事かと思い、すぐさま起き上がって震動の発生源と思われる場所に走る。

動力炉のある部屋を抜け、大きな吹き抜けの螺旋階段がある場所に出た。手すりに寄りかかり、階下を見遣ると、二人の人物が戦っている様子が見受けられた。その姿は俺のよく知る大切な友人。

「あいつの言ってた事って…これかよ…」

事態は大変な方向に向かっているっぽい。

・・・・・・・・・・

『アリサ』

「ほらほら、ちゃんと避けないと危ないよアリサちゃん」

「くっ…このっ…」

次々と襲ってくるなのはのディバインシューターをグローリーで切り捨て、時には左手の手甲で防ぐ。
誘導弾だから、避けようと思ってもうまくいかないのでこうやって防ぐしかない。

状況は最悪だ。ジュエルシードの魔力に飲まれた今のなのはは、あたしをいたぶるようにして、魔法を放っている。最初は何とか凌いでいたけど、徐々に被弾。やせ我慢で持ち堪える。

「結構、粘るなぁ……じゃぁこれなら」

次の手もなのはの生成した魔法弾。だけど数が尋常ではなかった。十…いや、二十はある。これだけの事ができるって…これがジュエルシードの恩恵。

「うまく凌いでね♪」

その言葉を言い終わると同時、一斉に襲い掛かる数の暴力。

ドドドドドドォォォォン！！

「あ…ぐぅっ…！！」

ほとんど残ってない魔力を振り絞って展開した防御魔法も容易く貫かれた。全身を駆け巡る激痛。意識がとびそうになるけど、歯を食いしばる。

「すごいアリサちゃん。さっきのはさすがにダメかなって思ったのに…」

なのはの何処か無邪気ささえ感じるような賞賛の声。それにまともに取り合える程、今のあたしには余裕が無かった。

これまでの傀儡兵との戦闘、鈴への魔力の譲渡。そして今のこの戦闘。もはや魔力はほとんど残っていない。騎士甲冑ももはや纏っているだけであり、防御能力は期待できないし、こうやって飛行しているだけでも恩の字なのだ。なのはの攻撃に耐えているのだってもはや意地だ。

ここで、負けたら楽になるんだろうけど…そんな気には絶対ならない。

「……んた…に…」

「ん？」

「あんた……みたいな…」

「どうしたの？　アリサちゃん」

「あんたのようなバカに…あたしの好きな人をとられてたまるもんですかっ！！」

なのはに向かって叫ぶ私の意地。それを聞いた途端、笑みの表情

から一転、無表情になる。その表情を見ただけで、してやったりという気分になる。ざまぁみろ…。

「なのは…あんたが鈴を好きなのは知っていたわ。すずかだって鈴が好きなのは知ってる。その想いを知っているから、仮に鈴がどちらかを好きになっても、祝福するつもりでいたわ」

「……」

「でも……今のあんたは別。今のあんたみたいなバカが鈴を奪おうとするなんてとても許容できない」

「……うるさい」

「あたしに鈴を奪われるかもしれないから、私を叩きのめす？　はっ！　何て短絡的なの？　そんなの自分に自信が無い証拠じゃない。すずかみたいに自信をつけ、磨こうって思わなかったの？」

「……うるさい…うるさい」

「あー、そっかっ！　ジュエルシードに頼ってしまうような弱いばかなのはには無理ってものよね！　ごめん、ごめん。考えが及ばなかったわ！」

「うるさいうるさいうるさーーいっ！！！」

あたしの堰を切ったような罵倒についになのはがキレた。それと同時になのははデバイスをこちらに向けて魔力のチャージを図る。ここで怒るって事はそれなりに自覚があったと思っていいのだろうか？

とはいえ、あたしもつい今のなのはの醜態に怒って色々とぶっちゃけたけど……早まったかしらね？　すごい魔力が収束しているし…今までは非殺傷設定だから殺す気は無いんだろうけど…最悪、障害が残る体になっちゃうかも。けど後悔はしていない。

「アリサちゃん。そこまで言ったからには…もう許さないよ」

「許しなんて求めていないわよ。事実を告げられたくらいで怒るなんて…程度が知れるわよ？」

「……さよなら、アリサちゃん。ディバィィィン、バスタァァァーー！！！」

収束した魔力の砲撃。ジュエルシードの魔力も合わさったその砲撃はとてもじゃないけど避けたり、防げるようなものではなかった。意地でここまで持たせたけど…ダメだったみたいね。このバカはあたしが止めようと思ってたけど…さすがにこの砲撃は……。

この瞬間に思い浮かべたのは、あたしの好きな人の顔。そして懺悔の言葉。

「鈴、ごめん。あたしじゃ、止められなかった」

もはや砲撃を防ぐ手段を持っていないあたしはこのまま襲い掛かるであろう衝撃に備えようとする。

「【盾】！！」

けど、次にやってきたのは聞き慣れた人の声と姿。あたしの前に割って入ってきたその人はその独特の魔法でなのはの砲撃を防ぎきった。

見慣れた黒髪。さっきまで体中に傷を走らせていたけど、もうそのような痕は残っていない。でも上の白カッターシャツは血糊でベタベタだ。

こいつはいつもそうだ。あたしが本当に必要な時には助けてくれる。だからこその好きな人なんだけどね。

「もう大丈夫なの？」

「ああ、ありがとうなアリサ。後は俺の役目だ」

「無理しないでね…」

「善処するよ」

その言葉じゃ少し不安だけど、今は大人しく下がっておく。そして鈴を信じながら見守る事にする。

「さてと……なのは、いくら俺でも怒るぞ？」

「鈴君…」

譲れない想いだからぶつかりあう（鈴、アリサ、なのは編）（後書き）

もっと病んでる表現がうまく書けるといいんですけどね…。

鈴の状態など、何とか説明しましたがわからないという方は遠慮なく質問等をどうぞ。

譲れない想いだからぶつかりあう（すずか、フェイト、プレシア編）（前書き）

内容としてどうなの？って感じになってしまいました。

早い話、スカスカ。

『忘れられし都アルハザードは…そこに存在する技術はただの伝説です』

「違うわ。アルハザードは確かに存在する。次元の狭間にある！」

『貴方はそこに行って一体何をするというのです。失った時間と犯した過ちを取り戻すの？』

「そうよ。私は取り戻す。アリシアを、こんなはずじゃなかった世界の全てを」

『それはあなたのもう一人の娘…フェイトさんを捨ててまで成し得なければならない事なのですか！』

「アレは私の娘じゃないわ！　アリシアの出来損ないの人形よ！」

『なぜそうまで、フェイトさんを否定するのです！　あなたの本心は…』

「黙れ！　あの娘の名を出すな！　私は取り戻す…こんなはずじゃなかった世界の全てを！」

ドッゴォォォォォン！！

「世界は何時だって『こんなはずじゃない』事ばかりだ！　昔から何時だって、誰だってそうなんだ！」

入り口を破壊して、なだれ込んでくる面々。その先頭のクロノが叫ぶ。

今、共に不器用である親子は再び向き合う。

・・・・・・・・・・・・

『フェイト』

再び母さんの前へとやってきた。母さんの傍らには生体ポッド。その中には私の姉、アリシア・テスタロッサ。

「プレシ……いえ、母さん」

「…まだ私を母と呼ぶというの？　あなたは…」

「はい。あなたが私をどのように思っていても、私にとって母さんである事に変わりありません。それはこれからもそうです」

「…くだらないわね。私にとって娘はアリシア唯一人。おまえのような人形は娘でも何でもないわ」

母さんのその言葉に胸が掻き毟られるような痛みが走る。この子達を信じて再び母さんの前にやって来たけど、やはり私は母さんにとって…。

そんな私の前に乗り出てきたのはすずか。

「何故そうまでフェイトちゃんを拒むんです！　たとえ直接的な血の繋がりはなくても、一途に母と慕うフェイトちゃんを！　あなただって本当はフェイトちゃんの事をっ！」

「黙りなさい！　私は人形を愛でる様な嗜好は持ち合わせていないのよ。その子はアリシアの記憶を持たない失敗作。そのような子に何の価値があるの？」

「”一人のフェイト”という人間を愛せないんですか！」

「言ったはずよ、人形に用は無いと…」

母さんの言葉にたまらずに膝をつく。自然と涙が滲み出てくる。

「…ぅ…やっぱり…私は…母さんには…うぅ…」

「フェイト！」

アルフが必死に宥めようとしてくるけど、この寂寥感はとめどなく溢れてくる。母さんはそんな私を一瞥しただけで、再びジュエルシードに向き合う。

「くだらない問答をありがとう。時間をかけてくれたおかげでジュエルシードの開放の目処がたったわ」

「何！　まさかこの場でっ！」

「ええ。この十個のジュエルシードの力、全てを開放するわ。そちらの艦長が抑えているようだけど、これだけの魔力を抑えることができるかしら？」

・・・・・・・・・・

「くっ！　させるか！」

「させません！」

すずかとクロノは同時に魔法を放つもプレシアに届く直前、障壁

に阻まれる。

プレシアが手をかざすと、薄っすらと輝いていたジュエルシードが一際強く輝く。そこから感じる魔力はもはや肌を刺すように荒々しい。

『いけない！　このままでは次元震が発生してしまう。みんな、私が限界まで抑えているから、早くアースラまで帰艦しなさい！』

「くっ、プレシアを前にして、ここまで来たのに！」

「待って下さい！　私はまだ、プレシアさんの心を聞いていません！」

『そんな事を言っている場合じゃないわ！　このままではみんな、虚数空間の海に呑まれるわよ！』

「…リンディさんの言うとおりだ。みんな、ここは撤退すべきだ」

リンディの言葉に最早、猶予は残り少ない事が感じられる。ユーノはそんな中冷静に状況を把握していた。だからこそ、撤退を促したのだ。

そしてユーノのその言葉に各々が悔しさに唇を噛み締める。

クロノは執務官として元凶を目前にしての撤退に。

すずかはフェイトと約束しておいてプレシアの本心を曝け出せなかった事に。

フェイトは最後まで母の愛を向けられなかった事に。

アルフはそのプレシアの身勝手さに。

そんな口惜しさを抱いていようとも、現状ではどうする事もできないでいた。

「さあ、ジュエルシードよ。その力を解き放ち、私をアルハザードへと導きなさい！！」

ジュエルシードの輝きは最早、眩しいくらいだ。周囲の床の所々が剥げ、そこから虚数空間が覗く。一同の立っている地面の揺れも激しい。

リンディの忠告を聞き、即座に行動に移せなかった一同は全速力で戻っても間に合うかどうかといった所まで追い詰められていた。それがわかっている筈なのに、だれも動かない…動けないでいる。

そしてその時が来た…。

「いい加減にしろ、ばか弟子」

突如、聞こえてきた声と同時、足元に強大な魔法陣が展開される。白く輝くソレはどのようなモノか、すぐにわかった。時間にして数十秒、もしかしたら数分程だったかもしれない。

さっきまで眩しいくらいに輝いていたジュエルシードは段々とその色彩を落としていく。そして、次元震の揺れも治まっていく。

プレシアを含むその場にいるみんな、アースラのクルーは最初、この状況を把握できていなかった。それはそうだろう。あれだけ荒れ狂っていた魔力量が突如として抑え込まれたのだから。

『エ、エイミィ…状況の報告を…』

『え？　は、はい…ジュエルシードの魔力は完全に沈静化しています。次元震も同様です。信じられません。あれだけの魔力量が…』

リンディ、エイミィの念話により、脳が再び再起動した少数の人間はその声のした方を振り向く。

そこに彼女は居た。普段と変わりない…それこそ悠然とした姿で。

「出てくるつもりはなかったが……そうも言っていられないか」

秋月蓮、その人が。

・・・・・・・・・・・・

『プレシア』

後一歩だったのだ。私の悲願達成まで本当に後一歩だったのだ。
だからこそ、その悲願が目前で阻まれる等、夢にも思わなかった。

どうして…何故…よりにもよって…

私の中で最も恐れていた…起きてほしくなかった事態が起こってしまった。

「な…何故、師匠が此処に？　あなたは静観を決め込むと…」

「そのつもりだったんだが…今のおまえがあまりにも救いようのないアホだったのでな…見ていられなくなった」

救いようのない……

そんな事はわかりきっている。今の私は狂気に身を委ねているのだから。今更ながら指摘される事ではない。

そんな師匠は未だに蹲っているあの子…フェイトにゆっくりと歩み寄り、その目線の高さに合わせるようにしゃがみ、そっとフェイトに語りかける。

「……あなたは？」

「初めまして。あのばか…プレシアの元師匠の秋月蓮だ」

「…母さんの？」

「ああ……突然だがフェイト嬢。おまえは母親の事が好きか？」

「えっ？」

「散々あれだけ言われて尚もプレシアに親子の情を抱いているか？クローン、人形の烙印を押されてまでも」

「わ、私は…」

「正直に…本心の声を聞かせてほしい」

「母さんにとって私は人形。価値のないモノ。でも私にとって…フェイトという人間にとっては、たった一人の母親なんです。嫌いになるなんて」

フェイトは俯いていた顔を上げ、そう宣言した。その顔はさっきまでのモノと違い堂々とした力強いモノだった。

やはりこの娘は…私なんかよりもずっと強い。

「…よく言った。君は思っていた以上に強いようだな」

師匠はフェイトとの問答を終えると、立ち上がり今度は私を見据える。その瞳は見たことがある。虚を全て見透かすあの眼だ。

「おまえの本心は知っているが改めて訊こう。プレシア・テスタロッサ、おまえはこの娘、フェイト・テスタロッサのこの言葉を聞いてもさっきと同じ事が言えるのか?」

この状態の師匠は…本当に苦手だ。昔から師匠を前にすると自分を隠す事ができなかった。

「師匠…私の心は以前、あなたに語った時と何ら変わりはありません」

「それは、今もこのフェイト嬢にも親子の情を抱いているという事だな？」

「…そうとってもらってもかまいません」

フェイトは大きく眼を見開いて信じられないという表情を浮かべる。それはそうだ。そのような心を悟られるようなそぶりを見せた覚えなど無いのだから。

「ですが…」

「ん？」

私は無言のままデバイスを突き出し、フォトンバーストの魔法を放つ。自らの師に向かって。

魔法による爆発が起こり、爆煙が巻き起こる。…がこちらの予想通り、そこには防御魔法を発動させた師匠が無傷で立っている。

「言ったように……ここまで来て、引き返すわけにはいかないんです。ですから、立ち塞がると言うのなら、たとえ師匠といえども……排除します」

「……やれやれ」

師匠は呆れたような表情のまま、大きく溜め息を吐く。やがて意を決したのか顔を上げこちらをキッと見据え、こちらに一歩、歩みだそうとして、

フェイトに袖を掴まれ、歩みを止める。

「……そう…だったな。おまえさんがやらなければいけない事だったな」

「えっと…察してくれてありがとうございます」

師匠はそのまま、他の面子の集団の中へと混じっていく。代わりに前へ歩み出てくるのはフェイト。そして互いに対峙し、無言のまま時が過ぎる。いつもの私の顔色を伺うような顔ではない、もっと堂々とした顔をしていた。

「母さん…」

「…あなたが私を阻むというのかしら、フェイト？」

「はい。これ以上の罪を重ねる前に…あなたの娘である私があなたを止めてみせます」

「娘ではないといったはずだけど？」

「もうそれは通じませんよ」

「……ちっ」

やはり通じないか。全く…師匠もやっかいな事をしでかしてくれたものだ。

と、これから戦いを始めるというのに、フェイトは小さく笑った。

「何が可笑しいというの？」

「ご、ごめんなさい。考えてみれば…まるで親子喧嘩みたいだなって思うと、つい…」

喧嘩？　…そうね。これも親子喧嘩の形の一つなのかも知れないわね。

「本当、おめでたい子ね、あなたは」

「…かもしれない」

そして互いにデバイスを構える。どちらも言葉は発しない。しかし魔法を放ったのはほぼ同時。

私の中にあったはずの狂気は、いつの間にか静まり返っていた。

・・・・・・・・・・

『すずか』

プレシアさんとフェイトちゃんの戦いは長くは続かなかった。プレシアさんは強力な魔法を立て続けに連発。フェイトちゃんは必死に捌くも徐々に追い詰められるも唐突に魔法が止んだのだ。何事かと思い、みんながプレシアさんの方をみると、彼女は咳き込み、吐血を起こしたのだった。

「母さん！」

真っ先に駆け寄ったのはフェイトちゃん。それに続いて、私たちも彼女の元に駆け寄る。

フェイトちゃんは懸命にプレシアさんの介抱を。ユーノ君も治癒魔法を施すも吐血は止まらない。

「くっ…急いでアースラの医療室へ運ぼう。そうすれば」

「無駄だ」

まだ騒がしい中、蓮さんの声は不思議と良く通った。

「蓮さん？」

「あ、あの…無駄って、どういう…」

「プレシアの命はもう……限界だ」

蓮さんの口から初めて聞く余命宣告。その言葉に一同は驚愕の表

情を浮かべる。特にフェイトちゃんの度合いは大きかった。ただ一人、プレシアさん本人は静かなモノだった。

「やはり…気付いていましたか」

「まぁな。ったく…ばか弟子が」

「蓮さん、どうにかできないんですか？」

「流石に無理だ。症状はもう限界を超えている。今までは執念で生きてきたようなものだ」

「そんな…」

淡々と非情なる宣告を告げる蓮さん。その一言、一言がフェイトちゃんの胸の内をさらに絶望に染め上げる。

・・・・・・・・・・

「ぐっ、ごほっ、ごほっ」

「母さん！！」

「ふ、ふふふ。今までの行いに対する…罰ね。…ねぇ、フェイト？」

「な、何？　母さん」

「……ごめんなさいね」

「えっ？」

「私はね、怖かったの。あなたがアリシアの記憶を持っていないとわかった時、私は狂気に蝕まれた。そんな私でもあなたは母さんと言って、慕ってくれた。そんな一途さだからかしらね、いつの間にかあなたを好きになっていたわ」

「……」

「けどそれを認めてしまうとアリシアへの手を止めてしまう。狂っていた私はそう考えて、あなたへの想いを消そうとした。…でも、無理だった。そこからはもう二律相反の想いがせめぎあって、もう何が何やらだったわ…」

「母さん…」

「半ば狂ったままこの計画を進めたけど…師匠の姿で我に返ったわ。母さんね…師匠だけには本当に頭が上がらないの、昔から…。だから私を見ていられなくて、咎めにきたのかもね」

「あの人、そんなに凄い人だったんだ…」

「ええ、母さんの…永遠の憧れの人よ」

そしてプレシアは一際大きい吐血をする。

「もう…限界…ね」

「そんな事ないよ！　きっと助かるから！」

「本当…お人好しね…」

プレシアは崩れそうになる体に鞭を打ち、傍のフェイトを押し退け立ち上がる。ゆっくりと、のっそりと歩く先にはアリシアの眠る生体ポッド。そして虚数空間を覗かせる大穴。

「母さん…何…を…？」

「フェイト…私のもう一人の娘…そしてアリシア…あなたにも…謝らないと…」

「母さん！！」

「フェイト、母さんはあなたの幸せを祈るわ…」

「待って！！」

「さようなら…私の愛しいもう一人の娘…」

プレシアは最後にフェイトへと微笑みかけ、アリシアと共に虚数空間へと身を投げる。フェイトは手を伸ばしながら、その光景に涙を流す……が、

「みなさん。今まで、本当にありがとうございました」

突然、すずか達に向かって一礼をする。そして次の瞬間、

彼女自身も虚数空間へと飛び込んだ。

この行動に、一同はパニックに陥る。特に使い魔であるアルフの取り乱しようは尋常ではなかった。彼女もフェイトと命を共にしようと、虚数空間へと向かおうとするのを他の面子が押し留める。すずかはただひたすら、静かに泣いていた。他のみんなも胸中の内は知れないが、沈痛な面持ちだった。

唯一人、蓮は別の表情を浮かべ、何かを思案していた。

・・・・・・・・・・

「母さあぁぁぁん！！」

「フェイト！　何故！？」

「これ以上、母さんを一人ぼっちにはできません！　それに、私の幸せはあなたと共に在る事です！！」

「もう戻れないのよ」

「それでもです！！」

「……本当に…お人好し」

二人はどちらからともなく、抱き合い、静かに落ちていく。

どこまでも……。

譲れない想いだからぶつかりあう（すずか、フェイト、プレシア編）（後書き）

バッドエンドなんて許されざるよ…。

師弟時代、蓮に弄られていたプレシア。

喧嘩！（前書き）

早速ですが、注意点を。

グロい表現注意。

エロい表現注意。

Ｒ－１５注意。

Ｒ－１８注意。

テンプレ注意。

ヤンデレ注意。

キャラ崩壊注意。

え～と…色々注意。

喧嘩！

少女がある日出会った、一人の少年。

一人ぼっちだった少女は寂しさを忘れ、何時しか少女は恋心を抱くようになった。

ある日、二人は新たに二人の少女を迎え、四人で過ごすようになる。

色々とありながらも、四人はかけがえのない大切な日々を過ごす。

しかし、ある日出会った『魔法』という力。

その力と出会った少女達は、様々な出来事を経て己の弱さと向き合う。

三人の少女の内、二人は己の弱さを認め、負けないよう強く在ろうとした。

そして一人は、その弱さに……。

『鈴』

「私ね…鈴君を誰にも渡したくなかったの」

「なのは…」

「誰よりも大切な…他を切り捨ててでも得がたい、大切な存在なんだ。だから……誰かにとられるなんて我慢できなかった」

内心、俺は複雑なモノを抱いていた。

誰しも、それぞれの人の心を占める割合が異なる。なのはの中では俺という存在の割合が、そこまで大きなモノだとは思わなかったからだ。

なのはに好かれる事に不満があるわけではない。むしろ好意を寄せてくれる事自体はうれしい。けど…

「だからって…アリサを傷つけるような事をする必要があるのか？」

「必要だよ。だってアリサちゃんは私たち三人の中で、最も鈴君の心の中で大きな存在なんだもん。え～っと…目の上のタンコブって言うんだっけ？　取り除かないと」

俺の中でアリサという存在は”居て当たり前”のような存在だった。それは俺の魂が宿っていたからという理由もあるんだろうけど、それを抜きにしてもあいつとの付き合いは心地よかった。

優劣をつけた覚えはないが、なのはからはそう感じたんだろう。

「友人同士といえど、何処か気に食わない所もあるんだろうけど…それにしたってやり過ぎだ！」

「もう友達じゃないよ。私から鈴君をとりあげようとする憎き”敵”だよ」

「っ！？」

「ああ、それで言ったらすずかちゃんも”敵”だね。あの子も鈴君をとろうとしてるんだから」

そう断言し、クスクスッと無邪気に笑うなのはの姿に絶句する。

なのははアリサと友人同士でありながら喧嘩したりもするが、ここまで強烈な敵意を向けることはなかった。

それが今ではどうだ？

アリサやすずか、友人であるはずの彼女達を憎き敵と断言し、あまつさえ傷つける事も厭わない。俺の知っているなのははそんな事は決してしなかったはずだ。

「それでね、鈴君をとられないようにするにはって思ってたら、この子が教えてくれたの。とる人がいなくなっちゃえばいいんだって。おまけに力も貸してくれるってさ」

そう言いながら、右手の甲に埋め込まれているジュエルシードをうっとりとした表情で眺めるなのは。その顔は完全に魅せられた人の浮かべるソレ。

「というわけで、鈴君。そこを退いてくれないかな？」

「退いてって…なのは、少し落ち着いて…」

瞬間、俺の手足がなのはの魔法、バインドで拘束される。拘束力は今のなのはの魔力が合わさり尋常ではなかった。

「!?　おい、なのは！」

「大丈夫。すぐに終わるからちょっとだけ待っててね」

そう言って、なのはは視線を離れた場所で見守っていたアリサへと移す。そのまま俺の横を通り過ぎようとする…

「だから待て。なのは」

…前になのはの腕を掴んで阻止する。

「あれ？　鈴君、バインドは？」

「解除した」

「おかしいな～。鈴君でも解けないような魔力量で設定したのに…」

それは以前の俺を基準に考えて設定したんだろう。けど、今の俺はあの出来事を経て、完全ではないが補完されている。つまり、『』だった頃の魔力や知識があるのだ。早い話レベルアップ。

……全盛期には程遠いけどね。

「鈴君はそんなにアリサちゃんが大事？」

「ああ、大事だね」

「なのはよりも？」

「…少なくとも、今のなのはよりも…な」

その言葉を聞いた途端、なのはの瞳から色が失われた。酷な事を言った自覚はあるけど、これは俺の正直な気持ちだ。別になのはが嫌いなわけではない。今のなのはを見ていられなくなった俺はこの言葉を選んだのだ。

だがこの時の俺は浅はかだった。この回答は最悪の悪手だという事に気がついていない。

「……」

「？」

「しょうがないなぁ～」

「鈴君はもっと素直になるように、お仕置きが必要だね♪」

途端に、腹部に焼けるような痛みを感じた。何が起こったのか理解できないままの俺は次いで背中に強烈な衝撃を感じ、一瞬呼吸が

止まる。
　さっきまでとは、見える光景が違う。吹き抜け螺旋階段の上階がそのまま見える…そしてさっきの衝撃。俺は墜落したのか？　墜落したんだろうなぁ。【強化】が無かったら、ミンチになっていたぞ。
　次にさっきの腹部の痛みの確認をしてみようと、俺は腹部に手を持っていく。ぬるっとした感触と、痛み、そして破れた何かの感触。顔を顰めながら手を顔の前まで持っていくと、鉄臭く、赤い液体に濡れた自分の手が見えた。この出血量からすると、結構深く傷が入っているかもしれない。
　クソ、さっき治療したばかりなのに、また出血かよ…。

「あれ、力加減を間違えちゃったかな？」

　声のする方を見ると、こちらにゆっくりと歩いてくるなのはの姿。今の発言を聞くに、この傷はなのはがやったんだろうけど、まるで悪びれる様子も無い。なのははそのまま俺の傍らにしゃがみこむ。

「…なのは…何を…」

「何って…鈴君が素直じゃないからお仕置きを」

「お、しお…き？」

「うん、そうだよ。鈴君、もう一度聞くね。鈴君にとってなのはが一番だよね？」

さっきとは微妙にニュアンスが違う質問だ。だが今のなのはを俺は…。

「今の…つぅ…はぁ……なのはは……肯定…でき…ない…」

「……」

俺の返答を聞いたなのはは無表情のまま信じられないような行動に出た。

「うん、しょっと…」

ぬる…ずぷっ！

「っ！！　があ〝あ〝あぁぁぁぁぁっ！！！！」

横たわっている俺を跨いで、馬乗りになる。そして腹部の傷を左手で弄び始めたのだ。人差し指、次いで中指、薬指と全ての指を使い、不規則に…しかし休める事無く丹念に俺の傷口に指を這わし、時折指を挿入して掻き回す。ぐちゃっと生々しい音が自分の体を通して、耳に入ってくる。

程度は浅いが、内臓を掻き回されているのだ。あまりの痛みに悲鳴が出るが、なのはは気にした様子もない。痛みから逃れたい一心から、振りほどこうとおもいっきり暴れるが、馬乗りの状態なのでそれも叶わない。

「痛い？　でも鈴君が悪いんだよ。ちゃんと素直な答えを返さないから」

「っっっぁっぁっ！！」

とてもじゃないが答えられるような状態ではない。まるで陸に打ち揚げられた魚のように暴れまわるだけの俺はさぞかしみっともない姿だろう。

暫くして、ようやくなのはは傷口を弄るのをやめる。痛みから解放され、荒い息を吐く俺を余所に、なのはは俺の血で赤く染まった自身の左手を見つめ……

おもむろに舐めあげる。

「はぁ…これが…鈴君の♪」

そしてそのままゆっくりと指をしゃぶり、血を舐めとっていく。指の一本を舐め終えるごとに、なのははぶるりと震え、恍惚とした表情を浮かべる。

全てを舐め終えた頃にはなのはの白い肌や口元は血化粧が塗られたような様相になり、表情も完全に愉悦に満ちていた。

妖艶。まだ幼い身であるが、今のなのはにはその単語がぴったりと当て嵌まる。俺は自身の知るなのはとかけ離れた、今のなのはに初めて恐怖した。

「さて、と。鈴君、もう一度だよ。鈴君は…誰よりもなのはの事が好きだよね？」

「…ぁ…ぁう…」

「うん？」

聞き取れなかったなのはがこちらに耳元を寄せてくる。

「今のなのは…は……好きに…なれない…」

「……」

「だから……以前の…なのはに…戻ってもらうぞっ！」

「えっ？」

体に残っていた力を振り絞り、馬乗りの状態のなのはを諸手突きで突き飛ばし、押し退ける。なのはの体重は年相応に軽い部類に入る。なのはの油断もあったんだろうが、力を振り絞った諸手突きでなのはは地面に弾かれる。

俺はそこから飛び掛り、なのはの右手…ジュエルシードを両手で掴む。そこからやる事は単純の一言。

「魔力…注入、開始っ！！」

「鈴君、何をっ！？」

俺の魔力をジュエルシードに直接、流し込む。ただの魔力じゃない。ジュエルシードの内包する魔力とは反対の性質の魔力を流し込んでいるのだ。マイナスにプラスを叩きつけるといった感じで。普通ならそうそうできる芸当ではないが、先生の魔法の特性の内の一つである魔力変換がそれを可能にしている。

魔法の行使中、腹の傷による痛みで集中力が途切れそうになる。けど、せっかくのチャンスをみすみす逃がす訳にはいかない。多少の無茶は…承知の上だ。

ジュエルシードを封印する術を持たない俺だが、弱らせる事はできる。そして肝心の封印は…

「アリサっ！！　封印を！！」

「わかってるわよ！！」

上階から来たアリサに任せる。

アリサは魔力もほとんど残っていないから、このまま封印しようとしても、ジュエルシードの魔力の方が大きすぎて、抵抗（レジスト）されて封印は不可能だ。そこで俺が今のアリサでも封印が可能な所までジュエルシードを弱らせる…といった寸法だ。

この作戦、俺がなのはにいたぶられている途中、こちらを目指して螺旋階段を下りるアリサの姿を捉えた時に思いついた即席の作戦である。そんな作戦なのに、念話も通さず俺の意図を察してくれるアリサは本当にありがたい。

……この以心伝心の仲の良さが、なのは暴走の原因だと考えると、ありがたいかどうか一気に微妙になった。

「っ！　アリサちゃん！？」

「グローリー、封印を！！」

《しかし、今の状態では成功率は五割を切ります！》

「それだけあれば上等よ！　ジュエルシード、封印！」

《…了解。封印開始》

なのはに埋め込まれたジュエルシードに、アリサはグローリーを突き立てるように近づける。グローリーの音声と共に、魔力が溢れ出し辺り一帯を満たす。

封印開始と同時に、ジュエルシードへの魔力注入を止め、今度は俺もグローリーを掴み、アリサの残り少ない魔力による穴を少しでも補う。

分の悪い勝負であったが、このまま封印が完了するかと思われた。
だが、

「レイジングハート！！」

《…ガガッ…ｒｙ…ｏ…》

なのはの呼びかけと共に、ジュエルシードが輝きだし、俺達のモノとは違う魔力が溢れ出した。その魔力を感じて、俺はなのはが何を目論んでいるのかすぐに察した。

抵抗（レジスト）だ。

さっき俺がやったように、ジュエルシードに魔力を流し込んで活性化させようというのだろう。それをレイジングハートが制御といった流れだ。けど、

「阿呆！　ジュエルシードの内部で魔力が反発を起こして、暴発するぞ！」

そんな俺の忠告も空しく、なのはの右手のジュエルシードが一際大きく輝き、そして…。

ガアァァァンッ！！！

輝きは辺りを白で埋め尽くす程に。轟音の後、徐々に輝きは収まっていく。ゆっくりと眼を開けた。みえる光景はまず天井。そして視線を辺りに移すと、近くにアリサが、少し離れた場所になのはが横たわっていた。どうやらさっきの暴発で各々が弾かれたようだ。

とりあえず起き上がり、傍のアリサに近づく。

「おい、アリサ。大丈夫か？」

「う～ん…な、何とか…」

いたた、と呟きながら身を起こすアリサの手を引っ張り、立たせる。アリサはそのまま、体の各所を動かし、異常が無いかどうかの確認。

「うん、大丈夫みたいね」

「それは良かった。さて、なのはは…」

次いで、なのはの無事を確認しようと、視線を向けるとなのははゆっくりと起き上がる。起き上がった事に安堵の溜め息を吐いたが、すぐに悔い改める。

立ち姿に力無く、時折ふらっと倒れそうにもなっている。そして何よりも右手だ。暴発の影響で右手から肘辺りまでバリアジャケットが千切れ跳んで、剥き出しになった肌も怪我を負ったのだろう、血によって赤く染まり、流れ出た血が床に血溜まりを造る。

そして肝心のジュエルシードだが、未だになのはの右手の甲に有

る。けどさっきの暴発、もしくは封印の影響なのか、さっきまでの強力な魔力を感じない。それでもなのはに寄生しているという事は、まだ魔力の供給機能は生きているようだ。

「ぅ…して…」

なのはの口から、声が漏れていた。最初は聞き取れなかったが、次の瞬間にはその呟きは叫びとなっていた。

「どうしてアリサちゃんばっかりなのっ！」

「！？」

「私はこんなにも鈴君が好きなのに…どうして鈴君は私を否定するの！　どうして私に振り向いてくれないの！　どうしてっ！　私だけを…見てくれないの…」

最後の方は嗚咽の混じった声だった。

一目でわかる。今のなのはは、さっきまでのジュエルシードに中てられたなのはじゃない。溜まった不安をぶつけるその姿は、年相応の女の子のソレだ。

なのはの強い想いをぶつけられた俺は、悔やんでいた。

自分は年上でなのはは年下だと、なのはの想いを友愛のソレだと勝手に決めつけて、軽い…というワケではないが、付き合ってきた。また、幼い頃のなのはの環境を知っていた事もあり、保護欲のようなモノもあったのかもしれない。

その結果、なのはの求める愛と俺がなのはに注ぐ愛に違いが生じ、なのはを苦しめる事となる。もっと考えろよ…当時の俺を殴りたく

なるが、既に遅い。

「もういい…」

なのはは急に静かになり、左手に持ったレイジングハートを片手でこちらに向ける。すると、レイジングハートがシーリングモードへと移行し、チャージを始める。ただ、その収束する魔力量はディバインバスターを行使する時、以上のモノだ。

これだけでわかった。なのはの砲撃魔法でも最強を誇るスターライトブレイカーだ。

「もうこんな酷い結末はいらない。こんな残酷な世界は…いらない。全部…壊れちゃえ…」

どこか虚ろに吐いた言葉は、最悪の結末を望む台詞だった。現実逃避の手段としてはナンセンスだ。

ともかく収束する魔力は、暴発寸前。間もなく、あの魔法は放たれるだろう。さて…どうする？

避ける？　ノン。貫通した砲撃が向こうのチームに届くかも。

阻止する？　ノン。ここまで溜まった魔力を散らすのは逆に危険。

迎撃？　イエス。

「アリサ…」

「…何よ？」

「なのはにお仕置きを頼む」

「……仕方ないわね。貸し一よ」

なのはの魔法に対してどうするのかとも聞かない。ただアリサは俺がどうにかするという事に疑いを持たない。

それだけ信じられているのなら…応えなきゃ、男が廃るってもんでしょ。

なのはの砲撃を迎え撃つために、俺も拳を突き出し術式を。馴染みの魔法陣の展開と共にチャージを開始。

行使するのは、以前も使った大技【波動砲】。補完した今なら威力も向上されているはずだが、なのはの砲撃を迎え撃つには若干、足りない。だから、別の形でなのはの砲撃を相殺する。

「魔法術式【波動砲】、ハイパードライブ型…」

ディバインバスターのバリエーションがスターライトブレイカーのように、俺の【波動砲】にもバリエーションがある。その一つがこの【波動砲】だ。

威力は通常の【波動砲】の方が上だが、これは若干、威力の下がった【波動砲】の連射による集中砲撃が可能となっている。短時間での総合的な火力ならこいつの方が上なので、この一点集中の連射でなのはの砲撃を迎え撃ち相殺する。

互いに収束する魔力により、大気が震える。俺の背後に控えるアリサはこの濃密な魔力の空間に居ながらも、いつものような自然体だった。本当に、俺の成功を信じて疑っていない。

そしてほぼ同時に……チャージした魔力が解き放たれる。

「スターライトォォ、ブレイカアァァーーーー！！」

全てを飲み込む桜色の砲撃が…

「ヲヤスミ、ナノハ…【波動砲】！！」

全てを打ち砕く青白い砲弾が…

それぞれの想いを乗せ、激突する。

・・・・・・・・・・

『なのは』

辺り一面に、立ち込める土煙によって視界は不良。でも、この空間は恐ろしく静かだった。ふと、ガラスの割れるような音が、右手から聞こえた。見てみると、私の血で赤くなったジュエルシードに罅が入って、そのまま地面に落下、割れる。途端にさっきまで、私を満たしていたナニカが抜けて、体が醒めてゆく。

さっきの魔法行使の際に、残りの魔力全てを供給した結果、抜け殻のようになっちゃったみたい。

「はは、ははは…あっははははははははははっ！！」

私はとうとう、やってしまった。大っ嫌いだったアリサちゃんを

消したのはいい。元々、そのつもりだったんだから。最初は非殺傷設定でやっていたけど、アリサちゃんの言葉を聞いて気が変わり、設定を変更したんだから。

けど、こんなつもりじゃなかった。鈴君にはお仕置きで、ちょっと怪我をさせたけど…殺すつもりなんて……なかった。それが結果はどうだ？　何もかもが憎くなり、その感情に身を任せたらこれだ。

私は…自分の手で大切な人を……。

「こんなつもりじゃなかったんだよ、レイジングハート？」

《…ザザッ…ィエ……タ…》

やっぱり聞こえない。私がジュエルシードを取り込んで以来、レイジングハートの声が聞こえなくなっちゃった。言葉のほとんどにノイズが奔り、まるで壊れたラジオを通しているようだ。

鈴君。

アリサちゃん。

レイジングハート。

みんな、み～んな、私が壊した。愛する人も、かつて友情を育んだ人も、自身の相棒も。

人を殺してしまった私は、もう誰にも顔向けできない。もう、本当にどうでもいいや。笑いしかでてくない。

「あーはっはっはははははははははっ！！」

「何がおかしいのよ、ばかなのはぁ！！」

声と同時に、誰かが土煙から飛び掛ってきた。その勢いのまま互いにもつれ合い、地面を転がる。

誰が…と確認する間もなく、胸倉を掴まれ、上体を引っ張り上げられる。

「ようやく捕まえたわよ、なのは…」

「アリサちゃん？　えっ？　何で、生きて…」

「鈴のおかげよ」

「鈴…くん？」

アリサちゃんが後ろに目配せする。何時の間にか、土煙は晴れ、視界が鮮明になっていて、そこには…

「ぐあぁぁっ！　超イテェェェ！　傷を塞いでから、撃てばよかったぁぁぁっ！」

私が負わせた傷を押さえながら地面を転がる鈴君の姿があった。

「あ、あぁ…」

その姿を見た途端、涙が自然と溢れてきた。死んだと思った大切な人が生きていた。この喜びはとても表現できるものではなかった。けどそんな感傷に浸る間も無かった。

ガツンッ！！

「あうっ！？」

「感傷は後にしなさい。あたしの話の後にでも…」

アリサちゃんの浮かべる表情はただ一つ。怒りだけだった。

・・・・・・・・・・

「さてと、言いたいことは一杯あるんだけど…まずはコレね……いい加減にしなさい、ばかなのはっ！」

ビクッ！

「癇癪を起こすってワリには度が過ぎてるわよ。ジュエルシードなんかに呑まれて…情けないわよ」

「も、元はと言えばアリサちゃんが鈴君とキスしたからじゃない！　呑まれた原因は間違いなく、ソレなんだから！」

「あれは…と、とにかくもっと、心を強く持ちなさい！　あたしやすずかだったら逆に取り込んでたわ」

「私は、二人みたいに強くない！」

「強くなれって言ってんのよっ！」

ぎゃあぎゃあと言い争う二人の姿は、先程の生死を賭けた者同士のソレではなく、普段の日常でよく見かけるソレだった。そして、そのまま喧嘩は続く。

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・
・

「なのははあいつの事が好きってのは理解できたわ。けど、それはあたしやすずかも一緒なのよ。あんたに邪魔される謂れは無いわよ！」

「あるよっ！　家では疎外感を感じて、アリサちゃん達には嫉妬して、そんな取り得も無く、惨めな私を鈴君は受け入れてくれた。私には鈴君しかいないの！」

「甘えるなぁ！！」

「ひぅ！？」

「確かに鈴は優しいからね、なのはも受け入れるでしょう。けど、そうやってもたれかかるばかりだったら、いつか鈴が潰れちゃうでしょうが！」

「あたしは…なのはと違って、甘えたり、頼ったりするばかりじゃなく、鈴の隣に立ちたいのよ！」

「っ！？」

「あんただって…さっき強くないって言ったけど、そんなはずは無いのよ」

「えっ？」

「あんたすずかの時の事、覚えてる？　すずかの事情を聞いた上で

友達でいようって言ったでしょ？　他にも魔法を最初に手に入れて、あたしを守ってくれた」

「そ、それは…無我夢中で…」

「あたし達の事を内心嫌いって感情を持っていたのに、見捨てたりせずに無我夢中で助けてくれた…その行動も強さの表れじゃないの？」

「あ…うぅ…」

「一緒に強くなるわよ」

「えっ？」

「鈴はあたし達を、何だか年下と接するみたいな時があるから、強くなって、良い女になって、振り向かせるのよ」

「え～と…できるかな？」

「やるのよ」

「拒否した場合は？」

「鈴をあたし達がいただくだけよ」

「そ、それは駄目っ！」

「じゃぁ、オーケーよね♪」

「あうぅ…嵌められたの…」

「よし…ならこの喧嘩は終了よ」

「え、喧嘩？」

「そう、あたし達は戦いじゃない。喧嘩をやったの。それなら管理局の人達も誤魔化せるでしょ？」

「誤魔化せる…かなぁ？」

「あーーもう、ウジウジと言わない！　返事はハイで！」

「は、はい！」

「そう、それでいいのよ……さて、時間がかかり過ぎたわ。行くわよ、他のみんなの様子も確かめなくちゃ」

「うん……アリサちゃん」

「ん？」

「私…後日みんなに謝るね」

「……そう」

（そういう会話は…俺の居ない所でやってくれよ…）

秋月鈴…少女達の暴露に顔を赤らめるのであった。

喧嘩！（後書き）

大変長らくお待たせしました。

急いだので、出来はアレですが何はともあれ投稿です。

今後は、活動報告も利用していこうかと思います。

そして次回で無印編は終わる予定です。

その後、いくつかのドタバタラブコメ編のようなモノを予定しています。

そしてA'ｓ編？

海鳴市在住、ご近所の魔法使い！（前書き）

今回は何故か早く書けた…何で？

これにて、無印編終了です。

ここまでのお付き合い、真にありがとうございます。

『鈴』

秋月家から数件、離れた場所にその借家はある。広大ではないが真新しく、小さな庭もあり、一家族が住むには十分すぎる家だ。

その家の玄関に俺は立っていた。右手にはＡ４サイズのファイル、左腕には少々、大きめの鍋という関連性がまったく見受けられない出で立ちだ。通報されそうな姿だが、最近では当たり前のようになったので、全然気にしない。

ともかく、いつものようにこの家の呼び鈴を鳴らす。

ピンポ～ン♪

「は～い」

ガチャッ！

扉が開いたその先に居たのは…。

「ウッス、フェイト。いつものように、定期健診だ。あと、この鍋

はお裾分け。今晩のおかずにでもしてくれ」

「ありがとう、鈴。さぁ、入って」

あの日、消えたはずのフェイト・テスタロッサだった。

フェイトの先導の元、短い廊下を歩き、途中、居間で寝ていたアルフを横目に目的の部屋へと辿り着く。先に入ったフェイトに続いて、俺も入室する。

「母さん、鈴が来てくれたよ」

「こんちわ、プレシアさん。毎度のように、定期健診で～す」

「ああ、あなたね。いらっしゃい」

ベッドに上体を起こし、本を読んでいたのは、フェイトと同じく、あの日消えたはずだったプレシア・テスタロッサだった。彼女は俺の姿を確認すると、おぼつかない動作で本を片付け、こちらへ向き直る。その姿はとても若いが、動きはまるで老人のように緩慢だ。

その間に俺もいつものように、ファイルからカルテを取り出し、準備する。プレシアさんが受診の準備が終えると、俺も健診を始める。

診察の間、あの日消えた二人が何故ここに居るかの経緯をお見せしよう。

・・・・・・・
・・・・・
・・・
・

あのジュエルシード事件が完全に終わった翌日、先生が朝早くからこんな事を言い出したのだ。

「釣りに行くぞ」

開口一番、これだったから俺はひどく困惑したものだ。そんな俺を気にせず、先生は俺の首根っこを掴み、転移で移動する。その移動先は……時の庭園だった。

現在のこの時の庭園は、時空管理局の管轄下にあり、おいそれと入っていい場所ではない。俺としても、この場所はフェイトを亡くした場所であるから、あまり近づきたくない…思い出したくもない場所であった。

「せ、先生。こんな所で何をするんですか？」

「フェイト嬢とプレシア嬢、そしてアリシア嬢のサルベージだ」

「…はぁ？」

「私が実行に移す。おまえは私のサポートに徹しろ」

「ちょ、ちょっと待って下さい！　サルベージって…二人は虚数空間に落ちたんですよ。魔法のキャンセルされるこの場所でサルベージってどうするんですか、不可能ですよ！？」

「二人にはあらかじめ、マーカーを植えつけている。それで座標特定をする。アリシア嬢についても同様だ。それに鈴よ…」

「私が”ただの”優秀な魔導師ではないのを、知っているだろう？」

その言葉を聞いた俺は閉口せざるを得なかった。俺は先生の全てを把握しているわけではないが、この人の非常識さを知っているからこそ、もしかしたら…という考えもある。

ならば俺は…疑いを捨てる事にしよう。

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・

結果から言えば成功した。地面には横たわっている二人の姿。傍には生体ポッドがあった。二人は多少衰弱しているようだが、まだ

息がある。

「よし、管理局にばれる前に逃げるぞ」

「へっ？」

「当たり前だろう。今の私達は不法侵入者なんだからな」

「い、言われてみればそうだった…」

というワケで先生の転移で再び、自宅へ戻る。

そしてそれだけで終わらないのが、秋月蓮だった。

「プレシアを移し替えるぞ」

朝と同じような感じで、言われて俺の思考は完全停止。もうどうにでもなぁれ。

やる事はプレシアさんの治療みたいなものだ。ただし、治すわけではない。プレシアさんの病魔を無かった事にするんだってさ。

『移し替える』『無かった事にする』この二つで、ある可能性を考えた。だからずばり聞いてみた。

「俺と…同じ事をするんですね？　魂の…移し替え」

「正解だ」

病の巣くっている体から、健康的な肉体への魂の移植。何という力技。

その後、庭の倉庫から地下に築いている先生の研究室へと移動する。そこに足を踏み入れた俺は驚愕した。生体ポッドの中には、知っている姿の女性がいたのだから。

「プレシアさん…ですか？　けど…若くなってませんか？」

「ああ、おまえの時のデータを参考に、新たに造り上げた肉体だ。おまえの時と違って、色々と改良を施して造ったから問題なく適応するはずだ。肉体年齢は二十代辺りに設定している。わざわざ、老衰の体を造る事もあるまい。これも術式はこちらで行う。お前はまた、サポートを頼む」

言うや否や、早速準備に取り掛かる先生。もう俺は、驚愕も疑いも捨てて、先生の準備を手伝う。まずはプレシアさんをここまで移送する事にしよう。

あ、フェイトは異常なしだったから、現在は客室に寝かせているぞ。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

・

これまた成功。さすがに先生のスペックの高さには驚愕を通り越して呆れるしかない。ただ、こんな規格外な魔法も魔力の消費が激しく、先生は回復のため数日間の眠りを要した。

そして最初に目覚めたフェイトだ。自分は虚数空間に落ちたはずと、もの凄く混乱していた。俺はそんな混乱する彼女を宥め、事情を説明するとフェイトは涙を流しながら、ひたすらに「ありがとう」と繰り返していた。

それからフェイトはプレシアさんが目覚めるまで、ひたすら彼女の傍に寄り添い、目覚めるのを待つ。

途中、アルフはどうなったかと聞いてきたので素直に答えた。

フェイトを失った（と思っている）悲しみで廃人のように。管理局の取調べにも反応なし。彼女は使い魔で、フェイトの命令にただ従っていただけで、大した情報も無し（という事になった）。フェイトとの契約も切れた（と思っている）上に、本人はフェイト以外との契約も拒否。となればこのまま消える身。ならば余生くらいはと、リンディさんやクロノの働きかけもあり、既に釈放。

現在は犬を大量に飼っているアリサの家で余生を過ごす（つもり）。あ、これは事件協力による心ばかりの報酬って事で、許しがでたらしい。

「それって…アルフは私の無事を知らないって事？」

「……あ」

・・・・・・

・・・

・

「もしもし、アリサかっ！　大至急、アルフに取り次いでくれ。緊急連絡だっ！！」

「うわ～んっ！　ごめんなさい、アルフ（泣）！」

そっからはもう、カオスだったよ。電話が切れた一分後には（何て速度だ）、ドカァァンッ！と開閉にあるまじき轟音を立てた玄関から走ってきたアルフとフェイトが久々のご対面。さらにはフェイト第一主義のアルフが珍しい事に、フェイトにビンタをお見舞い（さすがに怒ってるらしい）。そこからいくつかの言葉を交わして、お互いが抱きしめ合い、わんわんと泣く。ちょっぴり、煩かった。

イイハナシダナーとか思いながら、業者に玄関の修理を頼むために電話をかけようとすると、さらに複数の足音が聞こえてきた。

「鈴、フェイトが居るってどういう事よっ！！」

「フェイトちゃんが生きてるって本当ですかっ！！」

「鈴君、今度はフェイトちゃんに手を出す気っ！！」

…今日は激動の一日なのか、と諦めながら俺は、さり気にプレイボーイ扱いしたなのはへのアイアンクローの握力を強めるのであった。

・・・・・・・・

・・・
・

とまぁ、こんな感じで再び二人は戻って来たのだ。その後、先生とプレシアさんが目覚めたのはほとんど一緒。その日、プレシアさんは先生に説教をかまされ、反省するという事で一応の解決を。

テスタロッサ親子は向こうでは死亡という扱いになっているので、先生はこちらの世界で二人の戸籍を偽造。二人は、元々こちらの世界出身という扱いになった。現在のこの借家も、先生のツテで格安で提供してもらっているものだ。

そして問題のアリシアだが、既に魂はこの世に無いので先生でも甦らせるのは不可能。プレシアさんはその事実を驚くほど素直に受け止め、後日遺体を弔った。

その日、プレシアさんは一晩中涙を流し続けたようだ。

「…うん、魂はちゃんと定着してますね。これならもう大丈夫でしょう。今後は外へ散歩などして、体を慣らしていきましょうか」

「そう、なら良かったわ」

カルテに項目を書き加え、診察の終了を告げる。

魂を移植した後、慣れるまで体が思ったとおりに動かなくなる。経験者がやった方がいいだろうという事で、プレシアさんの診断、経過報告を先生から任された。俺の経験した道を、今度はプレシアさんが通る。先生の弟子二人が同じ経験をする。何とも因果な事だな。

健診も終わり、プレシアさんとちょっとした雑談を。

「本当、先生は何者なんでしょうね？」

「…やっぱり、あなたも師匠も全てを知っているワケではないのね」

「ええ。俺が全てを聞かないってのもありますが、先生もあまり話したがらないみたいですしね。プレシアさんの時はどうだったんですか？」

「似たようなものね。弟子入りを許された時も、余計な詮索はしないって事を条件に組み込まれたもの。何よりもまず、師匠の居所を掴むのにかなりの苦労をした覚えもあるわ」

「そうですか……」

「…けど、仕方ない事だと思うわ」

「あれだけの力を持ってますからね…」

正しい事にも使えれば、邪な事にも使える。もしかしたら先生の技術を欲しての戦争も在りうるとはプレシアさんの弁。なればこその秘匿なんだろう。

俺はその事を考え、報酬に上乗せの形で俺の魔法や先生の存在の秘匿を頼んだが…果たして何処まで守れるのやら。

そして俺は思う。先生は全てをいつかは話すと言っていたが…果たして、俺が本当に知ってもいい事なのか？

先生の弟子としては未熟すぎる俺が……。

・・・・・・・・・・

プレシアさんへの用事を終えた俺はそのまま帰る気にはならず、臨海公園まで来ていた。目的は無い。ただ、柵にもたれかかり、色々と思い返す。

どのくらいそうしていたかのか、不意に後ろから声をかけられた。

「あれ、もしかして鈴君？」

その声は俺には聞き慣れたもの。なのはだ。

「なのは…か。何してるんだ？」

「えへへ、たい焼き！」

たい焼きの入った紙袋を示すなのは。成程、食べたくなってあの屋台に買いに来たってワケね。

「鈴君は何してたの？」

「何って…別に何も…」

「成程、何かに悩んでたんだね？」

誤魔化そうとしたが、瞬時に…しかも一発で見破られた。

「…んな事ないぞ？」

「……鈴君」

「うん？」

「一緒に食べよ♪」

なのはからたい焼きを一つ貰い、二人並んでベンチに座る。

「うん、やっぱりおいしい」

「数日前に食べたばかりだろ？」

「それでもだよ」

数日前というのは、なのは、アリサ、すずか、フェイトがこの公園に集まった時のことだ。やった事は簡単。改めての自己紹介と友達になろうと宣言し、誓いの杯ならぬ誓いのたい焼きを喰い交わし

た日だ。
俺とアルフもその場に立ち会っていた。本来ならユーノも立ち会うべきだったんだが、里帰り中だったのでそれも叶わなかった。タイミングの悪い奴だ。

閑話休題。

「それで、何を悩んでたの？」

「だから悩んでなんか…」

「嘘、私の眼は誤魔化せないよ。何て言ったって、鈴君をずっと見てきたんだから。そのぐらいの変化はわかるよ。それとも、私に話せない事？」

「んな事はないけど…」

「ほら、やっぱり悩んでた」

……やられた。なのはも中々に、したたかな奴だ。これは…話すしかないか。

「あの事件で…俺は何をやれたのかなぁってな」

「何をって…」

「今のフェイトの笑顔は俺じゃない…先生のアフターケアで手に入れたモノだ。ジュエルシードだって集めたのは事実上、なのは達だ。

俺はといえば、肝心な時に何もできず。むしろ、いらない手を貸しただけのような気がする」

「……」

「あの巨大な傀儡兵にも遅れをとらなかったら、なのはとアリサの諍いも無かっただろう。そうすればその傷も無かっただろうし」

今のなのはの右手には大きな傷跡がある。手の甲を中心に、放射状に広がった決して無視できない傷跡だ。年頃の女の子がもつものにしては致命的だ。

「今回の事件は”何とかした”んじゃない。”何とかなった”だけだ。先生の言ったように為したいようにしたらこのザマだ。先生の弟子失格だな…」

「……」

「弱いよなぁ……俺って…」

今回の事で痛烈に実感した。俺は魔法が使える”だけ”だ。みんなは俺を強いというが、そんな事はない。戦闘に関しては他のみん

なよりも多い、経験があったからだ。人としての強さもなのは達のほうが遥かに強い。スタートラインが同じだったならば、俺は間違いなく大きく引き離されているだろう。

改めて実感し消沈していると、ふと隣のなのはの気配が動いた。そのまま立ち上がり、俺の正面へ。途端に感じる優しい感触。

なのはは俺の頭を優しく抱きしめていた。

「そんな事ないよ…」

「鈴君は自分が思っている程、弱くなんかない。少なくとも、私は鈴君が弱いなんて思ったことないよ」

なのはの声が響く。

「ジュエルシード集めの時は、鈴君がみんなを支えていたからできた。私のこの傷は自分の弱さが原因。フェイトちゃんに関しては私達みんなが、力及ばなかった。決して、鈴君一人が気に病む事じゃない」

なのはの優しさが心に届く。

「蓮さんも弟子だから完璧な人間になれって思ってなんかないよ。なんたって家族なんだから…」

なのはの想いが俺を包みこむ。

「もしそれでも自分は弱いって思ってるんだったら…みんなで強くなろう。みんなで…笑えるように…」

かつて、俺やアリサが言った言葉。その言葉を最後になのはは静かになり、俺を抱きこむ腕の力を一層強くする。

考えてみれば初めてだ。他のみんなが俺に愚痴や悩みを打ち明けることはあったが、俺が先生以外に弱みを見せることは。という事は、俺自身なのはの言葉に思う所があったんだろう。我ながら単純の一言に尽きるな……いや、ありがたかったけどさ。

気がつけば、目元が熱くなっていた。

「…鈴君、もしかして…泣いてる？」

「……見るんじゃないぞ。後、誰にも言うなよ？」

「…うん」

・・・・・・・・・・

結構な時間が経っていた。たい焼きも食べ終わり、話も終えた今、二人にはこの公園に何時までも留まる理由はない。

「すまないな。情けない姿を見せて」

「気にしなくていいよ。むしろ珍しいモノを見れたから、良かったかも」

「……さっさと忘れてください」

「やだ♪」

鈴はその返事に顔を顰め、溜め息一つ。どうやら、諦めたらしい。

「…さて、俺は買い物をしてから帰るけど、なのははどうする？」

「う～ん…予定もないし、一緒に行こうかな。いい？」

「いいぞ。んじゃ、行くか」

「うん！」

なのはの元気な返事を受け、二人は歩き始める。なのはの強い要望で鈴は手を繋ぐ。慣れたはずなのに鈴の顔が少し赤いのは、ちょっとした心境の変化故なのだろう。

やがて二人の姿は見えなくなった…。

少年・少女が集い、出会った魔法。皆の未来に多大な影響を及ぼした大きな力。

この先、その力をどのように振舞うかはわからない。正に使うのか…あるいは…

しかしそのような漠然とした”未来”ではなく、笑いあう”今”を謳歌する。

これは…そんなご近所の魔法使い達の、ほんの一幕でした。

※おまけ劇場

1・若さとは…

大きな姿見の前。上下、黒の下着姿のプレシア・テスタロッサ。

「……」

鏡に顔を近づけ、頬をゆっくりと撫でまわしている。どうやら肌の張り具合を確認しているようだ。

「……」

腰に手を当てたり、腕を伸ばしたりしてモデルのようにポーズをとってみる。

「……」

腕を組み、胸の谷間を強調しながら流し目。ちょっと悩ましげなポーズをとってみたり。

「……（グッ！）」

小さく、ガッツポーズ。小声で「師匠、感謝します」と聞こえる。

と、

「「……」」

扉の隙間からこちらを伺っていた、娘&使い魔と目が合った。

「……」

「「……」」

「……＾＾」

「「……；；」」

局所的な雷がテスタロッサ家に落ちたそうな。

2・したたか…

夜の高町家。なのはの自室にて…。

「言われたのは見るなって事だから、撮影はＯＫだよね。レイジングハート、ばっちり撮れた？」

《イエス、マスター。最高画質を保証します》

「ふっふっふっ。ちょっぴり涙目鈴君のレア画像、これを逃す手はないでしょ♪」

《さすがです、マスター。そのしたたか振りに敬意を表します》

「よーし！　この調子で鈴君のレア画像、ゲットだ！」

《一生ついていきます、マスター！　後、鈴殿の画像のメモリー保存の許可を！》

なのはの自室の外。なのはの笑い声に心配になり、こっそりと盗み聞きしていた高町家の人々は新たに決意を固める。

両親・長女は、必ず鈴をなのはの婿へ…と。

長男は…更なる殺意の波動に目覚め、後日ケリをつけよう…と。

3・『夜』の一族…

「フフフ、クロス…冗談にしては度が過ぎてるんじゃないですか？」

《ほ、本当です主。我々、デバイスネットワークの確かな情報です》

※デバイスネットワーク…レイハ・バルディッシュ・グローリー・クロスの雑談による情報共有。つまりデバイスの井戸端会議。

「じゃあ何かな？　鈴君とのキスを経験していないのは私だけ？」

《そうなりますね。ところで主、そろそろ力を緩めていただきたい。これ以上の圧力は、私の内部の精密機器に深刻な影響を及ぼします》

「ふふふふふふふふ……」

《あっ！　今、私から変な音が！　主、あるじぃぃぃーーっ！！》

「どうしよう…まさか、なのはちゃんにアリサちゃんがそこまで行っていたなんて…」

アリサが自室で雑誌を読んでいると、記事の一つにあったキスという単語を見て物思いに耽っていたときにクロスからの突然の申告を経て、今に至る。

クロス？　そこにうち捨てられてますが何か？

ちなみに鈴の経験したキスは、ぶっちゃけ女の子が憧れるようなソレではないが、すずかはそれを知る由もなし。

「どうしよう…どうしよう…」

何がどうしようなのかは、本人のみぞ知る。ただ二人に先を越されたという事実が彼女を蝕む。

部屋を暫くうろついていたすずかだったが、さっきの雑誌の記事の続きを見て思い立つ。

「っ！？　これです！？」

普段のお淑やかさを感じさせない速度で部屋を飛び出る。

ちなみにその記事には『大人の女性特集』と書かれていた。小学生のすずかには明らかに早すぎる内容だった。

「お姉ちゃんっ！！」

「わぁっ！　ビックリした！　ど、どうしたのすずか？　そんなに急いで…」

すずかは力強い歩みで姉の前に立ち、言い放つ。

「私の勝負下着を見繕ってください！　そして夜のテクニックも教えて！」

すずかは他の二人を引き離すどころか、鈴を連れてのワープを試

みるようだった。

・・・
・・
・

後に姉は語る。

「ええ。私はあの時、あの子から感じたわ。『夜の一族』では収まらない『夜の女王』としての資質を。いろんな意味で」

ああ、『夜の』ってそういう…。

海鳴市在住、ご近所の魔法使い！（後書き）

以上です。

いざ、見てみると長引きすぎましたね。

この後は、いくつかの日常編でも書いてみましょうか。

その後に、A-s編…かなぁ？

色々と捏造設定がありましたが、これは？と思うところがあれば遠慮なく、お申し

付け下さい。可能な限り返答いたします。もしくは修正を…。

※砂糖のように甘い話を書いていたが、できたのは砂糖”醤油”だった！（前書き）

シリアスばかり書いていたので、バカ話が書きたくなった也。

ネタ回也。

例によって、キャラ崩壊注意也。

※砂糖のように甘い話を書いていたが、できたのは砂糖”醤油”だった！

『すずか』

今日のお天気は、雲一つ見当たらない快晴。頬を撫でる風は、強い日差しの熱を和らげる心地よい風。ちょっと強めに吹いた風がワンピースのスカート部分を揺らす。

私、月村すずかは臨海公園にて人を待っています。待ち合わせよりも少し早い時間にも関わらず、その人はやって来ました。お相手は…

「あれ？　もしかして待たせてしまったか？」

「ふふっ、そんな事ないですよ、鈴君」

私達を支える、大切な人。

事の始まりは、お姉ちゃんがくれた映画のチケットでした。つい最近、公開されたばかりのラブロマンス映画。テレビなどでも告知が頻繁に行われた、この夏期待の新作と掲げられた映画です。どのような経路で手に入れたのかは不明ですが、これを二枚私にくれました。

『これでデートの口実ができるでしょ？　そしてあわよくば…』

ぬふふ、と不埒に笑うお姉ちゃんを魔眼で無理矢理黙らせます。私の魔眼の力は、お姉ちゃんでも簡単には抵抗できないほどに強まってます。

…でも、お姉ちゃんの言おうとしてる事の先はわかります。

あの事件から一月以上、経つのですが……まだなんです。私と鈴君…その、キ、キス…が（／／／）

中々、二人きりになる機会がなく、日々が過ぎていき私もちょっとばかり焦っていました。そんな時にお姉ちゃんが与えてくれたこのチャンス。逃しはしません！

このデートを機に、鈴君とのキスを！　あの二人との遅れを取り戻すのです！

えっ？　『夜の』計画はどうなったのかですか？

…ワタシノログニハナニモアリマセンヨ。

「で、見る映画ってどんなの？」

「これです」

「何々、『恋する乙女は片手で竜をも殺す』？　……ああ、ＣＭとかの…」

「はい。最近、話題のラブロマンスものなんです」

「そ、そうか。ラブロマンス…なんだ（殺すって…殺し愛じゃないよな？）」

「…もしかして苦手だった？」

「うえっ！？　そ、そんな事ないぞ、うん。じゃ、じゃあ…時間もアレだし、そろそろ行こうか！」

「はい！」

何だか戸惑っていたようですが、鈴君はすぐに行動を開始します。私も鈴君の隣に立ち、歩きます。

まだ時間は午前中。今日一日…この二人っきりの時間を存分に堪能させてもらいます。邪魔者も入らないように、手は打ってますし。というわけで早速、手を繋いでもらう事にします。

・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

一方、その頃。高町家付近、上空にて…。

「三人とも、そこを退きなさい」

「そうだよ。私達の邪魔をしないで。ユーノ君、この結界を解いてよ…」

「ごめん、なのは。それはできないんだ」

「すまないねぇ、二人とも。でも、アタシの骨付き肉のため…ここを死守させてもらうよ」

「ごめんね。けど…私はすずかには逆らえないの…怖いから…」

互いに向かい合うのは、共に顔見知りの五人。しかし、漂う緊迫した空気は戦場のソレ。

対峙している理由は簡単。すずかの抜け駆けを察知したなのはとアリサ。邪魔されないようにすずかが打った手はユーノ、フェイト、アルフという三人の抑止力。

「「「「「……」」」」」

各々がデバイスを…バリアジャケットを…騎士甲冑を展開する。

そして、

「「往生しなさいっ！！」」

「「「返り討ちっ！！」」」

あほらしい戦いが始まった。当人達にとっては、ひどく真面目だが…。

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・

海鳴市都心部に到着。早速映画館に入ります。話題となっているだけあり、既に大勢の人たちで賑わっています。下手をするとはぐれてしまいそうな人波ですが、私の左手に鈴君の温もりを感じている間ははぐれるなんて事はありません。

係の人にチケットを渡し、漸く入場できました。席は丁度、真ん中辺り。特に苦も無く見られます。それでは鈴君と一緒に、映画を堪能します。

えっ？　子供だけで入れたのか…ですか？

大丈夫です。ちゃんと係の人の眼を見て誠心誠意、お話をしたら分かってくれました。

・・・・・
・・・
・

『人の恋路を邪魔する奴はぁ！　馬に蹴られて地獄に堕ちろぉ！！』

『ねだるな、勝ち取れ！　さすれば与えられん！』

『好きだぁー！　サラ！　愛しているんだ！　サラァー！』

（バトルがあって、ロボットが出て、恥ずかしい告白……ラブロマンスとは一体、何だったのか…）

「……素敵です（ボソッ）」

（えっ！？）

・・・・・・

・・・

・

映画を堪能した後は、近くのファーストで少し遅めの昼食。

「たまにはこういった物が食べたくなりますね」

「まぁね。けど俺は作るのが面倒な時とかに利用するな」

「家事を全て一手に引き受けてますものね」

「かと言って先生にまかせると…なぁ。ユーノが居るからマシになったけど…」

「小学生主夫ですね」

「何てうれしくない称号だ…」

・・・・・・

・・・

・

立ち寄ったゲームセンターでクレーンキャッチャーに興じてみたり。

「人形二体、取ったどぉーー！！」

「やりましたね♪　けど、この人形…何処かでみたような…」

「俺もだ。何処だったかなぁ？」

『シャンハーイ』

『ホラーイ』

「「……」」

・・・・・

・・・

・

露天商のアクセサリーを物色してみたりと。

「見てみろよ、すずか。クロスがたくさん並んでるぞ」

《それは聞き捨てならんぞ。私は二～三千円の値で収まるほど安くはないぞ、若造》

「クロス…それってあなたは値がつく程度って事になるよ？」

《あああぁぁぁぁーーっ！！》

「今度。ヤフオクにでも出品してみるか？」

《やめてくだされい！　それで生半可な値で落札されると…私は…私はぁぁぁっ！！》

「必死すぎる…」

一日を使い、鈴君との楽しい時間を満喫する。そしてどんなに楽しい時間も終わりは必ずやってくる。

・・・・・・・

・・・・・

・・・

・

一方、その頃…。

「敵の砲撃を確認！」

「防御魔法展開！　総員、対ショック、対閃光防御っ！！」

「駄目っ！！　間に合わないっ！！」

「ディバィィンバスタァァーーッ！！」

「ハルバードランチャー、セット！！　ファイヤッ！！」

戦いは白熱、佳境に入っていた…。

・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
・

「いや～、遊んだ、遊んだ」

「クスッ、そうですね」

夕日に照らされる臨海公園。私達は再び戻ってきました。夕日を浴びながら体を伸ばす鈴君を見るに、本当に楽しかったのでしょうね。私も心から楽しむが出来ました。

楽しめたのですが…内心はちょっぴり焦っていました。思い起こせば、デートの最中も何度かいい雰囲気になっていたはずなんですが、あまりの楽しさに当初の目的をキレイに忘れていたんです。そして気がつけば、こんな時間。せっかくのこの機会。これを逃せば、次は何時になるのやら…。

そんな風にモヤモヤとした気持ちを抱えていると、不意に頬に冷たい感触が。

「ひゃうっ！」

「難しい顔してどうしたんだ？　ほれ」

鈴君はその手にオレンジジュースを持ち、問いかけてきます。さっきの冷たい感触はコレだったようですね。そのまま素直にジュースを受け取ります。

「あ、ありがとうございます…」

「ん。それで、どうした？」

「えっ？　い、いや何でもありませんよ！　本当に、えぇっ！」

「？　そうか？」

とてもじゃないけど、言える筈がありません。

「それにしても…」

「？」

「あれから一月以上が経つんだな。早いもんだ」

「そうですね…」

ベンチに座った私達はそれぞれの飲み物で喉を潤す。

あれというのはもちろん、ジュエルシード事件の事です。私達の生活を大きく変え、私達の絆を新たに結んだ切欠。各々の『強さ』を新たに問いかけた日々。

「鈴君…」

「うん？」

「私は…強くなれたんでしょうか…？」

・・・・・・・・・・・・

『鈴』

「なってる」

全くの躊躇いも無く、即座に返した俺の返答にすずかはポカンとした表情になっていた。

「戦闘力云々だけじゃない、人としてもすずかは強くなっている。それについては十分に自信を持ってもいい。断言しよう…っつーか

何？　まだ自信を持てないのか？　フェイトに勝っておいて」

「いえ…そういうワケではないんですけど…」

「んじゃ、何？」

「あの事件の後のなのはちゃんとアリサちゃんは…何と言いますか…」

「ああ、成程…」

すずかは言葉にするのを難しそうにしているが、言いたい事はわかる。あの二人は例の戦いを経て、妙な絆が生まれ、それが輪をかけて強さを生み出している。

そしてすずかはその場に居なかったため、それに対して自身と比べてしまうのだろう。俺から言えば、みんなが強くなっているから比較するだけ無駄のような気がしないでもない。

生死をかけて戦い、生み出された絆。

よく王道的な漫画であるものだけど、あれはあながち嘘じゃないなと俺も感じたものだ。なのはとアリサの戦いは飽くまで喧嘩としてすずか達には認識されている。命を賭けてた…何てのは知らなくていい事だと俺は思っている。

「さすがは…鈴君を取り合っての喧嘩をした二人です」

「……」

あらためて言葉にされると、すっごい恥ずかしい。俺はそこまで

上等な人間じゃないというのに…。しかもあの戦いの時に、拾った会話ではすずかも俺を好いてくれているらしい…。

「鈴君…」

「…ぅん？　うおっ！？」

気がつけば、すずかの顔が物凄く近くにあった。こちらを見つめてくる表情は真剣そのものだが、あまりの近さに顔が赤くなってしまう。この赤さを誤魔化してくれる夕日に今は感謝。

「鈴君は…あの二人の事が好きですか？」

「…好きだぞ」

「では…私の事はどうですか？」

「当然、好きだぞ」

「それは友達としてだけですか？　それとも…」

気がつけば退路が無かった。

もちろん、すずかの事は好きだ。それだけじゃない。なのはだって、アリサだって、フェイトだって、ユーノだって、アルフだって、先生だって…。その中から『恋』として好きなのは？と聞かれると答えられない。

ヘタレと言う無かれ。本当にそういう事に関してはわからないのだ。しかも、なまじ真剣な問いかけだから、中途半端な返答も出来ない。

思考に暮れ、俯いていた俺の顔をすずかは両手で上げ、強引に互いの視線を向き合わせる。

「すず…か？」

「私は鈴君が好きです。もちろん、友達としてだけではありません。一人の女の子として好きです」

知っていた。けど、本人の口から改めて言葉にされた事で頭の中が真っ白になる。さっきまで思考していた事が全部、吹き飛んだ。何かを言わなければと、口を動かすがうまく言葉が出ない。

「すずか…俺は…その…」

「ふふっ」

俺がヘタレていると、すずかはさっきの真剣な表情から一転、悪戯っ子のような小さな笑いと表情に浮かべる。

「鈴君はみんなが好きなんですね」

「へっ？」

「みんなが同じくらい好きで、誰かに絞る事ができないんですね。思っていた通りです」

「あ～…」

「私もそれを知っています。だから…今は返答はいりません。私は鈴君が好き。それだけを知っていただければ、いいです」

正直助かった。問題の先送りという日本人特有の悪癖だが、今の俺ではまともな返答ができそうになかったからだ。

ホッとしている俺を他所に、すずかには続きがあったようだ。

「そして…」

「？」

「私の想いが本物だという証明を…受け取って下さい」

眼を閉じ、ゆっくりとこちらに顔を近づけてくる。すずかの両手で顔を押さえられている俺にはそれから逃げられる術などない。

そして…俺とすずかの唇が重なｒ

ドッガァァァァァァァァァンッ！！！！

る寸前に、背後から爆音と衝撃。そしてわずかな地響き。

ビックリして俺達は背後を振り返る。まず見えたのは、歪んだ空間。何時の間にか結界が張られていたようだ。そして立ち込める土煙が晴れるとそこには…。

「すぅぅぅずぅぅぅかぁぁぁ…」

「スコシ…アタマヒヤソウカ…」

見知った二人。なのはとアリサだ。ただ纏う気配…というか、オーラはもの凄く禍々しい。バリアジャケット、騎士甲冑は強敵相手に戦闘でも繰り広げたのか、所々が擦り切れて、ボロボロだ。だが、それとは裏腹にランランと輝く殺気を帯びた瞳が恐怖を駆り立てる。

「なのはにアリサ…その格好は…一体…？」

「……チッ。しくじったんですか」

…あっれ～？今、隣から舌打ちが聞こえたような…。すずかが？ないない。気のせい、気のせい。

……気のせい……だよ……な？

「すずか…抜け駆けだけじゃなく、ユーノ達を放ってまで足止めを目論むなんて…本気のようね」

「オマケニイマ、リンクントイマナニヲシヨウトシテタノカナ？カナ？」

怒り心頭のアリサ。その怒気は周囲に嵐を呼びそうな程だ。

そしてなのは。

…笑顔だ。ただし、眼が笑っていない。その不気味な笑顔は、漫画家の藤田和〇郎がよく描くアレみたいだ。よくわからないと言う人は古本屋とかで調べてくれ。うしおととらとか…。

対するすずかは、二人のプレッシャーなどどこ吹く風。それどころか、恐ろしい行動に移した。

「何って…こうしてました」

言うや否や、さっきと同じように俺の顔を両手で掴み、

有無を言わさず、唇を重ねてきた。

「「あぁぁぁーーーーーーーー！！」」

二人は叫ぶが、俺の耳には入らず。何しろ脳内は理解が追いつかず、それどころか真っ白。でも何処かで、このまま天に召されろというお告げが聞こえる。

やがて、ゆっくりと名残惜しそうにすずかは唇を離す。

「…ふぅ……ふふっ、とうとうやっちゃいました♪」

小さく悪戯っ子のように笑うすずか。しかし湧き出る羞恥心は隠せなかったのか、夕日を浴びながらでもわかるくらいに顔が赤い。ついでに俺も同様に顔が赤くなっているだろう。

「これが、私の証明です…」

「すずか…」

「そして…これからも、よろしくお願いします」

感じるのは気恥ずかしさと…すずかの真剣な想いによるうれしさ。このまま俺とすずかの二人だけだったのなら、このまま流され、行くとこまで行ってしまいそうな雰囲気が漂う。

そう…俺達二人だけだったならな。

「「そこまでよっ！！」」

どこかで聞いたことのあるような紫でもやしな台詞の『待った』をかける二人の声により、おれはしょうきにもどった！

「あたし達を差し置いて、何を二人の世界に浸ってんのよ！　鈴も鈴でデレデレするな！！」

「スズカチャンニハオハナシガヒツヨウダネ。あ、鈴君も後でお話しようね」

ざんねんおれのぼうけんはここでおわってしまった！

なのはの死の宣告で膝から崩れ落ちる。『約束されたお話（物理）』により目の前が真っ暗になる。

しかし、捨てる神あれば拾う神あり。そんな俺に守るように立ち塞がるのはすずか。その神々しいく、頼もしい後姿に俺のすずかに対する好感度は急上昇！

女の子に庇われて情けないのはわかっているが、マジで怖いんだよ！

「まぁまぁ、そもそも今日は私が鈴君を遊びに誘っただけじゃないですか。何処に怒る要素があるんですか？」

「抜け駆けって要素が無けりゃ、あたしだって此処まで怒らないわ

よ！」

「おまけにユーノ君達を動かしてまでの徹底っぷり！　そして鈴君にキスまでっ！」

「だってお二人は鈴君とキス、してるんですよね？」

「あたしのは…その…人命救助的な…」

「私は…えっと…正気じゃなかったというか…」

途端に眼を逸らす二人。俺のキスが奪われていたのは知っている。聞く限りではその時の俺は意識が無かったらしい（デバイスのみなさんが教えてくれた）

だから二人のは純粋な意味でのキスとは違う気がする。

「だったら問題ないです！」

「「異議ありっ！！　あたし（私）も純粋なキスがしたい！！」」

もうそこからは泥沼。お互いが主張・跳ね除けるの繰り返しで、ぎゃあぎゃあと。三人寄れば姦しいとは何時、何処で誰の言葉だっただろうか…なんて当事者であるはずの俺は、ハブられて蚊帳の外。割って入るべきなんだろうけど、神は言っている…ここで割って入るさだめでは無いと…

暫く放置していたが、気がつけば辺りには不穏な空気が漂っていた。俺はこの空気を知っている。これは…戦場の空気だ。

「ふふふ…すずか。あなたはいい友人だったけど、あなたの抜け駆けがいけないのよ」

グローリーを構えるアリサ。アリサがアレを担いだら用心せい。

「すずかちゃん…少し、頭冷そうか…」

レイジングハートを向けるなのは。吸血鬼を打ち倒すのは　いつだって人間だ。

「クスッ…お二人には山ほど説教があります。楽しみに待っていてください」

クロスを突き立てるすずか。諸君、派手にいこう。

一触即発の空気に飲まれてた俺が我に返った時には遅かった。退避しようにも間に合わず。

ドドドォォォォォォンッ！！！

なのは達の魔力の衝突により起こった爆発に吹き飛ばされて海に吹っ飛ばされた。そして着水。水没。

（浸水…だと。ばかな…これが俺の最後というのか…）

現実逃避に精を出していた。何でこんな目に合うんだよ。俺が何をしたって言うんだ。

…何もしなかったから、問題があったのか。

（ああ…神様、助けてください…）

神（、乙、）＜貴様には水底が似合いだ…

（誰だっ！　てめぇ！）

かくして、楽しかった一日は情けない終局を迎えたのだった。

えっ？なのは達の決着はどうなったのかだって？

ボク、ヨクワカンナイ…。

※砂糖のように甘い話を書いていたが、できたのは砂糖”醤油”だった！（後書き）

ラブコメ展開とかは普通に好きなのだが…できたのはコレ。

ついカッとなって書き上げた。

さて、つぎはどんな日常話にしようか…。

……うちの主人公は最強系とは縁が無いなぁっと思った。

※ウィスキ～が、お好きでしょ♪（前書き）

お茶濁し、お茶濁し…っと。なのですっごく短いです。

A-ｓ編は構成半分くらいまで固まってますが、まだ先になります。

もう暫くお待ちください。

※ウィスキ～が、お好きでしょ♪

「ふぁぁ～…おはよう、母さん…」

早朝、眠たい眼を擦りながら居間へとやって来るのはフェイト・テスタロッサ。寝起きだから髪は所々がハネて、着ているパジャマもヨレヨレだ。プレシアと和解する前の彼女は、この辺りをキッチリしていた筈だが、望んでいた母との暮らしに充実感を得て気が抜けたのか、少し怠惰になってしまったようだ。

「…？　母さん？」

いつもなら返ってくる返事が無い。代わりに狼形態のアルフが居た。口に何やら紙を銜え、フェイトに差し出してくる。その紙には見慣れた彼女の母の字で書かれていた。

『フェイトへ

師匠から急な要請が入ったので、二日ほど空けます。話は通してあるので、その間は師匠の宅で過ごしなさい。あまり鈴に迷惑をかけないようにね。

プレシア』

「そっか…母さん居ないんだ…」

少しの間といえど、会えないのはフェイトにとってはやはり寂しいのだろう。しかしその反面で、大人の居ない鈴の家で過ごす二日間に…夏休みのお泊りというイベントにちょっぴりの期待に胸を膨らませている。何時の時代も子供にとって『お泊り』というイベントは楽しみなのだ。

「だったら早速、準備しないとね」

アルフもこくこくと頷いて肯定の意を示す。返事に満足したフェイトは身支度を整え、再び自室に引き返すのだった。

・・・・・・・・・・

「こんにちわ～、お邪魔します」

『邪魔するよ』

フェイトがやって来たのはお昼の時間帯の少し前。玄関で出迎えたのは、この家の居候ユーノだった。

そのまま居間に通され、鈴にもあいさつをする。
鈴は昼食の準備なのか、サヤインゲンの筋取りをしていた。手つきは手馴れたものでそこら辺の主夫にも負けない速度と正確さだ。
フェイトはそんな主夫の姿に、鈴は生まれてくる性別を間違えたのかなと偏見たっぷりの考えをもった。
特にやることも無いからとフェイトは鈴の手伝いをする。アルフはユーノとゲームに興じる。最近はこの二人、妙に仲が良い。お互い、動物として過ごす事が多いから波長が合うのだろうか。
どうでもいい話だが、この二人は動物形態の時に近所の野良犬や野良猫を統括していたりする。本当にどうでもいい話ですね。

「フェイトもアルフと一緒に遊んでて構わないんだぞ？」

「ううん。お邪魔になってるんだから、これくらいの事は手伝わないとね…鈴みたいにうまくできないけど」

「気にしなくていいのに…」

「大丈夫だよ。それにしても、蓮さんと母さん、どこに行ったのかな？」

「夜中に出て、なんか国外に行ったみたいだぞ」

「蓮さんのお仕事？」

「さすがにそこまでは聞いてないな。あの人がフラッと居なくなるのは、いつもの事だしな」

「母さん…危ない事をしてなければいいけど…」

「ま、大丈夫だろう。たとえ危ない事をしてても先生がついてるんだし、プレシアさんも修羅場を知ってるんだから」

「…うん。そうだよね」

そんな穏やかで、平和な一時だった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

・

そんな穏やかな一面とは裏腹に、件（くだん）の大人二人組みは…

「プレシア、もっとスピードを出せ！　追いつかれるぞ！！」

「これでも限度一杯まで踏んでます！！」

バァン！　バァン！　ダダダダダダダダダッ！！

国外で田舎マフィア相手に、銃撃戦&カーチェイスを繰り広げていた。

・・・・・・・・・・

場所は変わって、ここはとある街のとあるＢＡＲ。

その店の隅のほうのテーブルで二人は晩酌をしていた。たださっきまで追われていた二人だが、蓮のほうは平然と注文した酒のグラスを傾け、プレシアのほうは机に突っ伏したまま、傍らの酒に手をつけずピクリとも動かない。どうやら、心身ともに憔悴しきっているようだ。

「どうしたプレシア？　呑まないのか？」

「……何で、師匠は平然としているんですか？」

「慣れているからな」

どちらもそれなりの修羅場を潜ってはいるようだが、この辺に肝っ玉の違いが出ているようだ。

「というか、おまえが弟子だった時にも同じような経験をさせた事があるだろうが」

「あれは師匠がそう差し向けたんでしょうが！」

「うん？　そうだったか？」

「白々しい…」

プレシアも漸く顔を上げ、出された酒に口をつける。ただ、まだその顔には疲労感が見受けられる。

「それで…目的の物は得られたんですか？」

「ああ、これだ」

そう言って蓮がポケットから出したのは、五百円程のサイズの小さなコイン。ただ硬貨と違ってその表面に刻まれたのは幾何学な紋様。まるで魔法陣のような…。

「……これは…機能は死んでいますが、ロストロギアですね？」

「正解。さすがだな」

今回の蓮が国外までやってきた目的はコレだった。蓮は骨董品収集コレクターである田舎マフィアを相手にこのロストロギアを手に入れようとしていた。

取引で手に入れようとしたがその際、持ち主のボスがセクハラを働いたために蓮の怒りを買い、殴られる。ボス怒る。そして追走劇である。

地球は魔法文化も無く管理外世界に位置する地球だが、稀にこういった本物の物品が存在する。蓮は時折、そういった本物を見つけだし、調べる。それは彼女がずっと行ってきた行動だ。

「しかしこれには魔力も感じませんし、使えませんよ？」

「使うつもりは無い。私が知りたいのはその中身。使われている技術等だ」

「それを知ってどうするんですか？」

「……解きたい…かな？」

「何をですか？」

「秘密だ」

蓮はコインを再び、ポケットに仕舞いこみ酒を呑み始める。怪訝に思ったが、プレシアも蓮に倣い、酒を呑む。そしてふと思い返す。

（そうだった。師匠はこういう人だった…）

プレシアが思い返すのは、弟子入りした当初の記憶。

・・・・・・・・・・

まだ自分大魔導師と呼ばれる前だった頃に、プレシアは一時期、魔導師としての成長の壁に当たっていた。スランプだ。周りからも優秀という評価を受けていた彼女は、何をやってもうまくいかず、自信を喪失しかけていた。

そんな時に、偶然…本当に偶然、一目だけだがカレン（当時の蓮の名前）の魔法を見る機会があった。その魔法はミッドでも知れ渡っているごく一般的な魔法だったが、見る人が見ればその実、とんでもないレベルで行使されているのがわかった。

それからのプレシアは蓮を探す日々が始まった。白髪に黒瞳という特徴的な姿から、すぐに見つかるだろうとタカをくくっていた彼女だったが、意に反して全然見つからない。閲覧可能な情報を漁っても、人の噂を頼りにしても見つからない。

長い時間をかけ、ようやく出会えた時にプレシアは感無量と思ったほどだ。そしてプレシアの開口一番。

『わ、私を弟子にしてください！』

カレンはこの時、ポカンとした顔だったがすぐに大爆笑。そしてすぐに弟子入りを承諾した。そのあっけなさにプレシアの方が戸惑ったぐらいだった。あっけなく承諾した理由としては、

『探そうと思って私を探し、そして辿り着いた。それだけで君は優秀だ』

とプレシアの実力が認められたからだ。
弟子入りの条件は、決してカレンの名を世に出さない事とカレンのヘタな詮索はしない事だった。
プレシアはカレンの弟子として過ごす日々が始まった。既存の魔法・技術の画期的な教え、高レベルの魔法の行使の仕方、心構えなど、今まで習ってきた事は何だと思うほどのレベルだった。だがカレンは既存の魔法技術以上のものを教えることは決してなかった。プレシアはカレンが扱う独自の魔法体系を教えてほしいと願い出た事もあったが、受理されなかった。

それからのプレシアはスランプが嘘のように実力を伸ばしていった。師弟の過ごす日々は暖かく、たまにデンジャラスな出来事も経験するが、概ね良好だった。
そしてプレシアとカレンの出会いが唐突であったように、別れも唐突であった。
いつものようにカレンの住居に訪ねるとそのはもぬけのカラになっていたのだ。昨日まであった生活臭は一夜で消えていた。ただそのもぬけのカラの住居にあった一通の手紙。

『ワケあって、これ以上の教授は無理となった。元気でな　カレン』

随分とあっさりとした別れであったが、プレシアは納得していた。彼女との別れはこういうものになるだろうと予測していたからだ。
そしてプレシアの師弟の日々は終わり、かつての日々が始まる。

数年後、プレシアは『裏』を知るようになった時、カレンが『魔女』と呼ばれる存在だと知る。

・・・・・・・・・・

「フフッ…」

「…何だ？　急に笑い出して」

「いえ、昔を思い出しまして…」

「あ～、懐かしいな。あの頃のおまえは弄くりがいがあったのになぁ…」

「師匠には何度、泣かされたことか…」

「私なりの愛情表現だ」

「わかってますよ」

プレシアと蓮…互いに微笑み合い、今一度グラスを鳴らし、傾ける。

嘗ての日々を肴に二人の夜は過ぎていく。

・・・・・・・・・・

さて、海鳴市の平和な夜は…

「「「はやくwはやくwはやくw」」」

「うっせぇ！　黙って待ってろ、欠食児童共がぁ！！」

「アタシは肉！」

「僕は野菜たっぷりなもの！」

「私も！」

「（＾ω＾＃）ビキビキ」

夕食は辛さを極限にまで上げたチゲ鍋也。

教訓・台所を預かる者を怒らせるな！

※ウィスキ～が、お好きでしょ♪（後書き）

蓮とプレシアについては、もっと深く掘り下げるつもりでしたが、長すぎるのも

アレかなと思ったので、ダイジェスト風に。

A'ｓ編なんですが、追加ヒロインが一名になってしまった。どういうことなの…。

魔法使いは非日常？（前書き）

構成もだいぶ固まってきたので、執筆、投稿。

しかしながら、今後も遅筆に変わりはないであろう作者はダメですね。

とにかく、大変長らくお待たせしました…えっ？　だから別に待っていない？

……何はともあれＡ－Ｓ編、始まります。

魔法使いは非日常？

さてはて、様々な出来事を経ながらも掴み取った日常を過ごす、海鳴市在住のご近所の魔法使いさん。

しかし主人公というのは大なり小なり、トラブルに巻き込まれやすい者。

今回は『特』がつく程の『大なり』のトラブル。果たしてどのような事が起きるのか…。

『鈴』

「やれやれ…本当に寒いなぁ」

呟きながら、マフラーを巻きなおす。寒いのも当たり前。昼間のまだ陽が照る時間帯とはいえ、間もなく十二月に…冬に入ってるんだからな。

どうも。この海鳴市で魔法使い小学生をやっている秋月の鈴です。

あのジュエルシード事件から数ヶ月、戻った日常のありがたさを噛み締めながら過ごしてます。数ヶ月経ったといっても、身の回りでは大した変化は起きておらず、まさに順風満帆といったところです。学校ではフェイト、ユーノを新たに加えての日常。日常では魔法が加わるものの、やっぱり平和。日常とは良いものだという真理を改めて実感してます。

ただ、今日はその穏やかとはちょっと違う一日になるかも…。

目的地が見えてきた。目の前に建つ煌びやかな建物、ゲーセンだ。その入り口に立っているのは一人の少女。長袖のシャツにジャケットを羽織り、ハーフパンツ姿。変な形の首飾りをつけた赤毛の少女。

その少女は俺の姿を確認すると、にぃっと口唇を吊り上げて獰猛な笑みを浮かべる。

「逃げずに来たみたいだな。その度胸は褒めてやる！」

「お褒めに預かり、恐悦至極…」

少女の挑発を軽く受け流す。そんな俺の態度を少女は気にした様子も無く、店内に入っていく。俺も少女の後に続く。

これから赴くは戦場。俺達は敵同士。ならば互いに言葉など不要。戦いが会話なのだから。

それぞれ向かい合った筐体の前に座り、硬貨を投入する。ラウン

ドコール開始と共に、俺達は勝負に集中する。

・・・・・・

・・・・・

・・・

・

そもそもこの状況は何？　と思う方に説明しよう。

あれは二日前だったろうか…学校が終わり、スーパーのタイムサービスまでの時間つぶしで立ち寄ったゲーセン。そこで、この少女がやっていた格闘ゲームに乱入、そして勝利を掴む。すると間髪入れずに少女はさらに乱入。結果、返り討ち。それが何戦か続いたが、そろそろ時間だったので切り上げるため、適当に負けた。

すると少女は、俺が急に手を抜いた事に納得がいかなかったようで再戦を要求。俺は時間だったので拒否。少女はさらにゴネる。このままだと帰してくれそうになかったので、後日なら受けるという事で納得してもらった。

そして日取りを決め別れたのだった。ちなみにそのせいで、タイムセールに間に合わなかったために、赤毛少女には少しばかりの怒りを抱いた。

それが現在相手をしている、名も知らぬ赤毛少女との初邂逅。今日は休日だというのに、それを潰してまで…すっぽかしもせず、わざわざ相手をする俺は何てお人好しなんだろう。

ただ一つ、これとは別に懸念すべき事がある。それは…今日の休日、なのは達の誘いを断ってまでこの赤毛少女との対戦を優先してしまった事だ。

『私達の誘いを断ってまで優先する約束って何？』

あまりに理不尽な言葉に頭を痛めたものだ。赤毛少女の方が先約だったとはいえ、ここで女に会うと言うとロクでもない事になりかねなかったので、適当にはぐらかした。

……ここだけ聞いてると、俺って女誑しだよな…っと、

「見切ったぁ！！」

『うりゃぁ！　クラークスパーク！』

K．O！

YOU　WIN！

「あぁぁぁーーーー！！」

ふっ…また、つまらぬモノを投げてしまった。

向こう側の筐体から聞こえる悲鳴を肴に勝利の余韻に浸る。この赤毛少女の戦い方は正に猪突猛進。攻めはかなり強いが、守りが少々…ね。ならば、投げられぬ道理は無い。普段デバイス相手に格ゲーをやる俺には、人操作相手ではもの足りぬ。あいつらフレーム単位で読みきって、攻勢に出るからな。

…そんな俺も先生には勝てない。本物のゲーマーは恐ろしいもの

よ。

「うがぁ！　何で勝てねぇんだ！」

勝負を切り上げ、こちらにやって来て射殺さんばかりに睨みつけてくる赤毛少女。つーか、ゲームでそんなマジになるなよ。あれか？　ゲームは遊びじゃねぇんだよって人種なのか？　こいつは。

「次はあれで勝負だ！」

俺が黙ってるのをいい事に、次の勝負内容…エアホッケーの筐体を指差す赤毛少女。もしかして…やめられません。勝つまでは…ってパターンなの？　この状況。

・・・・・・・・・・

『赤毛少女』

ムカつく奴だった。

騎士にとって手を抜かれて得た勝利に何の価値も無い。だから今日、改めて再戦を申し込んだら結果は惨敗。男は得た勝利に何の感慨も見せない。その態度がアタシをひどく腹立たせた。その後のエアホッケーではアタシの勝利に終わったから、少しは溜飲も下がったけど。

その後もいくつかの勝負を行ったけど、どうやら体を動かすものに関してはアタシの方が分があるみたいだった。代わりに頭を使うものは、向こうの方が上だ。

「それで？　まだ勝負すんの？」

「……いや、アタシもこれから用事がある」

これは本当だ。ついつい勝負に熱くなってしまったけど忘れてはいけない。アタシ達の為さなければいけない事を。

「そっか。んじゃ、これで終了。解散だな」

男は早々に立ち去ろうとする。その何処までも淡白な反応にアタシは苛立たしさを覚えてしまう。これが言い掛かりだというのは分かっている。男はアタシの我侭に付き合ってくれてたんだから。

けど…このまま別れるのも癪だ。

「ヴィータだ！」

「んあ？」

「アタシの名前！　お前の名前は！？」

よく考えてみれば、アタシ達はお互いの名前を知らない。あれだけ勝負していながら…だ。騎士にとって名乗りは重要だ。

いきなりの怒声に、立ち去ろうとする男は呆気にとられていたようだが、次には小さく笑ってアタシに返す。

「鈴。秋月鈴だ」

鈴…リン。うん、覚えやすい。ヘタに長い名前だったら、覚える気も無くなるしな。

「また機会があれば…勝負だ！　その時は負けないからな！」

「ハッ！　返り討ちにしてやんよ！」

アタシの宣戦布告に対して、さっきまでの淡白な反応とは違い、挑発的な笑みを浮かべながら返事を返す男、鈴。その返事を最後に、こちらを振り返る事無く去って行った。

うん、やっぱりムカつく奴だ。けど……なんか憎めない奴。

うぅ…今日ではやてから貰ったアタシの小遣いはパーだ。どうしよう…。

この男、秋月鈴がアタシの今後を大きく変える事を…今のアタシが知る由も無かった。

・・・・・・・・・・

『鈴』

「ただいま戻りました」

「あ、おかえり。鈴君」

「なのは、来てたのか」

「えへへ、お邪魔してます」

いつもの事なので、特に気にする事もない。最近ではプレシアさんやフェイトも当たり前のようにウチに居る事もあるしね。それを俺や先生も特に咎めたりはしない。

「ん～♪」

急になのはが正面から抱きついてきた。なのは曰く、元気を補給という名目で抱きついてくる。これもいつもとは言わないが慣れるくらいされた事なので、されるがまま

にしておく。
と、いつもなら暫くしたら勝手に離れてくれるんだが、今日はどうした事か全然、離れる気配が無い。
「どうしたんだ、なのは？」
「……する」
「へっ？」
「鈴君から…知らない女（ひと）の匂いがする…」
なのはの腕の力が強まって抱きつくというより、もはやサバ折りになっていた。そしてこちらを見つめる瞳は…ハイライトが消えていた。
「へぇ～…鈴君は私達の誘いを断って、他の人と会ってたんだ…」
ちょ、本当に…く、苦しい。このままでは上半身と下半身が離婚してしまう。牙突された宇水さんになってしまう…っていうか、匂いって…アルフも真っ青の嗅覚じゃねーか！
「な、なのは…おち…ついてくれ。なのはが…考えてるような事では…」
「うるさい」
ゴキッ！！

・・・・・・・・・・

『なのは』

と、鈴君にお仕置きをしたのが昨日。それだけでは収まらなかったから、昨夜は一晩中、鈴君には抱き枕となってもらった。おかげで今の私は、昨日とはうってかわって気分が良い。私の想いを知っていながら無碍にしたんだから、これくらいの役得があっても良いと思うの。

「なのはちゃん、行くよ？」

「あ…うん」

すずかちゃんの声に引き戻された私は魔法の訓練に集中する。すずかちゃんは既に魔法陣も展開していて、準備万端みたいだ。私も慌てて準備する。

私とすずかちゃん、アリサちゃんにフェイトちゃんはいつものように魔法の訓練をしています。もはやみんなは慣れたものだけど、知らない人からみたらどういう光景に見えるんだろう？

すずかちゃんが空に放り投げた空き缶を生成した魔力弾でこちら

に向かって弾く。それに対して私も魔力弾を生成し、操り、すずかちゃんに向かって弾き返す。

私達のやっている事は、手の変わりに魔力弾を操ってのバレーボール。これがやってみると難しい。魔力弾の操作だけでなく、魔力弾で空き缶を破裂させないようにするために必要魔力の調節、的確な角度で打ち返す等、単純なようで奥が深い。

暫くはお互い上手に打ち返してはいたけど、時間が経つにつれて制御が甘くなってきて、最終的にはすずかちゃんが魔力量の調節に失敗して、魔力弾で空き缶を破裂させてしまった。

「はぁ、失敗しちゃいました…やっぱりなのはちゃんみたいに、長時間は操作できません」

「そんなに気にする事ないよ、すずかちゃん。これからうまくなっていくって」

すずかちゃんのフォローをしながら、もう一組の訓練光景を眺める。

「ハァァッ！」

「ヤァァッ！」

掛け声と共に、打ち合った互いの棒が乾いた音をたてる。アリサちゃんとフェイトちゃん。二人は自分のデバイスと同じぐらいの長

さに切り詰めた棒で組み手をしている。長い間、打ち合っていたので、二人の顔には玉の汗がびっしりだ。冬に入り、気温も低い中、二人の周囲だけは暑そうだ。

持ち前の動きで翻弄しようとするフェイトちゃんだけど、アリサちゃんは冷静にどっしりと構え、的確に迎え討つ。二人の戦績は接近戦に限って言えば、アリサちゃんに分がある。出会った当初に比べれば、凄い成長速度だと思うの。

これが魔法を加えた中・遠距離戦になると途端に戦績が落ちるんだけどね。

ガッ！！

「あっ…」

そして最後に、アリサちゃんが返した棒でフェイトちゃんの棒を弾いた事で勝負がついた。

「うぅ…今日も負けた…」

「何、言ってんのよ。魔法が無かったから勝てたのよ」

「それでも、私の方が経験は多いはずなのに…」

意気消沈のフェイトちゃん。最近、勝ち星を得られない事を結構気にしてるみたい。そんなフェイトちゃんにアリサちゃんはさっきの私みたいに、慰めと励ましの言葉をかける。私とすずかちゃんは

そんな姿に、笑い合う。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

「魔導師襲撃事件？」

「うん。昨日、母さんから連絡があって、最近、たくさんの魔導師が襲われてるんだって」

フェイトちゃんのお母さん、プレシアさんは現在地球には居ません。蓮さんのお供として、ミッドチルダに行ってるらしいです。蓮さんはプレシアさんを助手のように扱っているので、二人が居なくなるというのはもはや珍しくもない事。そのたびに、フェイトちゃんは鈴君の家に泊まる事が多いから正直羨ましい。

……私達も大概お泊りが多いような…って無粋なツッコミは受け付けてないよ。

「だからなるべく魔法は使わないように、だって」

「襲われた人はどうなったの？　もしかして…」

「あ、ううん。命に別状はないみたい。ただ、魔力を奪われるって。犯人もまだ捕まってないみたい」

「それじゃ、私達も狙われちゃうのかな？」

「ふふ、まさか」

それから私達は少しのお喋りを楽しんだ後、訓練を終わらせて早々に帰宅することにした。

この時、私達はみんな思い違いをしていた…。

この事件はプレシアさんがミッドで起こった事件に危惧し、私達に注意を呼びかけたものだと思っていた…。

だから知らなかった。この事件は地球で起こっていたと。だからこその注意勧告だったとは…。

そして、その勧告は遅かったのだと…。

・・・・・・・・・・

『アリサ』

夜、あたしは自室で寛いでいたら、それは突然、起こった。

《警告。アリサ様、魔力の反応です》

「えっ？」

グローリーからの急な呼びかけ。それに反応できずにいると次の瞬間には、あたしもわかるくらいに強い魔力を感じた。窓から身を乗り出すと、外が異様な空気に包まれているのがわかった。そしてそれが結界によるものだとも。

ただ、その結界は普段あたしの見慣れたミッド式のものとは、どこか違うようにも思えた。

「グローリー、これって…」

《はい。恐らく、ベルカ式によるものです》

ベルカ式。あたしは結界のとかは苦手だから使う機会は無いけど、この結界の規模は異常だ。よほど優れた術者でないと無理だろう。

《アリサ様、どこか見渡せるような広い場所に出ることを推奨します》

「…そうね。わかったわ」

行儀が悪いのはわかってるけど、あたしはそのまま窓から外に飛び出した。

家から離れた場所にある広めの平地に到着すると、待っていたかのように上空から一人の女性が軽やかに着地してきた。

見た目は二十歳前後。長い髪をポニーテールに結び、整った顔立ちに鋭い眼。鎧と衣服を合わせかねたような姿。そして一番眼を引くのは、その手に握られた一振りの剣。間違いなく、デバイスだろう。

彼女から感じる気配に、警戒しながら言葉を投げかける。

「誰なの、アンタ？」

彼女はあたしの言葉に沈黙のままデバイスをこちらに突きつけ、凛とした声を発した。

「我が主のため、その魔力を貰い受ける」

・・・・・・・・・・

『女性』

「はぁ？　いきなり言われても、わかんないんだけど…」

「わからないならそれでも良い。安心しろ、命までは奪わない」

以前からこの街からは、時折高い魔力反応を感じてはいた。そして今日、漸くその原因を突き止めた。それが四人のまだ幼い少女だという事に疑問を抱いたが、我が主の件もあり大して驚くことも無かった。

少女はとぼけて一般人を装っているようだが、こちらの方で調べがついている上に、私の眼は欺けない。私の気迫を受けながら臆する事無く、こちらを警戒し、いつでも動けるように身構えているその姿は、明らかに一般人のソレではない。何らかの訓練を受けている者だ。

「いや、だから…」

「ハァッ！」

大きく跳躍するように踏み込み、一閃。少女の驚愕は一瞬だけだった。次の瞬間には私から離れるようにして、後方へ大きくバックステップ。

この動き…やはり一般人ではなかったようだ。私も追う様に、追撃の一閃を放つ。

「グローリー！！」

《了解》

だが私の一閃は、少女の手に突如として現れた得物によって防がれた。

それは少女の細腕には余るような巨大なハルバード。それによって防がれた私の刃が、ギリギリと音を立ててせめぎ合う。思った以上に力のある少女との鍔迫り合いに、埒が明かないと判断。そのまま後ろへ跳んで後退し、再び睨み合う。

「…グローリー、お願い」

《了解。甲冑、装着》

少女の声と共に、現れる魔法陣。それは私達と同じベルカ式のモノだった。それだけでも驚くべき事だったのに、少女の姿を見てさらに驚かされた。

少女の額に巻かれたサークレット。動きを阻害しない程度に覆われた上半身のプレートアーマー。腰から足元を覆うように広がる衣。そして左手…いや、左腕を覆いそうな大きな白銀の手甲がこれはまた眼を引く。

幼い身でありながら悠然とした姿。その姿形は…そう、

「騎士…」

「名乗った事は無ければ、思った事も無いけどね」

私の思わず漏れ出た呟きにも、少女は律儀に答えてくれた。手にした彼女のハルバード型のデバイスを大きく振り、小さな風を起こしながら切っ先をこちらに向ける。振り回されている様子は無い。その得物を使い慣れている証拠だ。

構え直した少女の姿を見て、私も改めて構え直す。緊迫した空気の流れる静かな空間の中、少女の言葉がよく聞こえる。

「…で、よければ名乗ってもらえないかしら？　辻斬りさん」

自分の失態を恥じた。自分は騎士で、彼女も騎士。なればこれから行う決闘に名も知らずとは…気が走りすぎたか。

恐らく今の私の口元は小さく吊り上っているだろう。だが仕方あるまい。この溢れる高揚感…抑えきれないのだ！

「我が名は…『烈火の将』シグナム。そなたは？」

「二つ名は無いわ。アリサ・バニングス、ただのベルカ式の使い手よ」

アリサ・バニングス。成程…その名、覚えておこう。なればこの決闘…受けてもらう！

開始の合図は無い。だが…二人の踏み込みは、ほぼ同時だった。

・・・・・・・・・・

『鈴』

「くそっ！　この結界、どうなってやがる！」

「恐ろしくっ！　堅いねっ！」

「これは…ミッドチルダ式じゃないね…」

眼の前に張られた結界に、難儀しながら顔を顰める。事の起こりは、少し前。

ユーノとアルフの帰りが遅いんでちょっと迎えに行ってたんだが、念話で確認してみたらこいつら思った以上に遠くにいたもんだから時間が掛かった。漸く見つけて帰ろうと思ったら、急に魔力の反応。急いで戻ってみればこの結界。結界内部に入れないのだ。

誰だか知らないが、どう考えても魔法の所業。それもベルカ式という、アリサ以外の使い手の仕業。そんな知らない奴が結界を張る理由。少し考えれば、すぐに分かる。

俺達、魔法を扱う者に用事だ。それも現在、結界内部に居るだろうなのはとフェイトに…だ。

そう考えると、思考は悪い方向に行ってしまう。二人の安否を確認したいが、結界によるものか、内部と外部では念話が通じない。ならば結界を破壊しようとするも、うまくいかず。かなり優秀な奴が張った結界なのだろう。

「……ユーノ、アルフ。結界全部を壊さなくてもいい。穴を空ける、もしくは内部に転送できないか？」

「転送は…無理そうだけど、アルフと協力すれば穴を空ける事はできそうだよ。けど、すぐに閉じると思う」

「じゃあ、一瞬でもいい。空けてくれ。俺が中に入る。そして二人の安否を確認する」

「……わかった。気をつけて」

「二人の事、頼んだよ…」

「あぁ…」

ユーノが結界の表面に魔法陣を展開させる。それによって部分的に結界の強度を下げ、アルフの結界破壊の拳打による一撃によってガラスが割れるようにして、小さな穴が空く。すかさず穴に飛び込み、潜り終えると同時に、結界の穴は閉じてしまった。それは退路が絶たれたという事だが、どうでもいい。今は二人の安否が気になる。

人の気配が無いせいで、余計に広く感じる街並みの道路を走り抜

けた。

・・・・・・・
・・・・・
・・・
・

感じる魔力を頼りに暫く走っていると、轟音が耳に届き、粉塵が巻き起こっているのが遠目に見えた。俺は更に速度を上げ、走り続ける。目的地に近づくと、漸くはっきりと視界に入った。広い道路のほぼ中央に立っているのは、見た目赤いの一言に尽きる人影。ただ後姿なので、顔も性別もはっきりとはしないが、結っている長い髪の毛から女の子であると予想した。さらには手に持ったハンマーのような物から魔導師関係の奴だとも…。

そして、その少女？の向いている方向の先、そこには…。

倒れ伏している、見知った二人の姿。なのはにフェイト。

共に、纏っているバリアジャケットは一部が破損。それだけでダメージの大きさが窺えた。傍らに転がるデバイスは、それよりもさらにダメージが大きいのが分かる。レイハさんはもはやひび割れ、少しの衝撃で分解しそうな程。バルディッシュに至っては、柄の部分から折れており、これまたひびだらけだ。

傷だらけの大切な人。ピクリとも動かない大切な人。最悪な未来を想定してしまった俺。

「テェ…メェェェェェェェェッ！！！！！」

【強化】によって今まで以上に爆発的な速度で走った。少女？は俺の雄叫びによって、漸くこちらを振り向こうとするがもう遅い。このまま顔面に…くらえ！！。

「しょうげ！　…き…？」

「えっ？」

ピタッと少女の眼前で俺の拳が止まる。

魔法は発動しなかった。理由としては術式が一気に霧散してしまったからだ。それも仕方ない事だと思う。少女の…こいつの顔が見知った奴の者だったんだから。それもつい先日、互いに楽しんだ仲…。

「おまえ…ヴィー…タ？」

「テメェは…リン…」

ご近所の魔法使い達、『特大なり』の一幕は再び始まるのであった。

魔法使いは非日常？（後書き）

謎の関西弁少女「あれ？　最重要人物であるはずの私の出番は？」

イ「もう暫く、待ってて下さ…（グシャッ）」

と、いうわけで原作組と関西弁少女との出会いは、現時点ではまだです。

期待していた方、申し訳ありません。

世界は何時だって『こんなはずじゃない』事ばかりだ！（前書き）

どうも。スキル『遅筆』持ちの作者です。

それでは今回もくどいばかりの低クォリティ劇場…始まります。

部屋を明るくして、離れてご覧ください。

『アリサ』

シグナムと名乗った彼女の戦いは、凄まじいの一言だった。流れるような連撃に、心眼持ち（この場合は経験則かしらね）のような動きの先読み。互いにベルカ式の使い手。それでも私が押されるのは、彼女と私とを隔てる『経験』の差がある。ただの戦いの経験…場数だけじゃない。

「ハァッ！」

ギィィンッ！

「クゥッ！」

左腕の手甲で防御はしたけど、また弾き飛ばされる。追撃に入るシグナムの姿が見えるも、やられてばかりじゃいられない。

「このっ！」

崩れた体勢からそのまま強引に体を一回転させ、グローリーを大きく振るう。シグナムも少しの驚愕と共に、デバイスでそれを防ぐ事で追撃は不可能となる。

「あそこから強引に一撃を放つとは…さすがに予想外だったぞ」

「まぁ結局、防がれたけどね…」

「おまえは…経験が浅いな？　正確には、私のようなスタイルとの対人戦が」

…やっぱり見破られた。

訓練で、近接戦はフェイトや鈴が組み手の相手をしてくれるけど、スタイルも違うし、訓練の域を出ない。ジュエルシード事件の際に相手をしていたのも、傀儡兵だから人のソレとは違う。対して、彼女は『騎士』としての洗練された対人戦の動きを遺憾なく発揮している。素人目から見ても分かる程だ。

彼女とのその差を自覚してるからこそ、私は多少強引でも攻めなければ勝ちの目は見出せない。それほどまでに、勝ち目は薄い…けど、

「だからって…逃げ出すような事はしたくないのよ！」

「気概は、本物みたいだな…レヴァンティン」

ガコンッ！という音と共に、シグナムの剣がまるで拳銃のように空の薬莢を吐き出す。同時に彼女の魔力の高まる。蓮さんから聞いたことがある。ミッド式とベルカ式との違いの一つ。

「カートリッジシステム…」

「そうだ。おまえはどうした？　使わないのか？」

「…使えないのよ」

「何っ？」

私のグローリーは現在、その機構を外している。まだ魔法を使い初めの頃の私が使いこなせるはずもなく、蓮さんが意図的に外したのだ。おまけにグローリーのカートリッジシステムは術者に途方も無い負担をかけると蓮さんは言っていた。

蓮さんのその優しさが…今は仇(あだ)となってしまうとはね。

「カートリッジも無しに…私に勝つつもりか？」

「余計な気遣いはいらないわ。私はただ、全力でアンタを…討つ！」

「そうか…ならば言葉は不要だな。参るぞ、アリサ・バニングス！」

・・・・・・・・・・・・

『鈴』

突き出していた拳を収め、目の前のヴィータと対峙する。ヴィータの方も、未だに構える様子は無い。

互いに無言。渇いた空気が流れるのみ。

どれくらいの沈黙が続いたのかはわからないが、埒が明かないと判断したのかヴィータの方から口を開いた。

「…まさか、おまえが魔導師だったなんてな。私の事を知ってて、あの時、勝負を挑んできたのか？」

「んなわけねぇだろ、偶然だ。聞きたいことがある…おまえがこんな事をしたのか？」

「何だよ？　知り合いなのか？」

「友人だ。で、どうなんだ？」

「……そうだって言ったら……どうすんだ？」

「ぶっ飛ばす！」

駆け出す。収めていた拳を再び握り、振りかぶる。

「【衝撃】！」

ドゴォォォンッ！

「くぅっ！」

少々奇襲気味になってしまったにもかかわらず、ヴィータの展開した防御魔法に阻まれる。体ごと後方に大きく押されるヴィータに対して俺は手を休めない。続いて放った無誘導の【射撃】は容易く

避けられるが、相手の回避を想定した上での【射撃】だ。行動を先読み、更に【射撃】を放とうとするが、

「シュワルベ…フリィィゲェン！」

何時の間にやら、手に持った四つの小さな鉄球をハンマー型のデバイスで打ち出した。真っ直ぐに向かってくるソレを防ぐ。

「【盾】！」

ギィン！と耳障りな音が響き、六角形の魔法陣の盾に阻まれた鉄球は音を立てて砕ける。息をつく間もなく、今度はヴィータの方がデバイスを叩きつけようと跳躍してきた。

「ぶっ潰れろぉ！！」

ヴィータのデバイスが、ガコンッ！と一部をスライドさせる。そして魔力の高まりも感じた。けど慌てず、騒がず。

相手の得物はハンマーだ。つまり、その鎚の部分でダメージを与える。なら…鎚に当たる前に、零距離にまで接すれば、大したダメージにならない。

【強化】の効果を一気に高める。タイミングを見計らって上空のヴィータに向かって……跳躍！！

「どっせぇぇい！！」

「！！　なにぃ！」

俺が避ける、もしくは受けると思ってたんだろう、驚愕の表情を浮かべるヴィータ。ヴィータのデバイスは振るわれた頃には、俺は既に懐に…零距離に飛び込んでいた。当然、俺にはダメージは伝わっていない。ザクにも勝るとも劣らないようなショルダータックルで突っ込んだために、肩口がヴィータの腹部にめり込み、ヴィータの口から空気が強制的に吐き出される吐息が耳に届いた。

「かふっ…」

「もう一発だ…【衝撃】！！」

ドゴォォン！！

さすがにあの距離と体勢からはヴィータも防御が出来ず、その小さな体を吹っ飛ばされる。地面と並行して滑空…そのまま建物に吹っ飛ばされることで漸く動きを止める。崩れた建物から勢いよく粉塵が巻き起こる。

そこまでやって俺の頭は、徐々に熱が冷め、冷静になっていく。そして当初の目的の確認。

「なのは！　フェイト！　大丈夫か！？」

そう、二人の安否だ。駆け寄って、それぞれの状態の確認をする。

意識を失っているし、多少傷を負っているが、どちらも呼吸はしているので命に別状はなさそうだ。その事実にホッ…と胸を撫で下ろす。そして次に二人の状態に違和感を感じたが、すぐに判明する。

バリアジャケットが解除されている上に、魔力をほとんど感じないのだ。

その事に不可解を感じたが、すぐに思い出す。フェイトが言っていた魔力だけを奪われる、魔導師襲撃事件を…。

と、いう事は…まさかコイツらが…？

「テンメェェェェェェェ！！！！」

背後から怒声と、何かが崩れるような音が響いた。

振り返ると、建物の崩落によって、全身ぼろぼろ、煤だらけの…そして怒り心頭なヴィータがいた。アレをくらって、ダメージを負っている筈なのに、ソレを感じさせないくらいに怒っている。

……当たり前か。やった本人が言うのもなんだけど。

ヴィータの構えを見て、俺も再び構える。殺気に溢れ、睨み合う俺達。そして同時に踏み出す。

バキィィィィン！！

「全員動くな！　時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。これ以上の戦闘行為を禁ずる！」

…前に、突如として、結界が崩壊。そして聞き覚えのある声と姿が確認できた。相変わらずの黒い制服にデバイス。その姿は俺の記憶の中と相違ない…。

「…クロノ？」

「チッ…時空管理局かよ……シャマル！」

クロノの姿を見た途端、ヴィータの奴は顔を顰める。そして誰かの名を呼んだと思ったら、ヴィータの足元にベルカ式の魔法陣が展開される。

「リン！　とりあえず、勝負は預ける。けど、テメェは必ずアタシが倒すからな！」

俺が何かを言う前に捨て台詞を吐き、消えていった。多分、さっきのは転移魔法だったんだろう。気付かなかったが、仲間がもう一人居て、ソイツに頼んだのだろう。名前らしきものも言ってたしな。

「クソッ…逃げられたか…」

クロノは俺の前に下りてきた。溜め息を一つ吐き、再びこちらを見遣り、声をかける。

「大丈夫だったか？　鈴」

「あ、ああ。久しぶりだな、クロノ。元気そうで何よりだ」

「うん、君も変わりなさそうだな」

久しぶりの会話だったためにテンポが掴めず、ありふれた社交辞令のようになってしまう。とりあえず起きた事が多すぎて、整理が追いつかない。頭をガリガリと掻いて目の前の執務官に求める。

「…で、当然説明はしてくれるんだろう?」

・・・・・・・・・・

『シグナム』

「ここまで…だな」

「ハァ…ハァ…」

目の前のアリサ・バニングスは、最早戦える状態ではない。纏っている甲冑は、所々の破損が目立ち、肌にはいくつかの傷。本人もデバイスに縋って、漸く立っている状態だった。

しかし、それでもこちらに向ける眼差しは一向に衰えを見せない。

そもそも、私自身もこれほど長引かせるつもりはなかった。だが彼女の不屈の精神とタフネスさが徐々にだが、私を追い詰めていった。だからこそ余力が残っている内に、決着をつける必要があった。その結果が今の状態である。

これ以上、動かれるのはマズイので彼女をバインドで拘束する。

「っ！　あぅ！！」

「すまないが……っ！！」

バキィィィィィンッ！！

ガラスの割れるような音と共に、結界の崩壊。次いで、上空から幾つもの剣が私に向かって、降り注いだ。後方に大きく跳び、剣の雨を回避。

「アリサちゃん！！」

聞き覚えのない声に上空へ顔を向けると、そこには漆黒のバリアジャケットを纏い、十字架のようなデバイスをこちらに向ける少女が居た。その出で立ちから、魔導師だという事が、容易に窺い知れる。ならばこの剣の雨も、彼女の仕業なのだろう。

「クロス、取り囲んで！」

《承知、空間掌握》

彼女の声と共に、いくつかの剣の先端を覗かせた小さな魔法陣が、私を取り囲む。

「クッ…囲まれたか…」

マズイ状況であった。３６０度囲まれた、この状況からの回避は困難。かと言って受けるにしても、これ以上は恐らく、レヴァンティンが耐えられない。

「ソードシュー！…ッ！　キャアッ！！」

「すずかっ！！」

だが彼女の魔法は行使されることは無かった。それはバインドによって、拘束されてしまったからだ。無論、私ではない。同じヴォルケンリッターが『盾の守護獣』。

「大丈夫か？　シグナム」

この男、ザフィーラのフォローだ。

「ああ。助かったぞ、ザフィーラ…」

「礼には及ばん。それと先程、シャマルから連絡があった。管理局が介入してきたそうだ」

「何っ！」

「蒐集は既に済ませてあるそうだ。現在二人は管理局の追跡を振り切って、こちらに向かっている」

「そうか…ならば到着後、速やかに蒐集を終わらそう。あまり長引かせると感づかれる恐れがある」

「ちょっと、アンタ等！！」

私達に割り込んでくる叫びは、アリサ・バニングスのものだった。その仲間であろう、すずか（と言ったか）も、共にバインドで拘束され、地面に投げ出されている状態だった。

「さっきから『しゅうしゅう』だの何だの、一体何が目的なのよ！」

「…答えるつもりはない」

「何ですって！！」

「すまないとは思っている…だが、これも我が主のため。悪く思うな…」

このような事をほざく、今の私はどのような顔をしているだろう…。

・・・・・・・・・・

上空にて…

「それにしても、さすがシグナムね。同じ騎士が相手でも、勝っちゃうなんて」

「いや、あれ以上続けていれば…負けていたかもしれない…」

「どういう事だ？」

「これだ…」

「っ！！　レヴァンティンが…」

「そうだ。あれ以上打ち合っていたら…破壊されていただろう…」

「武器破壊…か」

「あの少女…アリサ・バニングスは、彼女自身が思っている以上に…騎士だったようだ…」

「…これからもあの連中が、邪魔をしてくるのであれば…思った以上に手強い相手になりそうだな」

「ああ……これからは管理局の介入を避けるため、蒐集は場所を変えたほうがいいだろう。幸い、今日だけでかなりのページが稼げた。遠からず完成するだろう」

「そうね、それがいいわ」

「了解した」

「……」

「？　ヴィータ、聞いているのか？」

「ぅえ？　ぁ、ああ…聞いてるよ。遠出するんだろ？」

「そうだが…何かあったのか？」

「いや…何でもねぇ…」

「ならばいいが…」

そして彼女達はその地に降り立つ。自身の帰るべき場所へ…自身を待ってくれている人のために。

「おかえり～。遅かったね、どないしたん？」

・・・・・・・・・・

『鈴』

「ほい、あ～ん」

「あ、あ～ん」

最早、コレぐらいの行為では動じなくなってきた自分を褒めてやりたい。

ここは時空管理局の医務室。何で俺達がここに居るのかというと、なのはとフェイトの治療のためだ。二人は怪我自体は大した事はないが、リンカーコア（魔導師の魔力の源）を抜き取られていて、そっちの方が重大だったために、本格的な検査が必要になり、リンディさんやクロノの計らいでここに搬送されたのだ。

ちなみにここには、なのはとフェイトだけじゃなく、アリサとすずかも居る。二人も、俺達と同時刻ぐらいに襲撃に遭い、これまたリンカーコアを抜き取られていた。実際には襲われたのはアリサだけで、すずかは魔力を感じたのでアリサの元へ駆けつけ、助けようとしたが返り討ちにあったというわけだ。

検査の結果、暫く魔法は使えなくなるだけで他は大した異常なし。精々、軽い傷を負っているくらいだった。これには安堵の溜め息一つ。んで念のために、みんなは４人部屋の病室で一泊。入院という事で、俺は何処からか拝借してきたリンゴを剥いて振舞っている。それが冒頭の遣り取りね。

「ん、おいしいよ」

「それは良かったよ、フェイト」

そうです。餌付けされているのは、フェイトなのです。おかげでなのはとアリサとすずかからの突き刺さる視線のせいで俺の胃がストレスでマッハなんだが…。

リンゴは数があっても、俺の体は１つだからな…全員にやる気はさすがに起きない。それにジャンケンで勝ったのがフェイトだったんだからそう睨むなよ。ちゃんと剥いて、切って、皿に乗っけてあげただろうによ。

ああ、でもおいしそうに食べるフェイトの無邪気な顔が小動物を思わせてくれるので、癒されてプラマイゼロ…にはならないな。

俺の胃よ…もう暫くもってくれ…。

なのは達の相手を終え、病室から出るとそこにはクロノの姿があった。腕を組み、こちらを真剣に見据える瞳から察するに、なのは達の見舞いってワケではなさそうだ。

「君に話がある」

…とりあえず、場所を変えるか。

・・・・・・・・・

「今回の事件に協力してほしい」

クロノの話とは、以前のように俺の手を借りたいとの事。なのは達は現状がアレなので俺だけだ。正直、俺としてはコチラから協力させてほしい所だったので、向こうから言ってきたのは色々と好都合だった。

なのは達の治療に、デバイスの修理、そして襲撃者達の情報など、管理局から協力を得なければならない事が多すぎるから、ソレと引

き換えに俺の手を貸すといった取引を持ちかけようと目論んだが、事態は良い方に転んだ。それにもう1つ、思うところもあるしな。

「ああ、かまわない。ただ今のところ、手を貸すのは俺だけだ。なのは達は…あの状態だからな」

「わかってるさ。それに君は連中の内、1人を単独で退ける程だ。それだけでも十分な戦力さ」

「なら…コンゴトモヨロシク」

クロノに手を差し出し、互いに握手を交わす。一応、契約成立の証としておく。話は以上とばかりに、俺は切り上げようとしたが…叶わず、クロノからもう1つ、問いかけが来た。

「もう1つ、聞きたいんだが……どうして彼女が…フェイト・テスタロッサが居る？」

…クソが。だからさっさと話を切り上げたかったのに。

あのジュエルシード事件の際、クロノ達の目の前で、フェイトは事件の首謀者であるプレシアさんと共に虚数空間の海へ飛び込んだのだ。恐らく管理局の方では、両名死亡扱いとなっているだろう。

そんな人物の1人が、目の前で生きていた。これは事件を担当した執務官として無視できない事だろう。一応、2人は元から地球出身として戸籍を偽造しているから、他人の空似としてシラを切る事もできるが…クロノは何だかんだで、協力し合った仲で情も抱いて

いる。だから嘘を吐くにしても、罪悪感が募り心苦しくなる。

「…これは”執務官”として聞きたいわけじゃない。クロノとして、”個人的”に聞きたいんだ」

「何だと？」

「あの事件はもう決着がついている。それを今更、蒸し返して更に後味悪くするつもりもない。彼女の身の上を知っているから余計にね」

執務官としては良くないけど…とクロノはそこで締め括った。

…俺はクロノという人物を見誤っていた。確かに情を挟むのは執務官としてはよろしくない。けど…だからこそ好感が持てる。クロノは信用できる。クロノは…本物だ。

全く…俺の眼は海のリハク以上に節穴だな。（俺も忘れがちだが）一応、年上の身としては立つ瀬が無いな。後、こいつらが早熟すぎるってのも要因のひとつだな。間違いない。

「…クロノ、あんたを信用して仲間…いや、馴れ馴れしいとは思うが友人として話す。だから一切の口外は無しで頼む」

「見くびるなよ、それくらいの事は弁えてるつもりだ」

これは失礼。

・・・・・・・・・・・・・

『すずか』

「いいな〜、いいな〜。フェイトちゃんは鈴君に食べさせてもらって」

「な、なのは…もう許して…」

「なのは、もう許してあげなさいよ…」

なのはちゃんのじと〜っとした視線を受け、泣きそうな顔のフェイトちゃん。私もアリサちゃんも羨ましいとは思ったけど、なのはちゃんが抱いた嫉妬の感情は余程、根深かったみたい。

そんな喧騒とは別に、私はあの時の事を振り返る。

・・・・・・
・・・
・

普段は感じないような魔力の反応を感知して不信感を抱いた私は、お姉ちゃん達には内緒で家を飛び出した。

辿り着いたのはアリサちゃんの家の辺り。しかも結界まで張ってあった。私達が使うミッド式とは違うからアリサちゃんかなって思

ったけど、アリサちゃんは結界魔法が使えない。だったら、この結界は誰が張ったの？

そこで思い出したのが、魔導師襲撃事件。まさかと思ったけど、ありえない事じゃない。その結果、私の心が大きくざわめいた。結界を解除しようにも、堅牢すぎてうまくいかない。

「クロス…何とかできない？」

《今の主の技量では解除は不可能です。ですが、主の魔力量でしたら…恐らく、破壊は可能です》

それを聞いて、即行動に移った。持ちうる魔力のほとんどを注ぎ込んだ、『ブラッディティアーズ』を結界に向けて、落とす。

血のように紅い魔力の剣と結界が鬩ぎ合い、両者が音を立てて崩壊した。結界の破壊と同時に飛び込むと、下降でアリサちゃんがバインドで縛られていた。私としては珍しく、感情に身を任せ、考える前に見知らぬ女性に向かって、ソードシューターを放った。

女性はそれを回避してみせるけど、これはアリサちゃんとの距離を離すため。続いて、彼女を取り囲むように、本命のソードシューターを展開させる。私の合図で、射出させるというところまで追い込んだけど、そこで思わぬ横槍が入りました。彼女とは違う、誰かのバインドです。

その犯人はすぐに見つかりました。鍛えられた体躯に、アルフさんと同じような獣耳を生やした男性。おまけに私を拘束するこのバインドからして、一流の魔導師。

私の魔法は霧消し、アリサちゃんと並んでその身を横たえる事になったのです。

私とアリサちゃん。共にバインドで拘束され、鈴君たちへの念話

も通じないこの状況は、最早詰みといった所でしょうか。でも、そんな状況にも関わらず、アリサちゃんは臆する事無く、女性に対して噛み付いてます。こういった状況でも、決して衰えないアリサちゃんの気概は見習うべき事だと感じました。

ただ女性もアリサちゃんに対して、答えを返すことはありませんでした。でもその折に、一瞬だけ見せたその表情は…何処か心苦しそうでした。

それから暫くして、二人の人物がやって来ました。一人は金髪で民族衣装のような衣を纏った女性。そしてもう一人は、赤毛にゴシック衣装の私と同じか、もしくは年下の少女。親しげに会話を交わす二人はこの人達の仲間ですね。

話が終わった金髪の女性が、その手に持った辞書のように分厚い本を開き、私達に向けて翳します。本が不気味に脈動し、輝き、そして……。

そして気がつけば、私達四人はこの医務室に居ました。目を覚まして、最初に感じたのは違和感。胸の奥の何かが抜け落ちたような虚無感。そして思い出す、魔導師襲撃事件の際の被害。試しとばかりに、魔法を行使しようするけど、使えません。

私達は、魔導師襲撃事件の被害者となったワケですね。

それから他のみんなが目を覚ましました。それとほぼ同時にやって来たお医者さんのような人と、懐かしい人物、リンディさんに事情を色々と説明してもらいました。

それが、つい一時間前ほどの出来事。

・・・・・・

・・・

・

「いい加減にしなさい、ばかなのは」

ゴンッ！！

「あいたっ！」

アリサちゃんのチョップがなのはちゃんの頭に振り下ろされる。頭を抱え、涙目のなのはちゃん。フェイトちゃんは漸く、解放されて安堵の溜め息一つ。そんな微笑ましい光景に見惚れていると、この部屋に人が訪れました。

「よう、諸君。災難だったな。調子はどうだ？」

「フェイト、大丈夫なの？」

「「「「蓮さん！　プレシア（かあ）さん」」」」

いきなりの登場にびっくりです。それは多分、みんなも同じだと思います。だって顔が物語ってます。そんな私達の様子に気付いているのかいないのか、蓮さんとプレシアさんは近くのパイプイスに腰掛けます。

「あの…蓮さんは何故、ここに？」

「ん？　元々こっちの方に用事があって滞在してたからな。そんな

時に鈴から連絡を受けて、お前達がここに居ると聞いてな。ちょっと見舞いに来たわけだ」

「ああ、そう言えば、そうでしたね」

納得しちゃいました。

それから蓮さんは起こった事件の詳細を私達に尋ねてきました。私達がそれぞれ感じた事を、一つ一つ話していき、蓮さんは静かに聞き入ってます。プレシアさんもフェイトちゃんに寄り添いながら、聞き手に徹していました。

「…闇の書…か」

「闇の書？」

「何ですか、それは？」

「ああ……多分、後で管理局の方から説明があるはずだ。その時にでも聞いてくれ。」

説明が面倒だ…と最後に締め括る蓮さん。ここに来て丸投げですか。

「まぁとにかく、今はしっかりと養生しておけ。まだ本調子ではないんだから」

「…そうですね。そうさせてもらいます」

「うん、蓮さん。お見舞いに来てくれてありがとう」

「ありがとうございます」

「あ、あの…蓮さん！」

突然、アリサちゃんの声が響きます。そういえば、さっきまで妙に静かだっただけど…どうしたんでしょうか？

「ん？　どうした、アリサ？」

「グローリーに…カートリッジシステムを戻してください！」

「却下」

キッパリ、スッパリと一刀両断です。惚れ惚れするぐらい、きれいに切り捨てましたね。

「いいかアリサ？　カートリッジシステムは確かに、瞬間的な強化を可能とする。そのため、デバイスと術者に多大な負担が掛かる。これは初期の頃に教えたな？　で、グローリーだが、こいつは私が手掛けた一品で、ちょっと特殊でな…システムの際、両名に掛かる負担は、他のアームドデバイスの比ではないんだ。グローリーはそれに耐えられるだけの耐久力はある。けどなアリサ、おまえはそうはいかない」

忘れがちになりますが、私とアリサちゃんのデバイスは、蓮さんのハンドメイドの一品でした。だからこそ、グローリーの性能と共に危険性も把握しているから、蓮さんは優しく諭す。

「掛かる負担によって下手をしたら、体に何かしらの障害を負う事になりかねない。だから私は、お前に渡す際に、システムを外したんだ。それにグローリーはカートリッジシステムが無くとも、十分に優秀なデバイスだ」

「それでは…」

「？」

「それでは…足りないんです。あの人に勝つには…」

アリサちゃんのシーツを握る手に力が込められます。俯いた顔からどんな表情をしているのかは窺い知れませんが、ここに居る一同が共通してわかった事があります。

アリサちゃんは…とても悔しがっています。

アリサちゃんだけじゃないです。本当は私達だって悔しいんです。でもそれを表には出さず、必死に気丈に取り繕ってました。現にさっきまで、普通に接していた私達ですけど、今は沈痛な面持ちでいます。

「あのシグナムって人は…毅然として向かってきました。その在り方に私は…応えることができませんでした。何と言いますか…負けた事もそうなんですけど、あの人の誇りに応えられなかった事が、とても悔しいんです」

「……」

「だから、次にあの人と戦うときはただの”ベルカ式の使い手”じゃなくて…”ベルカの騎士”として戦いたいんです！　お願いします！」

《マイスター…私からも頼みます》

アリサちゃんの必死の懇願の声に、蓮さんがどう思ったのかはわかりません。けど、アリサちゃんの想いは届く…と何故か確信してしまいました。

長い沈黙の後、蓮さんはプレシアさんから、一枚の紙とペンを受け取り、何やら書き込んでいきます。

そして書き終わると、アリサちゃんに手を差し出す。

「……グローリーを貸せ」

「えっ？」

「暫くはデバイス無しでの訓練だ。この紙に書かれたメニューをこなして、後日私が大丈夫だと判断したらシステムを取り付けてやる」

「ほ、本当ですか！」

「嘘はつかん。誓おう」

アリサちゃんは待機状態のグローリーを蓮さんに渡し、紙を受け取ります。

《ご武運を、アリサ様》

「まかせなさい。絶対にクリアしてみせるから」

アリサちゃんは拳を握って、力強く言い放ちます。その姿にはさっきまでの悲壮感はもうありません。

「じゃ、私達はそろそろ戻る。また後日、会おう」

「はい、ありがとうございます」

そして蓮さん、プレシアさんは去っていきました。

「よし！　退院したら早速頑張るわ……よ…」

意気込んでいたアリサちゃんだけど、その訓練メニューの書かれた紙を見た途端、動かなくなっちゃいました。私もなのはちゃんもフェイトちゃんも、どうしたのかと思って紙を覗き見ます。

「「「…うわぁ～」」」

これは最早、訓練というより…シゴキですね。

がんばってね、アリサちゃん。

・・・・・・・・・・

『鈴』

さてはて、俺が管理局に協力するようになってから、一週間以上経ちました。えっ？時間が飛びすぎ？気にしなさんな。俺は気にしない。

それまでの出来事といったら、まず管理局のアースラクルーのリンディさん達がこっちの世界の…しかも近所のマンションに引っ越してきた。といってもセーフハウスの意味合いでだけどな。俺も協力者としての立場から、このセーフハウスに寝泊りする事が多い。

リンディさん達が思った以上に、普通の生活をしていたことに何故か違和感を感じた。後、余談だけど俺が作った夕食を食べて、女&母親としての威厳を砕かれた女性二人が居た。

次になのは達だが、リンカーコアは無事に治った。一応、この事件には協力する姿勢ではいるが、今のままでは、またやられてしまう可能性が高いので、現場には出ずにひたすら訓練の日々だ。

大破していたなのはとフェイトのデバイスは何と、パワーアップして戻ってきた。『レイジングハート・エクセリオン』と『バルディッシュ・アサルト』だってさ。冗談半分で「中二病だー！」って指摘したら、ツープラトンでアックスボンバーをかまされた。首が折れそうだった。

アリサのデバイスはまだお預けの状態だ。先生の判定はまだ下っ

てはいない。あ、それとすずかも何やらクロスを弄っているようだ。何時の間にやら、メンテだけではなく、改造までできる程の知識を持つとは…。

そして肝心の事件だけど…中々に進展しない。向こうは魔力の蒐集を目的としていて、今ではこの地球ではなく、いろんな次元世界で蒐集しているみたいだ。一応、網は張っているけど、どうしても後手に回らざるをえない。その度に俺とクロノのコンビで向かうけど、少し交戦すればすぐに逃げられる。余程、優秀な参謀がいるようだ。

後は…近々、アルフをユーノを無限書庫で闇の書についての情報収集させるつもりでいるくらいかな？ユーノはともかく…アルフは明らかにミスキャストのような気が…。

大雑把に並べると、これぐらいかな？

そんな日々を送っている俺だけど、ちょっと懸念していることがある。

それはヴィータだ。

正直に言うと、共に遊んだ仲であるだけに、あまりあいつとは戦いたくない。そりゃああの時、なのはとフェイトが傷つけられたのを見て、プッツンきれて攻撃してしまったけど…

あの後、自己嫌悪に陥ってしまった。もっとやりようがあっただろうって。

そしてこれは自意識過剰とも思えるんだが…戦いたくないのはヴィータの奴も同じのような気がする。あいつは俺と戦って、退散する際に…いっつも辛そうな表情をしている。多分、そんな時の俺も辛そうな顔になってると思う。

何とか和解できないかと思って、話しかけるんだが…あいつは頑なに口を閉ざしたまま、こちらに力を振るう。

はぁ……本当、難しいよなぁ……。

ああ、やめだ！

このままネガティブに考えたって埒が明かない。そうだな…次に会った時は、逃がさないように注意しながら叩きのめして、無理矢理にでも事情を吐かせよう！それによって仲が一層、悪くなるだろうけど、今でさえ十分に悪いんだ。悲観するな！

よっしゃ！そうと決まれば、さっさと現れろ、ヴォルケンリッター！次に会った時が年貢の納め時だ！

ハァーーーハッハッハッハッハッーー！！！！

そう思っていた時期が…俺にもありました。

「ささ、大した御持て成しはできへんけど、ゆっくりしていってや♪」

「…い、いえ、お構いなく」

テーブルを挟んで目の前の少女は、にっこりと笑って紅茶を差し出してくる。その笑顔は人を惹きつけるような魅力的な笑顔だ。

背後の女三人と犬？一匹は、きつ～く睨んで殺気を飛ばしてくる。
その殺気は人を死に至らせんとするような濃厚な殴っ血ｋｉｌｌだ。

ああ、神よ…これだけは言わせて下さい。

「どうしてこうなった…」

世界は何時だって『こんなはずじゃない』事ばかりだ！（後書き）

謎の関西弁少女「…私の…デバンハ？」

イ「実装が中止され…（ゴキッ！）」

…次こそは本当にまともな出番です。彼女がファンの方、すみません。

※ちょっと捕捉

原作では無印の出来事を、プレシア・テスタロッサ事件と表記していますが、この作品ではプレシアは生きているので、ジュエルシード事件と呼んでいます。
ただ、そう呼んでいるのは生きている事を知っている面子のみ（理由としては、プレシアやフェイトに気を利かせて）ですが、管理局内では原作通り、プレシア・テスタロッサ事件、もしくはＰＴ事件と公表されています。

※作者自身、この辺は書いていてたまに混乱するので、作中の表記がおかしいなと思ったらぜひ御一報ください。

『絆』は時に苦しい？（前書き）

信じられるかい？　これ、全部携帯で打ったんだぜ…。

というわけで、かなりの間が空いて、申し訳ありません。

ひたすら携帯で、カタカタと…。途中、気が狂いそうになりました。

もうすぐＰＣのお古を貰える予定なので、今度は時間もかからない…かな？

何はともあれ、待っていただいた方には、お詫びと感謝の念を。

『絆』は時に苦しい？

『鈴』

「はぁ…今日も収穫は無し…っと」

ヴィータとやりあったゲーセンを中心に、周囲を足で捜索。もしかしたらこの辺りに住処があるのではないかと思って歩いたりするんだが、そうそう会える筈もなし。そろそろ帰ろうと、帰路につこうと思い始める。

「あ。ついでに買い物も済ませないと」

確か、リンディさん達のリクエストはグラタンだったな。っていうか最近、俺が料理当番の日が無性に多い気がするのは気のせいか？

・・・・・・・・・・

「「……ッ！！」」

ギリギリッと互いに譲らず、商品を掴んで離さない。俺達の愛を一心にその身で受けるのは、タイムセールの数量限定商品。全く…俺達の心を惑わし、掴んで放さない罪な商品(やつ)だ。

「……放せよ、リン。これはアタシが先にとったんだからな」

「ＨＡＨＡＨＡ！　何を仰(おっしゃ)いますやらウサギさん。明らかに、俺の方が早かったじゃないか。視力、悪いのかい？　ブルーベリー喰いな。ブルゥベリィ。」

一触即発。まさにその言葉が相応しい雰囲気が漂う。眼で牽制。相手の一挙一動を見逃すまいと、神経を尖らせる。

互いに動いた！

バッ！と商品から手を放し、距離をとる（注：ここは店内です）

共に相手を見据え、構える（注：ここは店内です）

呼吸を整え、必殺の一撃を繰り出すための一歩を踏み出す（注：ここは店内です）

パッ！！

「「あっ」」

なんてバカな事やっている内に、見知らぬおばちゃんに掻っ攫われた。流石だぜ、おばちゃん。自身の目的のためなら、ＫＹになることも厭わない。正に夕方の主婦（もののふ）。

「「……」」

さっきまでの険悪な雰囲気は何処へやら。代わりに漂うのは、かなり気まずい雰囲気。

それはそうだ。俺自身、冷静になってさっきまでのテンション＆寸劇を思い返すと、頭抱えて自室に三日間、引き篭もってしまいそうだ。目の前のヤツもさっきまでの遣り取りが恥ずかしかったんだろう、妙に顔が赤い。

なんて共に、居心地悪そうにしていたらヤツの方に声がかかった。

「ヴィータ、目的の品は買えた？」

…そろそろ突っ込もうか。

何でこのタイミングで出会うんだよ、ヴィータ！！物欲センサーでも搭載してんのか！！

・・・・・・・・・・

え～…長々と回想に耽っていましたが、以上が目の前の少女…はやてとの初邂逅。ついでにはやての車椅子を押していた、シャマルさんとの出会い。その後、俺がヴィータの知り合いと知るや否や、ヴィータがお世話になってますって名目で、はやての自宅に招かれました。

ヴィータも難色を示していたが、はやてはお茶の一杯くらいは…と耳を貸さない。

「え～っと…じゃあ、改めて自己紹介させてもらうね。秋月鈴って言います。好きに呼んでいいよ。他の皆さん方も、初めまして」

「おおきに。私は八神はやてっていいます。気軽にはやてって呼んでや。そんで、こっちから順に、シグナムにシャマル。ほんで、この犬がザフィーラや。みんな、私の家族やで」

「初めましてだ、鈴」

みんなを代表して、シグナムが挨拶してくる。言葉こそ礼節を弁えてはいるが、突き刺さる敵意は未だに消えていない。

「ところで、鈴君はこの辺に住んでんの？　私もよくあのスーパーに買い物に行くんやけど、見かけた事ないわ」

「いや、俺はここからだとちょっと離れた場所に住んでる。あそこにいたのだって、たまたま用事があったついでだったんだ」

「あ、そうやったんや、通りで…」

納得したようで、はやては紅茶に口をつける。俺も差し出された紅茶に口をつける。苦手な飲み物だけど、差し出されたモノには文句は言わない。当たり前だけど。

さて…そろそろ踏み込んでみるか。

「不躾な質問で申し訳ないんだけど、はやてとシグナムさん達ってどういう関係なの？」

「ん…まぁ、遠い親戚や」

「へぇ～。ん？　って事ははやてのご両親は？」

「…私が小っさい時に…ね」

「…ごめん」

「あ、別に気にしとらんで。何だかんだでシグナム達は私の大切な家族やし、寂しくもあらへんよ。他にも私を助けてくれるおじさんもいるし」

そう言って微笑むはやてには嘘偽りを感じない。本当に大切に思

っているんだろうなぁ。そしてシグナム達も、はやてを大切に思っているんだろう。はやての言葉を聞いた時、僅かだが俺に向けていた敵意が消え、表情も綻んでいた。

「ん、ありがとう。変な質問して悪かったね」

これ以上の深入りは止めておこう。シグナム達の俺に向ける敵意がさっきよりも膨らんでいる。

「ええよ、別に。じゃあ、今度は鈴君の事を教えてや」

「いいけど、あんまりおもしろいプロフィールとかは無いぞ？」

「それでもや。私、同い年の男の子の友達っておらへんかったから、興味あるんや」

「成程ね、わかった。じゃあ、何から話そうかなぁ」

それからは互いに、時々ヴィータ達のツッコミを受けながらも身の上話を繰り広げていった。はやてはなのは達と同様、早熟タイプの子だったらしく、無理なく話すことができた。

まぁ、一人で居るとそうならざるをえないのかねぇ。

・・・・・

「紅茶、ご馳走様。また会おうな」

「うん、今日は楽しかったわ。また今度、時間があったらゆっくりと話そうや」

「了解。ヴィータも、また今度な」

「…おぅ」

「こら、ヴィータ。ちゃんと挨拶せなあかんよ」

時刻は夕方過ぎ。冬であるため陽が落ちるのが早い。

門ではやて達の見送りを受け、俺ははやて家を出る。はやては最後まで手を振り、見送ってくれた。それに俺も手を振り返して別れる。

そして姿が見えなくなった途端、思考を切り替え、没頭する。

うん、はやてが闇の書の主で間違いないだろう。なのは達と同様に魔法の資質はあるようだ。なのは達程ではないけど、明らかに一般人よりも感じる魔力は多い。そしてヴォルケンリッターを親戚と偽った。これらから考察し、導き出した結果だ。

次に闇の書に関して。

ヴォルケンリッターが魔力の蒐集を行っているのは、闇の書の完成のため。それは闇の書の主、はやての命令によるものかと思った

けど、そうでない事がわかった。むしろそれについて、はやては関与していない。

俺はシグナムに向かって、『初めまして』と言った。シグナムのそれに対して、『初めまして』と返してきた。お互い、何度か戦った間柄なのにだ。つまりはやての前で俺たちはお互いが初対面を演じた。そこで立てた仮説は、『はやてを巻き込みたくなかった』だ。あのシグナム達が僅かに見せた、はやてに対する親愛の情。それがさらにこの仮説を裏付けるのに、滑車をかけた。

という事は、あいつらははやてに内緒で魔力の蒐集を行っている。

そしてアリサがシグナムから聞いた言葉、「我が主のため」の一言。

ヴォルケンリッターははやてのために、闇の書を完成させなければならない。しかし、主であるはやてに知られるわけにはいかない。はやてだって魔法を知っているはずなのに…だ。

はやての性格からすると、蒐集行為を許すような子とは思えないけどな…。

まぁこれらは飽くまで俺の仮説だ。細かい所を指摘していけば、穴のあるような仮説。むしろ俺のはやてに対する情も混じった暴論とも言えるかもしれない。けど得られた情報には変わりない。今後の捜査のために、役立てよう。

そうと決まったら、膳は急げだ。さっさとリンディさん達のセーフハウスに戻って、夕食の時にでも話そう。

ただ問題がある。それは、

「やっぱり、素直に帰れるわけないよなぁ」

周囲の空気が一瞬で変わる。視界に映る景色の色が濁り、人の気配は消え、街の明かりさえもまともに機能していない。

とりあえず買い物袋を安全な場所に避難させていると、俺を取り囲むように下りてきた三つの人影。さっきまで家に居たシグナムにヴィータ、そしてシャマルだ。ザフィーラは…いないようだな。

各々がデバイスを手に持ち、睨みつける視線は明らかに友好的なソレではない。

「さてはて、どうした？　見送りならさっき済ませただろう。何か用？」

「この状況でも動揺もしないとは、私達の襲撃がわかっていたのか？」

「まぁね。はやてに出会ってから現在も続いている通信妨害。そっちのシャマルの仕業か。自分達の居場所を知られたくなかったんだろう？　それなら俺をみすみすと帰すような事はしないもんな。だからこの状況は予想していた。つまりは…口封じだろ？」

「そこまでわかっているのなら、話は早い」

シグナムはそう言って、デバイスの剣を構える。シャマルも後方に下がっていく。前衛のサポートに徹する気なのだろう。

ただそんな中、ヴィータだけは何も言わずに顔を伏せたままデバ

イスを構えようともしない。

俺も臨戦態勢に移行する。ぶっちゃけ分が悪いどころの話ではない。一対三の状況、まともに戦って勝てるはずもなく、必死に思考を総動員させ、この場を離脱する手を模索する。何とかしてクロノ達に救援を要請できればいいんだが…。

「待った！！」

緊迫した空気の中で、さっきまで一人静かだったヴィータの声が響く。何事かと、全員が

「どうしたヴィータ？」

「悪いとは思ってる。けど…ここはアタシ一人にやらせてくれないか…」

「何を言ってるの、ヴィータちゃん！　あの子は私達を知ってしまった。だから確実に…」

「わかってるんだ。けど…それでも…頼む！」

「…わかった。そこまで言うからにはやってみろ」

「シグナム！」

「シャマル、確かに確実性を求めるなら三人でかかるべきなのだろうが、ヴィータはそれを跳ね除けてまでの主張だ。今回は任せてみようと思う」

「……わかったわ」

「ヴィータ、やるからには…敗北は許されないぞ」

「サンキュ、二人とも」

ヴォルケンリッター同士で、話がどんどん進んでいってるので傍観していたが漸く終わったみたいだ。
さっきの会話から察するに、ヴィータとのタイマンを凌げばいいのか？

「待たせたな」

「え～と…つまり、おまえを倒せば、俺を見逃してくれるのか？」

「そうだ。これはおまえとアタシとの…決闘だ！」

「…ワケを聞かせてもらおうか」

「アタシ自身が未練を断ち切るため…」

「未練？」

「正直に言う。アタシはおまえの事は嫌いじゃなかった。なんだかんだで、リンと遊んだ時は本当に楽しめた」

突然の暴露に思考停止。停止したのはシグナムとシャマルも同様だったみたいだ。驚愕の表情が見て取れる。

「だから…あの日から今まで、おまえと戦うたびに…割り切れない気持ちがあったんだ。多分、リンもだろう？」

「……まぁ…ね」

「それじゃ、ダメなんだ。そんな中途半端な心構えじゃ、アタシはこの先をやって行く事ができない。だから…アタシは自分の手でおまえを討って、この心を断ち切る！」

その宣言と共にデバイスを構える。シグナム達もヴィータの覚悟を見たのか、真剣な眼差しで見届ける心積もりのようだ。

俺はと言うと…不思議と落ち着いていた。いつもの俺だったら、さっきの暴露で「知り合いとは戦いたくないなぁ」とか思う筈なんだけど。

…何でだろ？いや、下手に心を乱したまま戦うよりは良いんだけど。

改めて、ヴィータと対峙する。ヴィータの眼は今までのように迷いを見せてはいない。正確には、内に押し殺しているんだろう。

俺も腰を落とし、戦闘体勢に移行する。一度、深呼吸を行い頭を切り替える。

互いに無言。しかし、仕掛けたのは…

「「っおおおおぉぉぉぉぉーー！！」」

同時。

・・・・・・・・・・

『シャマル』

始まった二人の戦い。私とシグナムは二人の戦いをただ見守るだけ。決して、手を出す事が許されない二人の『決闘』。

最初、私はこの決闘には反対。はやてちゃんの病を治す目的のための魔力蒐集。ヴィータちゃんと戦っている少年、鈴。彼の仲間の膨大な魔力を蒐集したおかげで、闇の書の完成は目前となった。管理局の捜査も本格的に始まり、蒐集がやりづらくなっている今、ヴィータちゃんの個人的な感情を優先すべきではない。私達で即座に蒐集、口封じをするべきだ。

けどシグナムは、ヴィータちゃんのその感情を優先させた。もちろん抗議した。けど、

「騎士としてのケジメをつけさせてやってくれ」

と返すシグナム。

「はやてちゃんとの約束を破った私達に、騎士のケジメも何もない」

とさらに反抗する私。それでもシグナムは、

「だからこそ、せめてもの誇りを尊重したい」

と言われて渋々と引き下がった。

ヴィータちゃんが彼との出会いを話した時の様子は今でも覚えている。夕食の時に、みんなにひたすらに「腹の立つヤツ」だの「次に会ったら決着をつけてやる」だのと憎まれ口を叩いてはいたけど、その顔は楽しそうだった。はやてちゃんがそれを指摘すると、顔を真っ赤にして必死になって否定する姿は本当に微笑ましいものだったのも覚えてる。

だけどその再会は、本人の望まぬ形で果たされた。敵として…。

ヴィータちゃんは彼と戦った日から変わった。物思いに耽ることも多くなり、時折上の空となる事も多くなった。みんなも気遣ってくれるけど、本人は大丈夫の一点張り。けど顔は決して浮かない。

それから管理局と幾度かの交戦も行った。ヴィータちゃんは管理

局員との戦いは今までどおりにやれていたけど、彼の姿を認めるたびに沈痛な顔を浮かべる。それは私達、ヴォルケンリッターでもあまり見ない表情だった。

そんなヴィータちゃんがその迷いを振り切るために、今も彼と戦っている。彼も決して悪い人ではないというのが、はやてちゃんを通じて分かった。ヴィータちゃんが心を許すのも頷けた。けど私達は、はやてちゃんを救うために心を鬼にしなければならない。ヴィータちゃんにとっては、そのための決闘だ。

しかし、今では心の隅で思う。本当にこれでいいのか？と。

・・・・・・・・・・

『鈴』

ドガァンッ！！

振り下ろされたヴィータのデバイスが地面に穴を空ける。

「ッラァ！！」

身を捻り、回避。その勢いのまま回し蹴りを繰り出すも、上空に逃げられる。かといって、追いかけたりはしない。距離をあけたなら、遠距離戦のスタイルに変更する。

「【射撃】！」

三発の魔力の弾丸はヴィータの障壁に阻まれ、届かない。まぁ、わかってた。つーわけで、障壁を破れそうな一発を。

「【砲撃】！」

さっきまでの魔力弾よりも一際大きな魔力弾が一発、放たれる。再び障壁に阻まれるが、魔力弾が掻き消えたと同時に障壁をも打ち砕いた。相殺ってところだな。

若干の驚愕の表情を浮かべているヴィータ。その隙に接近戦を仕掛けるべく、一気に肉薄しようとするが…。

「シュワルベフリィゲェン！！」

以前と同じように四つの鉄球を打ちだすヴィータ。急停止をかけ【盾】で弾く。

ギギギィィンッ！！

以前と同じ構図だ。こちらが防いでいる間に、今度はヴィータの方から肉薄してきた。無論、迎え撃つべく【衝撃】を放とうと術式を構築し、構える。

だから気付かなかった。ヴィータの奴が密かに噛っていた事に…。

「くたばれ、衝げ…っ！」

ゴッ！！

「ガァッ！！」

突然、背後に物凄い衝撃を受け、一瞬呼吸が止まる。前のめりに倒れそうな体、足を踏ん張り倒れるのだけは防ぐ。その際に、さっきヴィータの打ち出した鉄球の一つが霧散していくのが見えた。

（クソが…誘導弾だったか…って、マズイ！！）

「ラケーテンハンマァァー！！」

気付いた時にはもう遅い。体の側面から伝わるのは、今のとは比べ物にならない程の衝撃。一瞬にして視界がぶれ、景色が流れてい

く。それがヴィータのデバイスで吹っ飛ばされたのだと認識したのは、地面を転がり、漸く止まった時だった。

「…っつぅ…ゴホッ！」

口の中に鉄の味が広がる。むせた拍子に吐き出された血によって地面に赤い華が咲く。

今の一撃は致命的だった。【強化】に加えて【鎧】で可能な限り生身での防御力を上げたが、それらを上回る威力だ。骨どころか、内臓にまでダメージが届いている。【治癒】でなんとか回復させるも、ダメージが大きすぎるので全然追いつかない。

「ク…ソがぁ…！」

【治癒】を続けながら立ち上がろうとするけど足に力が入らない。あまりのダメージの大きさと、痛みによって魔法をうまく扱えないみたいだ。代わりに視界に入るのはこちらにゆっくりと歩いてくるヴィータの姿。そんなヴィータは俺の傍で立ち止まる。

・・・・・・・・・・

『ヴィータ』

アタシの一撃をモロに受け、倒れ伏すリン。所々を血に染めながらもこちらを睨む。その眼光を受けたアタシは僅かながらの懺悔の念が浮かび上がっていた。

「悪いとは思ってる」

「謝ん…な…」

それはそうだ。リンに傷を負わせたのはアタシなんだからな。謝罪の言葉なんて口にする資格は無い上に、罪悪感を感じる資格も無い。未だにこんな事を口走るなんて思わなかった。アタシはまだコイツに未練があるのか…。

だから…早く断ち切らないと。アタシは…。

「けど、はやてを助けるために…アタシはどんな事でもするって決めたんだ。だから…おまえとの絆。ここで終わりにする」

デバイスを頭上に振り上げる。これを振り下ろせば、リンの命の灯は消える。コイツとの繋がりを断ち切れる。

やらなくちゃいけないのに…未だに踏ん切りがつかない…。

「……はやてってさぁ…めっちゃ優しくて、いい子だよなぁ」

「？」

躊躇っていたアタシに気付いたのか、気付いていないのか。リンはこの絶望的な状況なのに対し、アタシに聞かせるように、独白を始める。

「あの子が闇の書の主ってのは…間違いないと睨んでるわけよ」

「おまえ…何を言って…」

「そんな優しい子が、おまえらに魔力の蒐集なんて命じたのか？」

「！！」

自分でも顔が歪むのがわかった。リンはアタシの表情から答えを汲み取ったみたいだ。口の端を僅かに持ち上げ、小さな笑みを浮かべていた。

はやてを巻き込みたくないと思ったアタシは、知らず知らずの内に声を発していた。

「…はやては関係ねぇ」

「だったら尚更、優しいあの子の事だ。おまえらがこんな事をしていると知ったら…悲しむんじゃねぇの？」

んな事、わかってるよ。こんなアタシ達をはやては受け入れてくれたんだ。ヴォルケンリッターという『駒』でも、『道具』でもなく『家族』として。

「いや、絶対悲しむな。はやてって、おまえらを”大切な家族”って思ってくれてたみたいだしな」

うるせぇ、わかってる。だから…それ以上、口にするな…。

「おまえらもはやてを信頼してんだろ？　なのにおまえらは何をやってる。それほどまで、闇の書を完成させなければいけないのか？」

いけないんだよ。じゃないと、はやてが…。だから…何も知らないヤツが口出しすんじゃねえ…！

「まぁ、つまり何が言いたいかというと…あの子を悲しませるような事すんじゃねえ！！」

「だまれぇぇぇぇーーーー！！！」

有らん限りの激情を込め、アイゼンを振り下ろした。

だけど、アイゼンがリンを捉える事は無かった。

我を忘れ、ただ怒りまかせの一撃を、リンは体を丸め、身を捩って避けた。しかもそれだけじゃなく、逆立ちをするかのようにして、アタシに蹴りを放ってきやがった。

頭に血を上らせた状態のアタシでは、それを避けることが出来ずに顎に直撃。たたらを踏むアタシ。反動を利用して立ち上がり、距離を離すリン。その姿は、アタシの一撃を貰ったのが嘘のようにしっかりとしたものだった。よく見れば、負っていた幾つかの傷も消えていた。

（こいつ…まさか回復魔法も使えるのかよ…）

僅かばかりの驚きを覚えたアタシを余所に、リンは言葉を続ける。

「何だよ。はやてに後ろめたさでも感じてんのか？　だったら蒐集なんてさっさとやめろよ」

何も知らないリンの言葉は、アタシを苛立たせる。

「うるせぇ！　おまえに何がわかる！　闇の書を完成させねえと、はやての体はッ！！」

「ヴィータッ！！」

シグナムの一喝に、ハッと我に返った。しまった…喋りすぎた。

「成程…つまり、はやての体の異常のためにおまえ達は魔力の蒐集をしている…と。やっと喋ってくれたか」

やっと…？つまりこいつは、それを聞き出すためにアタシに挑発じみた事を…？

改めてリンと向き合うと、あいつは…笑っていた。今までの挑発じみたモノじゃない。喜んでいるかのような、自然な笑み。それが理解できないアタシは問いかけてた。

「何を…笑ってるんだよ？」

「ん？　ああ、すまん。うれしくってさ」

うれしい？

「おまえらが、決して悪いやつじゃないってわかったから」

自分でも、息を呑んでしまう。

「ぶっちゃけ、俺も割り切れない想いがあった。だからはっきりとしておきたかったんだ。おまえが良い奴なのか悪い奴なのか。おまえは…良い奴みたいだな。さっきの挑発じみた所業、謝る。ごめんな」

「やめてくれ…アタシはそんなもんじゃない」

「そんな事はない、おまえは良い奴だよ。そして、それがわかったからには…俺は負けるわけにはいかなくなった」

リンはさっきまでの笑みを引っ込め、真剣な表情で再び構える。アタシの方はさっきまでの威勢もどこへやら…こいつのお人好しさに、心乱されていた。

そして、密かに喜びを感じていた。

「そろそろ、この決闘を終わらせよう。『鉄槌の騎士』ヴィータ」

その言葉を終えるや、リンはアタシに真っ向から向かってきた。今までで、一番速い加速だ。

対するアタシは、

「アイゼン、カートリッジ！！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

「ラケーテン…ハンマァァー！！」

フォルムを変え、加速と遠心力を加えた一撃を上段から振り下ろす。タイミングを合わせ、さっきのものよりも破壊力を乗せた一撃。

突っ込んでくるリンに叩きつけられる一撃。リンもタイミングを合わせるように拳を振るった。

「【衝撃】！！」

アイゼンに向かって。

ドッゴォォォォォォン！！！

轟音と共に、空気が爆ぜたような衝撃が巻き起こる。

デバイスを襲った衝撃波によって、持ち手が吹っ飛ばされそうになる。それでも決して放すまいと、握力を緩めない。だけど、それがいけなかった。

突如としてアタシの襟元を掴まれ、視界が回り、気がつけば地面に叩きつけられた。

視界には、アタシを見下ろすリン。リンは左手をアタシの鳩尾辺りに添えて、呟いた。

「ヲヤスミ、ヴィータ。【衝撃】」

・・・・・・・・・・

『鈴』

今の一撃で気絶したヴィータからそっと左手を離す。右腕がさっきの魔法で、ちょっとグロくなってしまったので【治癒】をかける。

治療を終えた頃、シグナムとシャマルの両名がこちらに歩み寄ってきた。

「この勝負、おまえの勝ちだ。約束だからな…このまま帰そう」

気絶したヴィータを背負い、そのまま二人ははやての家へ帰ろう

とするが…。

「ああ、ちょい待って」

俺は携帯を取り出し、

「もしもし。あ、クロノか？　うん、遅くなって悪かったよ。でさ、今、用事があって友達の所にいるから帰るのはまだになりそうなんだわ。リンディさんにも伝えておいてくれ。うん、頼む、じゃあな」

電話を切る。

「それじゃ、行こうか」

さっきの会話を呆然と聴いていた二人に促す。

「待て、どこに行くつもりだ？」

「はやての家」

「…何が目的だ？」

警戒心たっぷりに訊ねるシグナム。シャマルも警戒心剥き出しの状態だ。そんなの関係ねぇとばかりに俺は目的を素直に喋った。

「はやての体の診察」

決して、いやらしい意味は無いぞ。

『絆』は時に苦しい？（後書き）

ＰＣが使えなくなった時のあの絶望感。もう味わいたくないですね。

今回のお話は、ちょい意味不明になってしまったかも…。

※ちょっとした設定

鈴は親愛の情を抱いてる年上の人には、さん付け。

敵意を見せる方には呼び捨てです。

作中、バラバラなのはこのため。

良い事、悪い子と？（前書き）

またもやレア（じゃない）スキル『遅筆』発動！

最早、二週間以上がデフォになってきてる私です。罵っても構いません。

でも、ＰＶやお気に入り等が地味に伸びてるのでうれしい気持ちで一杯です。

みなさん、ありがとうございます。

良い事、悪い子と？

光の無い部屋に鎮座する大きなベッドの上で、ヴィータは目を覚ます。

「ぅう～ん…むぅ～」

落ちそうになる目蓋を擦りながら周囲を見渡す。そして此処が見慣れたはやての部屋だと認識すると、ヴィータは未だに寝ている頭を徐々に覚醒させる。

（え～と…何で寝てたんだっけ？　確か…いつものように過ごして、リンと会って……リン！！）

その思考が功を為し、ヴィータの脳は一瞬で覚醒した。布団を跳ね除け、部屋を飛び出し、階下の明かりの灯った居間へと突撃。バァン！と、壊れるんじゃないかというぐらいに乱暴に開け放たれた扉に、居間にいた人達は大層驚く。

「おい！　あの後、どうなっ…て…？」

入ってきた時の勢いは徐々に萎んでいき、終いには動きが止まる。ヴィータの眼に映ったのは…シグナムにシャマルに狼形態のザフィーラ。ここまではいつも通りなので、ヴィータが動きを止める理由は無い。

問題はもう片方の組み合わせ。ヴィータの大切な主であり、家族

の八神はやてと、ついさっきまでヴィータと死闘を繰り広げていた秋月鈴だ。

前話で鈴がはやての診察と言ってたので、ここに居るのは別におかしくはない…が、気絶していたヴィータはその事を知る由もない。

さらには、今の二人の体勢。はやては車椅子に座っていて、その前に跪いている鈴は、はやての足を持ち上げ、触診している途中だったのだ。

だが事情を知らない人が見たら、はやての素足を撫で回しているかのような様相だ。そして全く状況を理解できない上に、はやてを大事に想っているヴィータがそう悪い方に捉えてしまったのも無理はない（かもしれない）

そしてその光景はヴィータの中の『何か』を何故か波立たせる。

そのモヤモヤして、ムカムカする味わった事の無い感情を晴らすべく、

「何やってんだ、おまえはぁぁーー！！」

鈴に向かって飛び掛り、膝を横っ面に叩き込みました。

決め技：シャイニングウィザード

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・
・

カチャカチャ…モグモグ…。

はやて一家に鈴を交えての食卓は賑やかなものに……ならず、お通夜のように静かなものだった。それは鈴とヴィータ、二人の発する険悪な空気のせいである。他のみんなも雰囲気に呑まれたのか決して喋らず、一家の主であるはやてさえもが、どうしたものかと悩む。

だがその空気に耐え切れなくなったのは、張本人の内の一人、ヴィータである。

バンッ！！

「ああもう！　いい加減にしろよ、リン！　さっきのは悪かったって言ってるだろ！　いつまでもウジウジと……女々しいぞ！？」

「女々しい？　女々しいと申したか！　ふざけんな！　こっちはさっきの一撃で、実は密かに自慢だった健康な歯が一本、犠牲になったんだぞ！　しかも奥歯！」

「自分で治せたんだから、いいじゃねぇか！」

「それで全ての遺恨がなくなるようだったら、世界はもっと平和だよ！！」

互いに額をぶつけ合い、グリグリッと擦りながらメンチビーム。

ヴィータはもっと殊勝に、鈴はもっと心を広くもてば、事態は収束していたのだろうがもはや後の祭り。ここまでくれば意地の張り合い…というのが、二人の共通認識である。実は波長の合うコンビなのかもしれない。

暫く睨み合い、ヴォルケンリッター達も溜め息一つ。そろそろ止めるか、と動こうとしたところで、予測もしなかった方から、アクションがあった。

バァァァンッ！！

卓上の食器が一瞬、浮かび上がる。その音にビクッ！と震えた二人は恐る恐ると音源の方を向く。

「二人とも…ええ加減にしいや……（ニッコリ♪）」

一家の主、はやてだ。発した声色は重く、浮かべる表情は笑顔。笑顔とは本来、攻撃的な意味を持つとか、持たないとか…。

そんなはやてに、二人の行動は早かった。

「「ｈａｉ！　調子にのってすみませんでしたぁぁぁ！！」」

日本が誇る伝統文化奥義『ＤＯＧＥＺＡ』×２

この二人、やっぱり仲が良いのかもしれない。

・・・・・・・・・・

『鈴』

「う～ん…」

激動の食事も終わり、みんなと茶を囲みながらはやての診察の結果を振り返る。

正直、この診察で得た結果はヴォルケンリッターの知り得ているものと大差無かったりする。足の病の原因、それを改善するための魔力蒐集だったとか、進展は全く無し。

…これは後日、ユーノ達が無限書庫で得る情報に期待するしかな

いな。

「鈴君、どしたん？」

「いや、何でもない」

「でもなんか、眉間にごっつう皺寄ってるで？」

はやてに気遣われる。そんなに寄っていただろうか？と、眉間を揉み解しながらはやてに尋ねてみる。

「はやて、本当にこのままでいいのか？　そりゃあ、魔力の蒐集行為はあまりよろしくはないけど、それで苦しむのはおまえなんだぞ？」

「うん、ええよ。そんな事よりも、私はみんなと一緒にいる事の方が大切やから」

「その結果、発作の度に、みんなを心配させてしまうとしてもか？」

「……その問い掛けはちょっと卑怯やわ～」

「……すまん」

確かに、はやての性格からしてその事に心を痛めないわけがなかった。

俺ははやてに、シグナム達が蒐集をしていたという事を除いて、全てを話した。自分も魔法使いである事。現時点での闇の書の事。さっきの診察の結果、進展が無かった事。

それでも本人は嘆くことも無くみんなとの生を望む。その心がヴォルケンリッターの心を突き動かす。
本当、こいつらは愛し、愛されているな…。

「そや、鈴君の魔法を見せてや！」

「いいけど、急にどうしたんだ？」

「いや、単純に見てみたいんや。他の人の魔法ってどんなんやろかなぁって」

「それは、私も興味があるな」

「そうですね。あなたの魔法は、私たちも見た事が無いですし」

はやての欲求と共に、ヴォルケンリッターのみんなも興味を示してきた。シグナム、シャマル、ザフィーラは興味津々と。ヴィータは興味ない素振りをしながら、視線をチラチラと飛ばしてくる。
……もっと素直になってもいいんでないかな？

「ん～。じゃあ、【火】」

ボッ！と指先に火を灯してみる。はやては小さく拍手までしている。

「ほう、私と同じ変換資質か」

「ところがどっこい…【凍結】」

今度は、湯呑みの中の茶を凍らせてみる。小さな見慣れた六角形の陣が展開されると共に、凍結していくお茶。

「……二種類の変換資質？」

「詠唱を必要としない？」

「まだあるぞ」

その後も、電池を抜いた卓上時計を【電撃】で動かしてみたり、【風】で空気の流れを起こしてみたりと手品のような魔法を披露する。

その一つ一つにはやては惜しみない拍手を送り、他のみんなも目を丸くして見入っている。興味なさそうに徹していたヴィータも、そのバリエーションの多さに途中からみんなと一緒に混ざっていた。

「…デバイスも無しに、これだけのものを操るとはな」

「これだけの魔法をあなたはどこで、習得したんですか？」

「ん～、内緒ってことで」

「……まぁ、いいだろう」

あっさりと引き下がってくれたので、ありがたかった。ヴィータとの決闘に勝ち、はやての病気をみたりと、なるべく誠意をみせて接してはいるけど、今の俺は一応管理局所属。情報の提示は度が過ぎないようにしないとな。

……えっ？だったら、さっき魔法を見せたのもマズイんじゃない

かって？まぁ、ある程度は手を明かして信用を得るってことで一つ、目を瞑ってくれ。

うわぁ…何気に打算的だな、俺って。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

「じゃ、今度こそ本当に帰るわ」

「あぁ…」

本日二回目の見送り。ただ今回の見送りはヴィータだけ。二回目だから大勢はいらないってことで、はやて達には遠慮してもらった。

「……なぁ、リン」

「うん、どうした？」

「おまえは何で、そこまでしてくれるんだ？」

「そこまでって？」

「アタシはおまえとの勝負に負けた。だからアタシは色々と覚悟し

てたのに、おまえははやてを治そうとしてくれたり、管理局にアタシ達の事を内緒にしてくれたりと…何でだ」

「何だ、そんな事か…」

思わず、溜め息を吐いてしまう。

「はやての事もそうだけど、おまえらはなんだかんだで悪い奴じゃないだろ？　だから何とかしたいって思うのが人情ってものさ。納得いかないんだったら、簡潔に述べてやろうか？」

「？」

「つまり……お人好し」

『お人好し』

たった四文字だけど、これ以上にないぐらいの説明だと思う。ヴィータも暫くは呆気にとられていたけど、言葉の意味を解したのか、小さく笑った。

「くっ、くくっ……た、確かに簡潔でわかりやすいな」

「だろう？」

向き合いながら笑う。これで互いに命を賭けた戦いを繰り広げた仲だと思う奴はいないんじゃなかろうかってくらいだ。

「さて、これ以上はさすがにマズイから帰るわ。……またな、ヴィータ」

「またな、リン」

共に無意識の内に発した、再会を望む別れの挨拶。浮かべる表情も柔らかく、本来は敵同士でありながら、敵意も抱かない。

その事実を二人は気付いていない。二人にとって、互いに許せない奴でありながら、心許せる奴なのだから。

・・・・・・・・・・

「鈴君からっ！　また知らない女のっ！　匂いがするっ！　しかも複数のっ！！」

「落ち着け、なのは！！　つうか、何で服を脱がす！？」

「もうこうなったら、私の匂いを直接肌に擦り込むの！！　他の女の匂いが消えるまで！！」

「わけのわからんことを…って、やめろ！？　服を脱ぐな！！　パンツを脱がすな！！」

「■■■■！？」

なのはの病み具合は、ナリを潜めただけで治ってないようです…。

・・・・・・・・・・

『ユーノ』

はい、また数日が経ちました。最近は時間の流れが早いけど、気にしないでください。作者さんが、巻ける所は巻こうとしているみたいです（メタ話）

「…以上が、今回の調べで得られた情報です」

静かな室内で、僕の報告が終わる。

ここは管理局のセーフハウス。つまり、リンディさん達の部屋。以前から頼まれていた無限書庫での情報収集が終わったので、こうやってみんなに報告してるわけだ。ここに居る面子はリンディさん達管理局の人と、僕等いつものメンバー。それぞれに行き渡った纏めた資料のコピーと真剣に睨めっこ。

「鈴、今のを聴いての感想を聞かせてくれ」

「厄介の一言だな」

クロノの問いに、鈴は簡潔に答える。厄介…聞こえたその単語には僕も同意する。

『闇の書』

本当の名は『夜天の魔導書』。かつては技術や知識を研究のために、収集して記録する物。しかし、過去の誰かがこれのプログラムを改変したために、本来の機能が変質。それにより、停止や封印が不可能となり、完成後はただ破壊の力を振るうだけと化す。しかも宿主の命はその場で終え、闇の書そのものは次の持ち主に転生と迷惑以外の何者でもない。

「ねぇユーノ。あのヴォルケンリッターの連中もその事実を知ってるの？」

「さすがにそこまでは…でも連中が本来の名前ではなく、闇の書って呼んでる事から知らないのかも…」

「プログラムの改変の影響を受けたのは、あの人達も同じってことでしょうか？」

「その可能性は高いと思うよ」

その応答を最後に、室内は再び沈黙に包まれる。そしてリンディさんは立ち上がり、今後の方針を一同に伝える。

「さてと…ユーノ君、アルフさん、ご苦労様です。私達の行動方針は今のところ、変わりありません。連中の足取りを掴み、闇の書の主を見つける事。連中の逮捕です。最近は動きが無くなって、足取りを掴むのが難しいと思いますが、私達はできる事を精一杯やりましょう。では、以上でミーティングを終了します」

一気に空気が弛緩し、各々が動き出す。なのは達は女性同士で集まり、何やら話し合っている。そして僕達、男連中も自然と集まる。

「それにしても、これだけの資料をよく集められたな」

「うん、中々に骨だったよ。クロノも時々、手伝ってくれたし、アルフなんか途中で、投げ出しそうになってたんだよ」

「やっぱり、あいつはミスキャストだろう…」

「それに協力してくれた人もいたしね」

「誰？」

「僕の知り合いだよ。リーゼアリアとリーゼロッテ。僕の執務官研修の担当だった人、ギル・グレアム提督の双子の使い魔さ」

ちょっぴり、誇らしげに語るクロノ。僕は…ちょっと遠慮したいな。出会って早々に、クロノで遊び、僕に至っては捕食者のような目で見られたりと、出会いがしらのインパクトが強かった。（片方の人だけだったけど）

その点、グレアム提督は、普通に良い人そうでよかった。

「とにかく、俺にとってこの情報が得られたのは助かるな」

再び、資料に目を通す鈴。

鈴は何かを隠している。

そう感じた時と、連中が動きを見せなくなった時はほぼ同時。管理局のみんなは気付いていないけど、付き合いの長い僕達にはわかる。多分、鈴は連中と…。

なのは達はここぞとばかりに追求したけど、鈴は後日、ちゃん話すと言って、今は語らない。鈴の事を信用している僕達はとりあえずそれで納得しておく。

彼だったら、悪い考えは持たないだろうしね。

・・・・・・・・・・・・

『シグナム』

ここは、小さな公園。そこに、私と鈴は居た。

「ここに書かれている事は、事実なのか…？」

「恐らくね」

「だとしたら…私達のしていた事は…」

「はやての寿命をさらに縮めるだけだな」

鈴の言葉に、ガツンッ！と頭を殴られたような衝撃を受ける。

彼とは以前、ある約束を交わしていた。それは管理局で調べた闇の書に関する情報を与えるから、それまでは魔力の蒐集を控えてくれという約束だ。

決闘に負けた上に、貸しのある私達はこれを承諾せざるをえなかった。そしてその結果が今のこれだ。

何という…私達は道化もいいところではないか。

「それで、これからおまえらはどうするんだ？」

「……」

答えられない。答えられるはずがない。主を救う手立てと信じてやってきた事が、全て否定されてきたのだ。歩むべきはずの一筋の道が消え、絶望の淵に立たされた私達には…何ができるというのだ…。

「で、提案があるんだが……素直に管理局の助けを借りないか？」

鈴が何を言ってるのか一瞬、理解できなかった。

「別にあんたらを売るってわけじゃないぞ。ぶっちゃけ、俺たちに出来ることなんて、たかが知れてる。だったら素直に助力を求めた方が、はやてを助けられる可能性が高まる。さすがにあんたらが無罪放免ってわけにはいかないだろうけど、今の担当している管理局員は信用できる人だから、悪いようにはしないはずだ。俺もちゃんと、口利きするからさ」

「……」

「シグナム達は『夜天の魔導書』と共に、プログラムの改変の影響を受けてるんだろ？　だから『夜天の魔導書』の記憶が思い出せない。だからシグナム達だけでどうにかするのは、難しいぞ？」

その通りだ。『夜天の魔導書』という言葉には懐かしさを感じる事はあるものの、肝心の記憶、記録が私達には無い。もし仮に、残っていたのであれば私達だけでも、どうにかなったのかもしれない。

いや、ここで『もし』を語るには遅いか…。

「…どうする？」

手元のコピー用紙を折りたたみ、空を仰ぐ。頭では様々な思考が入り乱れ、グチャグチャな状態ではあるが、この胸中にはすでに答えを出していた。

落とし処は……はっきりとしておかねば…な。

「私個人としては、その提案には乗りたいところだが、ひとまずみんなに今回の事を相談する。その上で、後日返答させてもらう。それでもいいか？」

「ああ、かまわないさ」

その答えを最後に、この問答を打ち切る。暫しの静寂が訪れるも、それはすぐに打ち消された。

「はやての容態はどうだ?」

「今のところは安定している。突発的な発作も起こらずに、調子も良さそうだ。ただ…」

「ただ?」

「最近、夢を見るそうだ」

「夢?」

「そうだ。暗闇に呑まれる夢だとか…」

「…えらく抽象的だな」

「どう思う?」

「はやても何気に潜在魔力資質は高い。そういう人は、総じて夢にも何らかの影響が現れる。例えば、予知夢とか……だけどその内容だと、判別がつかん」

「そうか…」

「まぁ、夢は夢。そう悲観することもないさ。さて…これ以上は管理局にばれるかもしれないから、これで帰るわ。シグナムはどうす

る？」

「私は……もう暫くここにいるさ」

「そうか。んじゃ、また後日」

「あぁ…」

ベンチから立ち上がり、公園を去っていく鈴。それを見届け、私は空を仰ぎ、これからを思う。

我が主、八神はやては怒るだろう。交わした約束さえ守れず、人を傷つけた。だが、主が自身を犠牲に私達との生を望むように、私達は自身を犠牲にしてでも、主には生きていてほしかった。

これからどう転ぶのかは、もうわからない。ただ、主の無事を望むのみ。たとえ、これまでの生活を送れなくなったとしても…。

「ここまで…なのだな…」

この明るき空は……今の私とは対照的だな。

その夜、私はヴォルケンリッター達、そして主に全てを明かした。

・・・・・・・・・・

「…なのは。大人しく武装を解除し、直ちにお家に帰りなさい」

「ねぇ…誰と会ってるの？　ねぇ…誰の匂いなの？　ねぇ…私じゃダメなの？　ブツブツ…」

「……OK、俺も男だ。お詫びになのはの望みを一つ叶えよう。だから武装を解除せよ」

「私のモノになって（キリッ）」

「ハードル高すぎ！　せめて現実的なものにして！」

「…じゃあ明日一日、私に付き合ってね」

「まぁ、それくらいなら…」

「はい決定。言質は取ったからね。言い逃れをしたら……ワカッテルヨネ？」

「イエス、マム！！」

（鈴の）明日は～どっちだ～♪

・・・・・・・・・・

閑静な住宅街にその人物はいた。

上下のスーツを見事に着こなし、かぶった帽子の下に見える相貌は初老の顔。一見しただけでは、ただの初老の人に見える。だがその眼は、ただ年老いただけの老人のソレではなく、相応以上に研ぎ澄まされている事から、カタギの者とは思えないような雰囲気を漂わせている。

その人物はとある住宅の玄関先に佇む。備え付けられた表札には『秋月』の性。男はそれを確認すると、何かを覚悟するように、一度大きく息を吐く。そして意を決して、呼び鈴を鳴らす。

ガチャッ。

「はい、どちらさんだ？」

その人物が出るまで数秒だった。だが男にはそれ以上の時間がかかったように感じた。それも仕方ないかもしれないと男は思う。用があったとはいえ、まるで虎穴に飛び込むような行いなのだから。

しかもよりにもよって、応対したのが目的の人物本人だったのだから、不意打ち気味な出来事に男の心臓は早鐘を鳴らしている。だが、それを表に出すことはない。

コホンと小さく咳払いをして、動揺を消す。そして答える。

「初めまして。私はギル・グレアムと申します。本日は『魔女』であるあなたに用があって参りました」

「……わかった。話を聞こう」

男の名は、ギル・グレアム。時空管理局所属の提督。

女の名は、秋月蓮。かつて裏の世において『魔女』と呼ばれた魔導師。

良い事、悪い子と？（後書き）

シリアスっぽいものが続いてます。先生…コメディが…書きたいです。

というわけで、次回はコメディの予定です。

今はただこのひとときを！（前書き）

気がつけばこの小説も連載一年。思えば遠くに来たもんだ。

ここまで続けながらも、読んでくれた方々に『ありがとうございます』

遅筆ながらも、がんばっていきます。

…一周年のお礼に特別編でも…と考えてましたが、ネタが無い。orz

あえて言うなら、後半の全キャラ崩壊が特別編？

でも、こんなのが読みたいってリクエストがあったらがんばって書くかも…。

今はただこのひとときを！

『鈴』

「うおおおぉぉぉぉぉ！！　唸れ、俺の右腕！」

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ…

何をしているのかって？　必死にボールの中身をかき回してます。

「廻せ廻せ廻せまわせぇぇぇぇっ！！　――あがっ！　腕、つった！　いたたたたっ！！…くっ、静まれ、俺の右腕っ！！」

「鈴、何してるの？」

「痛みを紛らわすための邪気眼ごっこ」

日付も変わって、今日は十二月の二十五日。世間ではクリスマス。今年も俺たちは毎年恒例である、大規模なクリスマスパーティーをするのだ。会場も、すずかの家で開催。大人数なのだから、必然的に、広い場所が必要となる。

俺はというと、ユーノを伴って一足先に月村家にお邪魔して、台所で今夜の料理の準備をしています。料理は大人にまかせなさいという声もあったのだが、何気に俺の料理を望む人も多いので、こうして腕を振舞っているのだ。

「鈴、煮立ってきたよ」

「なら次は、丁寧にアクを取り除いてくれ」

「わかった」

ユーノに指示を出しつつ、自分の仕事も忘れない。同じように、厨房ではこの屋敷の使用人であるノエルさんとその妹であるファリンさんも今夜の準備にと大忙しだ。それに加え、料理やケーキは翠屋からも何品か持ってきて、立食パーティー形式にする手筈になっているので、豪勢な物になるだろう。

多すぎないか？と思うかもしれないが、今年はフェイト達に加え、リンディさんやクロノにエイミィさんと、管理局の人間も来る予定だ。

リンディさん達はまだ事件も解決していないからと遠慮していたのだが、部下達の勧めもあって参加することになったのだ。良い部下に恵まれてるなぁ。

まぁ、当日に事件が起こることも無いでしょう。あ…後、あいつらの迎えに行かなくちゃな。

・・・・・・・・・・

『フェイト』

毎年の恒例だというクリスマスパーティーに招待された私は、初めての経験にちょっと浮かれていた。

外はすっかり闇の帳が落ちているのとは裏腹に、招待されたすずかの家では、既に集まっていた人が開始時間までを思い思いに過ごしていた。

なのはやアリサ、すずかといったいつもの面子に加えてその家族や管理局の人と本当に大勢だ。私も大好きな母さんとイベントに参加するのは初めてなので実は内心、嬉しさで一杯。

「あ、フェイトちゃん！」

「来たわね、フェイト」

「いらっしゃい、フェイトちゃん」

「うん。こんばんわ、みんな」

私達が来た事に気付いたすずか達がこっちにやって来て声をかける。隣に居た母さんは私達に気を使ってくれたのか、みんなに軽く挨拶をした後、早々と桃子さんや蓮さんといった大人グループの方へ挨拶に行った。

「フェイトちゃん、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

ファリンさんからジュースの入ったグラスを受け取り、少しだけ

口をつける。実は少しだけ緊張してたから、喉を潤したかったんだ。

「それにしても凄いね。毎年、こんな感じなの？」

「ううん。もう少し控えめなんだけど、今年はフェイトちゃん含めて、初めての人も多いから賑やかにしようってみんなで決めたの。思い出に残るようにって」

「だからフェイト。今夜は存分に楽しみなさいよ」

「うん、ありがとう」

この温かさが心地いい。私はみんなに出会えた事を本当に嬉しく思ってる。この温かさが、尊いものだとも気付けた。あの頃とは違う、アルフとそして母さんと、友達と交わり幸せな日々を過ごす。

リニス…私は幸せだよ…。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・

「…あれ？」

部屋を見渡して気付いた。私やなのは、アリサ、すずかの家族。管理局の人達、蓮さんにユーノ…。

「ねぇ、なのは」

「ん、どうしたの？」

「鈴は、まだ来てないの？」

「うん、まだ来てない…」

そう、鈴の姿が見当たらない。たしか私と同様に、今回のパーティーに初めて参加する人を迎えに行ったんだっけ。私達に紹介するから仲良くしてくれって事だったけど、同い年くらいの人なのかな？鈴は今まで黙秘を貫いてたから私達も、どんな人なのかは把握していない。

「まぁ、鈴君が紹介するってほどだから悪い人ではないと思うんですけど…」

「あいつってホント、勝手に物事を進めるのよね」

「あ、あはは…」

どんな人が来るんだろう…。

「すいませぇぇん！　遅れましたぁ！」

噂をすれば何とやら…鈴がやって来た。入り口でひたすら腰を曲げて、みんなに遅れたことを謝っている。時間には間に合ってるから大丈夫だよ。

そして鈴の紹介と共に、彼が迎えに行った人達の姿が姿を見せたのだった。

「なぁっ！？」×多数

「どうも、初めまして。八神はやてといいます。そしてこっちが私の家族の…」

「シグナムです。よろしく」

「ヴィ、ヴィータ…です…」

「みなさん、初めまして。シャマルです。今宵はお招きいただき、ありがとうございます」

「ワォン！」

事情を知らない人は、それぞれが始めて出会う人に挨拶をする。

そして事情を知っている私達は…。

ギロッ！×多数

『わかってます。ちゃんと事情も説明しますし、謝罪もしますし、処罰も受けます。だから…そんなに睨まないで。マジふるえてきやがった怖いです；；』

私を含めた、多人数の人を射殺すような眼光を受けて小動物みたいに震えてる鈴がちょっぴり可愛かった。

・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

「…で、以上が全ての経緯？」

「はい。その通りであります、リンディ提督」

「他に隠し事は？」

「無いであります、クロノ執務官。だから、降ろしてもらえるとありがたいです。頭に血が…」

「クロノさん、私が聞きだしましょうか？　大丈夫です、〝眼〟を合わせてお話すればちゃんと…」

「やめてすずか！　それは最悪、廃人になっちゃう！」

忍さんから許可を貰い、普段は使っていない一室を借りて私達はごうも…じゃない、尋問を始めた。元凶である鈴は、すずかのチェーンバインドで簀巻きにされ、天井から逆さに吊るされ、蓑虫みたいな有様だ。

「あ、あの…鈴君も反省してるみたいやし、そろそろ許してあげたらどうやろ…」

一家の代表として、当事者としてついてきたはやてのお情けの言葉に鈴はうんうんと首が？げる勢いで肯定してるけど、今の私達はそれを聞き入れるほど甘くない。

「ダメよ。良い機会だからこいつのすぐに隠し事をする悪癖を直さないとね」

「悪癖って…俺は別に…ちょ、アリサ、ごめん！悪かったから、反省してますから！」

「…ねぇ、鈴君。また？　またなの？　また他の子をひっかけて…」

「論点がちょい違うから、なのは！　だから銃口（デバイス）向けないで！」

ジタバタと…蓑虫の状態だから、ユラユラと振り子のように揺れながら許しを請う鈴。そんな寸劇を余所に、はやてが私の傍に来た。

「えっと…フェイトちゃんだっけ？　そろそろ鈴君を許してあげるように言ってくれへんかな？」

「うん？　大丈夫だよ。みんな口で言うほど、怒ってないから」

私達は別に怒ってはいない（なのははわからないけど）

鈴はなんだかんだで、この事件解決の糸口を掴み、こうやって話し合いの場を設ける機会を作ったのだから。それに彼女達の言い分を聞いた今では、私も鈴と同じようにしたかもしれないという思いまであるのだ。この尋問だって、管理局員としてのケジメみたいなものだ。でなければ鈴は早々に、バインドを解除して、逃げ出してる。それをしないという事は、自分にも非があると自覚してるからだ。

「はぁ…いいわ。この件は一旦保留にして、そろそろ戻りましょう」

「…そうですね。鈴、後日しっかりと処罰を言い渡すからな。逃げるなよ」

「うぅ…了解しました」

やっと許しが出て、鈴は開放される。リンディさんとクロノは早々に、会場へと戻っていく。なのはとアリサとすずかは鈴へお小言を言ってから、同じように戻って行った。今、この場に残っているのは、私とはやてと鈴だけ。

「ごめんな、鈴君。私のせいでこないな事になって…」

「はやては悪くないって。俺だって別に後悔はしてないから、謝る

必要もないぞ」

「そうだよ、はやて。ちょっとしたすれ違いだっただけだって」

掛け違えたボタンのように、ちょっとしたズレが混乱を呼んだ。けど、いざ噛み合ってみると、なんて事のない、みんなが大切な物を守るために動いただけだ。嘗ての私もそうだったから、気持ちもわかる。

彼女たちも悪かったと思える気持ちがあるんだから、やり直せるよ。

・・・・・・・・・・

『はやて』

「それでは、今夜は思いっきり楽しんでいってください！　メリークリスマス、乾杯！」

「乾杯！！」×多数

忍さんの乾杯の音頭から各々が騒ぎ始める。私も受け取ったグラスを音頭に合わせて掲げ、飲み干す。

「はやてちゃん、何か食べたい物ってありますか？」

「あ、やったらシャマルに任せるわ」

「はい、わかりました」

ひょいひょいと、皿に幾つかの料理を取り分けるシャマル。シグナムは少し離れた場所でまだ料理に手をつけず、グラスを傾けてる。ヴィータは…まぁ、いつも通りっぽいわ。

「うめぇ！　はやて、これ本当にうめぇぞ！！」

「はいはい。ヴィータ、もう少し、落ち着いて食べや」

備え付けてあったナプキンでヴィータの口元を拭ってあげる。綺麗になったのを確認したら、ヴィータは再び、食事を再開した。ほんま、手のかかる妹みたいやわ～。

「はい、はやてちゃん」

「ありがとう、シャマル」

シャマルから料理の盛った皿を受け取る。律儀にバランスを考えてくれたようで、皿の上は色彩豊かなものに仕上がってる。目でそれを存分に堪能してから、口に運ぶ。

「…ほんまや。おいしい」

「ですね。うぅ、私もこれぐらいうまく作りたいです…グスッ」

なんや、シャマルがたった一口食べただけで、へコんでもうた。
まぁ、たしかにシャマルの料理は…いや、これ以上はやめとこ。それは、私の語るべき物語やない。

「ハァ～イ、楽しんでる？」

そんな私達の方に来たのは、さっき鈴君を突いてた金髪の子。その後ろにはツインテの子とカチューシャの子。

「楽しんでますよ。えっと、たしか…」

「アリサよ。アリサ・バニングス。あと同い年くらいなんだから、敬語とかいらないわよ」

「あ、ほんま？　助かるわ」

「クスッ…改めて自己紹介するね。私は月村すずか」

「高町なのはです、よろしく！」

「うん。こちらこそよろしく」

・・・・・・・
・・・・・・
・・・・
・

それからの事は楽しかったとしか言いようがなかった。ここに居る人はみんなが、良い人だった。飛び入り参加だった私達にも分け隔てなく接してくれて、その温かさにシグナム達の方も少しずつ応えてくれてと、ほんまに最高やった。

「ほう、シグナムさんは剣の心得があるのですか」

「ええ、と言っても齧る程度ですが…」

「はは、ご謙遜を。あなたの佇まい、発する気、どれをとっても素人のソレではないでしょ？」

「……そういうあなたも中々のようで」

「私の家に道場があります。もし機会があれば、息子達の相手をしてやってはもらえないでしょうか？」

「…ええ、その機会があれば」

・・・・・・
・・・
・

「えっ！？　これって鈴君が作ったん！？」

「そうよ。あいつ、料理の腕はそこらの店、顔負けなのよ」

「うわぁぁぁぁん（泣）！！」

「あ、シャマルさん！　どこに行くんですか！？」

「……シャマルは犠牲になったんや。メシマズの、その犠牲に…」

「はやてちゃん、何言ってんの？」

・・・・・・
・・・
・

にゃあ、ニャア、にゃ～ん♪

『頼む、こいつらを何とかしてくれ…』

「猫に懐かれる狼。いや～、中々の見物だねぇ、狼（笑）」

「アルフだって、下手したら（笑）が付くよ」

「お黙り、淫獣げっ歯類」

「ひどっ！？」

『……いいから、早く助けてくれ』

にゃ～ん♪

・・・・・・・・・・

シグナムは一人、壁にもたれながらグラスを傾けていた。彼女の胸中は複雑なようで、たしかにここに居る人達が悪い人でないと理解はしているが、まだどこか壁があった。

気付けばグラスが空になっており、再び飲み物を貰おうため動こうとした所で、横からスッと新しいグラスが差し出された。

「はい」

「おまえは…アリサ・バニングス」

「アリサでいいわよ」

アリサはシグナムにグラスを渡すと、そのまま横に並び立ち、自分の分のジュースを飲み始める。それに倣うように、シグナムも飲み始める。

二人の周囲だけ、空気を切り取ったかのように静かなものであったが、先に沈黙を崩したのはアリサだった。

「今日のパーティー、楽しくないの？」

「……いや、楽しんではいる。だが…」

「今の私は楽しむ資格は無い…とか？」

「……その通りだ」

シグナムは自分がやった事…それを思うと本心から楽しむ事ができないでいた。彼女からしてみれば、道化となり、イタズラに人を傷つけただけだと感じているようだ。シグナムは他のヴォルケンリッターを羨ましく思った。彼女らは、その辺をうまく割り切って楽しむ事ができているのだから。その点、シグナムは生来の生真面目さ故に、悩むことになっているのだ。

ベシッ！！

「痛っ！」

「こんな明るい場で、暗い顔をしないで」

「むっ…すまない」

「はぁ～…ねぇ、今回の事、悪いと思ってるんでしょ？」

「あぁ…」

「だったら、そんなに悩む必要ないわよ。ちゃんと反省して、罪を償って、もうこんなことにならないようにする。だからそんなに、背負い込み過ぎないで」

「だがっ！」

「はやてが言ってたわよ。シグナムが背負い込みすぎて、潰れるかもって」

シグナムは自身の主の名を聞いて思い出した。全てを打ち明けたあの日を…。

はやてとの信頼、絆が切れるのを覚悟してた。

それを聞いた彼女は当然、怒った。私達を散々怒って、怒って、説教して、泣いて……それでも最後は涙を浮かべながらも、笑った。

『今まで傷つけた人等に謝って、罪を償って、それらが終わったら、胸を張って私の所に戻ってきてや。ほんでまた一緒に笑って暮らそや』

主と私達との絆が切れる事はなかったのだ。

「…そうか、そうだったな」

「？　どうしたのよ？」

「アリサ・バニングス」

今まで俯いていたシグナムはアリサへと視線を向け、そしてその場に跪いた。

「私、烈火の将シグナムはそなたへの行いを悔い、そして謝罪する。すまなかった」

アリサはその突然の行動に臆することも無く、ただ静かに佇んでいた。そして言葉を発す。

「許してほしかったら、一つだけ条件があるわ」

「……甘んじて聞き入れよう」

「今度あたしともう一度、全力で戦いなさい。あたしって負けず嫌いでね。負けのままでは終わらせないわ」

「承知した。アリサ・バニングス」

シグナムの胸の問えはこの時、取り除かれたのだった。

・・・・・・・・・・

「と～き～を～超え刻まれた♪　か～な～し～みの記憶♪」

「おぉ～！　うまいで、フェイトちゃん！」

「「きゃー！　フェイトちゃ～ん！」」

「「キャーフェイトチャーン！　イッショニデュエットドウデスカー！」」

パーティーも中盤に入り、なにやら催し物のようなものが始まる。設営された壇上では、フェイトが恥ずかしそう身を捩じらせながらも、マイク片手に熱唱。ちなみに壇上の傍には、今にも昇天しそうな至福の笑顔を浮かべる彼女の母親の姿が確認された。

はやてがフェイトに声援を送りながら、観賞していると自分の傍に一人の寄る姿があった。

「楽しんでますか、はやてさん」

「あ、リンディさん。存分に楽しませてもらってます」

「そうかですか、それはなにより」

そのまま二人並んで、舞台を楽しむ。フェイトの番が終わり、次の演目が始まるまでの間にはやては彼女に聞いておく事にした。

「あの、こんな時に聞くのもなんですけど、鈴君はどうなるんですか？」

「えっ？　どうなるって？」

「いや、だから最初の方に言ってた処罰とか…」

「ああ、別に大した罰にはなりませんよ。たしかに、独断専行、作戦無視とありましたが、こうやって血も流さずにあなた達との場を設けた功績で、大半はチャラです。最も、一時的とはいえ、管理局に身を置いているので、お咎めなしにはできませんけど」

「そ、そうですか…」

「はやて、罪悪感を感じることはないぞ」

突然割り込んできた声。二人の元にやって来たのは、両手にグラスを持った蓮だった。片方のグラスをはやてに渡し、自分の分のグラスに口をつける。一息ついて、蓮は続ける。

「あいつが勝手に首を突っ込み、どうにかしたいと望んで動いたんだ。だからはやてが私のせいで…とか考える必要はない」

「それは…そうかも知れないですけど…」

「むしろあいつはおまえらを助ける方が大事だからな。処罰だって甘んじて受けるさ。何より、そんな顔してたら、あいつが浮かばれんぞ。だから笑っとけ」

「わかりました。蓮さんがそう言うなら…」

鈴の理解者であり、保護者である蓮の言う事に一理あると自分を納得させる。そして今は、パーティーの途中だった事を思い出し、

暗い雰囲気を出さないようにネガティブな思考を中断させる。
気持ちを切り替えるように、渡されたグラスを思いっきり傾ける。

「ブウゥゥゥッ！！　げほっ、げほっ…れ、蓮さん、これお酒じゃないですか！？」

「辛気臭い気持ちを振り払うなら…酒が一番！」

「あ、あなたはっ！！　未成年にアルコールって何考えてるんですか！！」

「あ～、御堅い奴だな。だったら…おまえも飲め！」

「ちょっ！？　何を、むぐっ！？」

天下の提督の口に、酒のビンを突っ込む蓮の姿に気圧されてしまうはやて。何だかんだで、自分を慰めてくれた蓮に胸中で感謝の言葉を述べる。実際、さっきまであったはやての心の中の暗雲は消えたのだ。

パーティーは最高潮の盛り上がりを見せる。途中から管理局だの何だのと無粋な事をいう者のいなくなり、心の底から楽しむ。敵も味方も無い。繋がりを作った少年に、事情を知る者全てが感謝していた。

明日から起こりうるであろう苦難の道。ただ…それを誰も考えない。今はただ、この一時を楽しもう。

「あ～いむしんか～とゅ～とゅ～とゅ～とゅとゅ～♪」

ちなみに件の少年は、壇上で『ナニカ』に汚染された歌、歌ってましたとさ。しかも原曲じゃないし。

・・・・・・・・・・

『ヴィータ』

料理も粗方食べ終わった頃に、メイドが運んできたのはケーキだった。アタシはよくは知らないが、クリスマスにケーキは付き物なんだとか。

もちろん、真っ先に頂いた。そしてそれは文句無しにうまかった。一切れ、二切れと食べていると、アタシの隣には何時の間にやら、こちらを見てる鈴の姿が。何を言うわけでもなく、小さく微笑みながらアタシを見ている。

「……何だよ」

「いや、そんなにうまそうに食べてもらえると作った身としてはうれしくてね」

今日の料理だけじゃなくて、このケーキまで作ってたのかよ。こいつ、何気に多芸だよな。

鈴はアタシに、ケーキが乗った皿を差し出してきた。曰く、これは翠屋のケーキで鈴のとはまた違う物らしい。断る理由も無いので、素直に受け取っておく。鈴もその後、自分のケーキに手をつけていた。

アタシはまた食事を再開しようとしたけど、思い出した事があったから、そっちを済ませておく。

「リン…」

「ん～？」

「あ、ありがとな…」

「…なんの」

アタシの礼の言葉に込めたいくつもの『ありがとう』。多分、リンの奴は気付いただろう。何も言わずに素直に受け止めてくれた事が、うれしかった。アタシもアタシで、急に照れくさくなったから、誤魔化すようにケーキに集中する事にした。

言葉の無いこの空間は、今の二人には心地よかった。

このさきには
暴力的で
鬼のような
キャラ崩壊が
あなたをまってます。
それでも読みますか？

さてみなさん。突然ですが、みなさんは酒をどう思いますか？

適度に楽しみ、無くてはならない者。酒による弊害で、辟易している人も居るでしょう。ちなみに作者は酒を飲める年ではありますが、全く飲めないので『酒は滅びろ』と言ってます。どうでもいいですね。

さて、酒による弊害、それは様々です。飲んだ途端、人が変わったように饒舌になったり、寡黙になったり、体調に異変をきたしたり、人に絡んだり…まぁ、様々です。

これは酒に振り回された、ご近所さんのお話。

パーティー会場の一部では何とも言えない、妙な空間が出来上がっていた。

「ん～♪　なのはの肌は柔らかいなぁ～」

「あぅ、あぅ…あぅ（／／／）」

ソファーに腰掛けた鈴、その膝には鈴に後ろから抱きかかえられたなのはの姿。

この状況の説明は簡単だ。

鈴が酒に酔った。

ただそれだけ。未成年の鈴が何で酒を飲んでるの？という疑問もあるだろう。その点に関しては、とある『Ａ・Ｒ』のイニシャルを持つ人による悪戯という思惑があったりなかったり…。

まぁそんな事より、酒の弊害にはこんなものもある。

『抑圧された鬱憤だの欲望だのの開放』

つまり……これは…面倒な事に、なっ…た…。

「鈴君、その…ちょっと、恥ずかしいよ…」

「気にすんな」

多くの観衆の眼を気にしだすなのはを切って捨てる。その視線から感じるものは様々。

嫉妬・羨望・楽観・憤怒。

そして観衆の中には今にも鈴を撲殺せんとばかりに木刀を振るう兄の姿があったり。そして必死に羽交い絞めにするその妹の姿があったり。

しかし鈴は気にも止めない。すごいね、酒の力。

普段だったらこの状況バッチコーイ！のなのはだが、日常からは考えられない鈴からのストレートな愛情表現に、思考回路がショート寸前。鈴に対してイケイケのなのはは、突発的な受身に弱いのだった。

暫くなのはの柔肌を堪能していた鈴は、突然なのはの右手をとる。

「あ…」

なのはの消え入るような吐息が漏れる。鈴は只管になのはの右手、正確にはそこに刻まれた傷を見つめる。鈴となのはにとって、自身の過ちによる傷。ある意味において、鈴となのはとを繋ぐ証でもあった。

「え、えっと…」

「ごめんな、なのは」

「ふぇ？」

「だけど俺だって女の子を傷物にしておいて、『はい、さよなら』をする気は無い。いざとなったら…」

「なった…ら…？」

「男らしく、なのはを…いただいていく！」

周りから「おぉー！！」と歓声が上がる。小学生、さらには酔っ払いの発言とはいえ、今のは完全にプロポーズのソレである。

「良かったわね、なのは」だの、「彼ならばウチのなのはを…」だのと、さりげにご両親も同意していたり。ちなみに兄の方はうるさくしすぎたのか、頭から血を流しながら昏倒していた。誰の犯行なのかは不明。ただ彼の妹の手には、妙に赤く染まった酒瓶が握られていた。

言われた当のなのはも最初はその言葉の意味に思考が追いつかなかった。だが暫く熟考して、その意味を理解した途端…。

ボンッ！！

「きゅぅ…」

思考回路がショートした。

「ありゃ…にゃのは？　を～い」

急に動かなくなったなのはに呼びかける鈴。だけど全く反応が無いので、段々とつまらなく感じてくる酔っ払い。そんななのはに駆け寄る姿があった。

「な、なのはちゃん！　しっかりして！」

「ん～？　あ～、すずかかぁ～」

鈴の視界に映った月村すずか。　目標捕捉！捕縛開始！

「ほら、すずかも～、一緒に飲もう～」

「ひゃあっ！」

傍に居たすずかを一気に引き寄せ、さっきのなのはと同じように後ろから抱きかかえる。

「あ、あの鈴君。ちょっと落ち着いて。ね？」

「らいじょ～ぶ。酔ってまへ～ん♪」

応答がどう見ても酔っ払いのソレです。本当にありがとうございました。

「す～ず～か～♪」

「きゃあ！　ちょ、鈴君！　や…そんな…とこ、ひゃん！　…あっ」

文面にするとＲ－１８っぽくなってますが、決して【ピー】な事はしてません。当然です、二人はまだ小学生なのですから。道徳は

弁えましょう。
　ちなみに彼女の姉は妹を応援すべく、Ｒ－１８を推奨していましたが突如現れたメイドさんに引き摺られてどこかに行っちゃいました。多分、ＯＨＡＮＡＳＨＩですね。ムチャシヤガッテ…。

「り、鈴君！　いい加減に－－」

「すずか」

　締まらない顔から一転、真剣な顔をした鈴に、すずかも出そうとした言葉が詰まります。そんな事は露知らず、鈴は吐息がかかりそうな程、すずかの耳元に口を寄せ、彼女だけに聞こえるよう静かに呟く。

「すずかが何者であろうと関係ない。必ず、おまえと契約してみせる」

「えっ？」

　すずかは一瞬にして悟った。夜の一族における、その人個人との契約とはただの契約ではない。鈴が言ってたのは、その契約だろう。もちろん、それを知らないすずかではない。そしてそんな言葉を聞かされたすずかは……。

「～～～っ！！」

　逃げた。顔を真っ赤にして、恥ずかしさのあまり顔を両の手で覆い隠しながら猛ダッシュ。夜の一族の身体能力をフル活用している

のでかなり速い。

「んぇ？　すずか～、何処行った～？」

取り残された酔っ払いは、まだ現状を把握出来てないっぽい。急に居なくなったすずかを探すべく、キョロキョロと周囲を見渡す。見えるのは、この遣り取りをすっかり酒の肴にしている野次馬連中ばかり。彼のお目当てであるすずかは居ません……が。

「おっ？」

「あ」

代わりの人を見つけたようです。その人物、アリサ・バニングスは目と目が合う瞬間、逃げるべきだと気付いた。

そして逃げました。当然、追いかけました。

「アリサ・バニングス、確保ぉぉぉ！！」

「わぁっ！　何であんたそんなに速いのよ！」

「ふっ、これも秋月式魔法システムのちょっとした応用よ」

※嘘です。脚限定のただの【強化】です。

「っつ～か、何で逃げんだよぉ？」

「酔っ払いの相手なんてゴメンよ！」

「ちょっと羨ましそうにしてたくせにぃ～」

「だ、誰がっ！？」

「何だ、二人に妬いたのか…」

「だから妬いてなんかっ！」

突如として、鈴はアリサを力一杯抱きしめる。アリサは戸惑う。自分の好意を寄せる人の抱擁だが、相手は酔っている。『放せ』と『このままで』という二律相反の思いが鬩ぎ合い、動けないのだ。

「すまんな。けどあの二人も俺にとって、かけがえのない大事な人なんだ」

「あ…う…」

「けど勘違いするなよ？　アリサだって俺にとっても大事な人であり、大好きな人だ」

Qこいつ実は酔い覚めてるだろ？　A酔ってます。

「よ、酔っ払いの言う事に惑わされないわよ！」

「じゃあ、証明してやる」

へっ？と思う暇も無かったアリサ。

アリサが自分の唇に感じた感触と熱。一秒にも満たなかったが、彼女は確かに感じた。鈴のキスを…。

「これで証明されたか？」

「……」

「アリサ？」

「き…」

「き？」

「きゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！」

アリサは一瞬にして、自身の相棒（グローリー）を展開。そのままフルスイング！！

「ウボァー！！」

モロにくらった鈴はそのまま吹っ飛び、地面を二回ほどバウンドし、動きを止める…つーか、動かなくなった。手足が変な方向に曲がってるのは気のせいだと信じたいところだ。

「もっとマシなシチュエーションでやってよ！　このバカァ！」

さり気に自分の願望を吐き出しながら、その場から駆け出すアリサ。動かなくなった鈴は当然、放置。
自業自得だから仕方ないね。

結局、鈴はＯＨＡＮＡＳＨＩを終えたメイドさんに発見されるまでそのままでしたとさ。

翌日

「鈴君、その…昨日言ってた事って本当？」

「あ、あの、今は無理でも、お互いが大人になったらですね…」

「あのね、い…嫌ってわけじゃないのよ。ただ…もっとこう、ムードとかをね…」

「…おまえら何言ってんの？」（※覚えていない）

「「「……」」」

「おい、おまえら。何でデバイスを構える？」

「オモイッキリ……アタマ、ヒヤソウカ…」

「眼前鈴君の完全沈黙までの間…能力使用限定解除、開始…」

「一発で沈めてあげるわ。覚悟はできたかしら？」

ＸＸＸＸ年、海鳴市は魔法の炎に包まれた。

今はただこのひとときを！（後書き）

後半部分は、書いてる本人が「これはヒドイ」と唸りました。

絶対にお酒は二十歳を過ぎてからにしましょう！

そしてさり気に登場した、アリサの新デバイス。詳しい描写は無いけど（爆）

※黒幕会議２ｎｄイグニッション（前書き）

パッと思いついただけの駄文也。故に短し。

深く考えないようにするが吉。流し読みを推奨。

恐らく、修正する。最悪、消す…かも。

あと新たなオリキャラ（？）登場。

※黒幕会議２ｎｄイグニッション

そこは、まるで幻想のような風景だった。

上を見上げれば何処までも広がってゆく青い空。所々に散らばる小さな雲がその美しさを際立たせる。

前を向けば何処までも続いてゆく草原。背の低い草は地平線の彼方まで広がっていた。

その美しくも、何処か寂しげな幻想風景の中央、そこには少々大きめの、一つのテーブルが鎮座している。それを囲むのは、四組の椅子。そして…四人の男女の姿。

一人はロングの髪を下のほうで束ねた女性。流れる美しい髪に合わせたかのように、顔の造形も整った美人と称するに相応しく、簡素なローブ姿と共に柔らかな雰囲気漂わせる女性だ。

もう一人の女性。ショートヘアに日焼けしたかのように浅黒い肌。さっきの女性に劣らず、これも美人と称するに相応しい。その身に纏った鎧のおかげか雰囲気はどこかに険を感じられる。だが卓上にあるクッキーをハムスターのように貪る姿のせいでそんな雰囲気も台無しだ。

続いては男性。髪を短く切り揃え、ハイネックセーターに黒のパンツ。何処かにでも居そうな男にみえるが、気品溢れる優雅な佇まいでコーヒーを啜る仕草が只者ではないと証明していた。

そして最後の男性。長い白髪をオールバックにして後ろで纏め、蓄えた白い顎髭。その身をビシッとした執事服で固め、堅物のような姿とは裏腹に、微笑みながら紅茶を味わう姿のおかげで親しみを感じる老人だ。

四人の間に流れる空気は穏やかだ。それぞれが談笑しながらお茶を。お茶会と呼ぶに相応しい光景である。

そんな中、セーターの男が唐突に、全員に向かって問い掛けを投げた。

「そういえば、結局彼と一番仲がいいのは誰なんだい？」

その問い掛けに男以外の全員がキョトンとする。そして一転、各々が様々な表情を浮かべる。自慢げな顔…ドヤ顔を、浮かべたのはロングヘアの女性。無表情に見えるが、口の端を僅かに吊り上げたのはショートヘアの女性。

「「当然、私のマスターです（だ）」」

瞬間、空気が固まった。問いを投げかけた男は、しまった！という苦々しい表情を浮かべる。

「ふふふ、あなたでも冗談を言うのね、ローリー」

「貴様…レイハ…」

あ～ぁ～、と天を仰ぎながら溜め息を吐く男、バルディ。その横で静かに笑う老人、ロス。

ロングヘアの女性、レイハ。正式な名をレイジングハート。

ショートヘアの女性、ローリー。正式な名をグローリー。

執事服の老人、ロス。正式な名をクロス。

セーターの男、バルディ。正式な名をバルディッシュ。

これは普段決して語られない…彼の者達のお話である。

そもそも此処に見える風景は現実の物ではない。現在の彼女（彼）らは現実世界においては大掛かりなメンテナンスの最中である。まとめて蓮の研究室に備えてあるパソコンに繋いであるため、このような事が可能となっているのだ。

この風景が広がる空間は電脳空間。皆の姿は人工知能の擬似人格から形成した仮初めの姿なのである。

※デバイス達の姿は作者の貧弱で勝手な妄想であるため、読者の方は好きな容姿でイメージしてね。そのための電脳空間なのですから。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・
・

「また始まったか、あの二人」

「ふぉっふぉ、仲の良い証拠だ」

バルディの視線が向ける先では、レイハが杖を振るって砲撃をぶっ放し、ローリーが自身の得物を振るってその砲撃を叩き斬る所業を展開している。（ちなみに電脳空間なので、この戦いも実際はプログラムでの戦いとなっている）

「ペットは飼い主に似る…デバイスは主に似る…」

「あれは”似る”と言うより”染まる”だろ…」

レイハのマスター、高町なのは。ローリーのマスター、アリサ・バニングス。魔法を知る以前は、頻繁に喧嘩をしていたが、実際は仲が良い二人。成程、二人の言ってる事はもっともだ。

「レイハはインテリジェント、対してローリーはアームド。なのにプログラム処理でローリーはレイハとも渡り合える…」

「マイスター蓮の作ったデバイスだ。優秀なのは当たり前だ。それにしても…お主も”染まって”きているな」

「？　何がだ？」

「この会合に混ざるようになった当初は、口数の少ない奴だったのにのぉ。今ではローリーの方が口数が少ないときた」

バルディのマスター、フェイトはジュエルシード事件の時は口数の少ない子だった。今では母と和解した事もあり、そこそこ喋るようになっている。その影響はデバイスであるバルディにも表れていた。

「ローリーは自分のマスターと違い、あまり喋らないな」

「優秀とはいえ、あやつは飽くまでアームドだからな。インテリジェントほど感情豊かではない。代わりにアリサ殿の気概に”染まって”きているがな」

「……だが、悪くないな」

「ああ、そうじゃの…」

二人は遠く離れた喧騒を余所に、再び優雅にカップを傾ける。

・・・・・・・・・・

「いいですか！　私のマスターは鈴殿との付き合いが一番長いのです。ならば一番仲が良いのは確定的に明らか！」

「…笑止！　アリサ様との気心知れた仲こそ至高」

何だか俗っぽく染まっているデバイスである。

「…そもそもレイハ。貴様はマスターを差し置いてリンの信頼を得ている。そして貴様も満更ではなさそう…デバイスとして、愚の骨頂！」

「うっ！？」

そうなのである。レイハは一時期、鈴の嫁にしたい人ランキングＮｏ１に輝いていた。まぁ、その頃の鈴は心身ともに疲れていたか

ら、レイハの気遣いにときめいたワケだ。ちなみにそれを知ったなのははレイジングハートを万力にかけようとする事件が起こったのだった。

「それに…ジュエルシード事件の際、貴様は自分の主を止められなかった。正にデバイス失格」

「うぅっ…」

それについてはレイハも一応、弁明の余地はある。ジュエルシードの影響を受けたなのはの魔力に耐え切れず、過負荷によりレイジングハートは機能に障害をきたした。だからなのはを止めることも出来なかったのだ。

「そ、それはまた話が別です！　とにかく、鈴殿にはマスターが一番お似合いなのです！」

「アリサ様だっ！」

戦いは続く（笑）

・・・・・・・・・・

「……で、実際どうなのだ？　彼は誰を好いているのだ？」

バルディの問いの答えはまだ明かされていない。このお題で醜い争いにまで発展したのだ。もはや答えを得ない事には治まらないといったところだ。ちなみに醜い争いを繰り広げた張本人は、頭にデカイこぶを拵えて再びテーブルを囲んでいる。殴ったのはロス爺。

「さてのぅ…私の知る限り、アレはよく言えば博愛。悪く言えばヘタレじゃからな」

「そもそも、彼は『男』として機能しているのか？」

「その辺りは大丈夫です。確かに私も一時期は不感症だの不能だの、もしくは男色の気も疑いましたがそれらは全て否定しています」

「それにこの前の酒乱事件。鈴殿の溜まってた鬱憤を聞くに、何だかんだでマスター達を意識しておる」

「……時間の問題だ」

鈴本人の与り知らぬところでの、この謂われよう。鈴が聞いたら泣くね。

「私達のマスターはともかく…あなたのマスターはどうなのですか？　バルディ」

「……マスターが彼に向ける感情は親愛・友愛のソレだ。決して恋愛では無い」

「今はまだ」とは口にしない。もし口にして、レイハ達を経由して彼女らの耳に入ればマスターの身に危険が及ぶかもしれないからだ。主に彼女ら（特になのは）の嫉妬による報復的な意味での。

「あと……最近、鈴殿を少なからず想ってる奴が一人増えたの」

「……はやて？」

「いや、赤毛の…ヴィータという者じゃ」

「また増えるのか…」

「ですが、かなりの強敵です。マスターも、うかうかしていられません」

何やら拳を握り、気合を入れ直すレイハ。

「ともかく、私らは主の想いを全力で応援、そして成就させるのみ」

「……たとえ彼が誰を選んでも、恨みっこなし」

「ええ、わかってます。最も私のマスターの負けはありえませんけど」

「やれやれだな…」

ポ～ン♪

「お？　終わったようじゃな」

「だな。では、そろそろ解散としよう」

「そうですね。また次を楽しみにしてますよ」

「…楽しかった」

徐々に周囲が暗くなっていき、構成されていた幻想風景が崩れていく。辺り一面が闇に包まれた頃、皆の姿も光の粒子となって、闇に溶けてゆく。

・・・・・・・・・・・・

「ほら、メンテ終わったぞ」

「「「「ありがとうございます、蓮さん」」」」

「ん。それじゃあ、また今度な」

《マスター》

「ん？　何、レイジングハート？」

《アリサ様》

「何よ、グローリー？」

《主》

「どうしたの？　クロス？」

《マスター》

「どうしたの？　バルディッシュ？」

《《《《頑張ってください》》》》

「「「「？」」」」

これは、彼女らのパートナーのお話。

※黒幕会議２ｎｄイグニッション（後書き）

このお話を載せたら、今までのお話を修正する予定。

アリサ、すずかのデバイスの口調や台詞を修正しようかなぁ、と。

飽くまで予定なんで、このままで行く可能性も有り。

次回からはシリアス続きの予定なんで、また二週間くらいかかるかな？

それ以上かかりそうだったら、活動報告で生存報告します。

世界で最も長い大晦日！（前書き）

申し訳ないです。大変長らくお待たせしました。

新年一発目の投稿です。

クオリティは別として、どうぞお願いします。

あと、オリキャラでます。閲覧の際にはご注意・ご了承ください。

※宣伝※　かなり前ですが、ＩＳの短編を一つあげました。

知る人ぞ知る”正義”が主役のお話です。嘘じゃないですよ？

（詐欺くさいけど…）

よろしければどうぞ。

世界で最も長い大晦日！

『鈴』

年越しまで、もう間もなくと迫ったある日、俺ははやてにお呼ばれされた。年の瀬は何かと忙しいので無理…とは言わない。友人の誘いを無碍にする気もないからな。

何やら用件を聞いてみると、相談したいことがあるそうな。内容ははやての家で直接話すとさ。

というわけで、レッツゴー。

・・・・・・
・・・・・
・・・
・

「いらっしゃい、来てくれてありがとな～」

玄関で迎えてくれたのは、いつも通り車椅子に座ったはやてだ。毎度の事だが、この家は掃除が行き届いていて素晴らしい。見習うものがあるな。

居間に通されて、座るように勧められる。その際に、同じようにテーブルを囲む守護騎士の連中がみんな静かだったのが妙に気になった。あ、シャマルさんだけはお茶の用意をしてた。

差し出されたお茶に対する礼を告げ、漸くみんなが席に着く。俺はお茶を一口啜って、はやてに切り出す。

「それで、相談ってのは何なんだ？」

「うん。大した事やないんやけど、鈴君は魔法についてどう思ってるんかな？」

「魔法について？」

えっ？　相談事ってソレ？

何やら哲学的（？）な問いを出され、戸惑ってしまう。はやてが何を思ってこんな質問をしてきたのかはわからないけど、とりあえずは答えてみる。

「そうだな～。しいて言うなら…便利なモノ…かなぁ？」

「便利なモノ？」

「そう。魔法は人を傷つけるようなモノも多いけど、生活に役立つモノもある。けど、そういうモノは魔法の浸透していないこの地球にだってたくさんある。だから俺は魔法ってのは便利なモノの一つって認識かなぁ」

昔の俺はその便利な力に魅せられ消えかけた。その命がけの教訓もあり、魔法は素晴らしいけど危険と隣り合わせという、そこらの家電製品みたいな認識ができてしまった。まぁ、あれだ。火遊びして火傷した子供ってわけだ。

あ、今の俺の小さい体を考えると、うまいこと言ったかもしれん。

「…うん、そうやね。この地球で危険と隣りあわせで発展した科学と何か通じるもんがありそうやわ」

何やらテーブルに肘をつき、碇ゲンドウポーズをとるはやて。

「うん、そっかそっか。今も科学が発展してるように、魔法技術も発展してる。鈴君の扱う魔法が良い例やな」

「はやて？」

あれ？　はやてってこんな奴だったっけ？

俺の胸の内に湧き出てきた疑問。そして……違和感。それと同時に、俺の頭の奥で何かが鳴っている。

「鈴君は自分の魔法の特異性に気付いとるんやな。その特性と…危うさに。だから誰にも教えようとせんし、出所も教えない。良い師に恵まれてるようやな」

そう、先生の魔法は確かに便利すぎる。クロノやユーノさえも知らない魔法。ミッド式やベルカ式よりも燃費も良く、利便性があり……世界に喧嘩を売ってるようなモノさえある。

「…人ってのは、次のステップに進むためには何かを犠牲にする必要がある。それは科学に然り、魔法についても然りだ。だってその先には、犠牲にするだけの価値がある”可能性”があるんだから」

目の前のはやては饒舌に語る。はやては魔法を知ってはいるけど、

立場は一般人だ。そんな彼女がこんな話題を口にするなんて…。
そんな何処か楽しそうに笑いながら語る彼女の姿に対して、何をするでもなくただ静かに座っている守護騎士の連中。

「お主の魔法ってさぞかし、可能性の宝庫なんだろうなぁ」

頭の奥で何かが鳴り響いている。それは段々と大きくなっていく。
俺はかつて二度、この音を聴いた事がある。最初は以前の体での魔法失敗の際に…もう一つはあの巨大な傀儡兵との決着がついた時。

「ねぇ、鈴君…」

はやての口から、艶やかな声が響く。俺の頭の奥では…警鐘が最大音量で鳴り響いた。

「その可能性……ワシに寄こせ」

空気が爆ぜた。

ドォン！とデカイ音を響かせ、弾けるようにその場から飛びのいた。同時にさっきまで俺の座っていた場所にはバインドがかけられる。事前に【強化】をかけておいたのが幸いした。してなかったら俺は捕まっていただろう。

背後から舌打ちが聞こえたが、それを無視して窓を突き破り、外に飛び出す。そして眼に飛び込んできたのは、俺にとってはもはや見慣れた歪んだ空。

（結界かよっ！？）

「ふむ…勘の良い奴じゃな」

上空から聞こえてきたのははやての声。その声に反応して、空を見上げる。

まず見えたのは完全武装を施した守護騎士達の姿。その騎士達に守られるようにして立っていたのは、確かにはやてだった。

だけどその格好は、さっきまでの私服姿じゃない。灰色を基調とした有り余る袖に裾。その上からは黒にほど近い灰色のローブを羽織っている。そしてその腕に抱えられているのは闇の書。まるで御伽噺の魔法使いそのままのような姿だ。

上空から俺を見下ろすその瞳は、以前の彼女のモノではない。アレは『人』を見る眼ではなく、『物』を見るかのような眼だ。

……違う。俺の知る彼女は、こんな冷たい眼をしないはずだ。そう思ってら自然と口から漏れていた。

「…あんたは誰だ?」

「これは異な事を。お主も良く知る『八神はやて』じゃないか」

「はいはい、ワロスワロス。冗談は良いんだよ」

「……ふむ、心に余裕を持った方がよいぞ。そうすれば脳は冷静に思考を続け、いずれは活路を見出せるだろうに」

(言ってる事は最もだが、言われると腹が立つな!)

「だが確かに。名も知らぬまま、消え行かせるのは忍びないな。ならば、改めて自己紹介しよう」

「ワシの名はジーン。嘗て、この闇の書の主だった者じゃ」

「ジジイ…はやてはどうした？」

「ジジイとはな…これでも生前は女じゃったんだがな」

「ババア、はやてはどうした？」

「やれやれ、口の減らぬガキじゃの。まぁ、よい。あの小娘はもう居ないぞ」

「何？」

「いやはや、長年待った甲斐があったわ。歴代、最高の適合率じゃ」

さっきから奴の話す内容を整理していくと、突拍子のない憶測が生まれた。

「適合……はやての体を…」

「察しがいいな。そうじゃ、貰ったのだ」

一瞬で血液が沸騰した。胸の奥から湧き上がる激情を押さえる事が出来なかった俺は、【強化】をそのまま維持。そして一気に踏み出した。

後方に。

「「「「なっ!?」」」」

「ほう。莫迦ではないようじゃな…追え。痛めつけても構わんが殺しはするな。必ず取り押さえるんだ」

地を抉りながら走り去る鈴を追う守護騎士達。それを見届けながらはやて…否、ジーンは闇の書を起動させ、魔法を発動させる。

それを確認したジーンは世界を見遣る。その瞳の奥、僅かに見えるモノは……歓喜。事実、彼女の口の端は獰猛に吊り上っている。

「お主の可能性、必ず奪ってみせる」

この街の魔法使い達全てが変わる、長き最後の日が始まる。

・・・・・・・・・・

『クロノ』

「魔力反応を確認！　これは…」

エイミィの報告の後、映像が映し出される。そこに映っていたのは、結界で覆われたこの街の地から滲み出るように現れた、黒く塗りたくられたまるで闇が象ったような姿の異形だった。

「エイミィ、アースラとの通信は？」

「ダメ、結界によるものか繋がらない！」

思わず、舌打ちしてしまう。突如として突き出されたこの状況、何が原因で、何が目的なのか。とにかく、いきなりすぎて情報が少なすぎる。

「一体何が…」

「何者かによる介入か、もしくは…」

「闇の書が目覚めたのか…ね」

艦長が入室してくる。

「クロノ、なのはさん達とコンタクトをとり、合流して。その後、詳しい原因の究明を！」

「了解です、艦長！」

「待って下さい！　この怪物……セーフハウス、アリサちゃん、すずかちゃんの宅を中心に出現しています！」

「何だって！？」

「現存する武装局員は、このセーフハウス周辺で防衛を！　クロノ、まずは近くのなのはさん、フェイトさん、鈴さんと合流して。その後、アリサさん、すずかさんと合流のち、現場の判断に任せます」

「わかりました。では、行きます！」

階下に見える異形どもを、尻目にベランダから飛び立つ。

その後、すぐさま襲い掛かってきた大型の鳥のような異形と交戦することとなった。

・・・・・・・・・・

『鈴』

「クソがっ！？　召喚魔法か！」

目の前の異形を【衝撃】でフッ飛ばしながらひたすらに逃げる。奴らの虚をつく形で転進。そのまま、みんなとの合流を目指したのだがこの召喚は少し予想外。全然進まない。さらには後ろからは守護騎士の連中。状況的には……詰んだっぽい。

「だからって諦めれるかぁぁっ！！」

脚の回転を上げ、さらに爆走する。ちなみに空を飛ばないのは、俺は【強化】で走った方が速いし、建物とかの障害物を利用するためだったりする――と。

「やっば！？」

走っている途中で湧き出る異形とモロに遭遇してしまい、しかもいきなりの一撃を振るってきた。何とか【衝撃】を喰らわせて消滅させるも、そこで脚を止めたのがまずかった。

「――ィィィヤアアアアッ！！！」

上空から聞こえてくる雄叫び。見上げると、こちらにご自慢の鉄槌を振り下ろさんとするヴィータの姿が見えた。俺は追いつかれたようだけど、他の面子の姿は見当たらない。こいつだけ先行してきたのだろうか？

「砕けろおぉぉぉ！！」

「ざっけんなぁぁ！！」

ヴィータのアイゼンを最小限の動きで半身になって回避。衝撃によって地面が大きく陥没する。回避に成功した俺は、目と鼻の先にまで迫った無防備の状態であるヴィータの顔を正面から鷲掴みにし、あの魔法を試してみる。

「【覚醒】！！」

掴んだ手から一瞬、光が溢れた。弾けた光が治まった頃には、ヴィータは眼を閉じ地面に横たわっていた。

「効いた……のか？」

わからない。俺のこの魔法が通常の人間にならともかく、プログラム生命体である守護騎士に対して通じるか、試した事もないからな。無論、効いたと祈るしかない。

と、そこで俺は思い出した。今の俺は脚を止めていい状態では無いと。

「うわっ！」

遅かった。突如として俺の手足に奔るバインド。俺はそのまま拘束されたが、思考を魔法術式の方へ切り替え、手足のバインドの解析に努める。

「存外、遠くへ逃げたな」

さっきのヴィータの時の様に、上空から声が聞こえる。そのすぐ後には、ジーンに他の守護騎士が降り立つ。

シグナム、ザフィーラが俺を見下ろす眼つきは冷たい。何があったのかは知らないが、以前の彼女等ではないようだ。シャマルは眠っているヴィータを元に居た。同じ仲間内での信頼はまだあるようだ。

「放っておけ、シャマル。いずれ勝手に眼を覚ますだろう」

多分、今一番冷たい人間がやって来た。

その身を包む灰色のローブを冬の風にはためかせながら歩く姿は

元のはやての小さな体でありながら、巨人のように大きく感じられた。

ジーンの登場により、彼女に向かって傅く守護騎士。一瞬、倒れているヴィータを一瞥したが、小さく鼻を鳴らしただけで関心を捨てた。彼女はやがて俺の前で立ち止まる。俺を見下ろす…否、見下(みく)す冷酷(だす)な眼を睨みで返す。

「足掻きは止めたのかや？」

「さぁね…」

コメカミを蹴られた。

目の前に火花が散る。揺れる視界が定まる頃に、再び睨みをきかす。頬の辺りに熱い液体が伝わる感触を感じるに、蹴られた辺りをざっくりやられたようだ。

「余裕を持った方がいいんじゃない？」

「手の掛かるガキに対する躾じゃ」

その問答を最後に、沈黙が訪れる。以前として俺の眼光を受けるジーンではあるが、彼女の態度は変わらず、堂々としたものだ。これをはやての顔姿でやられるんだから溜まったものではない。

「さて、そろそろお主にはワシの糧となってもらうぞ」

「糧？」

「なぁに、すぐにわかるさ…」

ジーンは闇の書を開き、魔法を起動させる。ベルカ特有の魔法陣が展開され、その光が俺を包み込もうとする。

（クソッ！　もう少しで解除できそうなのに！）

必死にバインドを解除しようとしていたが、このままでは間に合いそうにない。一応、この距離ならこんな体勢でも【衝撃】を放てるんだが、奴の中身はアレでも体ははやて。下手に傷つけるわけにはいかない。

そうこう足掻いている内に、魔法陣に包まれた俺にジーンが手を伸ばしてくる。ただそれだけの筈なのに、奴の力は未知数、おまけにその人柄故に無駄に恐怖心を煽ってくる。

既に二回も死を経験しているから、今更死ぬのは怖いわけではない。だが、理解はしても納得は出来ないんだよなぁ。

「さらばじゃ。鈴…」

「アイゼン！？　叩き割れえぇぇぇぇっ！！！！」

響き渡る叫び。その直後、世界は文字通り揺れた。しかも揺れるだけではなく、大地に亀裂が奔り、割れる。視界に入る限りのアスファルトが大地震の後のように割れ、配水管が破裂したのだろう、水が吹き出ている。

ジーンも守護騎士達も、突如として訪れた大地の衝撃に備えられず、たたらを踏み、割れたアスファルトに脚を取られ、挟まれ、もがいている。

だが俺に限って言えば、被害は無い。なぜなら今の俺は空へと逃げているのだから。

見慣れた赤毛を揺らす、この少女に抱きかかえられて。

「……ヴィータ？」

「話は後だ！　逃げるぞ！」

「ま、待て!?」

「【凍結】!!」

丁度、バインドも解けたので配水管の水を被った連中に向けて魔法を放つ。囲むように広がる六角形の魔法陣。連中に滴る水滴、濡れた大地は一気に、その温度を下げ、凍り付いてゆく。この程度では当然、どうにかなるわけがない。だが足止めとしては効果的だ。

ヴィータの腕から離れ、俺も自分で飛ぶことにする。ヴィータは、守護騎士達の方を一瞬だけ一瞥し、そのまま俺と並んで飛ぶ。

こうして俺は何とかこの場での危機を脱することが出来たのだった。

・・・・・・・・・・

「申し訳ありません。取り逃がした失態、必ず挽回を…」

「……まさか洗脳を解くとはな」

守護騎士の言葉にも耳を貸さず、ジーンは自身の事に没頭し始め、闇の書を操る。守護騎士は言葉が届かなかったのかと戸惑うも、自分達の主の邪魔をすることはしない。

ジーンは黙々と、闇の書の魔法を操る。その時間の長さに、さすがのシグナムも訝しげになる。

「あの、主…」

「喜べ、守護騎士達よ」

「ハッ…？」

「お前達は更なる力を手にするのだ！」

「それは…一体…ッッグッ！　アアァァァッ！！」

魔法陣に包まれたシグナムが突然苦しみだす。それはシグナムだけではなく、他の守護騎士達も同様だった。蹲り、苦しむ守護騎士達の様子も何処吹く風、ジーンはただ黙って『観察』していた。

やがて魔法陣の発する眩い光に包まれる。その光が治まる頃には、守護騎士達は変わっていた。

さっきまでの苦しさなど嘘だったかのように、毅然と立ち並ぶ。纏う騎士甲冑は、嘗てはやてのデザインした物のままだが、所々の細部が変わっていた。何より変わったのはその色彩だった。

全てを飲み込むような深い黒。もはや闇と称した方がしっくり来るだろう。その色に奔る血のような紅のラインが禍々しい。

そして開いた瞳には…何の色も感情も浮かんではいない。

ジーンはその守護騎士達の姿に満足したのか、一つ頷く。

「命令は同じだ。さっきのような失態は許さんぞ。行け」

「「「ハッ！」」」

飛び去る守護騎士。ジーンは変わらず、感慨の無い顔のまま見送る。暫くすると、ふと思い出したように、再び書を操作する。

「ワシの意に従わぬ守護騎士など……不要じゃ。消え去れ……」

ジーンの差す守護騎士は、現状ただ一人。聞こえる筈も無し…だが脳裏の、その守護騎士に対して忌々しげに吐き捨てる。

・・・・・・・・・・

「……何だこれは？」

街の遥か上空、ドーム状に展開されている結界を見て、女性…秋月蓮は口に咥えた煙草を落としそうになる。

「これは……結界ね。それもかなり強固な」

「見ればわかるわよ」

蓮の傍には二人の女性。片方はロングヘア、もう片方はショートヘアの女性。似通った二人の頭にはピョコンと突き出た獣耳があった。明らかに人間ではないと、主張している。

リーゼアリアとリーゼロッテ。それが二人の名前である。

「クソ…。年の瀬くらい、ゆっくりしようと思って早々に済ませてきたのに。誰だか知らんが、空気も読めんのか…」

「そんな意図があって、あんな強行軍なスケジュールで行ったんですか！？」

「いや～、でもわかるわ。私だってそんな時くらい、炬燵とか暖炉の前でのんびりしたいもの」

猫耳女二人組みの対照的な反応を流しながら、蓮は解析をかける。やがて簡単な解析を終えた彼女は顔を歪めて、舌打ち一つ。

「チッ…闇の書が目覚めている…」

「そんなっ！？」

「えっ！？　だってまだ書は完成してない筈じゃあ…」

「帰ってきたばかりの私が知るか。ともかく、予定はかなり早まった。至急、コイツを届けるぞ」

「わかりました」

「一応、父様に連絡しとくね」

蓮の胸元にぶら下がっている、掌サイズの銀細工の羽根が小さく音を鳴らした。

世界で最も長い大晦日！（後書き）

シグナム達がアンリ・マユに呑まれたでござるの巻。

この作品においては、闇の書に関して結構な設定の改変を加えております。

詳細は次話にて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4479p/

魔法少女リリカルなのは～ご近所の魔法使い～

2012年1月10日06時55分発行